

古戸遺跡

一般国道212号三光本耶馬溪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2019

大分県立埋蔵文化財センター

古戸遺跡

一般国道212号三光本耶馬溪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

序 文

本書は国土交通省大分国土河川事務所が実施している一般国道212号三光本耶馬溪道路の建設工事に伴って行われた古戸遺跡の発掘調査報告書です。発掘調査は土地買収の進捗に応じて、平成27年度から29年度にかけて3回に分けて実施しました。

その結果、検出された遺構は主に縄文時代後期から中世にかけての竪穴住居跡や土坑、墳墓であり、特に弥生時代の調査では県内最古級の石包丁や前期の壺棺が出土するなど古戸遺跡は大分県内でも貴重な弥生時代前期の集落遺跡であることがわかりました。

今回の調査結果が地域の歴史を解明する資料となり、また文化財に対する意識を高める一助となることを願うとともに、調査全般にわたりまして御協力頂いた地元教育委員会や地域の方々に対しまして、心より御礼申し上げます。

平成31年3月29日

大分県立埋蔵文化財センター

所 長 江 田 豊

例 言

- 1 本書は国土交通省大分河川国道事務所より委託を受け大分県教育委員会が実施した、一般国道212号三光本耶馬溪道路建設工事に伴う発掘調査の調査報告書である。
- 2 本書には平成27年度から同29年度にかけて3次にわたって実施した古戸遺跡発掘調査の調査成果を収載している。
- 3 調査は第1次調査を(株)リサーチ、第2次調査を(株)島田組、第3次調査を(株)イビソクにそれぞれ一部業務を委託して実施した。
- 4 出土遺物の整理作業については、平成28年度から同30年度にかけて(株)九州文化財総合研究所に委託して実施した。
- 5 出土遺物の理科学分析については放射性炭素年代測定については(株)パレオ・ラボ、(株)パリノ・サーヴェイ委託して実施した。
- 6 出土遺物はすべて大分県立埋蔵文化財センター(大分市牧緑町1-61)で保管している。
- 7 本書の執筆、編集は井が行った

目 次

目 次

序文 例言

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査組織の構成	1

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2

第3章 調査の概要

6

第4章 遺構と遺物

第1節 縄文時代	19
第2節 弥生時代～古墳時代	67
第3節 平安時代～鎌倉時代	133
第4節 近世・近代以降	148

第5章 自然科学分析

第1節 古戸遺跡第2次調査出土炭化材の放射性炭素年代測定 (バリノ・サーヴェイ株式会社)	150
第2節 古戸遺跡第2・3次調査出土炭化材の放射性炭素年代測定 (パレオ・ラボAMS年代測定グループ)	154

第6章 総括

第1節 古戸遺跡から出土した弥生時代前期の石包丁について	159
第2節 古戸遺跡出土の弥生時代前期の土器について	160
第3節 古戸遺跡出土の線刻絵画土器について	165

遺物観察表

171

写真図版

197

挿 図 目 次

第1図	古戸遺跡の位置と周辺の遺跡	4	第36図	SK011出土遺物実測図	32
第2図	調査区の位置	7	第37図	SK012遺構実測図	32
第3図	古戸遺跡遺構配置図(全体)	8	第38図	SK012出土遺物実測図	33
第4図	古戸遺跡遺構配置図(調査区1)	9	第39図	SK013出土遺物実測図	33
第5図	古戸遺跡遺構配置図(調査区2)	10	第40図	SK014出土遺物実測図	33
第6図	古戸遺跡遺構配置図(調査区3-1)	11	第41図	SK015出土遺物実測図	33
第7図	古戸遺跡遺構配置図(調査区3-2)	12	第42図	SK016遺構実測図	35
第8図	古戸遺跡遺構配置図(調査区4)	13	第43図	SK016出土遺物実測図	35
第9図	古戸遺跡遺構配置図(調査区5)	14	第44図	SK017遺構実測図	36
第10図	古戸遺跡遺構配置図(調査区6)	15	第45図	SK017出土遺物実測図(1)	37
第11図	古戸遺跡基本土層位置図	16	第46図	SK017出土遺物実測図(2)	38
第12図	調査区1北壁土層図	17	第47図	SK017出土遺物実測図(3)	39
第13図	調査区6北壁土層図	18	第48図	SK017出土遺物実測図(4)	40
第14図	SH001遺構実測図	19	第49図	SK017出土遺物実測図(5)	41
第15図	SH001出土遺物実測図(1)	20	第50図	SK018出土遺物実測図	43
第16図	SH001出土遺物実測図(2)	21	第51図	SK019出土遺物実測図	43
第17図	SH001出土遺物実測図(3)	22	第52図	ST001遺構実測図	43
第18図	SH001出土遺物実測図(4)	23	第53図	ST001出土遺物実測図	44
第19図	SH001出土遺物実測図(5)	24	第54図	ST002遺構実測図	44
第20図	SH001出土遺物実測図(6)	25	第55図	ST002出土遺物実測図	45
第21図	SH001出土遺物実測図(7)	26	第56図	ST003遺構実測図	46
第22図	SK001遺構実測図	27	第57図	ST003出土遺物実測図	46
第23図	SK001出土遺物実測図	27	第58図	SP001遺構実測図	47
第24図	SK002遺構実測図	28	第59図	SP002遺構実測図	47
第25図	SK002出土遺物実測図	28	第60図	SP001出土遺物実測図	47
第26図	SK003出土遺物実測図	28	第61図	SP002出土遺物実測図	47
第27図	SK004出土遺物実測図	28	第62図	SP003出土遺物実測図	47
第28図	SK005遺構実測図	29	第63図	SP004出土遺物実測図	47
第29図	SK005出土遺物実測図	29	第64図	SP005出土遺物実測図	47
第30図	SK006出土遺物実測図	29	第65図	SP006出土遺物実測図	47
第31図	SK007遺構実測図	29	第66図	SP007出土遺物実測図	47
第32図	SK007出土遺物実測図	30	第67図	SP008出土遺物実測図	47
第33図	SK008出土遺物実測図	31	第68図	SP009出土遺物実測図	47
第34図	SK009出土遺物実測図	31	第69図	SP010出土遺物実測図	48
第35図	SK010出土遺物実測図	32	第70図	SP011出土遺物実測図	48

第71图	SP012出土遺物実測図	48	第106图	包含層出土遺物実測図(7)	61
第72图	SP013出土遺物実測図	48	第107图	包含層出土遺物実測図(8)	62
第73图	SP014出土遺物実測図	48	第108图	包含層出土遺物実測図(9)	63
第74图	SP015出土遺物実測図	48	第109图	包含層出土遺物実測図(10)	64
第75图	SP016出土遺物実測図	48	第110图	包含層出土遺物実測図(11)	65
第76图	SP017出土遺物実測図	48	第111图	包含層出土遺物実測図(12)	66
第77图	SP018出土遺物実測図	48	第112图	SH002遺構実測図	67
第78图	SP019出土遺物実測図	48	第113图	SH002出土遺物実測図(1)	68
第79图	SP020出土遺物実測図	48	第114图	SH002出土遺物実測図(2)	69
第80图	SP021出土遺物実測図	48	第115图	SH003遺構実測図	70
第81图	SP022出土遺物実測図	48	第116图	SH003出土遺物実測図	70
第82图	SP023出土遺物実測図	48	第117图	SH004遺構実測図	70
第83图	SP024出土遺物実測図	48	第118图	SH004出土遺物実測図	70
第84图	SP025出土遺物実測図	49	第119图	SH005遺構実測図	71
第85图	SP026出土遺物実測図	49	第120图	SH005出土遺物実測図	71
第86图	SP027出土遺物実測図	49	第121图	SH006遺構実測図	72
第87图	SP028出土遺物実測図	49	第122图	SH006出土遺物実測図(1)	73
第88图	SP029出土遺物実測図	49	第123图	SH006出土遺物実測図(2)	74
第89图	SP030出土遺物実測図	49	第124图	SH008遺構実測図	75
第90图	SP031出土遺物実測図	49	第125图	SH008出土遺物実測図	76
第91图	SP032出土遺物実測図	49	第126图	SH009出土遺物実測図	76
第92图	SP033出土遺物実測図	49	第127图	SH009出土遺物実測図	77
第93图	SP034出土遺物実測図	49	第128图	SH010遺構実測図	77
第94图	SP035出土遺物実測図	49	第129图	SH010出土遺物実測図	78
第95图	SP036出土遺物実測図	49	第130图	SH011遺構実測図	78
第96图	SP037出土遺物実測図	50	第131图	SH011出土遺物実測図	79
第97图	SP038出土遺物実測図	50	第132图	SH012遺構実測図	80
第98图	SP039出土遺物実測図	50	第133图	SH012出土遺物実測図	80
第99图	SP040出土遺物実測図	50	第134图	SH013遺構実測図	81
第100图	包含層出土遺物実測図(1)	55	第135图	SK023遺構実測図	81
第101图	包含層出土遺物実測図(2)	56	第136图	SK023出土遺物実測図(1)	82
第102图	包含層出土遺物実測図(3)	57	第137图	SK023出土遺物実測図(2)	83
第103图	包含層出土遺物実測図(4)	58	第138图	SK024遺構実測図	84
第104图	包含層出土遺物実測図(5)	59	第139图	SK024出土遺物実測図	84
第105图	包含層出土遺物実測図(6)	60	第140图	SK025遺構実測図	85

第141图	SK025出土遺物実測図	86	第176图	SK049出土遺物実測図	109
第142图	SK026遺構実測図	87	第177图	SK050遺構実測図	110
第143图	SK026出土遺物実測図	87	第178图	SK050出土遺物実測図	110
第144图	SK027遺構実測図	88	第179图	SK052・SK053遺構実測図	111
第145图	SK027出土遺物実測図	89	第180图	SK052出土遺物実測図	111
第146图	SK028遺構実測図	90	第181图	SK053出土遺物実測図	111
第147图	SK029遺構実測図	90	第182图	SK054遺構実測図	112
第148图	SK030遺構実測図	91	第183图	SK054出土遺物実測図	112
第149图	SK031・SK032遺構実測図	92	第184图	SK055遺構実測図	113
第150图	SK031・SK032出土遺物実測図	92	第185图	SK055出土遺物実測図	113
第151图	SK035遺構実測図	93	第186图	SK056遺構実測図	114
第152图	SK036遺構実測図	93	第187图	SK056出土遺物実測図	114
第153图	SK036出土遺物実測図	93	第188图	SK057遺構実測図	115
第154图	SK037遺構実測図	94	第189图	SK057出土遺物実測図	116
第155图	SK037出土遺物実測図	94	第190图	SK058出土遺物実測図	116
第156图	SK038遺構実測図	95	第191图	SK059遺構実測図	117
第157图	SK039遺構実測図	96	第192图	SK059出土遺物実測図(1)	118
第158图	SK039出土遺物実測図(1)	97	第193图	SK059出土遺物実測図(2)	119
第159图	SK039出土遺物実測図(2)	98	第194图	SK060遺構実測図	119
第160图	SK040遺構実測図	99	第195图	SK060出土遺物実測図	119
第161图	SK040出土遺物実測図	99	第196图	SK061出土遺物実測図	119
第162图	SK041遺構実測図	100	第197图	SK062出土遺物実測図	120
第163图	SK041出土遺物実測図	101	第198图	SK063遺構実測図	120
第164图	SK042遺構実測図	101	第199图	SK063出土遺物実測図	120
第165图	SK042出土遺物実測図	101	第200图	SK064遺構実測図	121
第166图	SK043・SK044遺構実測図	102	第201图	SK064出土遺物実測図	121
第167图	SK043出土遺物実測図	103	第202图	SK065遺構実測図	122
第168图	SK044出土遺物実測図	103	第203图	SK065出土遺物実測図	122
第169图	SK045遺構実測図	104	第204图	SK066遺構実測図	123
第170图	SK045出土遺物実測図	105	第205图	SK066出土遺物実測図(1)	123
第171图	SK046遺構実測図	106	第206图	SK066出土遺物実測図(2)	124
第172图	SK046出土遺物実測図	107	第207图	SK067出土遺物実測図	125
第173图	SK047遺構実測図	108	第208图	SK068出土遺物実測図	125
第174图	SK048遺構実測図	108	第209图	ST004遺構実測図	126
第175图	SK049遺構実測図	109	第210图	ST004出土遺物実測図	127

第211図	ST005遺構実測図	128	第246図	S57出土遺物実測図	145
第212図	ST005出土遺物実測図	129	第247図	S45出土遺物実測図	145
第213図	SP049遺構実測図	130	第248図	S3128出土遺物実測図	145
第214図	SP041出土遺物実測図	130	第249図	S3824出土遺物実測図	145
第215図	SP042出土遺物実測図	130	第250図	S3983出土遺物実測図	145
第216図	SP043出土遺物実測図	130	第251図	S3142出土遺物実測図	145
第217図	SP044出土遺物実測図	130	第252図	S3987出土遺物実測図	145
第218図	SP045出土遺物実測図	130	第253図	S3198出土遺物実測図	145
第219図	SP046出土遺物実測図	130	第254図	S3267出土遺物実測図	145
第220図	SP047出土遺物実測図	131	第255図	S3262出土遺物実測図	145
第221図	SP048出土遺物実測図	131	第256図	S3272出土遺物実測図	145
第222図	SP049出土遺物実測図	131	第257図	S3276出土遺物実測図	145
第223図	包含層出土遺物実測図	132	第258図	S3298出土遺物実測図	145
第224図	SK069遺構実測図	133	第259図	S3307出土遺物実測図	146
第225図	SK069出土遺物実測図	133	第260図	S4096出土遺物実測図	146
第226図	SK070出土遺物実測図	133	第261図	S3714出土遺物実測図	146
第227図	SK071遺構実測図	134	第262図	S3715出土遺物実測図	146
第228図	SK071出土遺物実測図	134	第263図	S3310出土遺物実測図	146
第229図	SK072 出土遺物実測図	134	第264図	S85出土遺物実測図	146
第230図	SK073遺構実測図	135	第265図	S83出土遺物実測図	146
第231図	SK073出土遺物実測図(1)	136	第266図	S4186出土遺物実測図	146
第232図	SK073出土遺物実測図(2)	137	第267図	S4527出土遺物実測図	146
第233図	SK074遺構実測図	138	第268図	包含層出土遺物	146
第234図	SK074出土遺物実測図	139	第269図	近世・近代以降の遺物(1)	148
第235図	SK075遺構実測図	140	第270図	近世・近代以降の遺物(2)	149
第236図	SK075出土遺物実測図	140	第271図	大分県における三角形を呈する石包丁	159
第237図	SK075出土遺物実測図	141	第272図	土器編年図	163
第238図	SK077遺構実測図	141	第273図	線刻絵画土器(1)	166
第239図	SK077出土遺物実測図	142	第274図	線刻絵画土器(2)	167
第240図	SK078遺構実測図	143	第275図	線刻絵画土器(3)	168
第241図	SK075出土遺物実測図	144	第276図	線刻絵画土器の文様	169
第242図	S246出土遺物実測図	145			
第243図	S242出土遺物実測図	145			
第244図	S114出土遺物実測図	145			
第245図	S11出土遺物実測図	145			

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

古戸遺跡は、大分県中津市本耶馬溪町跡田に所在する縄文時代から近世の複合遺跡である。

本遺跡の発掘調査の契機となったのは、国土交通省大分河川国道事務所による一般国道212号線三光本耶馬溪道路の建設事業である。「三光本耶馬溪道路」は、大分県中津市から日田市へ至る延長約50kmの地域高規格道路として建設が計画されている「中津日田道路」の一部である。中津日田道路は大分自動車道や東九州道と連結することで福岡市や北九州市などとの循環型ネットワークを形成し、中津・日田地域の生活・産業・観光面において活力ある地域づくりに大きく貢献するインフラとして期待されている。

平成27年3月には東九州自動車道の豊前IC～宇佐IC間の供用が開始され、それとほぼ同時期に、中津三光道路（伊藤田IC～中津IC）と中津港線が供用されたことで、すでに供用されていた中津三光道路と中津港線の交通量は2倍以上に増加した。特に大型車は3.2～3.7倍の高い伸び率を示しており、物流の効率化に大きく寄与していることがわかる。

その一方、中津日田道路に併行する国道212号線は、法面崩壊等の災害による通行止めが多く、多数の道路防災点検要対策箇所が存在する。特に、平成24年7月の北部九州豪雨では、多くの箇所で行き止まりが発生した。本路線の整備により、国道212号線災害時の代替路の確保が可能となるため、災害に強いネットワークも形成されることになる。

以上のように、中津日田道路は経済活動や物流の効率化を支援するとともに、災害に強い道路ネットワークを構築し、安全・安心の向上に貢献するインフラとして、沿線の地元自治体等からも、事業の推進に大きな支持・支援を得ている。

本書で報告の対象となる古戸遺跡については、平成26年度の試掘調査でその存在が確認されたため、平成27年度から29年度にかけて3次にわたる本調査を実施した。出土遺物の整理作業については、大分県教育庁埋蔵文化財センター（平成28年度）・大分県立埋蔵文化財センター（平成29～30年度）において、平成28年度から30年度に実施した。

第2節 調査の経過

第2節 調査組織の構成

古戸遺跡の調査組織については、以下の通りである。

第1次調査(平成27年度)

大分県教育庁埋蔵文化財センター所長 宮内克己
同 受託事業班参事(総括) 小柳和宏 同 受託事業班 松本康弘(調査担当)

第2次調査(平成28年度)

大分県教育庁埋蔵文化財センター所長 後藤一重
同 受託事業班参事(総括) 友岡信彦 同 受託事業班主幹 吉田寛
同 受託事業班専門員 小林昭彦(調査担当) 同 受託事業班主事 井大樹(調査担当)

第3次調査(平成29年度)

大分県立埋蔵文化財センター所長 後藤一重
同 参事兼調査第二課長 友岡信彦 同 調査第二課主幹 吉田寛
同 調査第二課主事 井大樹(調査担当)

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

古戸遺跡が立地する立地する大分県北部は、福岡県境に沿うように山国川の下流から中津市、三光村、本耶馬溪町、耶馬溪町、山国町の1市3町1村がみられたが、平成17年にこれらが合併し、新たに中津市となった。山国側の中・上流域は河川に浸食された山々に奇岩が連なり、独特な情景が広がり大正12年3月7日には国指定の「名勝 耶馬溪」として、その景観の保護が図られている。また、近年には平成29年4月28日に日本遺産「やばけい遊覧～大地に描いた山水絵巻の道をゆく～」に認定され、新たな活用の段階に進んでいる。そもそも「耶馬溪」の名称は1818年に江戸時代の文人である瀬山陽が浸食された山肌や奇岩をみて「耶馬溪天下無」と漢詩に読んだことが起りである。瀬山陽がこのように中国風の名称をつけたのは、中国の山水画のような川により浸食された地形を観たためであり、これは耶馬溪の地質が新生代第四紀の火山活動により形成された凝灰岩や凝灰角礫岩等からなる台地の浸食によるものである。この台地を侵食する山国川は、大分県と福岡県を分ける県境の川としても知られている。大分県中津市山国町英彦山付近を源流としており、上流から上志川、金吉川、山移川、津都川、三尾母川、跡田川、屋形川、友枝川、黒川等の水を集め、下流では広大な中津平野を形成し、周防灘へと注がれる。総延長は56km、流域面積540㎡を測る一級河川である。

古戸遺跡はこの支流跡田川の左岸に位置する。跡田川は山国川河口部から約15kmの地点で本流に合流するが、古戸遺跡はこの合流地点から600m程さかのぼった標高約60mの地点である。跡田川は大分県中津市本耶馬溪町東谷鹿嵐山南側に源を発し、迫りくる山塊を縫うように台地を深く浸食しながら流れ「地蔵峠の景」、「引水の景」、「洞鳴峡の景」、「羅漢寺の景」、「古羅漢の景」等の様々な景勝地を織りなしている。この遺跡の位置する地点は山国川本流に合流するため、やや広い平坦面が形成されており、北西には標高597mの大平山を望み背後には独特の岩肌が特徴的な羅漢寺が位置している。

また、周辺には1919年に発表された菊池寛の小説「恩讐の彼方に」の舞台となった「青の洞門」がある。僧真如庵禅海が開削した洞門で、山国川本流に沿う樋田と青の間は競秀峰の断崖がつらなり、川が深く渡しが危険でしばしば人馬や通行人が命を落とすことを知り、1730年～1763年頃までの約30年の歳月をかけノミと槌を用いて削り貫き開削した。この付近は更新世前期に形成された耶馬溪層下層からなり、泥岩や凝灰岩のような細粒岩と凝灰角礫岩で構成されている。この青の洞門の下流には1923年に整備された全長116mの「耶馬溪橋」（通称:オランダ橋）が架かり、8連石造アーチ橋としては日本で唯一である。1981年には県指定の有形文化財に指定され、平成24年7月北部九州豪雨により大きな損傷が生じたものの翌年には復旧している。

第2節 歴史的環境

本遺跡の所在する中津市本耶馬溪町は遺跡の発掘調査事例も少なく、考古学的情報から体系的に歴史叙述するのは難しい。悉皆的な遺跡分布調査など、今後の調査研究に期するところが大きいだが、現状において明らかになっている旧本耶馬溪町域の状況を概観する。

旧石器時代については、遺跡が確認されていない。これは旧本耶馬溪町に限らず、山国川流域の共通した状況である。大分県内でも遺跡が集中する大野川流域などとは、大きく様相が異なる。遺跡数の粗密などは、旧石器時代の社会状況を反映した可能性もあり、今後の資料数の増加を待ちたい。

縄文時代では山国川支流の屋形川沿いにある粉洞穴が著名である。粉洞穴は屋形川右岸に位置し、洞穴は南向きに開口している。その規模は開口11m、奥行き9mを測る。別府大学による数次にわたる発掘調査が行われ、大きな成果が得られているが、正式報告書はいまだ刊行されていない。概要報告によると、66体もの縄文時代人骨が確認されている。これは九州の縄文時代遺跡のなかでは最大規模である。時期的には、前

期、中期、後期のものがあるようで、時期ごとの埋葬状況を知ることのできる良好な例となるであろう。加えて、多くの遺物も出土しており、報告書の刊行が待たれるところである。縄文時代早期の遺物を出土する遺跡として下屋形遺跡がある。下屋形遺跡は、粉洞穴と同じ屋形川沿いの左岸に位置する。弥生・古墳時代の遺構に混じり早期の田村式土器が検出されている。屋形川流域では、洞穴や段丘上に小規模な遺跡が点在する状況であったことが想定される。このほかの縄文時代遺跡として曾木遺跡と多志田遺跡がある。両遺跡とも山国川本流沿いに位置する。曾木遺跡では、ほ場整備事業に伴う試掘調査が行われたのみであるが、縄文時代後期の土器片が確認されている。また、多志田遺跡では縄文時代晩期の遺物が確認されている。

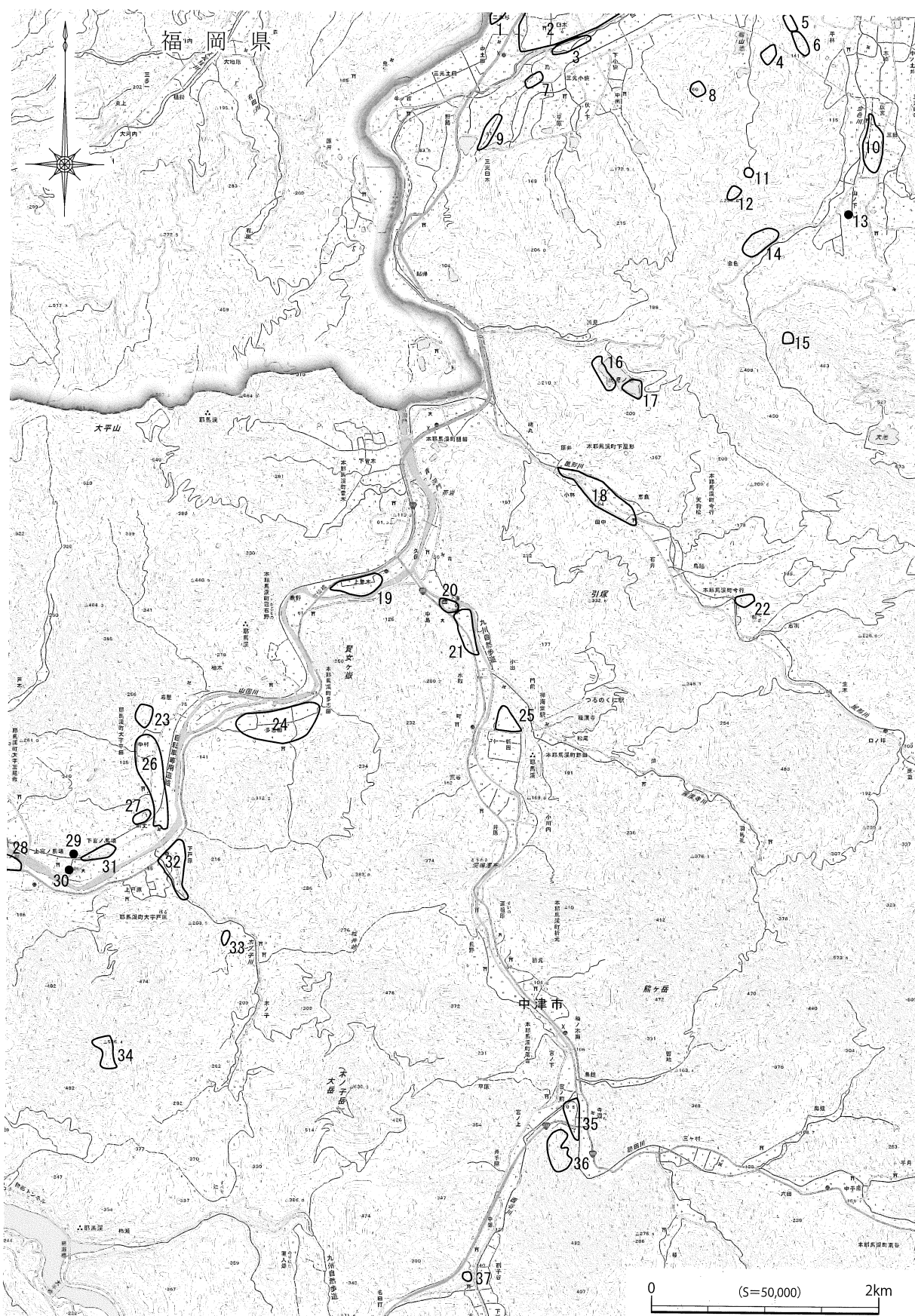
弥生・古墳時代では下屋形遺跡において31基の竪穴建物が確認されている。遺跡は屋形川左岸に位置するもので、本地域の中核的な遺跡の一つであろう。ほ場整備事業に伴い調査されたもので、複雑に切り合う竪穴建物群が調査された。竪穴建物は弥生時代中期から6世紀に及ぶもので、屋形川に沿いにのびる溝と丘陵に挟まれた部分に集落が展開する。山国川本流沿いにも比較的広い谷底平野がみられるが、これらの部分では弥生・古墳時代の集落は確認されていない。河床の深い山国川本流沿いではなく、山国川支流の小河川沿いに弥生・古墳時代集落が形成されていたようである。周辺には古墳時代の周知の埋蔵文化財包蔵地として上曾木遺跡、天神前遺跡、中村遺跡、城前遺跡、ホキノ上古墳、城井若宮古墳が知られているが調査が行われていないために詳細については不明である。

古代の遺跡は、これまで旧耶馬溪町内では確認されていない。

中世では下屋形遺跡で掘立柱建物跡、土壙墓、井戸などが確認されている。土壙墓の存在から屋形川流域における支配層の一翼をなす屋敷跡であろうと思われる。また、井戸については、深さ1m程度の素掘りのものである。数基が検出されているが、いずれも農業用の灌漑井戸であろうと思われる。灌漑用水路と思われる溝に近接して配置されており、井戸は溜井的性格を有するものと想定される。このような遺構は、段丘上など水利環境があまりよくない水田が展開する部分でみられるようで、国東半島の国東市七郎丸遺跡、杵築市八坂本庄遺跡などでも確認されている。また、古庄屋遺跡では鎌倉時代全般にわたり存続した館跡が確認されており、館跡は北側と南側に溝をもつ一辺1町四方の館に相当する大規模なものである。また、館南側の溝の内側では、土壙墓が溝に沿い主軸を東西にもつものと南北にもつものが交互に配置される特異な状況が確認されている。

また、遺跡の北東には全国鎮西羅漢の総本山といわれ南北朝から続く曹洞宗寺院羅漢寺が位置している。羅漢寺は暦応元年（1338年）に僧円龜昭覚により禅宗寺院として開山されたとき、五百羅漢については円龜昭覚と逆流建順という僧が延文5年（1360年）に700体余りの石仏を完成させたと伝えている。これまでこの二人の僧、円龜昭覚と逆流建順については伝説的な存在の架空の僧と考えられる向きが強かったが近年の中津市教育委員会の調査により当時の文献等で確認することができ、実在の人物であることが判明した。羅漢寺は室町時代には幕府の保護を受け豊前の守護であった大内氏の雑拳僧としても活動していた。戦国時代には大友宗麟によって天正年間に焼き討ちを行ったという伝承が残り、この際に伽藍も消失したと伝えられる。江戸時代になると細川氏や小笠原氏の庇護のもと再興され、現在の曹洞宗寺院として続いている。

石仏については羅漢寺の向かいに位置する古羅漢に安置されている石造観音菩薩像の左膝部分から木製五輪塔に入れられた歯と光明真言種子が書かれた紙片が発見されており、「正平十七年九月十二日 金剛佛子道悟 敬白」と銘があり、この観音像が正平17年（1362年）に造られたことがわかる。また、羅漢寺参道からも「暁愚禅門 応安七 二 八日」と刻まれた石造地藏菩薩像が見つかっており、これも応安7年（1374年）であることから石造物群の年代を考える上では重要な資料である。無漏窟の五百羅漢については近年の中津市教育委員会の調査により、その構図が中国宋代の五百羅漢の思想が日本の禅宗世界に取り入れられ、その中で独自の要素が加わり日本最古の石造五百羅漢像として14世紀に成立したことが明らかになった。これら無漏窟の石造物群については平成26年に国の重要文化財に指定されている。



第1図 古戸遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)

No.	遺跡名	所在地	時代	種別
1	城の百穴横穴墓群	三光土田字城	古墳	墳墓
2	臼木遺跡	三光臼木	弥生・古墳	包蔵地
3	臼木古墳群 (1～4号)	三光臼木	古墳	墳墓
4	鴨山横穴墓群	三光諫山	古墳	墳墓
5	庵ノ尾横穴墓群	三光成恒	古墳	墳墓
6	大迫平横穴墓群	三光田口・成恒	古墳	墳墓
7	外園遺跡	三光臼木	中世	墳墓
8	コウゴウ石遺跡	三光諫山	—	祭祀
9	臼木上ノ原遺跡	三光臼木	弥生・古墳	墳墓
10	仮宮遺跡	三光田口	弥生・古墳	包蔵地
11	鴨山奥山遺跡	三光諫山	—	祭祀
12	辰の口洞穴	三光田口	—	祭祀
13	山下経塚	三光山下	鎌倉	経塚
14	妙見宮祭祀遺跡	三光田口	中世	祭祀
15	コマノツメ遺跡	三光田口	旧石器	洞窟
16	渋見池遺跡	三光渋見	縄文	包蔵地
17	川尻遺跡	三光下屋形	弥生	包蔵地
18	下屋形遺跡	本耶馬溪町下屋形	縄文	包蔵地
19	上曾木遺跡	本耶馬溪町曾木	弥生・古墳	包蔵地
20	中ノ島遺跡	本耶馬溪町曾木	弥生	包蔵地
21	古戸遺跡	本耶馬溪町跡田	縄文・弥生・中世	集落
22	枌洞穴	本耶馬溪町今行	縄文	洞窟
23	天神前遺跡	耶馬溪町平田	弥生・古墳	包蔵地
24	多志田遺跡	本耶馬溪町多志田	縄文	包蔵地
25	跡田遺跡	本耶馬溪町跡田	縄文	包蔵地
26	中村遺跡	耶馬溪町中村	弥生・古墳	包蔵地
27	平田城跡	耶馬溪町平田	中世	城跡
28	城井遺跡	耶馬溪町戸田	古墳	包蔵地
29	ホキノ上古墳	耶馬溪町平田	古墳	墳墓
30	城井若宮古墳	耶馬溪町戸田	古墳	墳墓
31	森遺跡	耶馬溪町平田	縄文	包蔵地
32	下戸原遺跡	耶馬溪町下戸原	縄文	包蔵地
33	向戸原遺跡	耶馬溪町戸原	中世	包蔵地
34	高城跡	耶馬溪町戸原	中世	城跡
35	古庄屋遺跡	本耶馬溪落合	縄文・中世	集落
36	ジョウヤ城跡	本耶馬溪落合	中世	城跡
37	小野家屋敷跡	本耶馬溪町西谷	近世	—

第1表 周辺遺跡一覧表

第3章 調査の概要

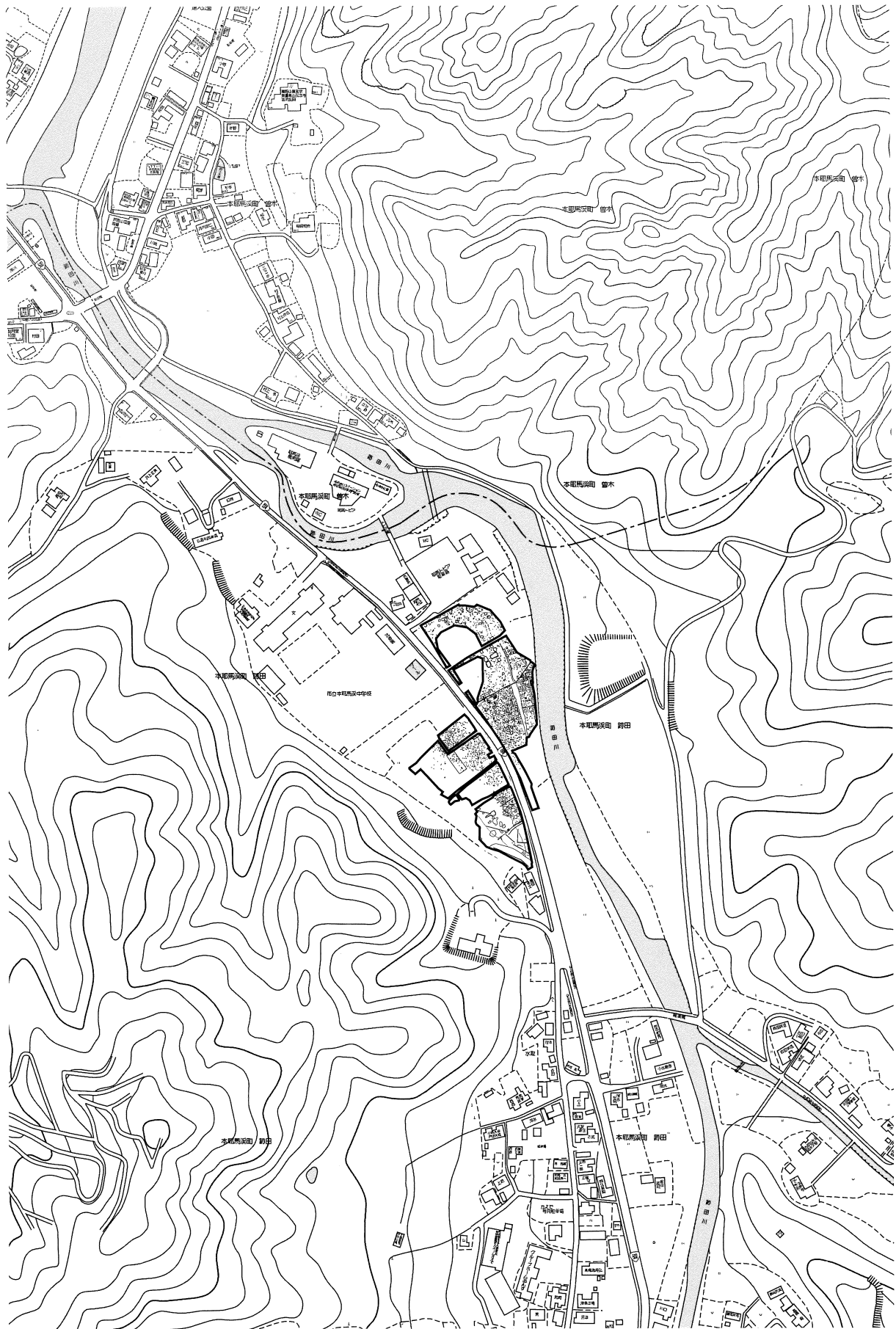
調査は用地買収の進捗に応じて、国土交通省大分河川国道事務所の依頼を受け3ヵ年3次にわたって行われた。

第1次調査は平成28年1月5日から行われた。調査範囲は今回の報告の調査区3の北側と川側のL字状の範囲約2,000㎡である。5日から重機による表土掘削を行い、翌日より遺構検出作業を開始した。調査区3の北側中央には縄文時代後期の遺物を多く含む包含層があり、これらの包含層掘削も6日より実施した。遺構掘削については15日に調査区3の東側から開始し、順次遺構検出の完了した範囲から行った。2月21日には午前中から空撮作業を行った。遺構掘削、遺構図面、遺構写真等の作業は24日に完全に終了し25日から重機を使用して埋め戻し作業を実施した。埋め戻し作業には4日間かかり、29日に仮設事務所等を撤去して調査を終了した。第1次調査では弥生時代中期～後期にかけての竪穴建物を調査区の北東部分で数基調査できたほか、表採ではあるが、刺突を前面に施した分銅型の土偶の出土をみた。

第2次調査は平成28年5月31日から行われた。調査範囲は今回の報告の調査区1、調査区2、調査区3の西側、調査区4、調査区5、の約13,000㎡である。翌日の6月1日から調査区1で重機を用いた表土掘削を開始した。6日からは表土掘削の終了した範囲から遺構検出を行い、遺構掘削は8日から実施した。これと並行して調査区2・3では13日から重機を用いた表土掘削を行い、降雨の影響と調査区1の進捗状況を考慮して8月9日から遺構掘削を実施した。8月19日には調査区1の空撮を実施し、22日からは重機による埋め戻し作業を実施し9月2日に調査区1を完全に埋め戻した。9月7日にはST004の検出作業を行い遺構掘削を開始した。9月23日にはST004の掘削作業を完了し、内部に土を残したまま取り上げを行った。その際、大分県立歴史博物館学芸員の稗田優生氏に取り上げる遺物の養生等の指導を頂いた。10月4日には調査区4の表土掘削を開始した。13日からは表土掘削の完了した範囲から遺構検出作業を開始した。また、同日には調査区3の空撮を実施した。調査区4は西側半分が遺構の集中が希薄であったことから早期に調査が終了し21日には遺構掘削が終了し空撮を実施した。24日には調査区5の表土掘削を重機を用いて行い、31日には調査区4の埋め戻し作業を実施した。また、作図の関係上作業を行っていた調査区3は11月7日に埋め戻し作業を開始した。同日には調査区5の遺構検出、遺構掘削作業も開始した。17日には遺構掘削も完了し埋め戻し作業を行った。25日にはすべての埋め戻し作業が完了し調査を終了した。第2次調査では縄文時代から中世にかけての幅広い遺構が確認され、ST004のように弥生時代前期の貴重な一括資料も確認することができた。

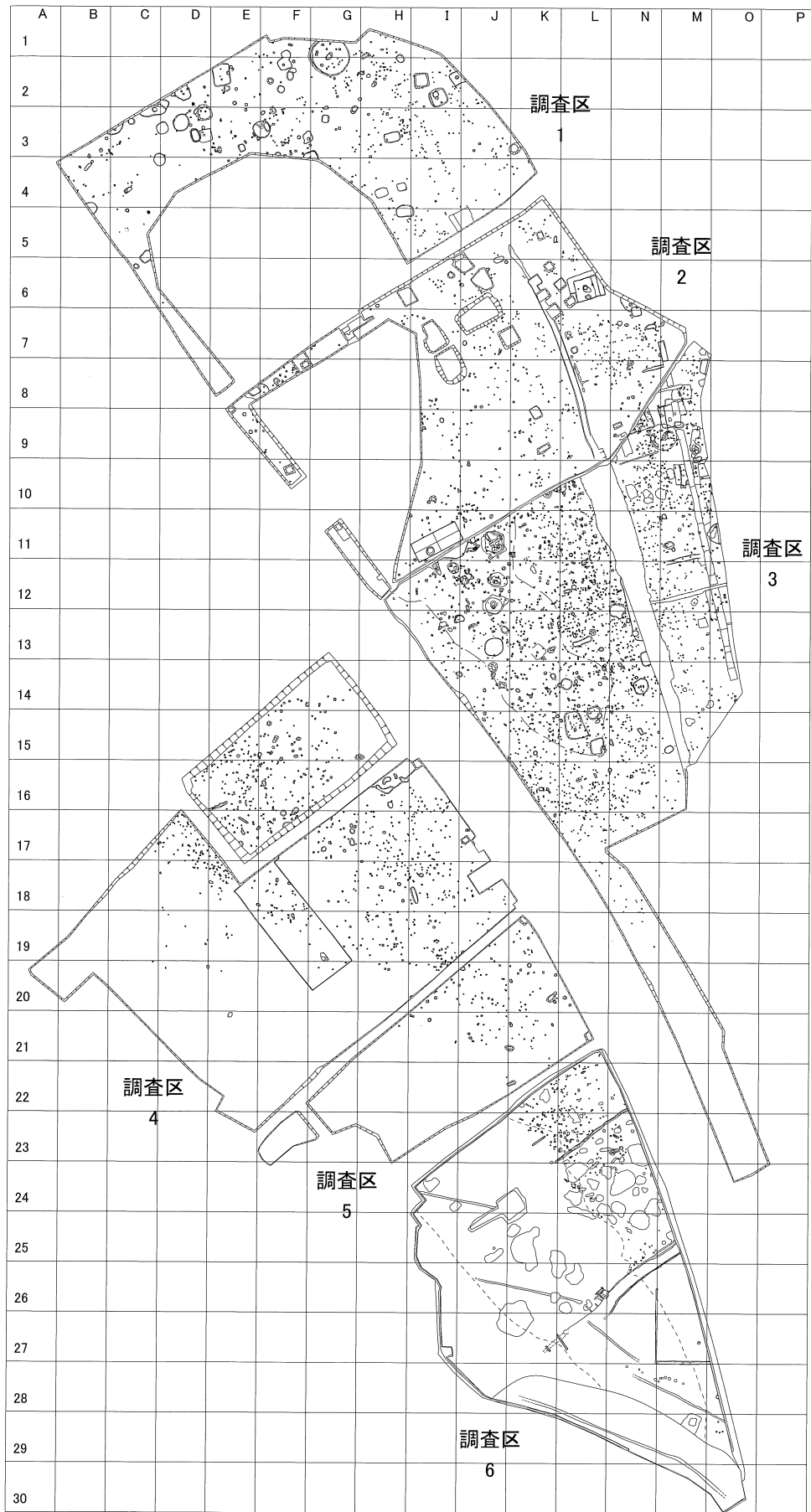
第3次調査は平成29年6月8日から行われた。調査範囲は今回報告の調査区6の約3,800㎡である。8日から重機を用いた表土掘削を行い、表土に大型のコンクリート片等が大量に含まれていたことからその除去に時間がかかり、19日に表土掘削が終了した。降雨のため22日から遺構検出を実施し23日から遺構掘削を開始した。6月後半から7月前半にかけては雨が続き7月6日には北部九州豪雨の影響により耶馬溪地区に避難指示命令が発令されたこともあり、その後の排水作業も含めてこの間、遺構掘削の実施は困難であった。13日からは調査区内の水も徐々に引き始め遺構掘削を再開した。8月29日には遺構掘削も完了し、翌30日に空撮を実施した。その後は遺構の作図を中心とした作業を中心に9月7日に重機による埋め戻しを開始した。埋め戻しは15日までかかり、この日に仮設事務所等も撤去し発掘調査を終了した。平成29年7月北部九州豪雨の影響により調査は困難を極めたが、排水等の円滑な実施により調査を終了することができた。遺構としては古戸遺跡の集落の縁辺に位置していたために遺構密度は低かったものの自然の谷地形を確認することができ、その埋没の過程で古代から中世にかけての土器片数点を確認することができた。また、近世の暗渠（溝）に使用されていた礫の中には縄文時代の扁平片刃石斧を利用したものもみられ、古戸遺跡出土の扁平片刃石斧の中では最も大型のものであった。

このように3ヵ年3次にわたって行った発掘調査では延べ面積約18,800㎡を調査し、縄文時代～近代にわたる複合的な遺構、遺物を確認することができた。

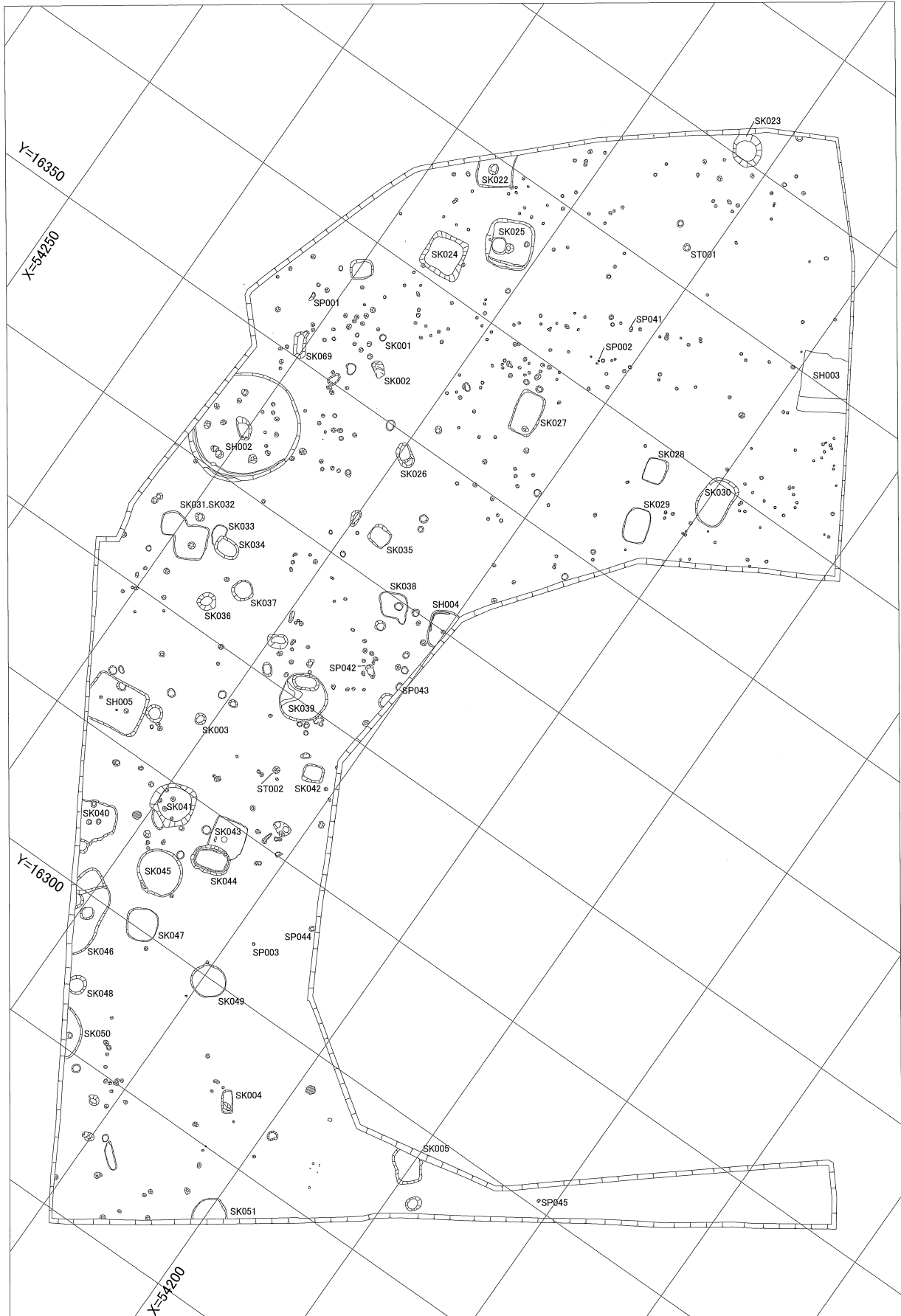


第2図 調査区の位置

第3章 調査の概要



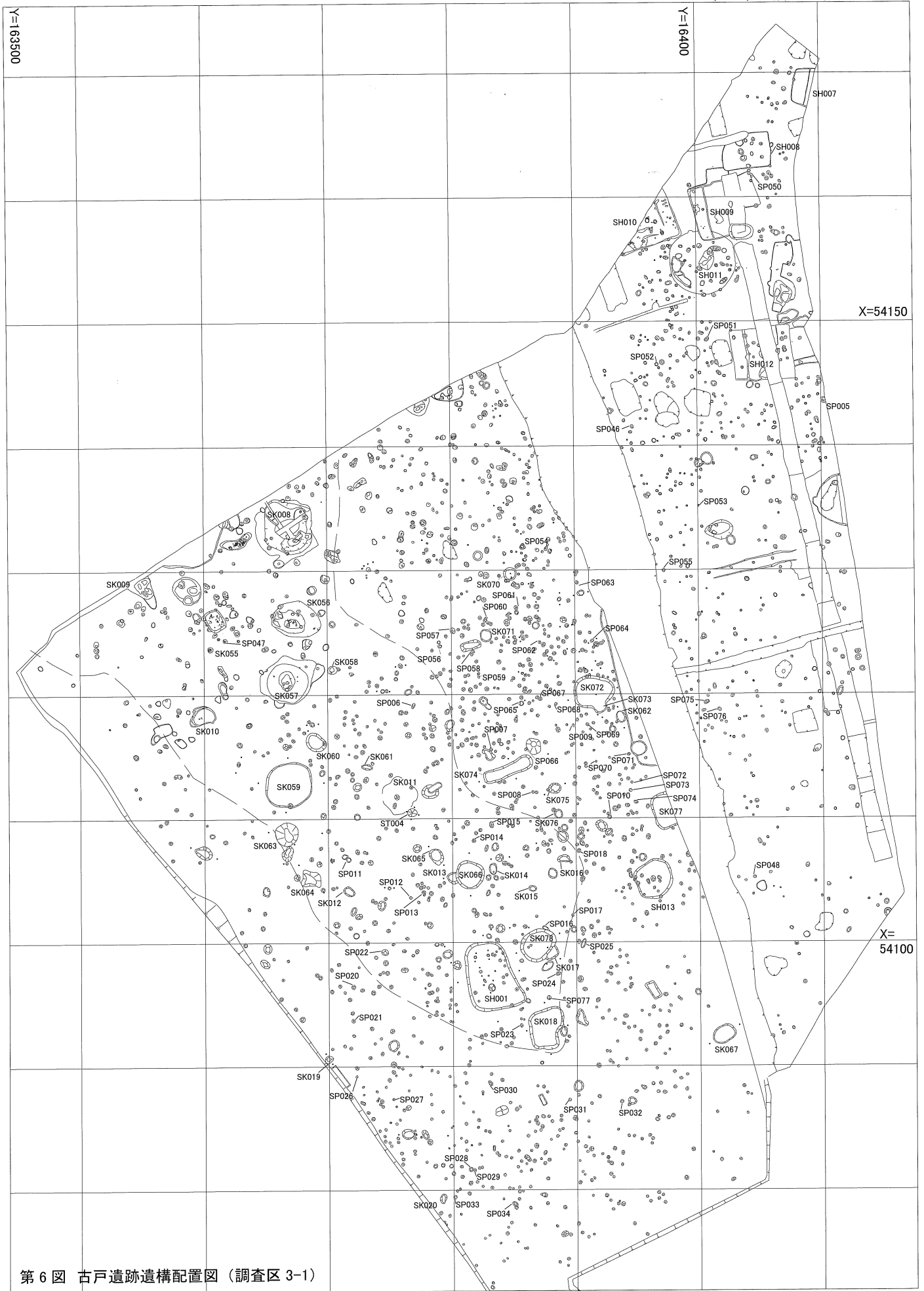
第3図 古戸遺跡遺構配置図（全体）



第4図 古戸遺跡遺構配置図（調査区1）

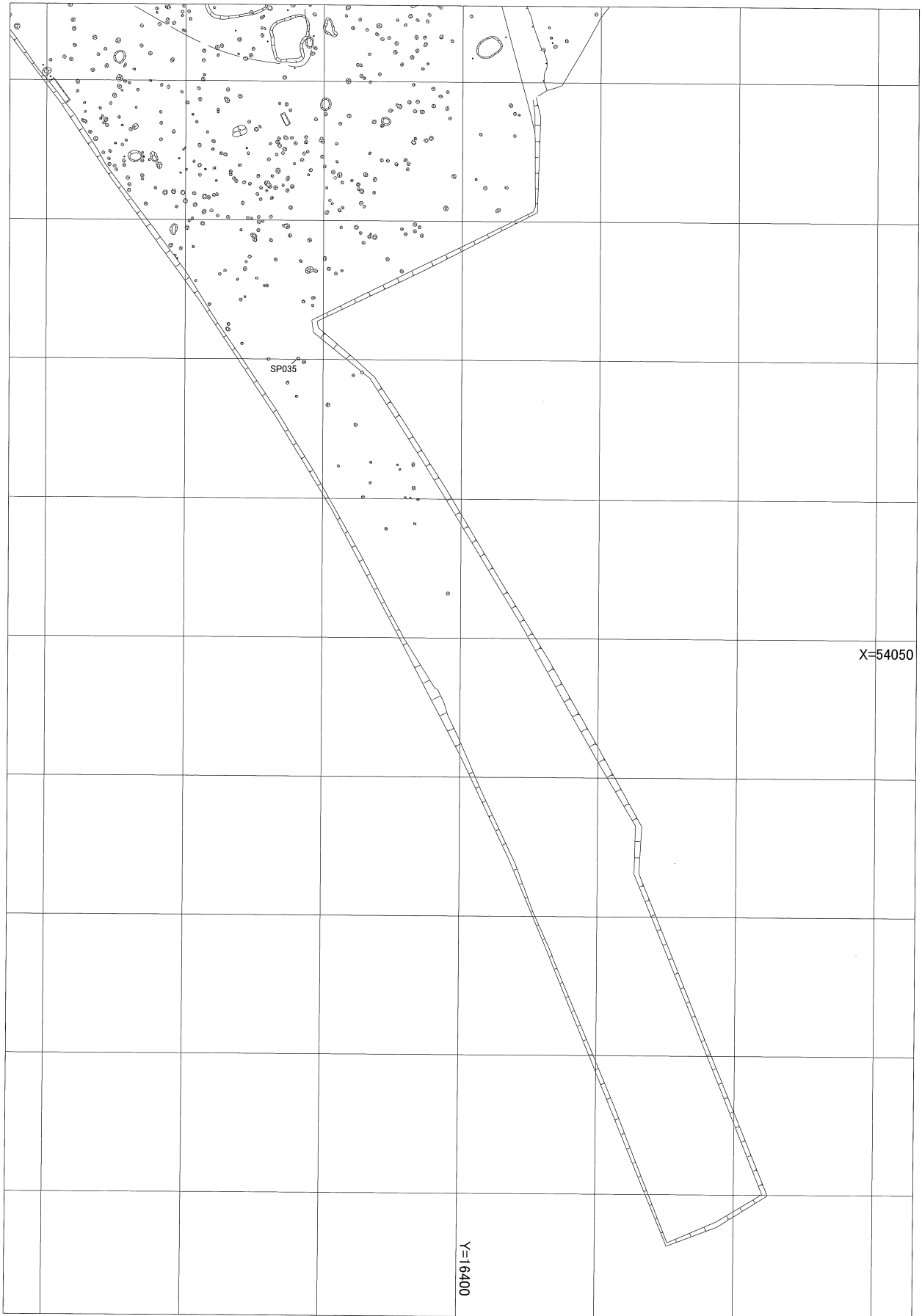


第5図 古戸遺跡遺構配置図 (調査区2)

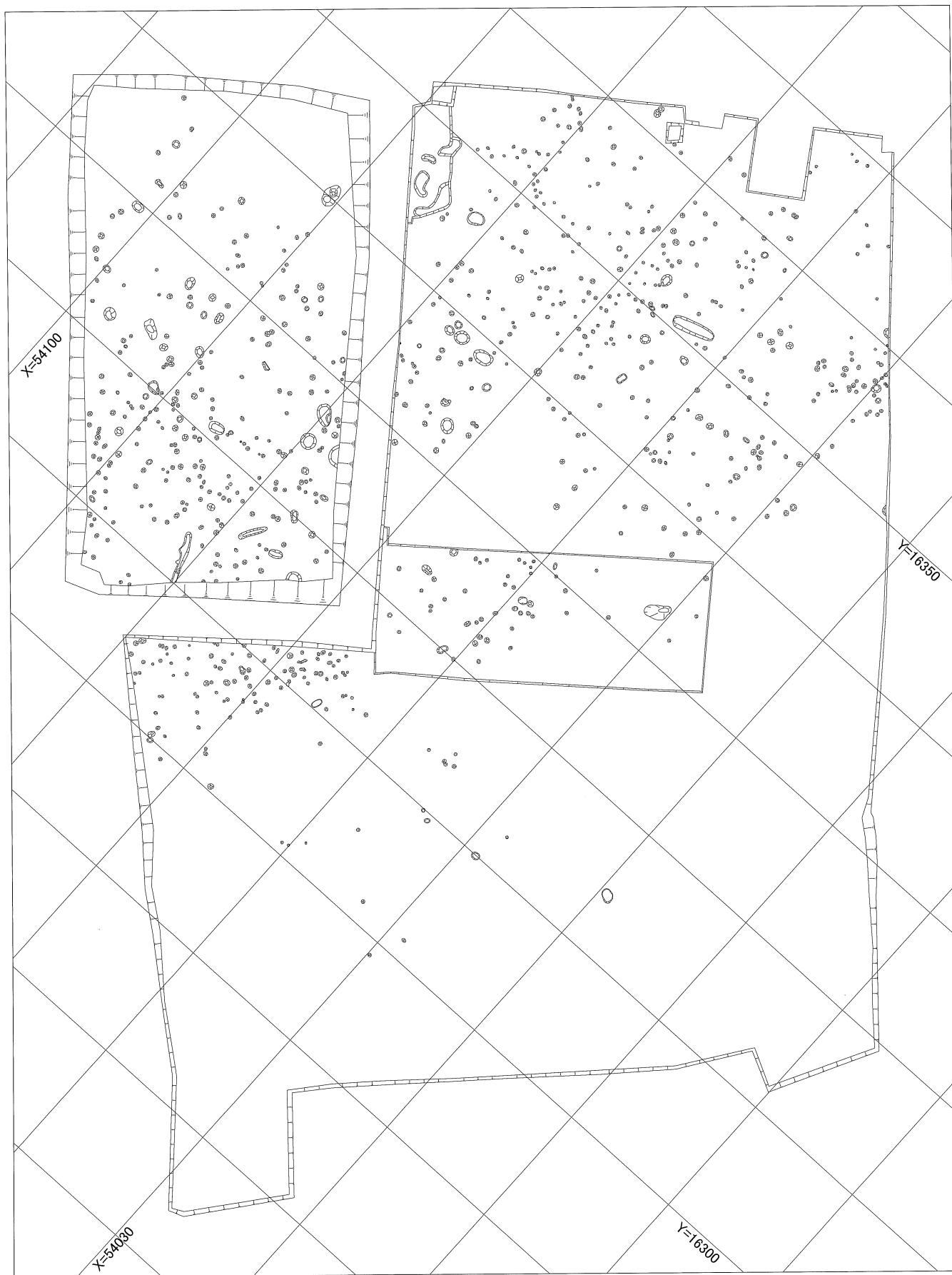


第6図 古戸遺跡遺構配置図(調査区3-1)

第3章 調査の概要

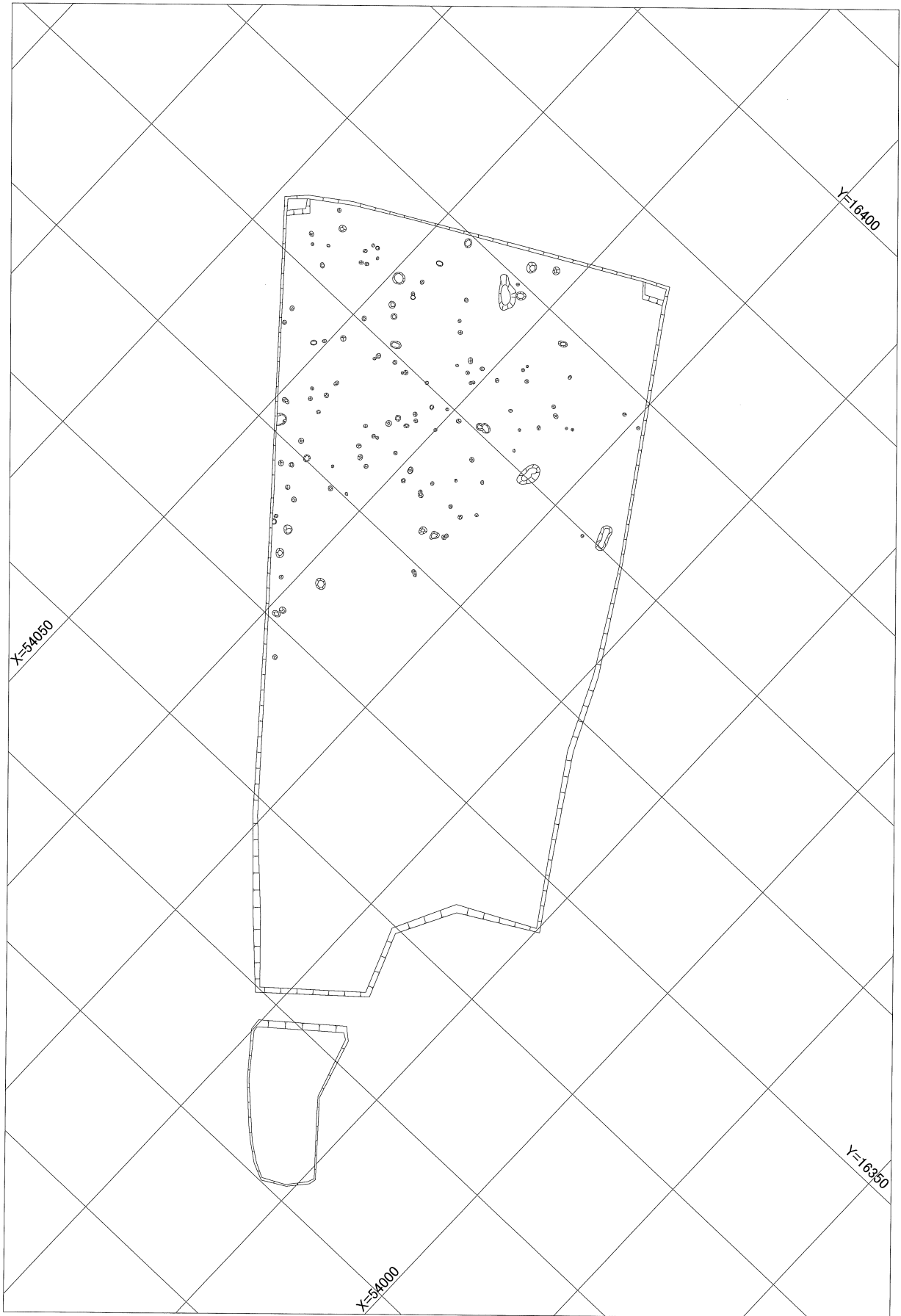


第7図 古戸遺跡遺構配置図（調査区3-2）



第8図 古戸遺跡遺構配置図（調査区4）

第3章 調査の概要



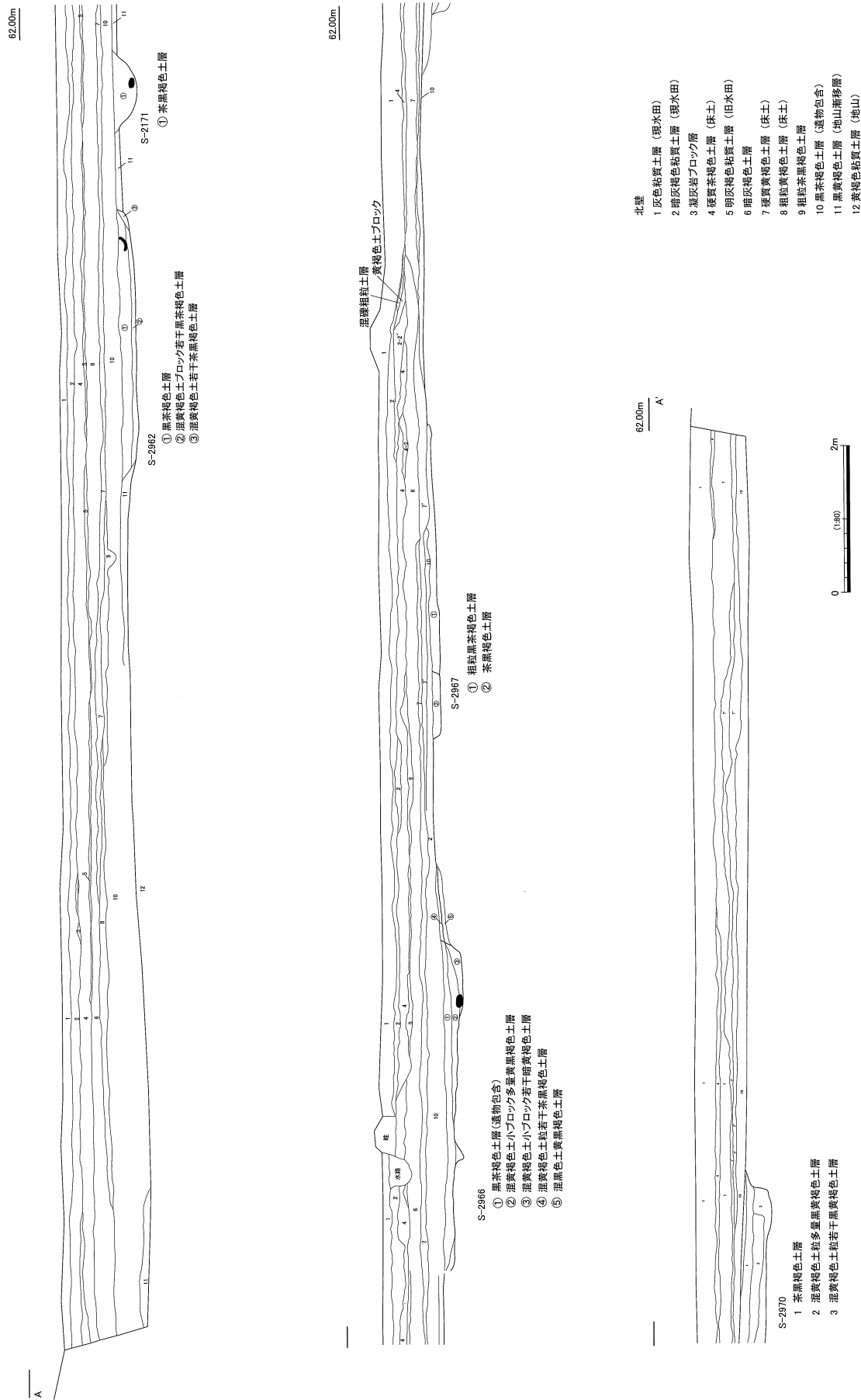
第9図 古戸遺跡遺構配置図（調査区5）



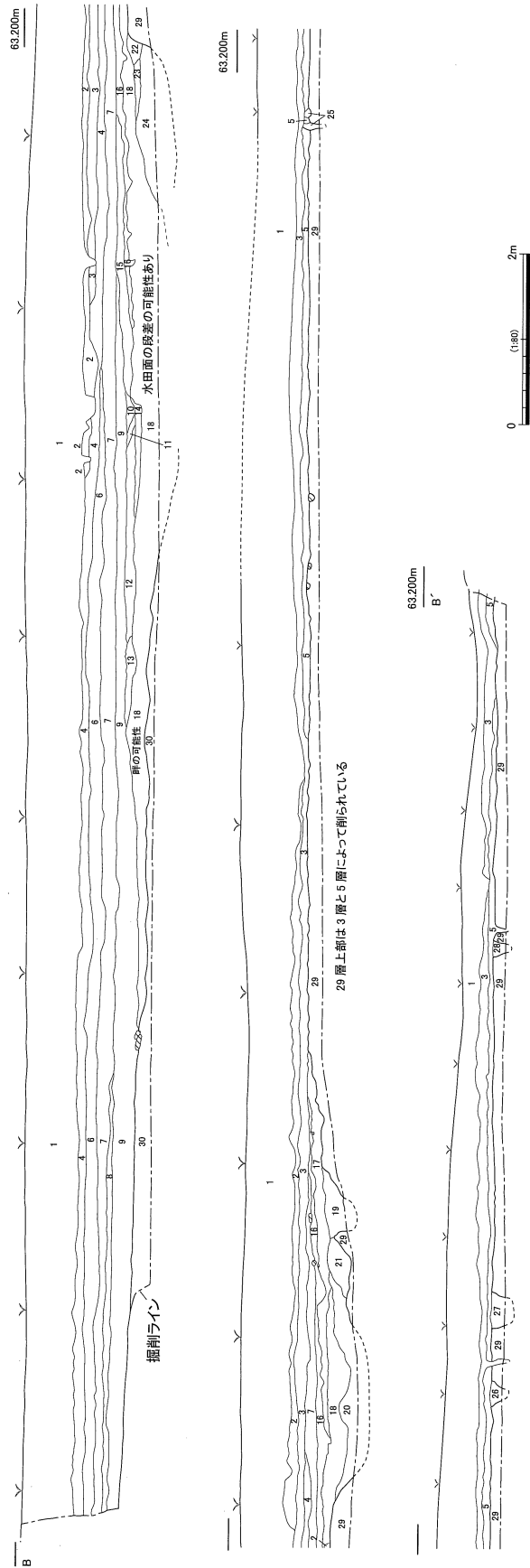
第10図 古戸遺跡遺構配置図(調査区6)



第 11 図 古戸遺跡基本土層位置図



第 12 図 調査区 1 北壁土層図



第13図 調査区6北壁土層図

- 1 現代土上現代耕作土
 - 2 黒褐色粘質土(10YR5/6)乾燥して硬化。粘質性少、灰白・黄褐色の粘を少量に含む。
 - 3 褐色粘質土(10YR4/4)乾燥して硬化。灰白・黄褐色の粘を含む。
 - 4 褐色粘質土(10YR4/2)乾燥して硬化。粘質性少、灰白・黄褐色の粘を少量含む。
 - 5 灰白色の粘を多く含む。遺物未確認。
 - 6 黒褐色粘質土(10YR5/1)乾燥して硬化。粘質性少、灰白・黄褐色の粘を少量含む。
 - 7 黄褐色粘質土(10YR4/1)乾燥して硬化。粘質性少、灰白・黄褐色の粘を少量含む。
 - 8 黒褐色粘質土(10YR5/2)乾燥して硬化。粘質性少、灰白・黄褐色の粘を少量含む。
 - 9 褐色粘質土(10YR4/1)乾燥して硬化。粘質性少、灰白・黄褐色の粘を少量含む。
 - 10 暗褐色粘質土(10YR3/3)乾燥して硬化。粘質性少、灰白・黄褐色の粘を少量含む。
 - 11 黒褐色粘質土(10YR5/2)乾燥して硬化。粘質性少、灰白・黄褐色の粘を少量含む。
 - 12 暗褐色粘質土(10YR4/1)乾燥して硬化。粘質性少、灰白・黄褐色の粘を少量含む。
 - 13 暗褐色粘質土(10YR5/6)乾燥して硬化。粘質性少、灰白・黄褐色の粘を少量含む。
 - 14 暗褐色粘質土(10YR5/1)乾燥して硬化。粘質性少、灰白・黄褐色の粘を少量含む。
 - 15 黒褐色粘質土(7.5YR3/1)乾燥して硬化。粘質性、しまり有、9層より暗い色調となる。
 - 16 黒褐色粘質土(7.5YR2/2)乾燥して硬化。粘質性、しまり有、15層より暗い色調となる。
 - 17 灰黄褐色粘質土(10YR4/2)乾燥して硬化。粘質性ややシルト質、しまり有。
 - 18 暗褐色粘質土(10YR3/3)乾燥して硬化。粘質性ややシルト質、しまり有、灰白色の粘を少量含む。
 - 19 水田面のベース及び溝状遺構の覆土となる。遺物は未確認。
 - 20 暗褐色粘質土(10YR5/1)の粘が混在して濁った土質となる。溝状遺構の覆土となる。遺物は未確認。
 - 21 暗褐色粘質土(10YR3/2)乾燥して硬化。粘質性、しまり有、基本的18層と類似。
 - 22 暗褐色粘質土(10YR3/2)乾燥して硬化。粘質性、しまり有、基本的18層と類似。
 - 23 暗褐色粘質土(10YR3/2)乾燥して硬化。粘質性、しまり有、基本的18層と類似。
 - 24 暗褐色粘質土(10YR3/2)乾燥して硬化。粘質性、しまり有、基本的18層と類似。
 - 25 暗褐色粘質土(10YR4/4)乾燥して硬化。粘質性、しまり有、18層と類似するが、粘性が18層より強い。
 - 26 暗褐色粘質土(10YR3/4)乾燥して硬化。粘質性、しまり有、灰白・黄褐色の粘を多く含む。ピット覆土。
 - 27 暗褐色粘質土(10YR4/4)乾燥して硬化。粘質性、しまり有、灰白・黄褐色の粘を多く含む。ピット覆土。
 - 28 暗褐色粘質土(10YR3/3)乾燥して硬化。粘質性、しまり有、灰白・黄褐色の粘を多く含む。
 - 29 暗褐色粘質土(10YR5/6)乾燥して硬化。粘質性、しまり有、灰白の粘を少量含む。
 - 30 暗褐色粘質土(10YR5/6)乾燥して硬化。粘質性、しまり有、灰白の粘を少量含む。
- ※2・3・5層は類似した土質となる。また、29層と9層の間は0.2~5cmの間隙が数箇所みられている。
この間隙からは古代~近世の土器、縄文、黒曜石、石斧が多く確認している。
※4層と9層は類似した土質、同じにしても良い。2・3・5層による造成前の耕作土の可能性有。
※7層と9層は類似した土質、同じにしても良い。2・3・5層による造成前の耕作土の可能性有。
※10層は暗褐色粘質土(10YR3/3)乾燥して硬化。粘質性少、灰白・黄褐色の粘を少量含む。
※11層は暗褐色粘質土(10YR5/2)乾燥して硬化。粘質性少、灰白・黄褐色の粘を少量含む。
※12層は暗褐色粘質土(10YR4/1)乾燥して硬化。粘質性少、灰白・黄褐色の粘を少量含む。
※13層は暗褐色粘質土(10YR5/6)乾燥して硬化。粘質性少、灰白・黄褐色の粘を少量含む。
※14層は暗褐色粘質土(10YR5/1)乾燥して硬化。粘質性少、灰白・黄褐色の粘を少量含む。
※10~14層は9層を基本土とする。No.9に対して削平を受けており、遺構埋土または耕作土と推定。
遺物は確認されない。

第4章 遺構と遺物

第1節 縄文時代

SH001

SH001は調査区3に位置する。長辺5.5m、短辺4mを測るやや不定形の隅丸方形を呈する竪穴建物である。中心からやや南側には円形の土坑がみられ、内部からは赤褐色の焼土がみられた、この土坑の周辺からは大量の土器が出土している。

第15図1～11は水平口縁を呈する深鉢である。口縁端部外面には沈線を巡らし、8～11のように沈線の下にキザミ目を施すものもみられる。

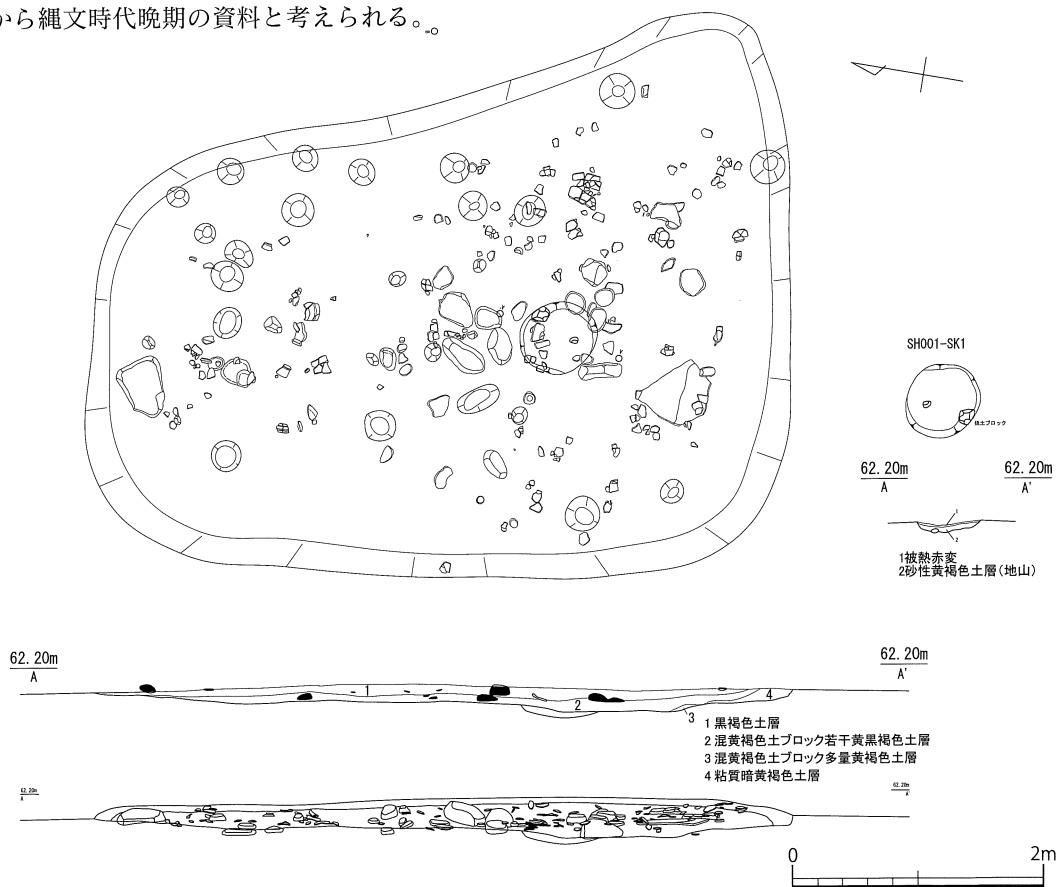
12～20は波状口縁を呈する深鉢である。16器面が非常に厚く内外面に丁寧な調整を行った後、沈線や刺突を施している。

20～22、第16図23～27は胴部に施文を巡らす深鉢の胴部片である。23は反転復元できた資料で、胴部は丸く膨らみ頸部の直下に沈線や押し文が巡る。27は外面に縄文を巡らした資料である。

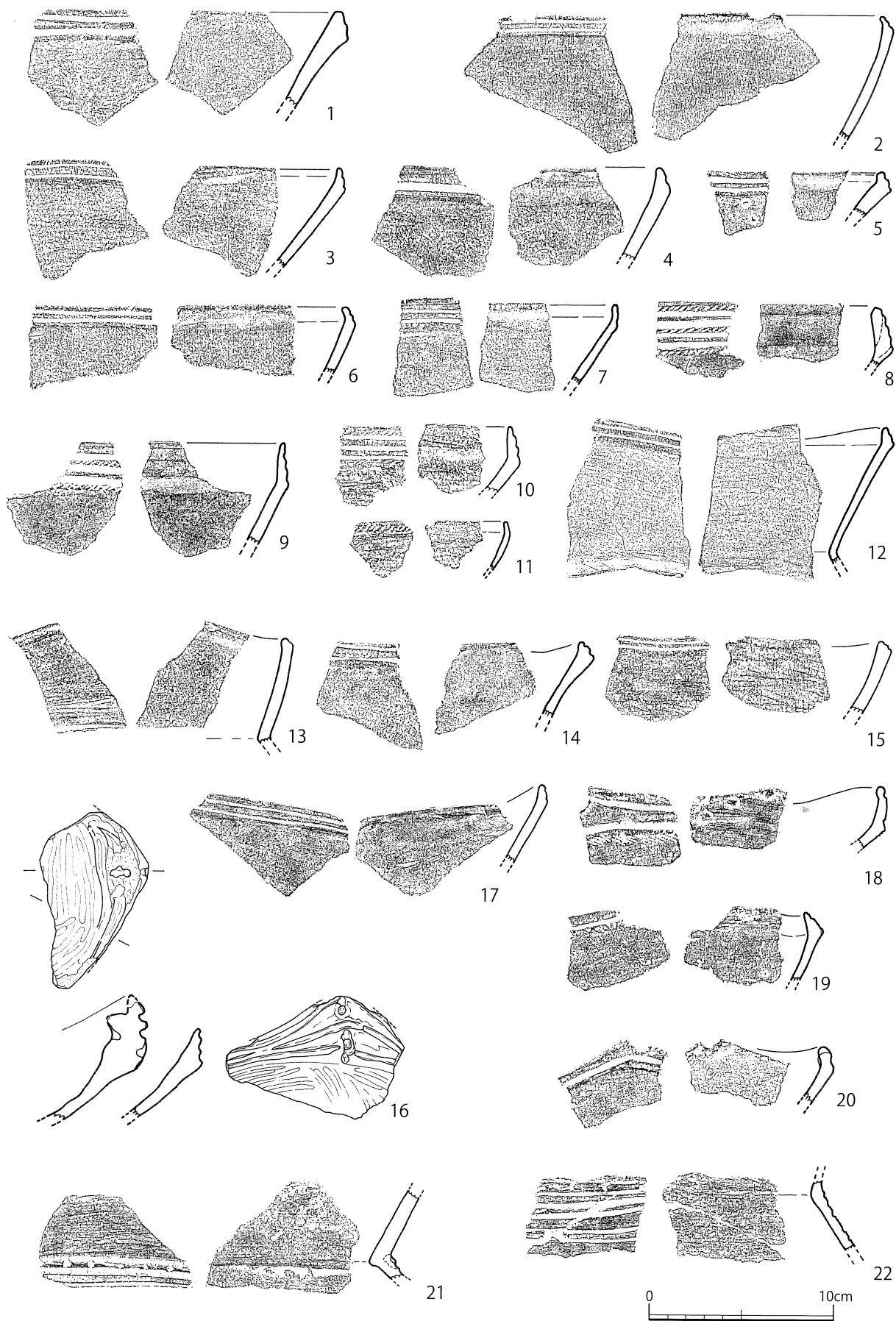
28～31、第17図32～44図、第18図45～47は水平口縁を呈する無文の深鉢である。いずれも内外面共に丁寧な調整を施し口縁部は直線的に大きく開く。口縁端部の形状は短く内傾するものもみられ、32のように口縁端部内面に一条の沈線を巡らすものもある。

48～54は波状口縁を呈する無文の深鉢である。いずれも内外面共に丁寧な調整を施し波状の頂部は丸みを帯びている。54には口縁端部外面に細い一条の沈線が巡る。

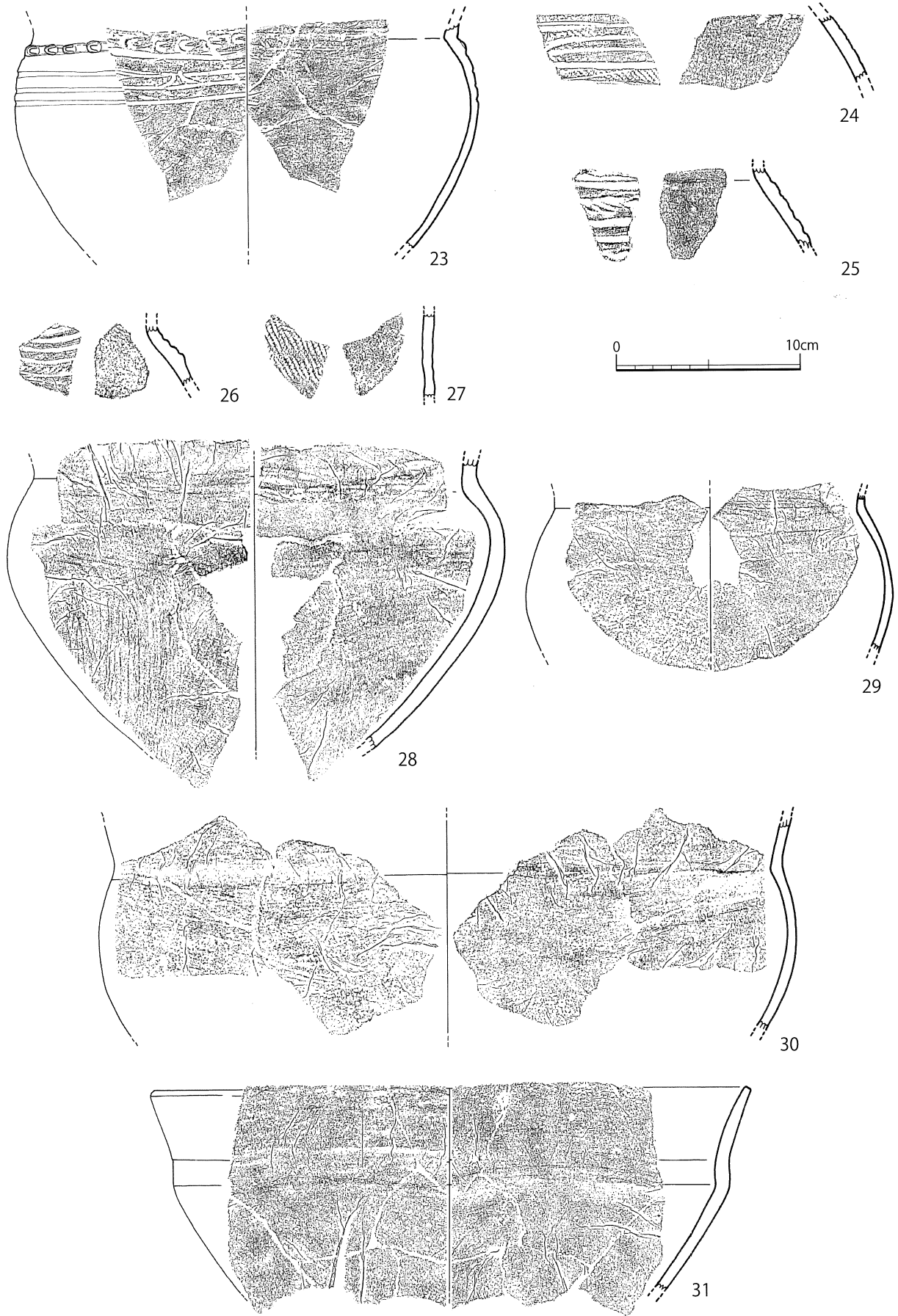
55～57は鉢である。55が胴部に鈍い三条の沈線が巡り、口縁部は直線的に大きく開く。口縁端部内面にはやや鈍い沈線が一条巡る。56はこれも胴部に鈍い三条の沈線が巡る資料で、口縁部は短く直立する。胴部はやや丸みを帯びながら底部へと延びる。57は朝顔状に広がる小型の鉢である。内外面とも丁寧な調整が行われ、形状から縄文時代晩期の資料と考えられる。



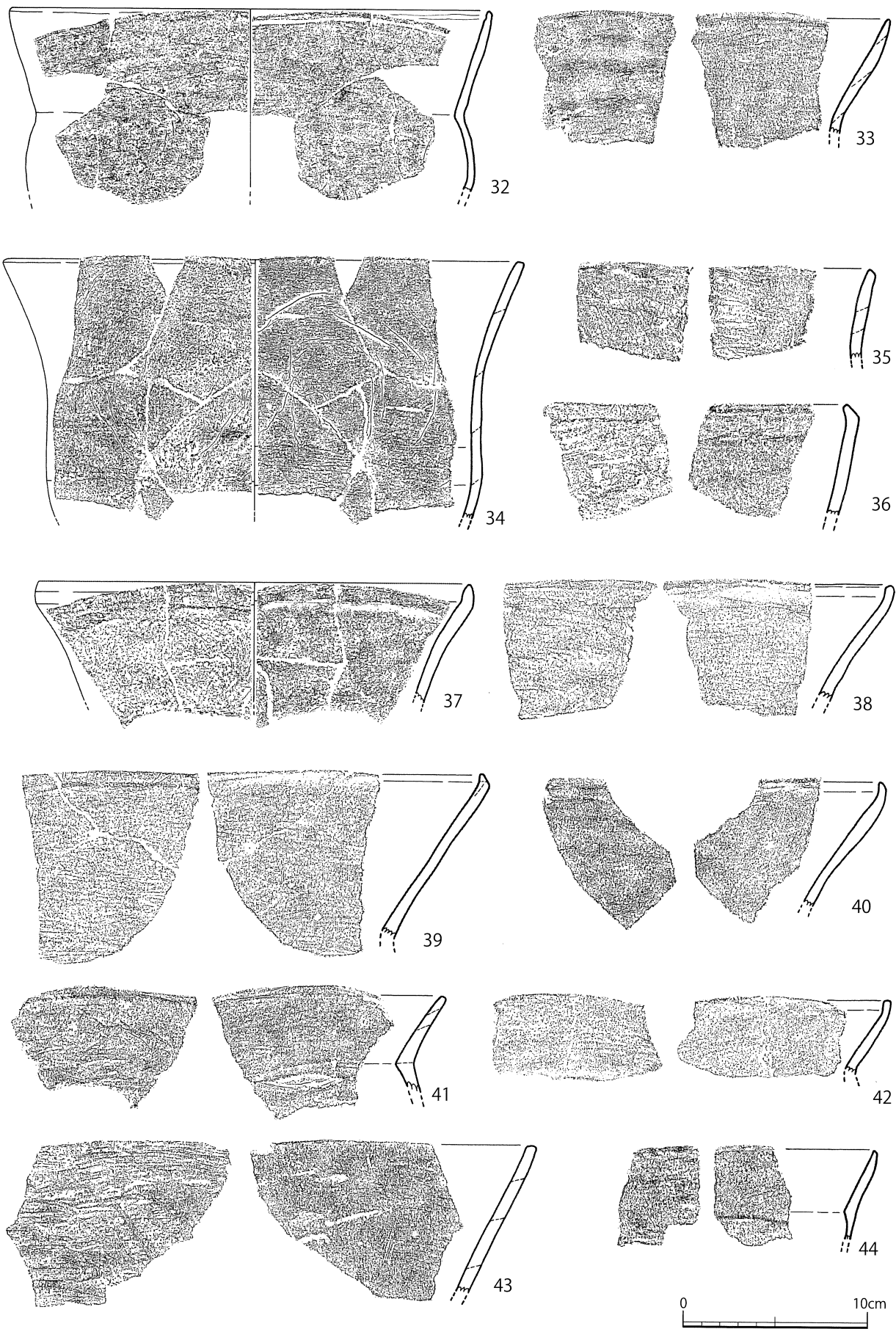
第14図 SH001 遺構実測図



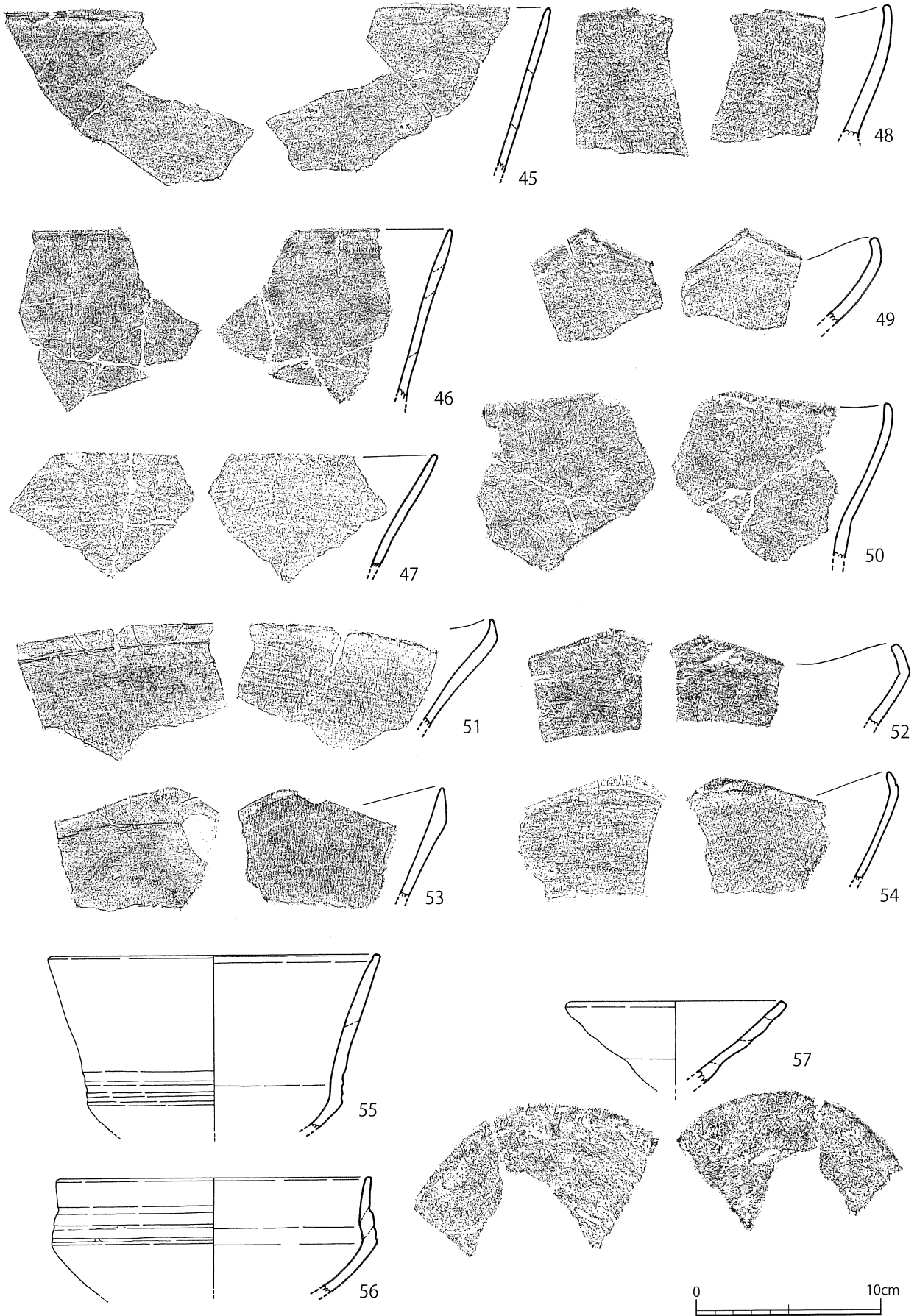
第15図 SH001 出土遺物実測図(1)



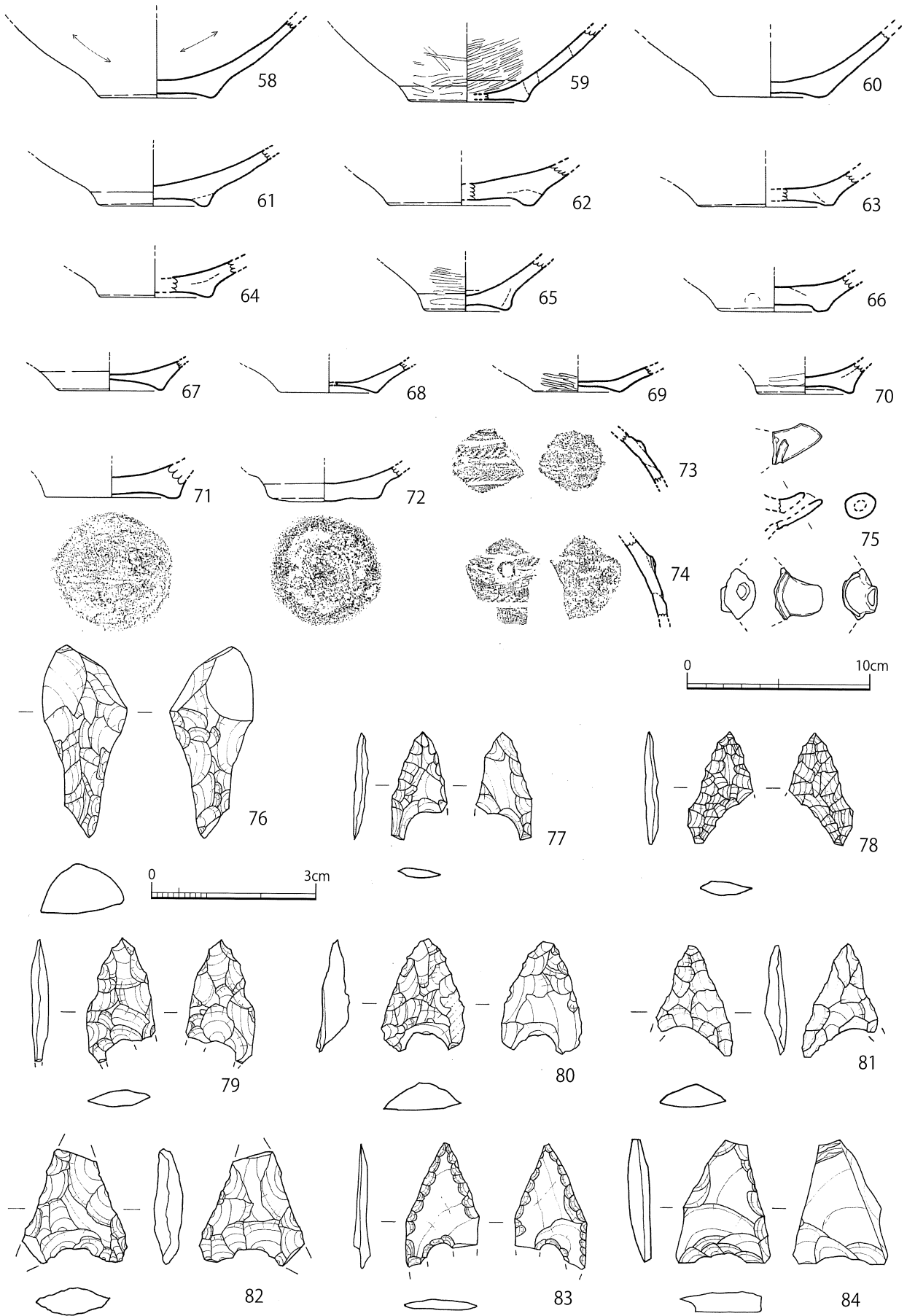
第16図 SH001 出土遺物実測図(2)



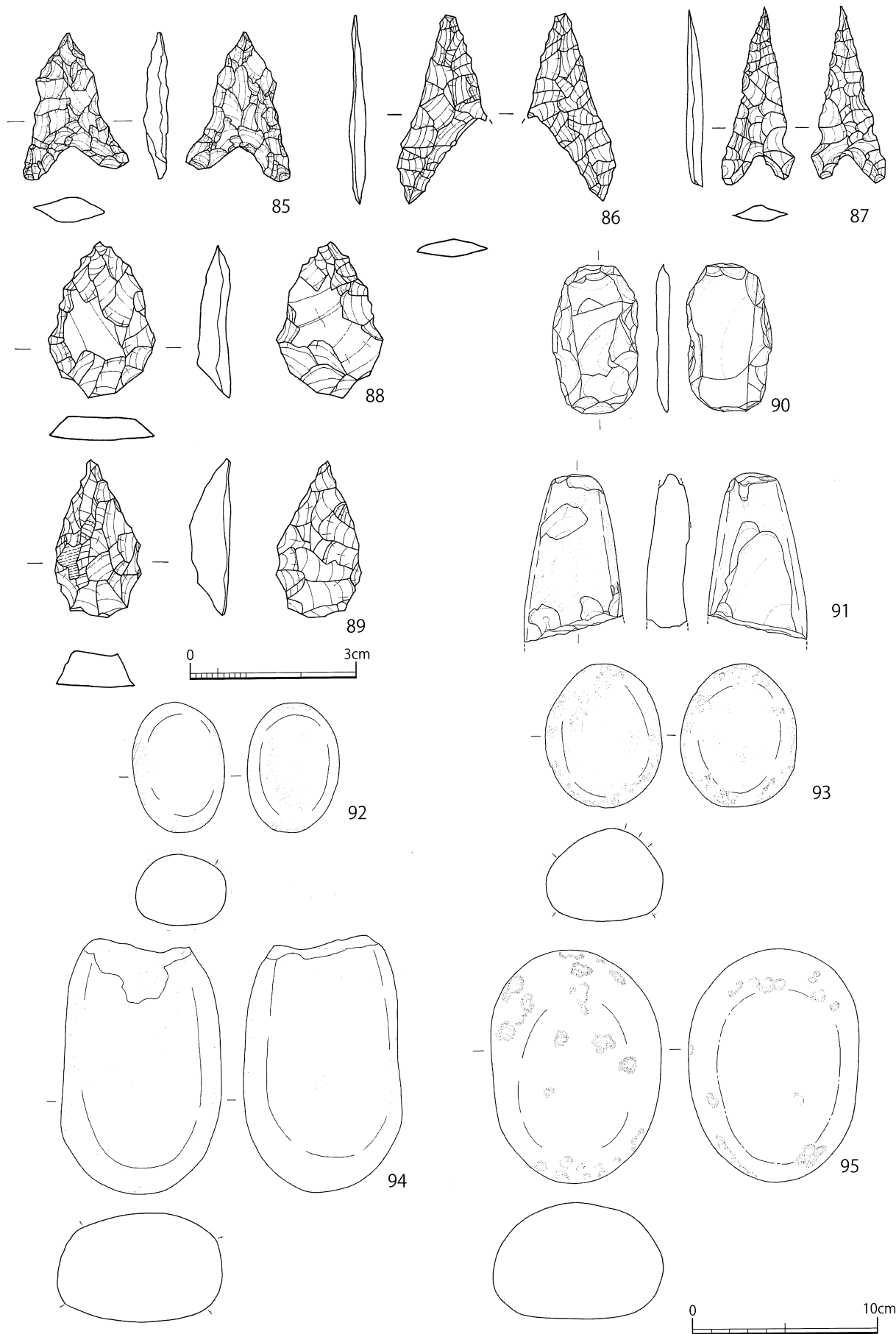
第 17 図 SH001 出土遺物実測図 (3)



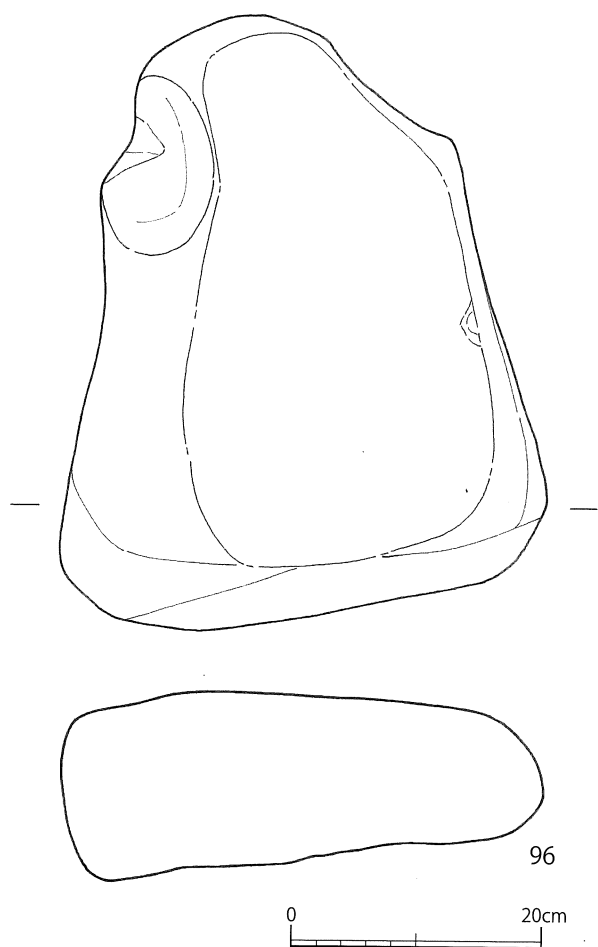
第18図 SH001 出土遺物実測図(4)



第19图 SH001出土遺物実測图(5)



第20図 SH001 出土遺物実測図(6)



第21図 SH001出土遺物実測図(7)

58～72は縄文土器の底部資料である。72を除くとすべてレンズ状の上げ底で、内外面共にミガキが施される。73～75は注口土器と考えられる資料である。73、74は体部の資料で、キザミ目状の偽縄文の上から沈線を巡らし、74には外面に凹点が施される。75は残存長3cm程の注口部の資料で、外面下部には一条の沈線が巡る。注口部端部は楕円形である。76は姫島産黒曜石製石錐である。石錐の先端部は折れており、上部の断面は三角形を呈する。77～87は石鏃である。83はサヌカイト製で2mm程の剥片を端部のみ加工し石鏃としたものである。86、87は大型の石鏃資料で、特に87は黒曜石製である。84は黒曜石製の石鏃の未成品と考えられる資料である。88、89は涙形を呈する剥片石器で石鏃と比較すると非常に厚みをもつ。いずれも姫島産黒曜石製である。90は小型の扁平打製石斧である。91は蛇紋岩製磨製石斧で刃部を欠く。92～95は安山岩製の敲石、摺石である。96は台石で、遺構の北部床面から出土した。長辺48cm、短辺は38cmで安産岩製である。上面に平坦面が確認できる。

以上の遺物から、本竪穴建物の時期は縄文時代後期と考えられる。

58～72は縄文土器の底部資料である。72を除くとすべてレンズ状の上げ底で、内外面共にミガキが施される。73～75は注口土器と考えられる資料である。73、74は体部の資料で、キザミ目状の偽縄文の上から沈線を巡らし、74には外面に凹点が施される。75は残存長3cm程の注口部の資料で、外面下部には一条の沈線が巡る。注口部端部は楕円形である。76は姫島産黒曜石製石錐である。石錐の先端部は折れており、上部の断面は三角形を呈する。

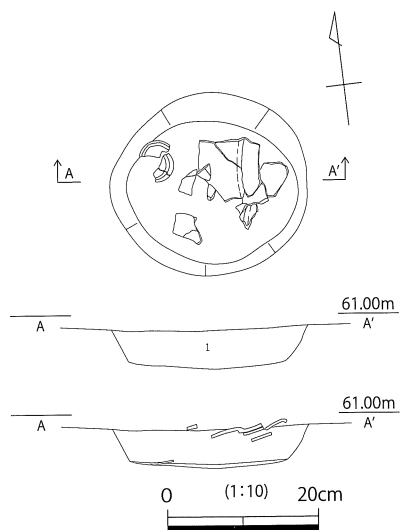
77～87は石鏃である。83はサヌカイト製で2mm程の剥片を端部のみ加工し石鏃としたものである。

86、87は大型の石鏃資料で、特に87は黒曜石製である。84は黒曜石製の石鏃の未成品と考えられる資料である。88、89は涙形を呈する剥片石器で石鏃と比較すると非常に厚みをもつ。いずれも姫島産黒曜石製である。90は小型の扁平打製石斧である。91は蛇紋岩製磨製石斧で刃部を欠く。92～95は安山岩製の敲石、摺石である。96は台石で、遺構の北部床面から出土した。長辺48cm、短辺は38cmで安産岩製である。上面に平坦面が確認できる。

以上の遺物から、本竪穴建物の時期は縄文時代後期と考えられる。

SK001

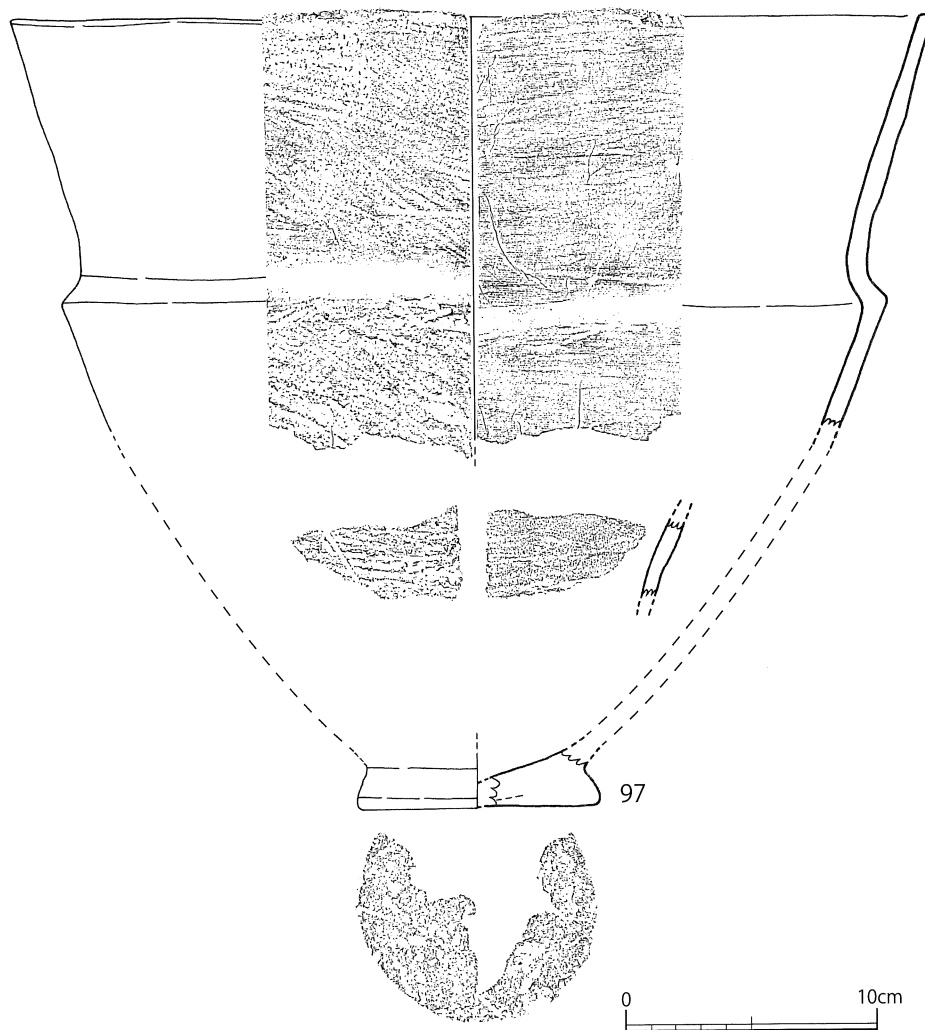
SK001は調査区1に位置する。長辺26cm、短辺24cmの円形を呈する土坑で、内部からは一個体に還元可能な深鉢が出土した。土器片のほとんどは床面から浮いた位置から出土し。底部は遺構の北東部から口縁部は中央部に集中していた。土器片の下部と上部で埋土の違いはみらなかった。



第22図 SK001 遺構実測図

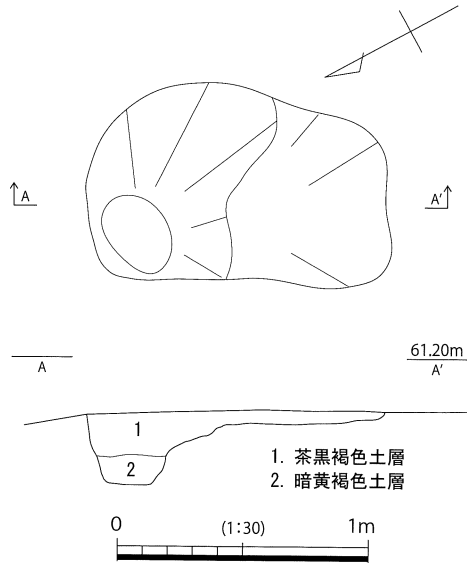
内外面共に貝殻条痕を施す深鉢で、口径は約37cmに還元でき、体部にはくの字状の屈曲部がある。口縁部は大きく外側に外反し、接合はしないが、同一個体と考えられる破片には沈線が施されたものもあり、図化できなかった資料も含めると3片ほど確認できる。底部径は9.8cmに還元でき、底は肥厚し、底部下部が広がる。

これらの出土遺物から本遺構の時期は縄文時代晩期と考えられる。

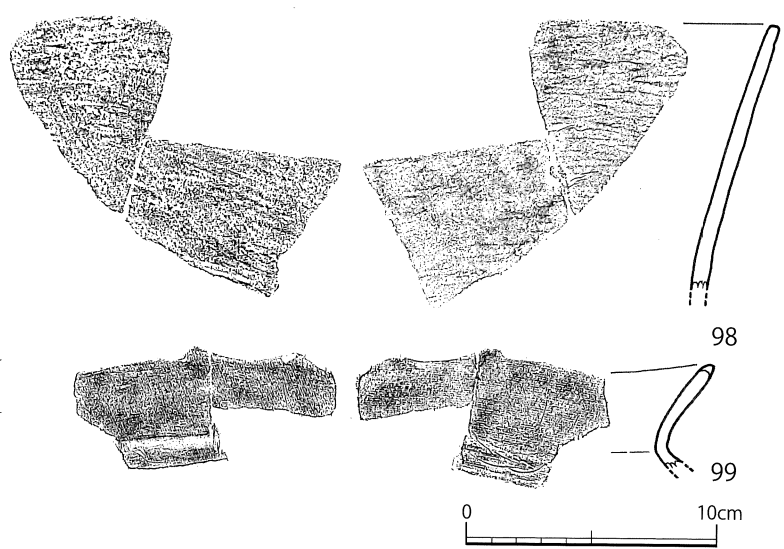


第23図 SK001 出土遺物実測図

第4章 遺構と遺物



第24図 SK002 遺構実測図



第25図 SK002 出土遺物実測図

SK002

SK002は調査区1に位置する。長辺1.2m、短辺80cmの楕円形を呈する遺構である。北東部方向に傾斜し深くなっており、1層から2点の土器片が出土している。

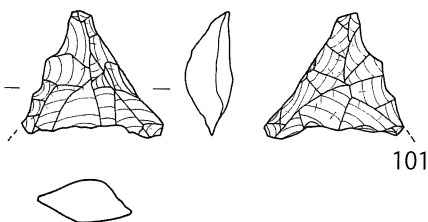
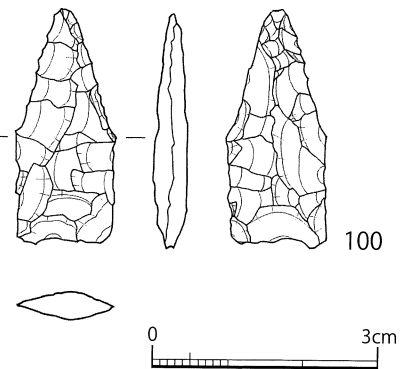
第25図98は内外面ともに貝殻条痕で調整を施した深鉢の口縁部資料である。99は口縁部にリボン状突起を有する浅鉢であり、これらの出土遺物から本遺構の時期は縄文時代晩期と考えられる。

SK003

SK003は調査区1に位置する土坑である。第26図100はサヌカイト製の石鏃で、全体の形は五角形で大型の資料である。101は小型の石鏃で、姫島産黒曜石製である。

SK004

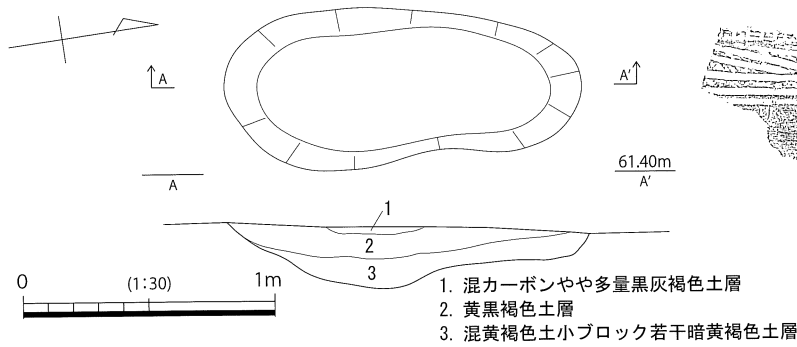
SK004は調査区1に位置する土坑である。内部からは小片の土器が数点出土しており、第27図102はそのうち図化できた資料である。縄文時代晩期の浅鉢で内外面ともにナデ調整を行っている。



第26図 SK003 出土遺物実測図



第27図 SK004 出土遺物実測図



第28図 SK005 遺構実測図

SK005

SK005は調査区2に位置する。長辺に1.4m、短辺65cmの楕円形の土坑で、南側に向けてやや深くなっている。1層には炭化物を多く含み、2層から土器片が数点出土した。

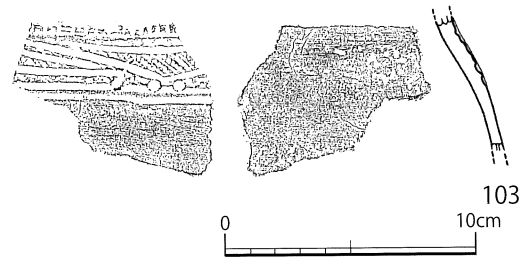
第29図103は縄文時代の深鉢で、頸部に刻目を、その下に縄文を施したあと、三角文を中心とした沈線が巡る。

これらの出土遺物から本遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

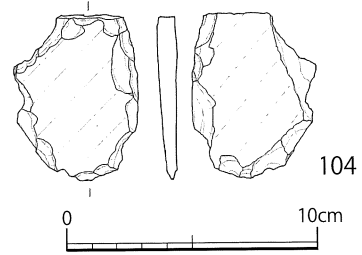
SK006

SK006は調査区2に位置する円形の土坑である。内部の底に近い位置から石斧が出土している。

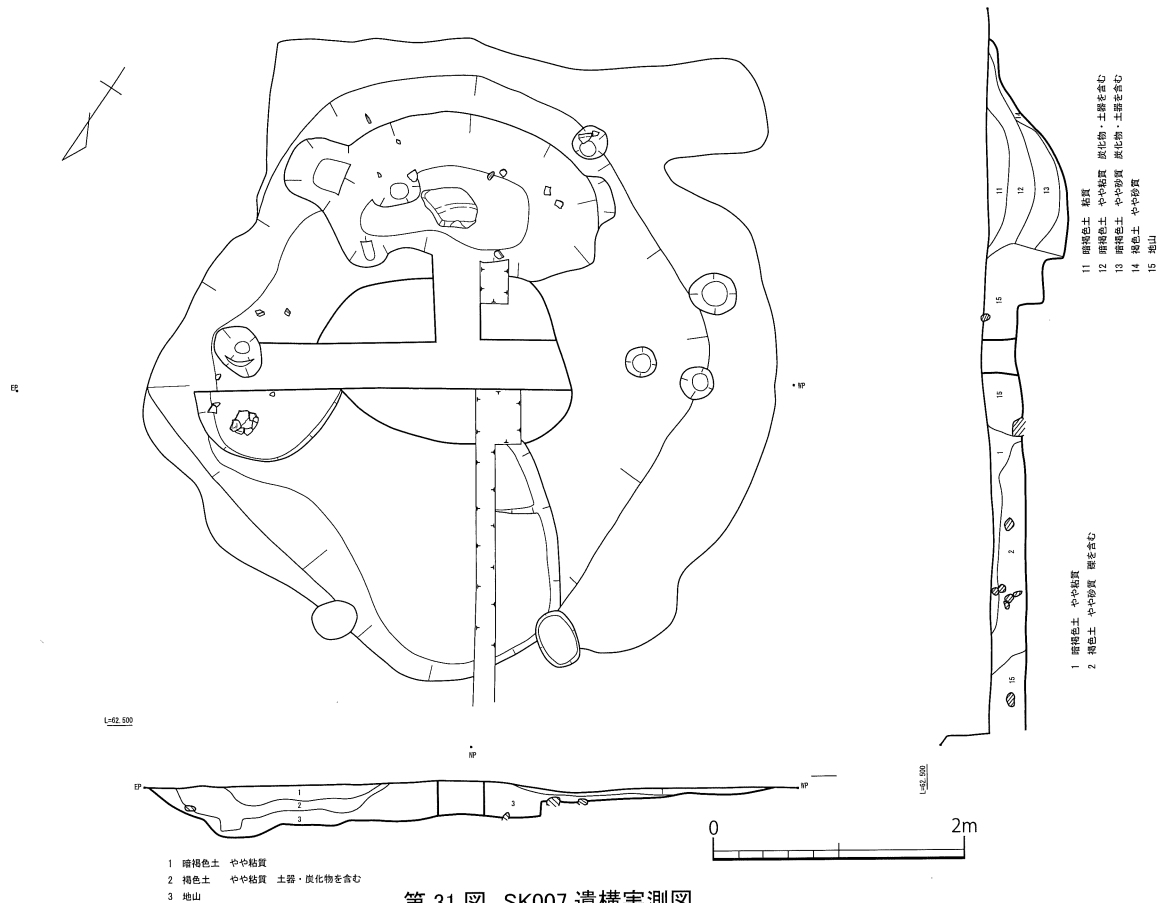
第30図104は安山岩製の扁平打製石斧である。上部を一部欠いている。



第29図 SK005 出土遺物実測図



第30図 SK006 出土遺物実測図



第31図 SK007 遺構実測図

第4章 遺構と遺物

SK007

SK007は調査区3に位置する。長辺5.1m、短辺5mの円形を基調とした不定形の土坑で、東側に向けて深くなる。主として遺物は東側の掘り込みを中心に出土している。

遺物

第32図105、106は浅鉢である。105は口径を9.8cmに復元でき、口縁端部内面には一条の沈線を施し、くの字に屈曲する体部には4条の浅い沈線を巡らせる。106も同様の器形を呈する浅鉢と考えられる。体部の屈曲する部分の破片資料であり、沈線の位置の違いから105とは別の個体と考えられる。

107～110は深鉢である。107～109は有文の深鉢の胴部資料で107は外面に渦巻き状の沈線を配す。

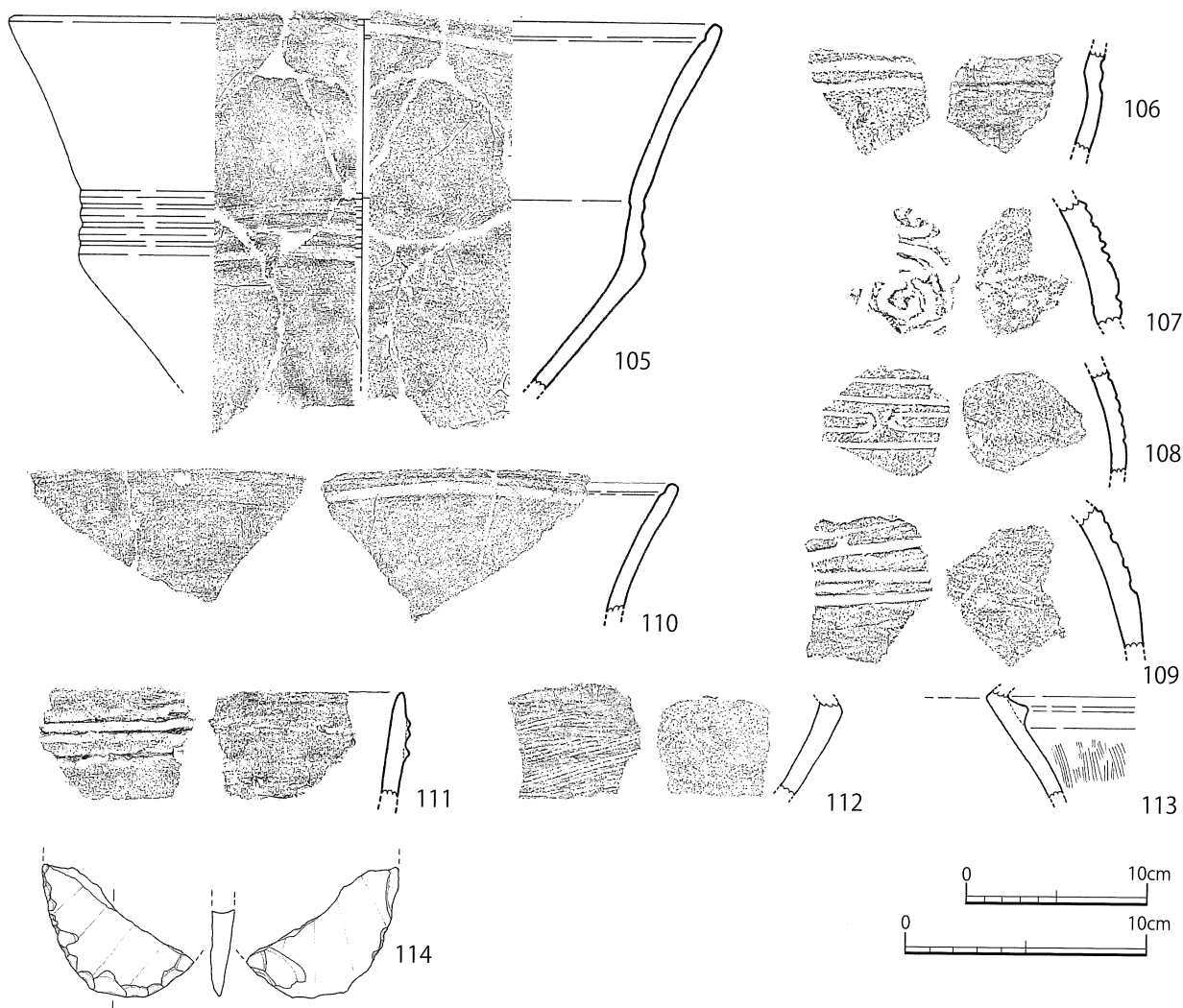
108、109は三角文が崩れた沈線が胴部に巡り、沈線の下に縄文はみられない。110は無文の水平口縁を呈する深鉢である。口縁端部内面に一条の沈線が巡る。

111は深鉢の口縁部資料で3条の微隆三角突帯が巡る。縄文時代前期（轟B式）の資料と考えられる。112は外面に貝殻条痕を施す深鉢である。

113は弥生土器で、頸部に一条の三角突帯を巡らす弥生時代中期後半の資料である。

114は安山岩製の扁平打製石斧で厚さ1cmほどの剥片の端部のみを剥離し加工している。

これらの出土遺物から本遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。



第32図 SK007 出土遺物実測図

SK008

SK008は調査区3に位置する。不定形土坑で、埋土の中位から土器片が一片出土した。

第33図115は縄文時代の深鉢の口縁部の破片で、外面に縄文が施され、内面はナデで調整される。

これらの出土遺物から本遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

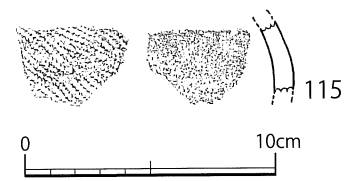
SK009

SK009は調査区3に位置する。楕円形の土坑で、土坑の底に近い位置から数点の土器片が出土した。

第34図116は縄文時代の深鉢の体部破片である。内外面ともに貝殻条痕が横方向に施され、土器片の残存状況から全体の径を復元するのは難しいが、比較的大きい個体になると考えられる。

117、118は縄文時代の深鉢の底部である。117は底部が、レンズ状にへこみ、内外面共にミガキを行っており、縄文時代後期の資料と考えられる。118は底部がやや上げ底になり、内外面共に貝殻条痕が施されており、縄文時代晩期の資料と考えられる。

これらの出土遺物から本遺構の時期は縄文時代後期～晩期と考えられる。

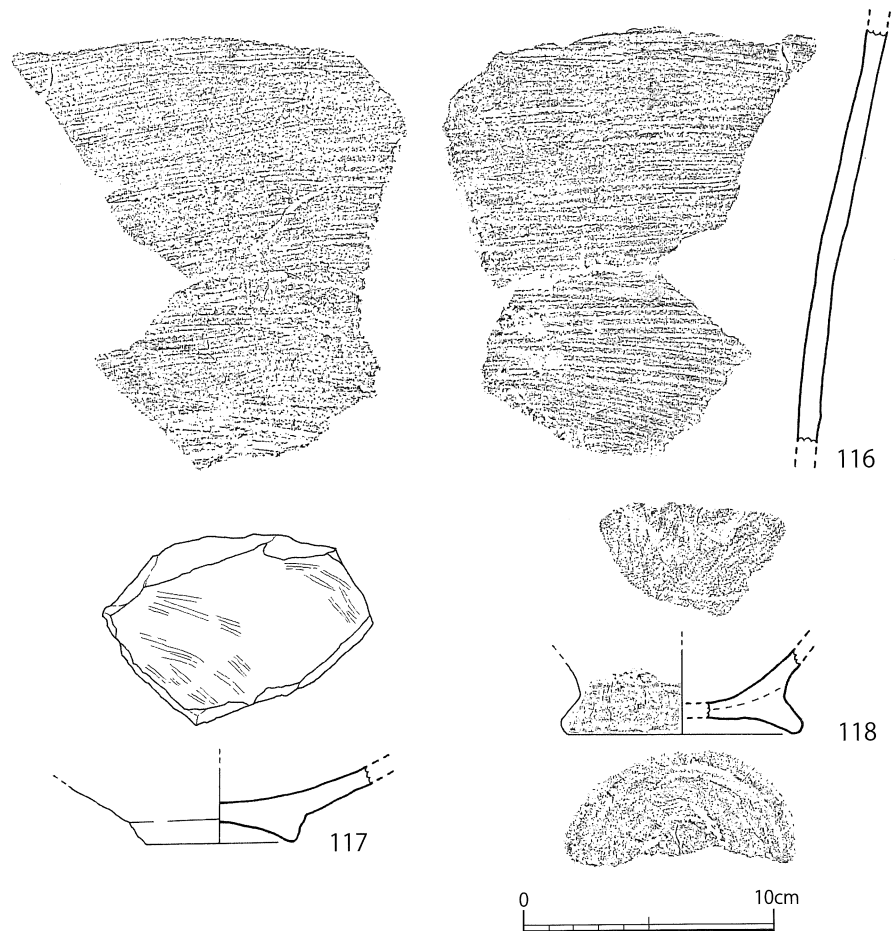


第33図 SK008 出土遺物実測図

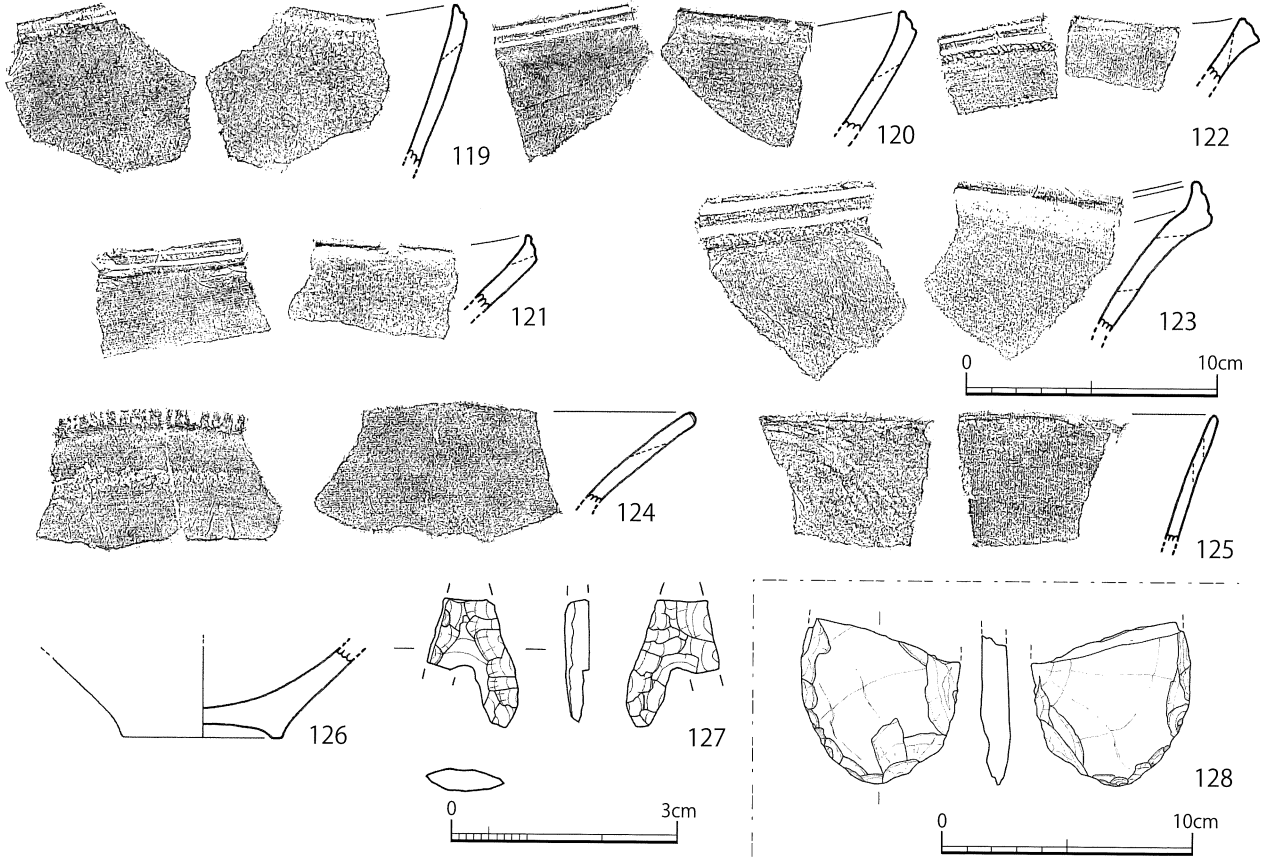
SK010

SK010は調査区3に位置する。円形と考えられる土坑で、検出時に残存状況が極めて悪く明確な遺構の形を確認できなかった。しかし、出土遺物の残存状況や周辺遺構との位置関係から、円形の土坑状であると考えられる。

第35図119～123は縄文時代の深鉢の口縁部破片である。いずれも波状口縁を呈する資料で、2本の沈線を巡らしている。122、123は沈線の下に縄文を施文する。



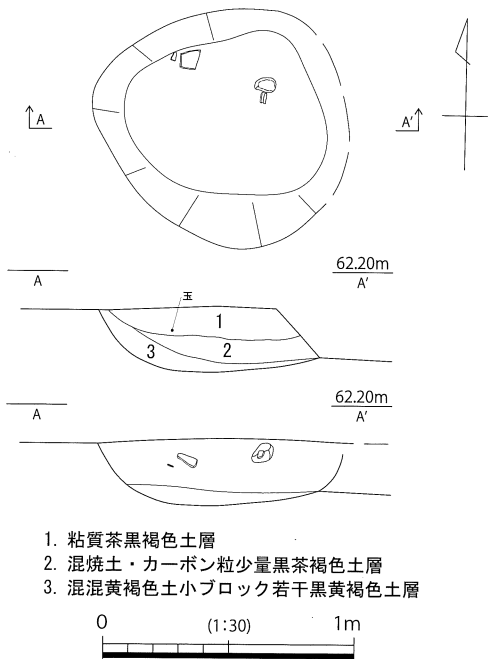
第34図 SK009 出土遺物実測図



第35図 SK010 出土遺物実測図

第36図 SK011 出土遺物実測図

124は無文の深鉢の口縁部である。口縁端部に2~3mm間隔でキザミ目を施し、口縁部は大きく外側に傾く。
 125は無文の水平口縁を呈する深鉢の口縁部片である。内外面共にミガキが施され、口縁部は直線的に立ち上がる。



1. 粘質茶黒褐色土層
2. 混焼土・カーボン粒少量黒茶褐色土層
3. 混混黄褐色土小ブロック若干黒黄褐色土層

第37図 SK012 遺構実測図

126は底部である。底はレンズ状にへこみ内外面共にミガキを行っている。

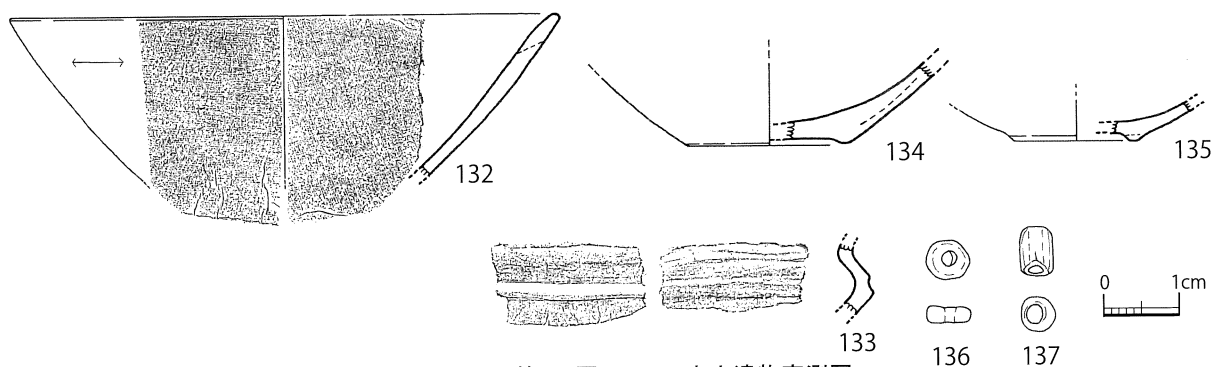
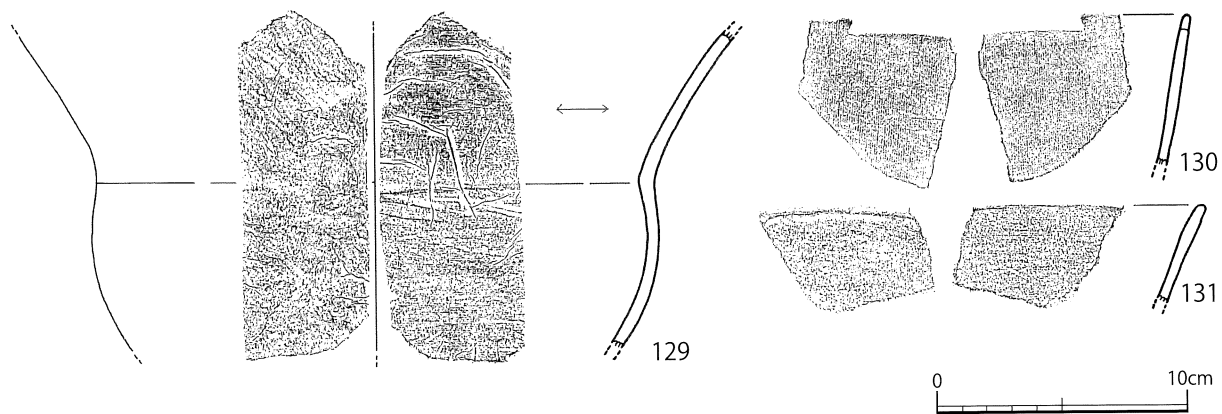
127は黒曜石製の石鏃である。先端部の一部を欠いているが、全長は1.5cm程度に復元でき下部の挟りこみが深く入る。

これらの出土遺物から本遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

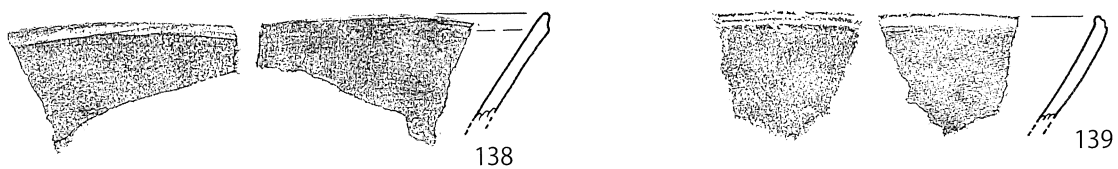
SK011

SK011は調査区3に位置する。楕円形の土坑で、埋土からは扁平打製石斧が出土した。

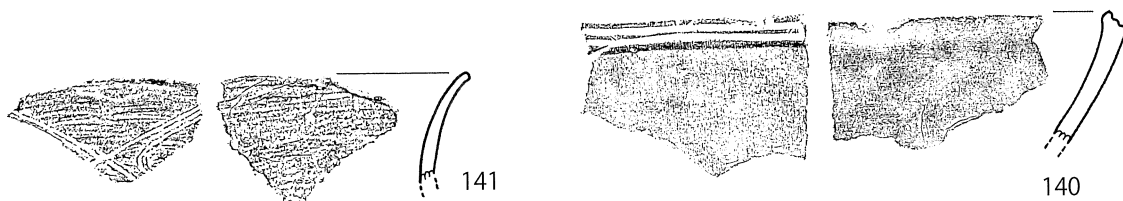
第36図128は安山岩製の扁平打製石斧である。全体の半分程度が残る。



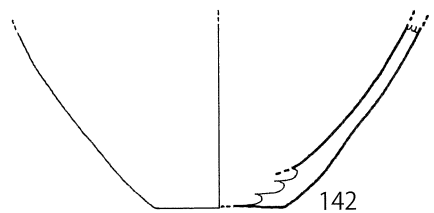
第38図 SK012 出土遺物実測図



第39図 SK013 出土遺物実測図



第40図 SK014 出土遺物実測図



第41図 SK015 出土遺物実測図

第4章 遺構と遺物

SK012

SK012は調査区3に位置する。長辺1m、短辺1mの円形の土坑で、東側の一部をSK040に切られている。埋土の中位から複数の土器片と玉2点が出土した。

第38図129～131は無文の深鉢である。129は口縁部を欠く胴部の資料で、大破片が残存し反転復元可能であった。130、131は水平口縁を呈する口縁部の資料で、130は直線的に立ち上がり、やや外反し、リボン状の突起が認められる。131は直線的に立ち上がる。

132、133は浅鉢である。132は口径22cmに反転復元できた資料で、内外面共にミガキが施され、椀型の形を呈する。133は浅鉢の屈曲部で、外面には一条の沈線が巡る。

134、135は底部の資料である。共にやや底が上げ底で、内外面共にミガキが施される。

136、137は緑色のクロム白雲母製と考えられる玉の資料である。136は直径6mm程で、厚さは2mm、穴の内径は1.5mmであり、やや扁平な形状を呈する。137は直径5mm、長さは1.15cm、穴の内径は2mmであり、管玉上の形状を呈する。いずれもほかの遺物と同様に埋土の1層から出土している。

これらの出土遺物から本遺構の時期は縄文時代晩期と考えられる。

SK013

SK013は調査区3に位置する。楕円形の土坑で、埋土から数点の土器が出土した。

第39図138は水平口縁を呈する深鉢の口縁部片である。口縁端部に一条の沈線が巡り、直線的に立ち上がる。

SK014

SK014は調査区3に位置する。楕円形の土坑で、埋土から数点の土器が出土した。

第40図139、140は水平口縁を呈する深鉢の口縁部片である。口縁端部に二条の沈線が巡り、やや内湾する。

これらの出土遺物から本遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

SK015

SK014は調査区3に位置する。楕円形の土坑で、埋土から数点の土器が出土した。

第41図141は深鉢の口縁部片で、内外面共に横方向の貝殻条項を施し、外面にはX字状の線刻を施す。口縁部はやや外反する。これらの特徴から瀬戸内系の影響が考えられる資料である。

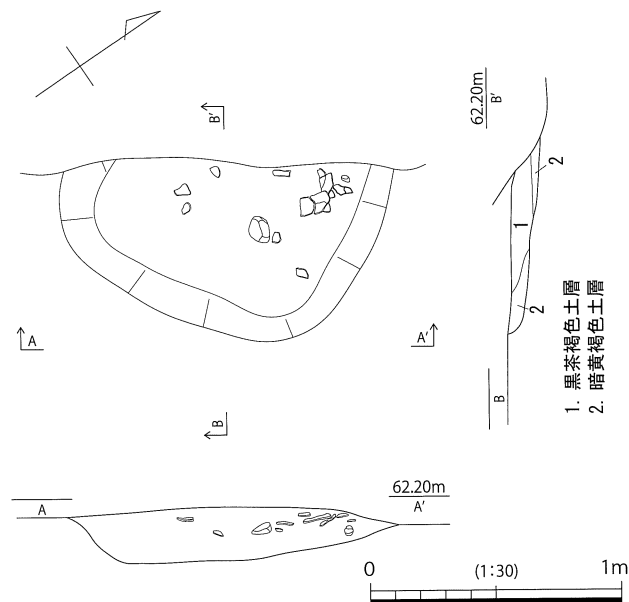
142は底部である。底はほぼ平坦で、器面の摩耗が激しく調整は確認できなかった。

これらの出土遺物から本遺構の時期は縄文時代晩期と考えられる。

SK016

SK016は調査区3に位置する。隅丸方形の土坑で、北西部の一部をSK051に切られる。遺物は主に1層を中心に出土している。

第43図143、144は深鉢の口縁部片である。143は無文の深鉢で、口縁端部がやや内径する。内外面共にミガキ調整で整えられる。144は波状口縁を呈する深鉢で、口縁端部に二条の沈線が巡り、先端にかけ、やや肥厚する。

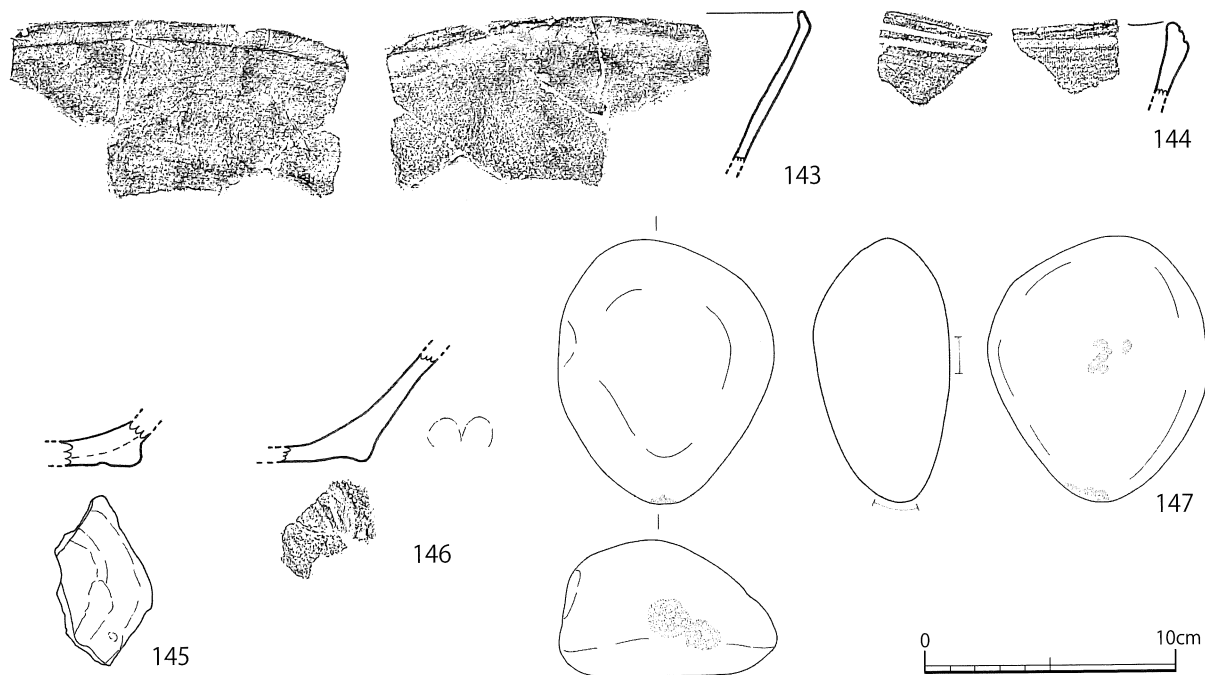


第42図 SK016 遺構実測図

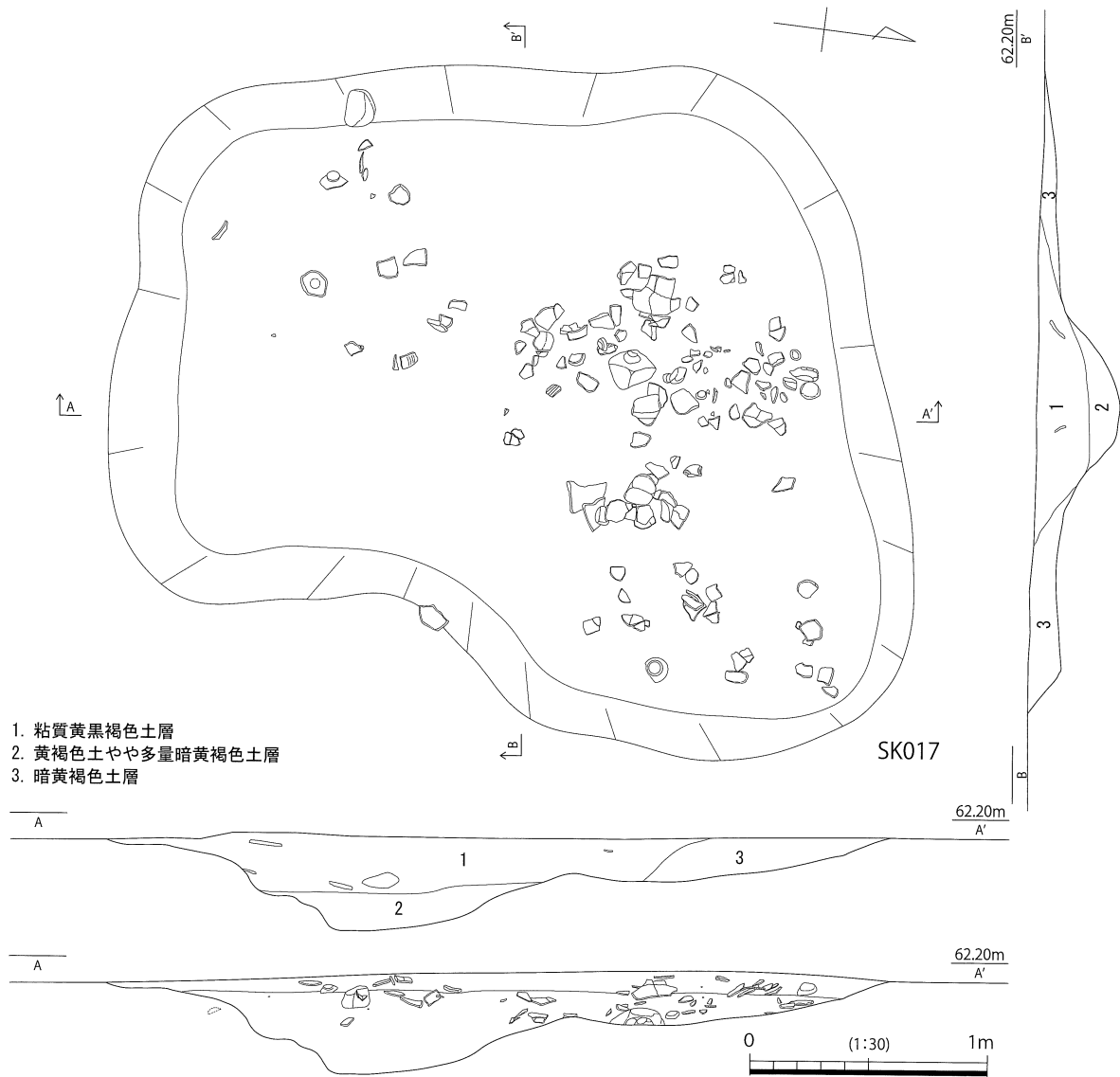
145、145は底部である。いずれも底の平面形態が五角形を呈し、やや内側に上げ底である。船元式の深鉢底部と考えられる資料である。この二つは出土位置も非常に近いが、接合はしない。

147は乳白色を呈する花崗岩製の敲石である。全体的に非常によく磨かれており、裏側の平坦面の一部とやや尖った先端部に敲打痕が残る。

これらの出土遺物から本遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。



第43図 SK016 出土遺物実測図

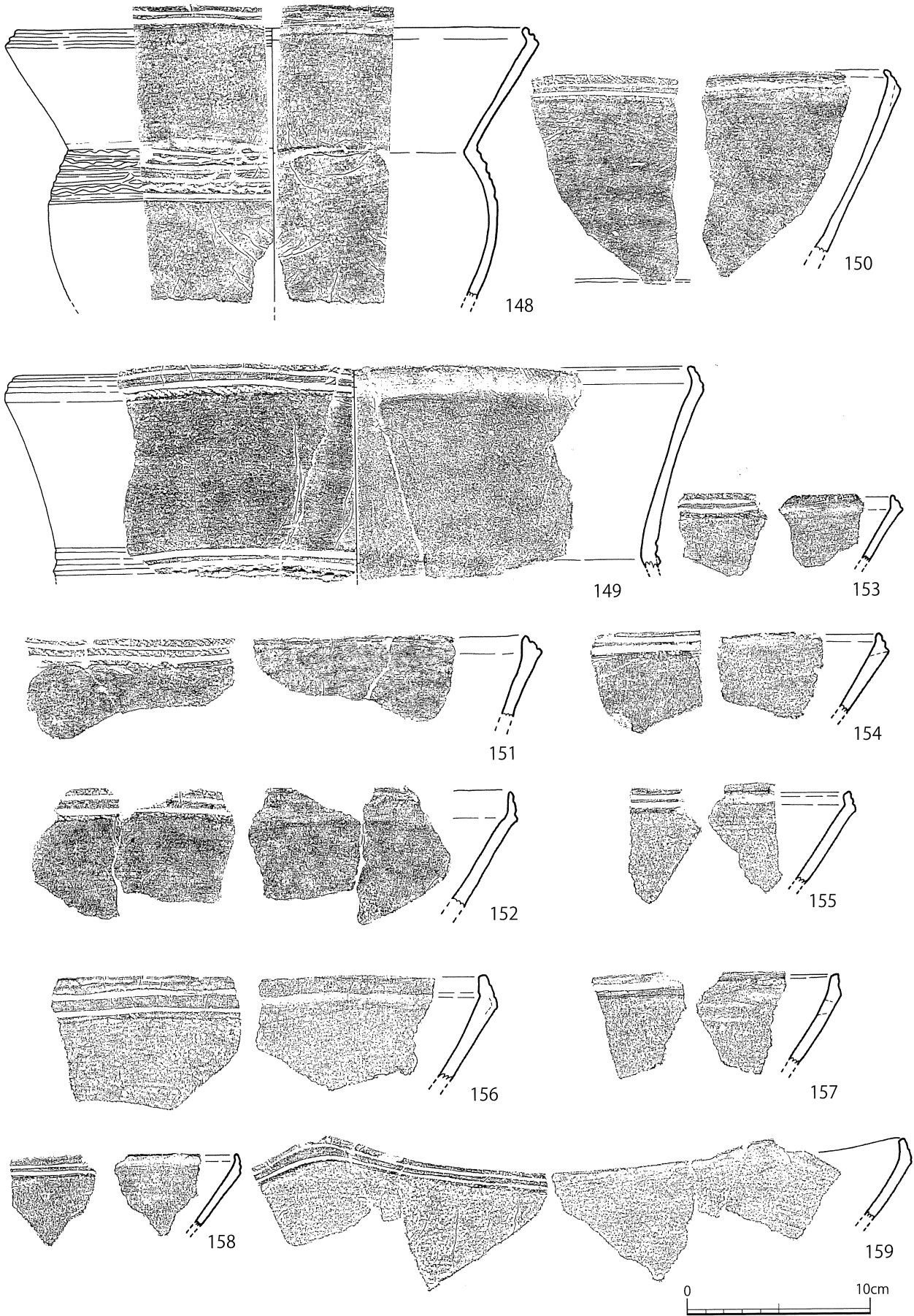


第44図 SK017 遺構実測図

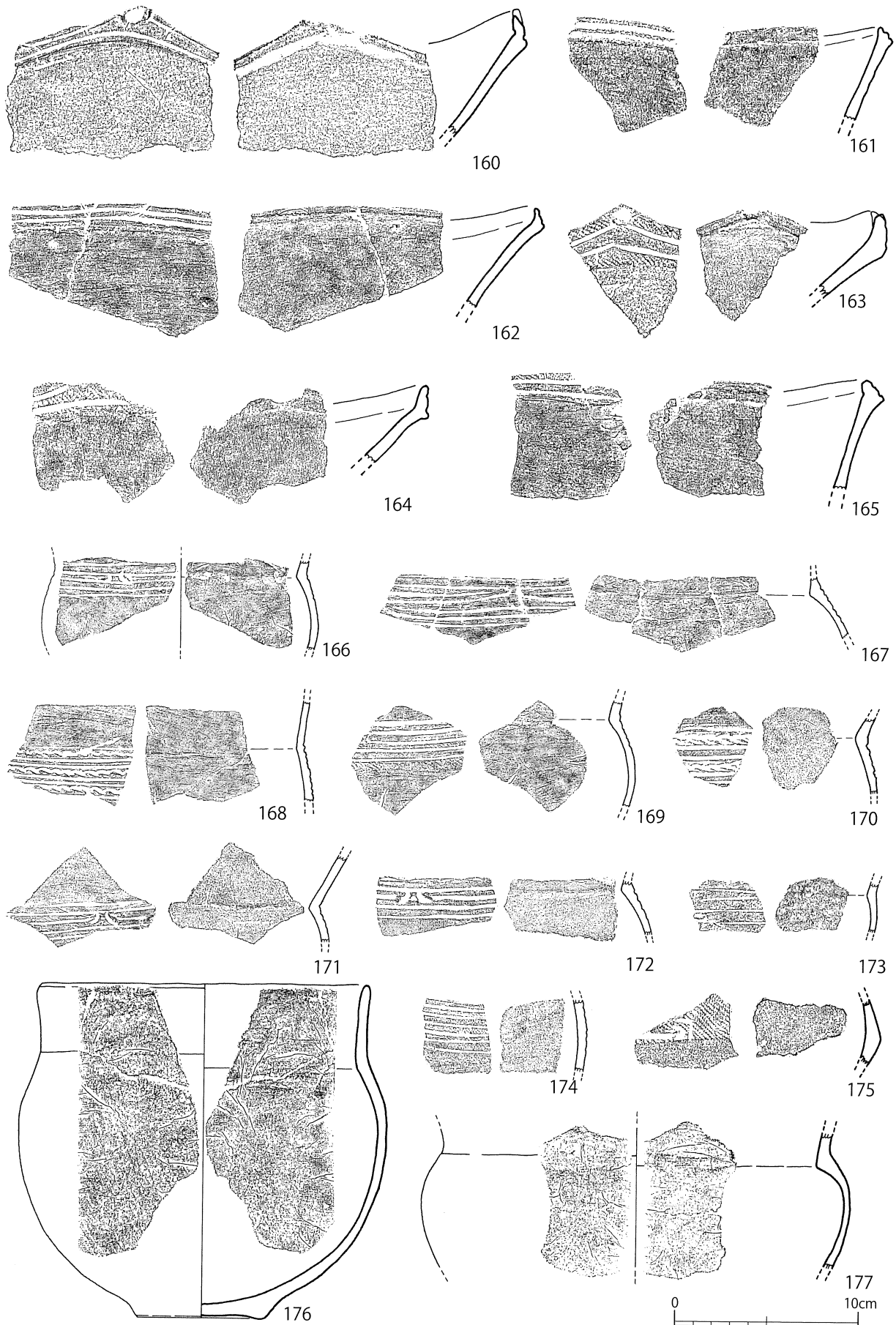
SK017

SK017は調査区3に位置する。長辺3.3m、短辺2.25mの不定形土坑で中心に向かいすり鉢状に掘り込まれる。埋土からは多量の土器が出土し、その多くは土坑の北部からである。土坑内からは土偶が2点出土しており、注目される。

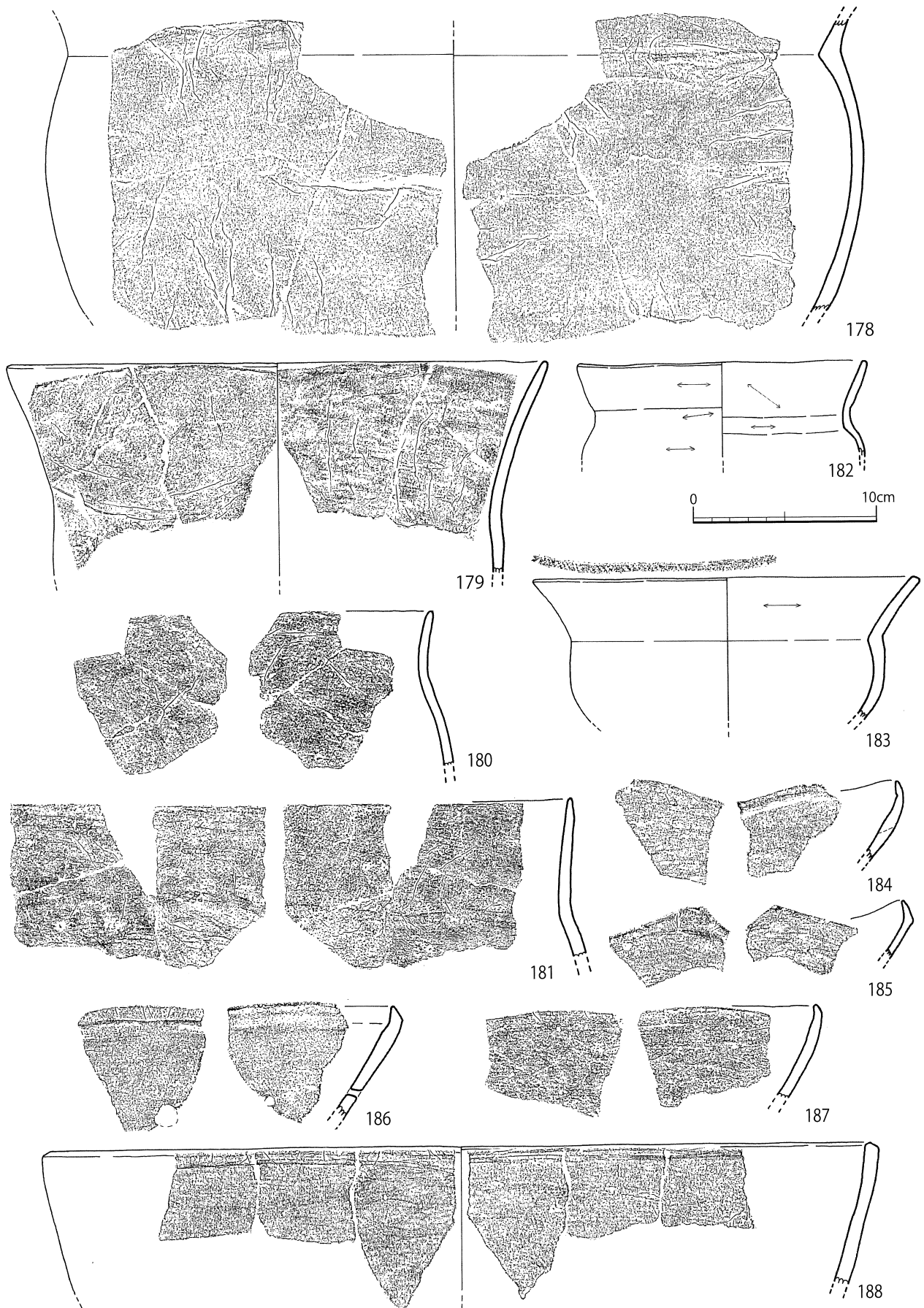
第45図148～158は水平口縁を呈する深鉢である。148は破片の残存状況がよく口径が27.8cmに反転復元できた資料であった。口縁端部には二条の沈線が巡り、先端は逆くの字形に内傾する。胴部には3cm程の文様帯がみられ、波状文や乱れた三角形文がみられる。149は口縁端部には縄文を施したのち二条の沈線を巡らし、先端はやや丸みを持ち内傾する。頸部には二条の沈線の下に押し引き文が確認できる。150は小片であるが、口縁部から頸部まで残存する資料である。口縁端部には縄文を施したのち二条の沈線を巡らし、先端は細くなりながら逆くの字形に内傾する。頸部には一条の沈線がみられる。151、152は口縁端部に縄文を施したのち二条の沈線を巡らした資料である。151は口縁部の先端がやや肥厚し、短く立ち上がる。152は口縁端部が直線的に短く立ち上がり、先端にかけ細くなる。153～158は口縁端部に一条から二条の沈線を巡らす資料である。沈線を施した口縁端部はいずれも幅が狭く、158は器面も特に薄いことから小型の個体であることが考えられる。



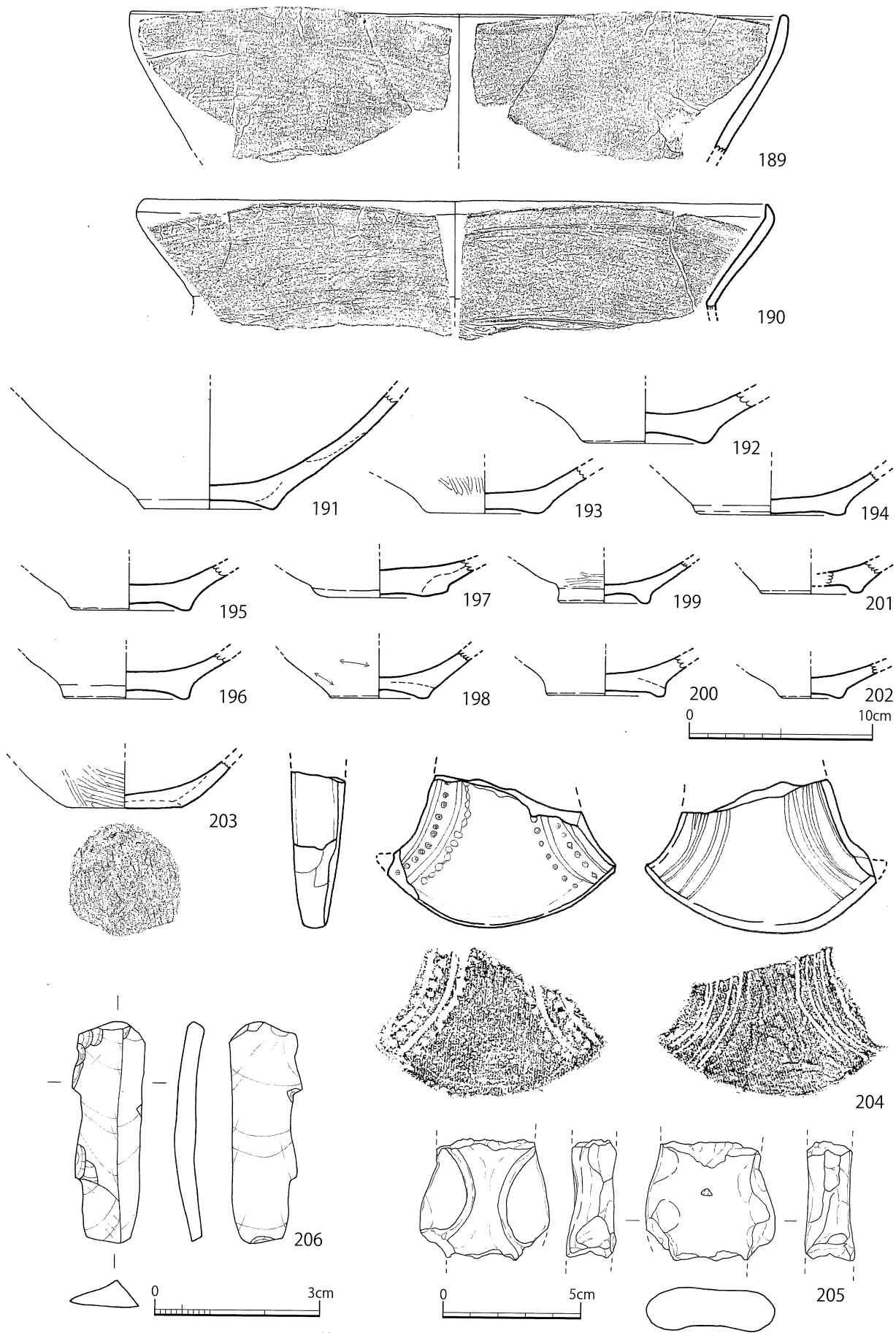
第45図 SK017 出土遺物実測図(1)



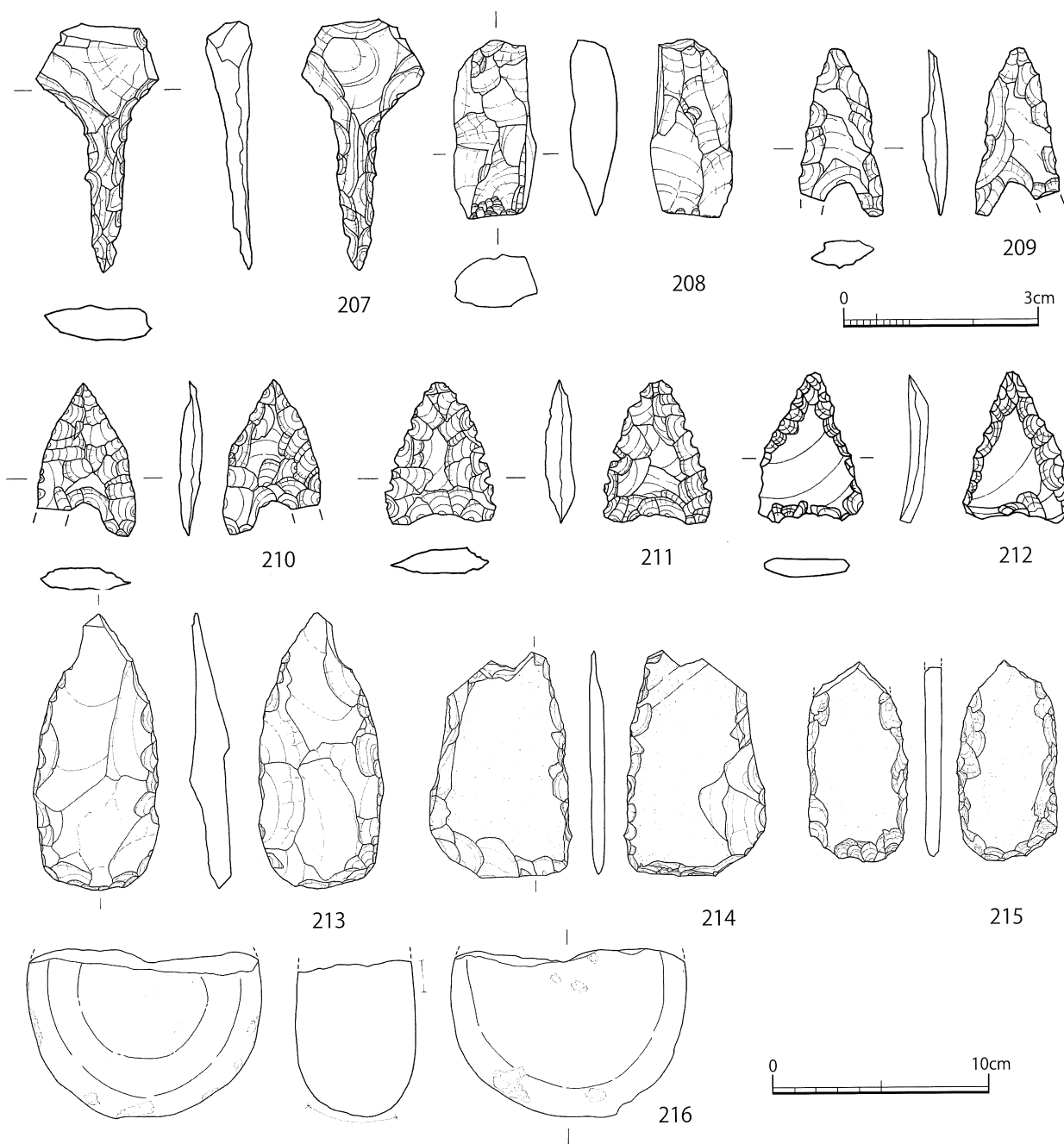
第46図 SK017 出土遺物実測図(2)



第47図 SK017出土遺物実測図(3)



第48図 SK017 出土遺物実測図(4)



第49図 SK017 出土遺物実測図(5)

第45図159、第46図160～165は波状口縁を呈する深鉢である。159、160は口縁端部に二条の沈線を巡らし、頂部には一部を欠いているが凹点が認められる。163は口縁端部に縄文を施したのちに二条の沈線を巡らした資料である。沈線間の縄文はナデ消しており、頂部には凹点がみられる。口縁部は肥厚し、やや丸みを持ち内傾している。164、165も口縁端部に縄文を施したのち二条の沈線を巡らした資料であるが、口縁部の屈曲部がやや下垂するタイプである。

166～174は深鉢の胴部の資料である。166は破片の残存状況がよく反転復元ができた資料で、胴部には直線的な沈線やX字文が施される。胴部の径も小さく小型の個体である。167は山形文が施された胴部の資料で、やや形の整った山形文がみられることから本土坑の中では古手の資料である。168～174は胴部に直線的な沈線や押し引き文、X字文が施された資料である。特に173は器面も薄く小型の個体と考えられる。

第4章 遺構と遺物

175は深鉢の口縁部の資料である。口縁部の先端を欠いているが、やや丸く内湾し、屈曲部の上部に縄文が施されたのち、方形に沈線が入られる。石町式の深鉢と考えられる。

第46図176、177、第47図178～188、第48図189、190は無文の深鉢である。176は全体が反転復元できた資料である。口縁部は直線的に立ち上がり、胴部は丸みを帯び、やや上げ底の底部へとつながる小型の資料である。178は大型の資料で、内外面共にミガキが施される。179は口縁部から胴部にかけて屈曲のみられないタイプの資料で、直線的に立ち上がりながらやや外側へと開く。180、181も胴部の屈曲がみられないタイプだが、口縁部は直線的に立ち上がる。182は小型の資料で、口縁部全体がやや肥厚し、内外面共にミガキが施される。183は小型の深鉢で、口縁部は外側に大きく開き、端部に縄文が施され、体部は丸みを帯びる。184、185は波状口縁の深鉢である。184の口縁部は内湾し、内側に弱い段がみられる。185はやや丸みを帯び逆くの字状に内傾した口縁部で、外面の屈曲部はやや下垂する。186～190は水平口縁の深鉢で、186は口縁部の下部に外面から直径2mm程の穴が穿たれる。187～190はいずれもやや内湾した口縁部で、特に190は先端部が逆くの字状を呈する。

191～203は底部である。いずれも底の平面形態は円形で、レンズ状に上げ底になるタイプと、やや上げ底にあるタイプ、平底のタイプに分けられる。203はこの中では唯一平底の資料で、内外面共にミガキによる調整が認められる。

204、205は土偶である。204は分銅型の資料で、表面には側面に沿って施文が認められ、外側から沈線、列点、沈線、列点の順に行われている。列点は2～3mmの間隔で施されており、左側の施文の方がやや目が詰まっている。裏面はこれも側面に沿って施文が認められ、左側は5本の沈線が、右側も5本の沈線がやや揺らぎながら施される。土偶の全体は側面も含めてミガキが施され、その上に列点や沈線が巡る。厚みは中央に向かって厚くなる。この資料は土坑のほぼ中央部の底に近い位置から出土しており、接合する破片はみられなかった。おそらく祭祀行為に伴って破砕され、遺棄されたと考えられる。205も土偶であるが、人型の資料である。腹部の資料で、表面にはほぼ中央部に刺突がみられ、へソを表現している。背面にはX字状に沈線が認められ、土偶の全体は側面も含めて、ミガキが施されている。腰の部分は側面をやや強くつまみ幅を狭くしており、腹部が幅広く表現されている。妊婦の腹部を表すためにこのように強調したのであろう。全体の厚みはほぼ均等で、へソの部分がやや凹んで表現される。この資料も土坑の中央部中位から出土しており、接合する資料や同一個体と考えられる小片もみられなかった。おそらく祭祀行為に伴って破砕され、遺棄されたと考えられる。

206は姫島産黒曜石製の石刃である。全長4cmと非常に大型の石刃で、縄文時代晩期に特徴的にみられる。

第49図207はサヌカイト製の石錐である。全長は3.8cmで厚さは先端にかけて薄くなっている。基部は台形で、ほぼ全体を残している。

208は姫島産黒曜石製の楔形石器である。幅広の刃部をつくり、基部は厚み7mm程と比較的厚みがある。

209～212は石鏃である。211は鋸歯状に刃が加工され、下部にやや丸みを帯びた削り込みがみられる。

212は特徴的な石鏃で、剥片の平たい剥片の側面のみを加工し、刃部を造り出しており、全体的に薄い。

213～215は扁平打製石斧である。いずれも中型～小型の資料で、全体の一部を欠いている。

216は安山岩製の摺石である。ほぼ円形に復元される資料で、1/3程度を欠いている。

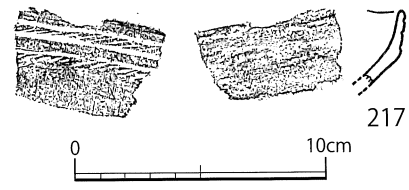
これらの出土遺物から本遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

SK018

SK018は調査区3に位置する。楕円形の土坑で、埋土から複数の土器片が出土している

第50図217は波状口縁の深鉢である。口縁部の資料で、外面に、キザミ目を施したのち二条の沈線を巡らしている。口縁部はやや内湾し、先端に向けて次第に器面が薄くなる。

これらの出土遺物から本遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

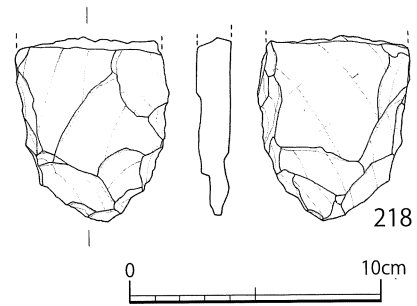


第50図 SK018 出土遺物実測図

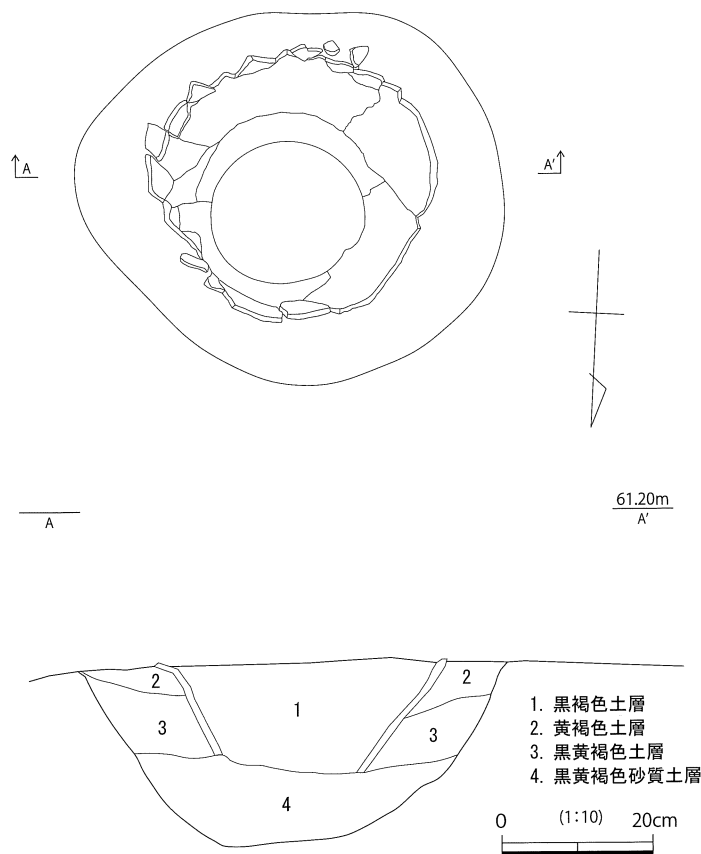
SK019

SK019は調査区5に位置する。長楕円形の土坑で、埋土から扁平打製石斧が出土している。

第51図218は安山岩製の扁平打製石斧である。全体の半分を欠いている。



第51図 SK019 出土遺物実測図

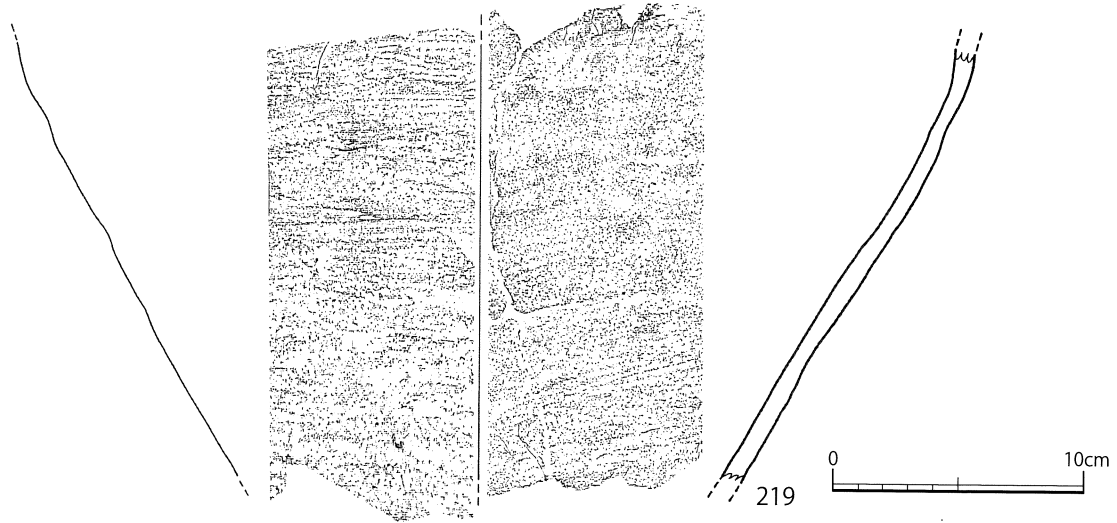


第52図 ST001 遺構実測図

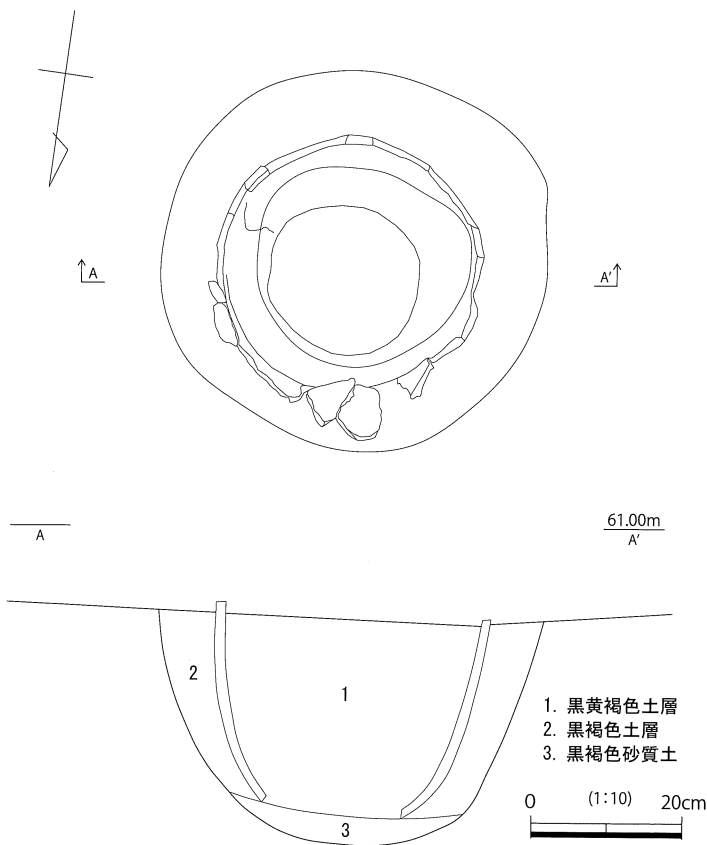
ST001

ST001は調査区1に位置する。長辺56cm、短辺48cmのほぼ円形の土坑で、中央に底を欠いた深鉢が埋置されている。土坑の深さは最も深いところで25cmで最下層にやや砂の混じったしまりの弱い土を入れ、その上に深鉢を置いている。深鉢の側面にはややしまりの強い土で埋め、埋甕の内部からは他の土器片や石器等は確認されなかった。

第53図219は深鉢である。残存の最大径は38cmで、胴部から底部のやや上部の資料と考えられる。下部から直線的に外側に向かって開き、上部がやや直線的に立ち上がる。ここから深鉢の胴部へとつながると考えられる。外面には横方向の貝殻条痕が残り、内部の同様の貝殻条痕を施すが、その上からナデ調整を施している。内面はやや白色の色調で呈し、外面は茶褐色だが、一部に炭化物の付着がみられる。この資料は縄文時代後期～晩期の深鉢と考えられる。



第53図 ST001 出土遺物実測図

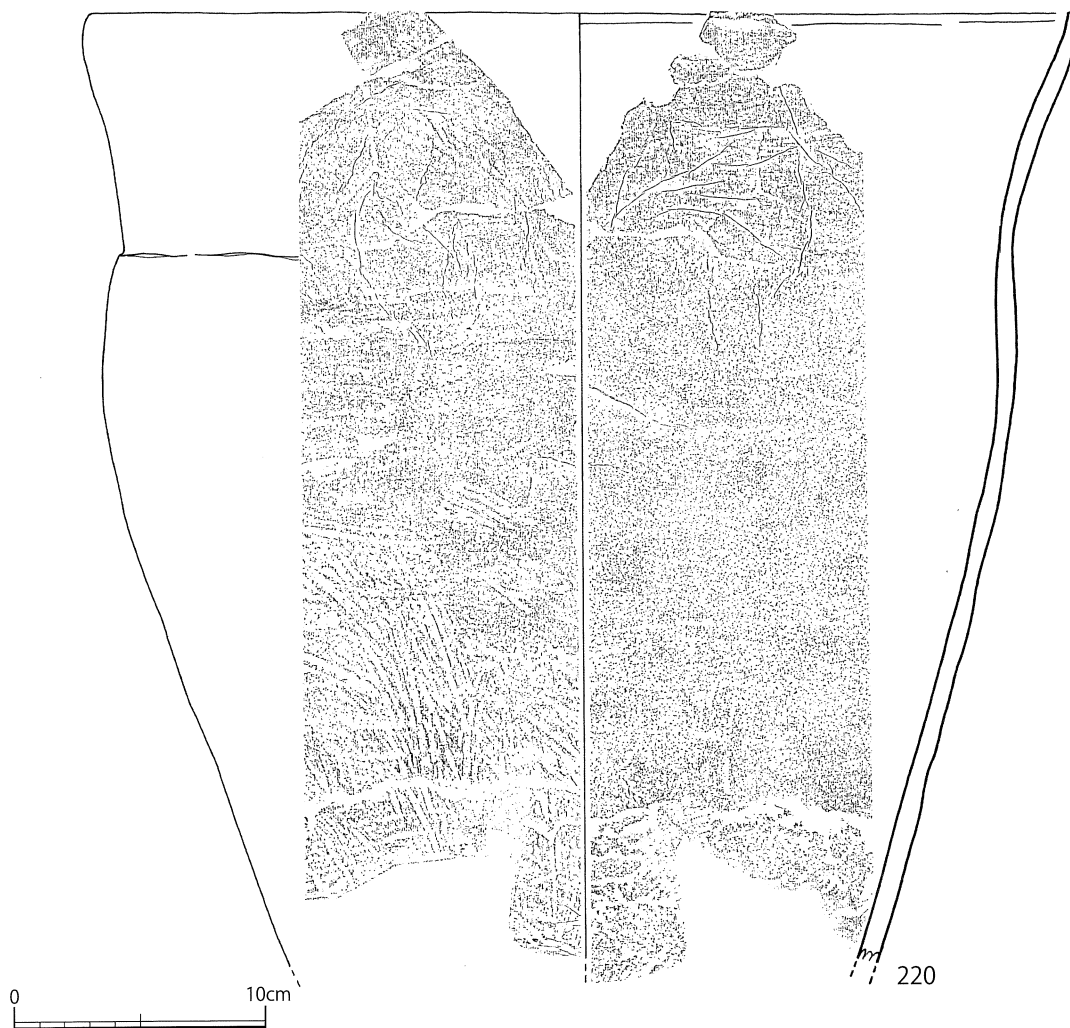


第54図 ST002 遺構実測図

ST002

ST002は調査区1に位置する。長辺52cm、短辺50cmの円形の土坑で、中央に底を欠いた深鉢を埋置している。土坑の深さは最も深いところで30cmで最下層にやや砂の混じったしまりの弱い土を入れ、その上に深鉢を置いていた。埋甕の内部からは他の土器片や石器等は確認されなかったが、埋土の上部から落ち込んだと思われる口縁部の破片が見つかり、口縁部から体部までが復元できた。

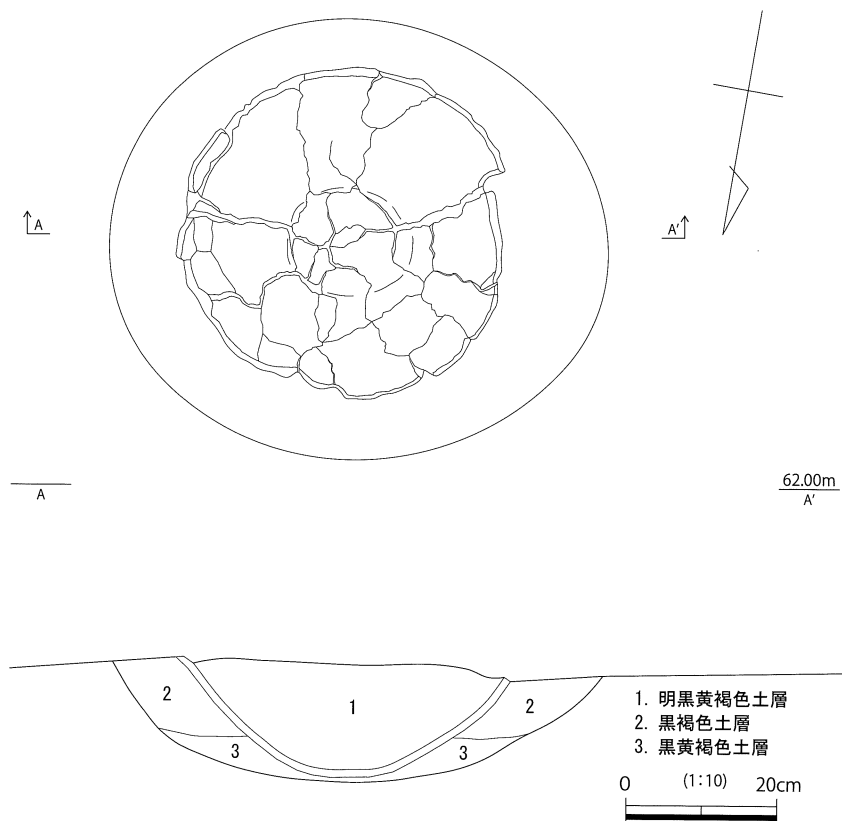
220は無文の深鉢である。口縁部は水平口縁で、やや内湾し、内側に弱い段を持つ。頸部は緩やかにすぼまり、粘土帯の接合痕の影響からか、ここにも弱い段を持つ。頸部から底部にかけては直線的に小さくなり、底に近くなるほど器面が厚くなる。深鉢の下部外面には縦や斜め方向の条痕が複数確認できる。外面の上部や、内面は丁寧にナデ調整が施されている。内面はやや白色の色調を呈し、外面は茶褐色だが、一部に炭化物の付着がみられる。この資料は縄文時代後期～晩期の深鉢と考えられる。



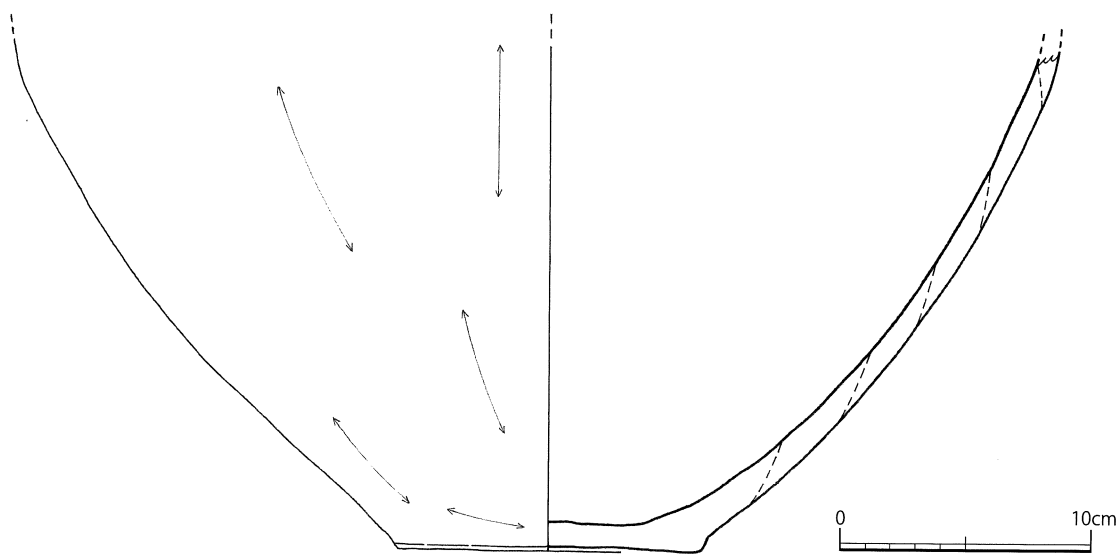
第55図 ST002出土遺物実測図

ST003

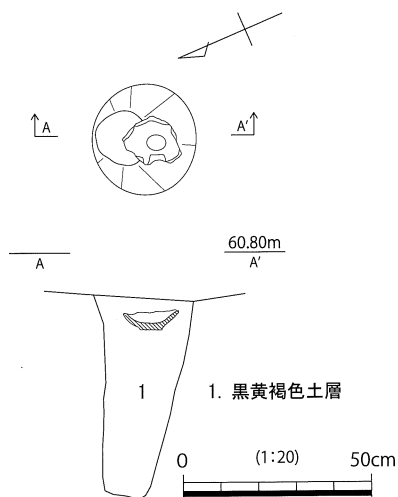
ST003は調査区2に位置する。長辺66cm、短辺58cmのほぼ円形の土坑で、中央に底部の残る深鉢を埋置している。土坑の深さは最も深いところで16cmを測り、底のほぼ直上に深鉢を置いている。土器の胎土は非常に脆く、検出した際にはすでに土圧で小片に割れていた。埋甕の内部からは他の土器片や石器等は確認されなかった。体部はやや丸みを帯びた形で、底部は直径12cmを測り、内面も中央部が盛り上がり、やや上げ底である。内面の底に近い部分は黄褐色だが、半分より上部には全体に黒斑が認められる。外面には黒斑や炭化物の付着は認められず、茶褐色の色調を呈している。器面の残存状況が悪く、調整が確認困難だが、内外面共にナデによる調整が認められる。この資料は縄文時代後期の深鉢と考えられる。



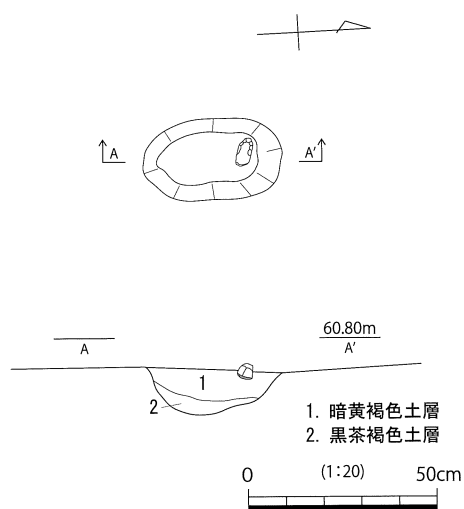
第 56 図 ST003 遺構実測図



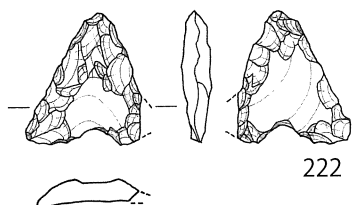
第 57 図 ST003 出土遺物実測図



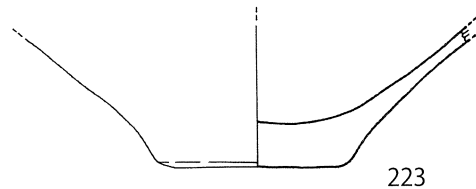
第58図 SP001 遺構実測図



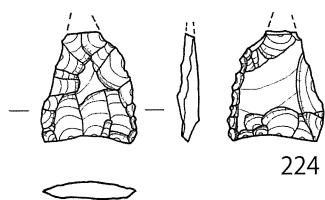
第59図 SP002 遺構実測図



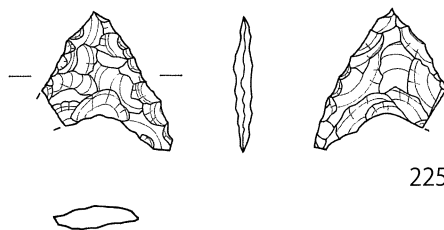
第60図 SP001 出土遺物実測図



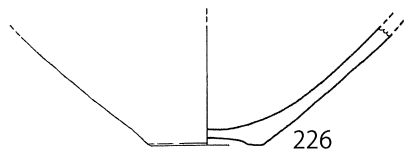
第61図 SP002 出土遺物実測図



第62図 SP003 出土遺物実測図



第63図 SP004 出土遺物実測図



第64図 SP005 出土遺物実測図



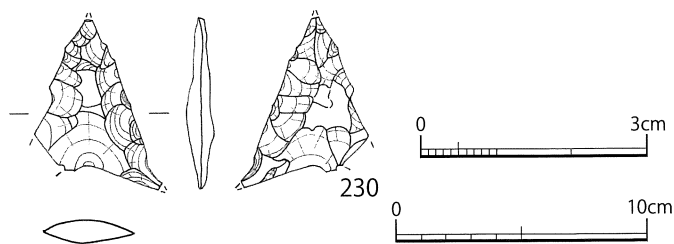
第65図 SP006 出土遺物実測図



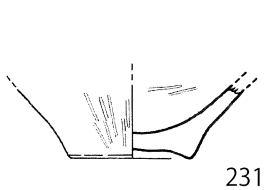
第66図 SP007 出土遺物実測図



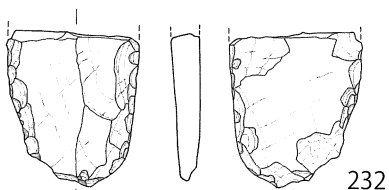
第67図 SP008 出土遺物実測図



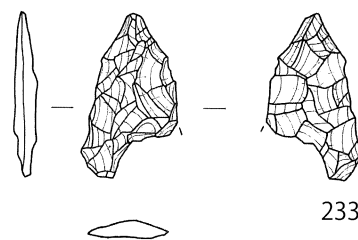
第68図 SP009 出土遺物実測図



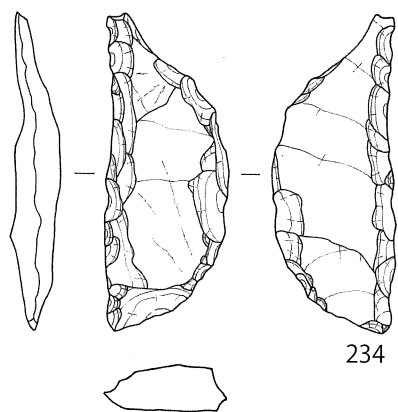
第 69 図 SP010 出土遺物実測図



第 70 図 SP011 出土遺物実測図



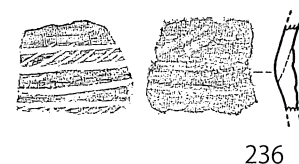
第 71 図 SP012 出土遺物実測図



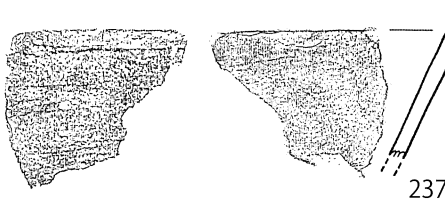
第 72 図 SP013 出土遺物実測図



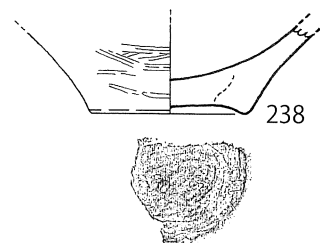
第 73 図 SP014 出土遺物実測図



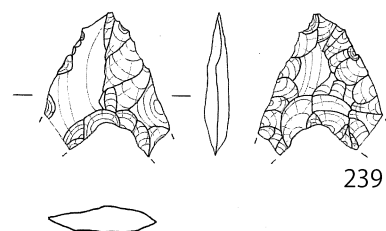
第 74 図 SP015 出土遺物実測図



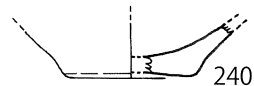
第 75 図 SP016 出土遺物実測図



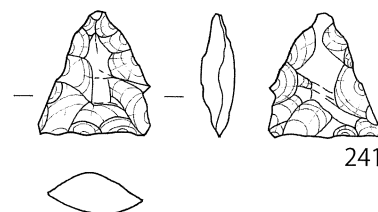
第 76 図 SP017 出土遺物実測図



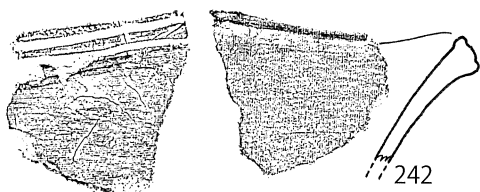
第 77 図 SP018 出土遺物実測図



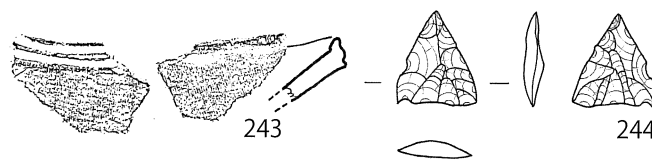
第 78 図 SP019 出土遺物実測図



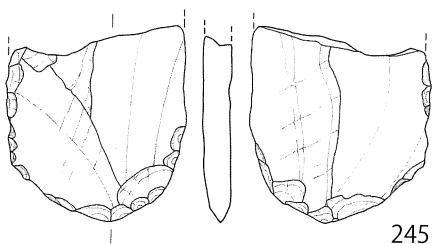
第 79 図 SP020 出土遺物実測図



第 80 図 SP021 出土遺物実測図



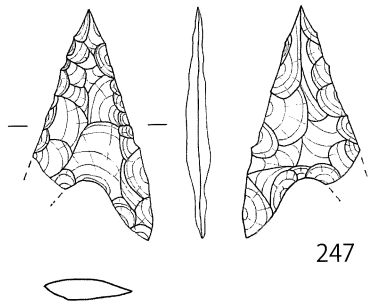
第 81 図 SP022 出土遺物実測図



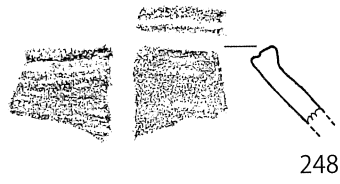
第 82 図 SP023 出土遺物実測図



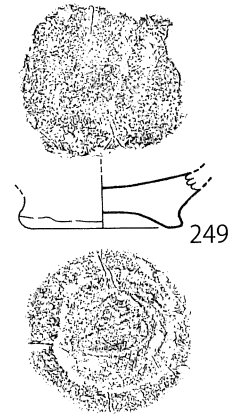
第 83 図 SP024 出土遺物実測図



第84図 SP025 出土遺物実測図



第85図 SP026 出土遺物実測図



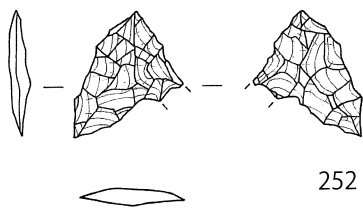
第86図 SP027 出土遺物実測図



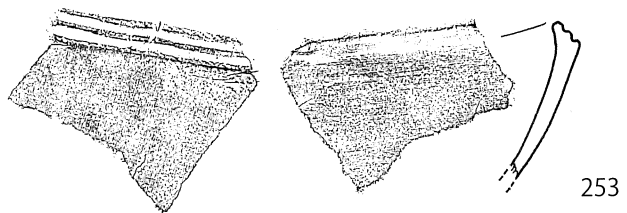
第87図 SP028 出土遺物実測図



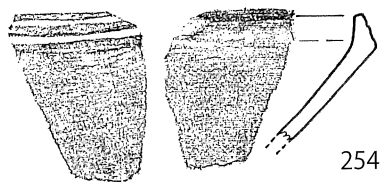
第88図 SP029 出土遺物実測図



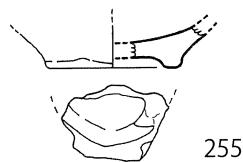
第89図 SP030 出土遺物実測図



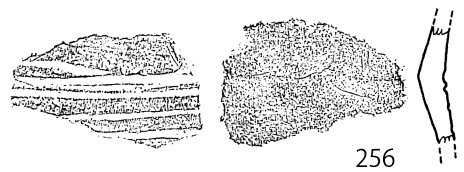
第90図 SP031 出土遺物実測図



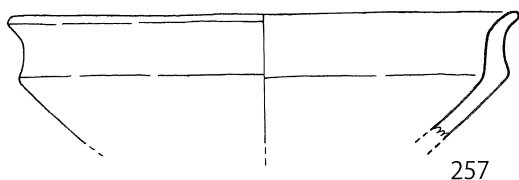
第91図 SP032 出土遺物実測図



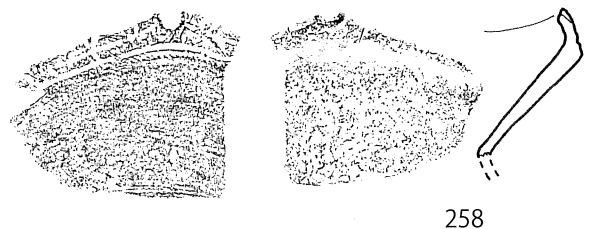
第92図 SP033 出土遺物実測図



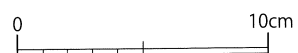
第93図 SP034 出土遺物実測図

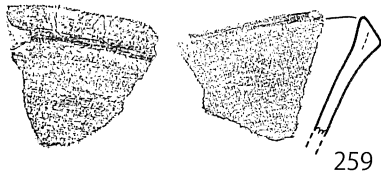


第94図 SP035 出土遺物実測図



第95図 SP036 出土遺物実測図





第96図 SP037 出土遺物実測図



第97図 SP038 出土遺物実測図



第98図 SP039 出土遺物実測図

第60図222は姫島産黒曜石製の石鏃である。両面の中心部に大きな剥離面を残し、刃部を丁寧に剥離し成形している。基部にはやや円形の刳込みを施す。

第61図223は底部である。小土坑の上層から正位置で出土した。内外面共に丁寧な調整を施し、底は平らである。

第62図224は姫島産黒曜石製の石鏃である。先端部を一部欠き、基部には浅い刳込みがみられる。

第63図225は姫島産黒曜石製の石鏃である、下部の一部を欠き、両面共に丁寧に剥離がなされ刃部を成形している。基部には大きく刳込みが施される。

第64図226は底部である。内外面共に丁寧な調整が施され、底はレンズ状に上げ底を呈している。底部の器面は薄く、胴部にかけてはほぼ同じ厚さで広がる。

第65図227は刻目突帯をもつ胴部の資料である。逆U字状の刻目突帯が施され、3~4mm程の間隔で施文される。器面の摩耗が激しく調整は明確には確認できない。船元式に特徴的にみられる胴部である。

第66図228は細線が施される口縁部の資料である。口縁端部を欠き全体の形状は明らかではないが、逆くの字状に内傾すると考えられる。内外面共に横方向に貝殻条痕が施され、内面はその後ナデ調整が行われる。外面の屈曲部より上部には縦方向に3本の細線が施されており、石町式の深鉢に特徴的にみられる。

第67図229は浅鉢である。内外面共に丁寧な調整が施され、胴部の屈曲部より内湾し、口縁端部は外へ開く。口縁端部内面には一条の沈線が巡る。縄文時代晩期の資料である。

第68図230は姫島産黒曜石製の石鏃である。両面共に丁寧な剥離がなされ刃部が成形されている。基部には鋭く刳込みが施され、全体的に大型の石鏃である。

第69図231は底部である。内外面共に丁寧な調整が施され、底はレンズ状に上げ底を呈する。

第70図232は安山岩製の扁平打製石斧である。全体のおよそ半分を欠き、片面は特に丁寧に剥離を施し、刃部を成形している。厚さは中心が若干厚く、先端にかけて薄くなる。

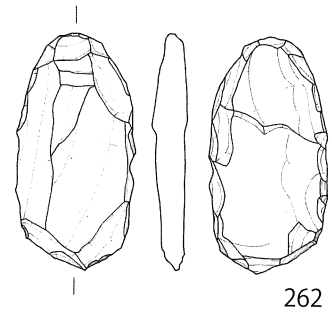
第71図233は姫島産黒曜石製の石鏃である。全体的にやや五角形を呈し、両面共に比較的荒く剥離し、刃部が成形される。基部にはやや深く鋭角に刳込みが施される。

第72図234はサヌカイト製の石匙である。縦方向に基部が成形される石匙で、両面とも中心部に大きな剥離面を残し、刃部の部分は丁寧な剥離が施される。

第73図235は深鉢の口縁部である。口縁は波状を呈し、口縁端部の外面には一条の沈線が巡る。内外面共に丁寧な調整が行われ、大きく外側に開く。

第74図236は深鉢の頸部である。内外面共に丁寧な調整が施されたのち、外面には複数の沈線が巡る。沈線と沈線の間には一部斜め方向にキザミ目が施される。

第75図237は無文の深鉢の口縁部である。口縁は水平で、内外面共に丁寧な調整が施される。口縁部は直



第99図 SP040 出土遺物実測図

線的に外側へ開き、口縁端部は先端にかけやや細くなる。

第76図238は底部である。内外面共に丁寧な調整が施され、底はやや上げ底である。底部は比較的厚く、体部にかけてやや薄くなる。

第77図239は姫島産黒曜石製の石鏃である。片面の一部に大きく素材からはぎ取った際の剥離面が残り、裏面などは丁寧に剥離が施され刃部が成形される。基部には比較的深く刳込みが施される。

第78図240は底部である。底は若干の上げ底で比較的厚みをもつ。表面の摩耗が激しく調整は詳しく確認できない。

第79図241は姫島産黒曜石製の石鏃である。二等辺三角形を呈する石鏃で、両面とも比較的丁寧に剥離がなされ刃部を成形する。基部には刳込みがなく平坦で、全体的に厚みのある石鏃である。

第80図242は深鉢の口縁部である。口縁は波状を呈し、内外面共に丁寧な調整を施す。口縁端部外面には二条の沈線が巡る。口縁端部にかけて次第に器面は厚みをもつ。

第81図243は深鉢の口縁部である。口縁は波状を呈し、口縁端部外面には二条の沈線が巡る。口縁部は大きく外側へ開き、口縁端部にかけて次第に器面は厚みをもつ。

244は姫島産黒曜石製の石鏃である。非常に小型の石鏃で全体は三角形を呈する。両面とも比較的丁寧に剥離がなされ刃部を成形する。基部には刳込みがなく平坦である。

第82図245は安山岩製の扁平打製石斧である。全体のおよそ半分を欠き、両面共に大きな剥離面を残す。先端の一部はやや丁寧に剥離がなされ刃部が成形される。厚みは全体を通してほぼ均一である。

第83図246は深鉢の口縁部である。口縁は水平で、内外面共に丁寧な調整が施される。口縁部は直線的に外側へ開き、口縁端部に二条の沈線が施される。

第84図247はサヌカイト製の石鏃である。両面共に丁寧に剥離がなされ、刃部が成形される。基部にはやや丸みを帯びた刳込みが施される。比較的大型の石鏃である。

第85図248は深鉢の口縁部である。内外面共に丁寧な調整が施され、口縁端部には一条の沈線が巡る。

第86図249は体部である。内外面共に丁寧な調整が施され、底はレンズ状に上げ底を呈する。底は比較的厚みがある。

第87図250は深鉢の口縁部である。口縁は波状を呈する。内外面共に丁寧な調整が施され、口縁端部外面に縄文が施されたのち、二条の沈線が巡る。口縁端部は逆くの字状に屈曲する。

第88図251は深鉢の口縁部である。口縁は波状を呈する。波状の頂部に近い破片資料で、口縁端部外面には二条の沈線が巡る。外面の屈曲部はやや下垂し、広く装飾部がとられる。

第89図252は姫島産黒曜石製の石鏃である。基部の一部を欠き、両面に比較的丁寧な剥離によって刃部が成形される。基部の刳込みは全長の1/3程まで行われる。

第90図253は深鉢の口縁部である。口縁は波状を呈する。内外面共に丁寧な調整が施され、口縁端部には二条の沈線が巡る。全体的に大きく内湾する。

第91図254は深鉢の口縁部である。口縁は水平である。内外面共に丁寧な調整が施され、口縁端部に二条の沈線が巡る、口縁端部は逆くの字状を呈する。

第92図255は底部である。内外面共に丁寧な調整が施され、底は上げ底である。底の平面形態は五角形状を呈する。船元式に特徴的にみられる底部である。

第93図256は深鉢の頸部である。内外面とも丁寧な調整が施され、複数の沈線が横方向に巡る。頸部の屈曲は比較的緩やかで、外側へ開く。

第4章 遺構と遺物

第94図257は浅鉢である。比較的大きく破片資料が残存し、口径は20.2cmに反転復元可能である。内外面共に丁寧な調整が施され、口縁部は短く立ち上がり、外反する。縄文時代晩期の資料である。第95図258は深鉢の口縁部から頸部にかけての資料である。口縁は波状を呈する。内外面共に丁寧な調整が施され、縄文を施したのち二条の沈線を巡らせる。頂部には凹点が施される。頸部から口縁にかけて器面は次第に厚みをもつ。第96図259は無文の深鉢の口縁部である。口縁は波状を呈し、内外面共に丁寧な調整が施され、口縁端部は厚みをもつ。第97図260は深鉢の口縁部である。口縁は水平である。口縁端部外面に一条の沈線が巡り、厚み等から比較的小型の資料と考えられる。第98図261は深鉢の口縁部である。口縁は水平である。内外面共に丁寧な調整が施され、口縁端部に二条の沈線が巡る、口縁端部は逆くの字状を呈する。第99図262は安山岩製の扁平打製石斧である。小土坑の上層から出土し、全体的に小型の資料である。

包含層出土遺物

第100図263～266は外面に微細な突帯を施す資料である。いずれも直線的にのびる口縁部の資料で、外面には微細な突帯が口縁端部から隙間なく巡る。内面には横方向に貝殻条痕が施され、口縁端部には1～2mm程の間隔でキザミ目が施される。266は外面の一部にもキザミ目が施される。縄文時代前期に特徴的にみられる。轟B式の資料である。器面も比較的残存状況が良く、この時期の遺構は確認できなかったものの、周囲に縄文時代前期の遺構の存在が想定される。267～270は外面にキザミ目突帯を施す同時期の資料である。267は外面に縄文を施したのち口縁端部よりやや下の位置に2～3mm程の間隔でキザミ目突帯を巡らす資料で、内面には丁寧な調整が施される。268は同様に縄文を施したのちキザミ目突帯を巡らす、その形状は直線的ではなく、曲線状の突帯が施される。269は胴部の資料と考えられる。270は底部の資料で、底の平面形態は小片のため明らかではないが、内外面共に条痕が施される。これらの資料は縄文時代中期の船元式の資料と考えられる。271は深鉢の口縁部資料である。把手の部分の破片資料で、外面には多条の沈線が施される。環状の把手の内径は1cm程で、口縁端部の内面には若干の段差がみられる。この資料は縄文時代中期の資料と考えられる。272～279は波状の口縁を呈する深鉢の口縁部資料である。272は口縁端部が大きく内湾し、縄文を施したのち二条の沈線が施され、沈線間の縄文は消される。頂部には凹点があり、内外面共に丁寧な調整が施される。273は縄文の代わりにキザミ目が施された資料である。二本の沈線間には施文はされない。275は口縁端部が逆くの字状を呈する資料で、縄文は施されず、頂部に凹点が施される。274は縄文の施された資料だが、二本の沈線間の縄文は残る。276は破片の残存状況が良く反転復元できた資料である。口縁は波状を呈し、口縁端部には二条の沈線が巡る。頸部には沈線やキザミ目を施した装飾帯があり、器面の厚みや、小型の資料である点は注目される。277は口縁端部が丸みを持ち内湾する資料で、縄文を施したのち、3条の沈線を施す。頂部には凹点がみられる。278は口縁が逆くの字状を呈する資料で、キザミ目を施したのち沈線を巡らす。279は内湾する口縁部の資料である。第100図280、281、第100図282～288は深鉢の胴部である。いずれも内外面共に丁寧な調整が施され、直線的または波状の沈線や押しき文が巡らされる。287、288には胴部の一部に縄文が施される。289～293は注口土器の破片資料である。289、290は口縁部の資料で、内外面共に丁寧な調整が施される。289は縄文を施したのち3条の沈線を巡らしており、一部の沈線間の縄文はナデ消している。290は口縁端部直下に波状と直線の沈線が巡る。291～293は胴部と考えられる資料で、内外面共に丁寧な調整を施したのち、沈線や凹点が施される。特に293には沈線の上に粒状の粘土を張り付け凹点を施している。いずれも資料も縄文時代後期と考えられる。294～295は脚部である。294には外面に地上の沈線が巡り、一部に凹点が施される。上部を欠いてい

るものの一部に楕円形の透穴が施される。295はやや直線的に伸びるタイプの資料で、外面には一部沈線が巡る。上部を欠いているものの一部に楕円形の透穴が施される。これらの資料は縄文時代後期の三万田式に特徴的にみられる脚部である。296～298は水平口縁を呈する無文の深鉢の口縁部である。296は口縁端部が逆くの字状を呈する資料で、内外面共に丁寧な調整が行われている。口縁は全体的にやや外反し、中ほどに焼成後、直径約1cmの穴が穿たれる。穴の大きさから外側から穿たれたと考えられる。297は大きく内湾する口縁部の資料である。内外面共に丁寧な調整が施され、先端に行くにつれて器面は薄くなる。298は直線的に長く伸びる口縁部の資料である。内外面共に丁寧な調整が施されたのち口縁端部の内側には一条の沈線が巡る。299も直線的に長く伸びる資料であるが、外面には横方向の条痕が残る。内面は丁寧な調整が施され、口縁端部はやや内傾する。300は無文の深鉢の胴部である。内外面共に丁寧な調整が施され、胴部はやや湾曲している。301～303は底部である。301、302は内外面共に丁寧な調整を施し、やや上げ底を呈し、底部から大きく外側へ開く資料である。303はレンズ状の上げ底を呈する資料で、底部の中央部の器面は薄い。第102図304、305は無文の浅鉢である。304は口縁端部内面に玉縁状に器面を厚くする資料で、内外面とも丁寧な調整が施される。中ほどに焼成後、直径約1cmの穴が穿たれる。305は大きく外反する資料で内外面とも丁寧な調整が施され、口縁端部の外面直下には突帯状の粘土帯がみられる。これらの資料は縄文時代晩期のものと考えられる。306は浅鉢の口縁部である。口縁は波状を呈し、頂部にコブ状の粘土帯がみられる。内外面とも丁寧な調整が施され、こぶ状の粘土帯は縦方向にやや細長い。縄文時代晩期の資料と考えられる。307は深鉢の口縁部である。内外面共に横方向の貝殻条痕が施され、口縁端部直下にはやや緩い無キザミ目の突帯が巡る。縄文時代晩期の資料と考えられる。308は波状の口縁を呈する深鉢の口縁部である。外面は条痕を施したのち、荒く格子状の線刻を全体に施す。内面は比較的丁寧な調整を施す。瀬戸内地域の特徴がみられ、縄文時代晩期の資料と考えられる。309、310は浅鉢の口縁部である。309は口縁部が大きく外反する資料で、内外面共に丁寧な調整を施したのち、屈曲部の上部に鈍い一条の沈線を巡らす。310は口縁部が内傾する資料で、内外面共に丁寧な調整を施したのち、屈曲部の上部に鈍い一条の沈線を巡らす。これらは縄文時代晩期の資料と考えられる。311は浅鉢である。小片のため、傾きは不明であり、直立させて図化した。屈曲部と考えられる資料で、リボン状の粘土帯がみられる。内外面共に丁寧な調整が施される。縄文時代晩期の資料と考えられる。312は器種不明の資料である。小片のため傾きは不明であり、直立させて図化した。内外面共に横方向に貝殻条痕が施され、全体的に緩やかに外反する。外面には縦方向の細線の間にはアラビア数字の8状の細線による施文があり、瀬戸内系の影響の考えられる資料である。類例は不明だが、縄文時代晩期の資料と考えられる。313は浅鉢である。表土掘削中に出土し、比較的大型の破片が残存し、反転復元が行うことができた。内外面共に丁寧な調整が施され、全体的に底部から口縁部にかけて大きく外側に開く。体部はやや椀型に膨らみ、口縁部は直線的に伸び、一部には17cm程の幅にリボン状の装飾を持つ。縄文時代晩期の資料と考えられる。第103図314は深鉢である。内外面共に横方向の貝殻条痕が施され、内面はその後、ナデ調整が行われる。口縁端部には2～3mm程の間隔でキザミ目が施され、器形は全体的に内湾する。縄文時代晩期の資料と考えられる。

315は土偶である。1次調査の際に表採された。頭部の資料である。表面の摩耗により、調整は不明であるが、表面には中心に深さ5mm程の窪みがあり口を表現している。その両脇にはやや深い刺突で目が表現され、額の部分にはやや不規則な列点が5列程みられる。額の最も右側の刺突は貫通しており、耳の表現と考えられる。頬の部分は右側が剥離しているために左側のみ確認できるが、ここにも2列程の列点がみられる。裏面にも頭部に3列の列点と、両側面にやや内側に湾曲しながら2列の列点が確認される。厚みは横方向

第4章 遺構と遺物

にはほぼ同じ厚みで、縦方向にかけては中心から端に行くにつれて次第に薄くなる。全体的には隅丸方形の形状で、胴部を復元すれば、分銅状の形態を呈すると考えられる。この資料はその特徴から縄文時代後期の資料と考えられる。

316は姫島産黒曜石製の異形石器である。石鏃のような形状を呈するが先端部がなく、全体的に丁寧な剥離が施される。317は安山岩製の石錘である。安山岩の河原石を利用した石錘で、端部を一部打ち欠き削り込みを作成している。全体の半分ほどが残存する。

318、319は結晶片岩製の石棒である。318は断面が楕円形で、先端に向かって次第に細くなる。全体的に丁寧に成形される。319は未成品と考えられる資料で、断面は隅丸方形を呈する。表面にはやや粗い摺痕が残る。320は姫島産黒曜石の石核である。一部に自然面を残し、全ての面に剥離面が認められる。第104図321は姫島産黒曜石製の剥片である。比較的大型の剥片で、裏面には先端に打痕が残り、大型の石材から剥離したことがわかる。322は姫島産黒曜石製の剥片である。比較的大型の剥片で、両面に複数の剥離面が認められる。323は姫島産黒曜石製の剥片である。両面とも一部に丁寧な剥離が施され、刃部が成形される。第105図324は姫島産黒曜石製の剥片である。両面とも一部に丁寧な剥離が施され、刃部が成形される。325はサヌカイト製の剥片である。両面とも大きく横方向にはぎ取り、刃部を造り出し、基部の一部を欠いている。スクレーパーと考えられる。

326、327は姫島産黒曜石製の尖頭器である。326は前面に大きな剥離面の残る資料で、一部には自然面を残す。全体は三角形で断面も三角形である。327は全体が涙形の資料で、裏面には大きな剥離面が残り、表面は丁寧な剥離が施され、刃部が成形される。断面は三角形である。

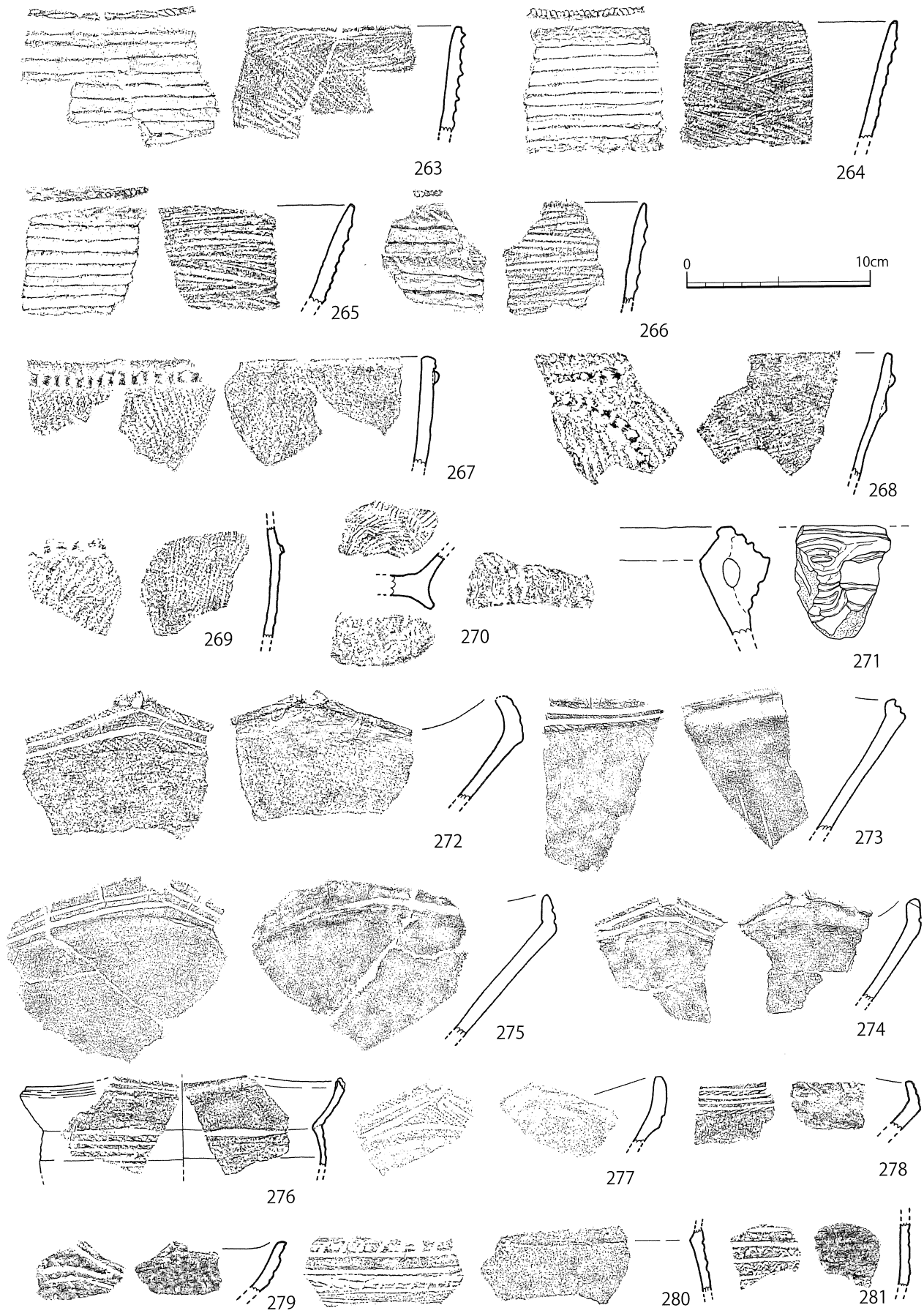
第105図328～330、第106図331～336は石鏃で、特に基部の削込みが無いもしくは浅い資料である。大きさは約1.5cm～約2.8cmとさまざまである。石材には姫島産黒曜石、サヌカイトがみられる。第106図337～345、第107図346～356も石鏃で、特に基部の削込みが深い資料である。大きさは約1.3cm～約2.9cmとさまざまである。石材には姫島産黒曜石、サヌカイトがみられる。357～36も石鏃で、特に刃部が細長い資料である。360は基部に二段の突起がみられる資料であり、注目される。石材には姫島産黒曜石、サヌカイトがみられる。第108図361、362も石鏃で、特に鋸歯状の刃を持つ資料である。両者共に非常に細かく端部に剥離を行い、刃部を造り出している。361は基部にやや浅い削込みを施し、362はやや深い削込みを施す。石材は姫島産黒曜石である。363、364も石鏃で、特に全体が五角形を呈する資料である。サヌカイト製の石鏃で、共に丁寧な剥離が施され、刃部が成形される。縄文時代晩期の資料と考えられる。

365～369は石鏃の未成品である。石材は姫島産黒曜石とサヌカイトであり、いずれも大きな剥離面の端部を細かく剥離し、刃部の成形を行っている。いずれの資料も基部に削込みがなく、これを施すことが最後の工程であると想定される。

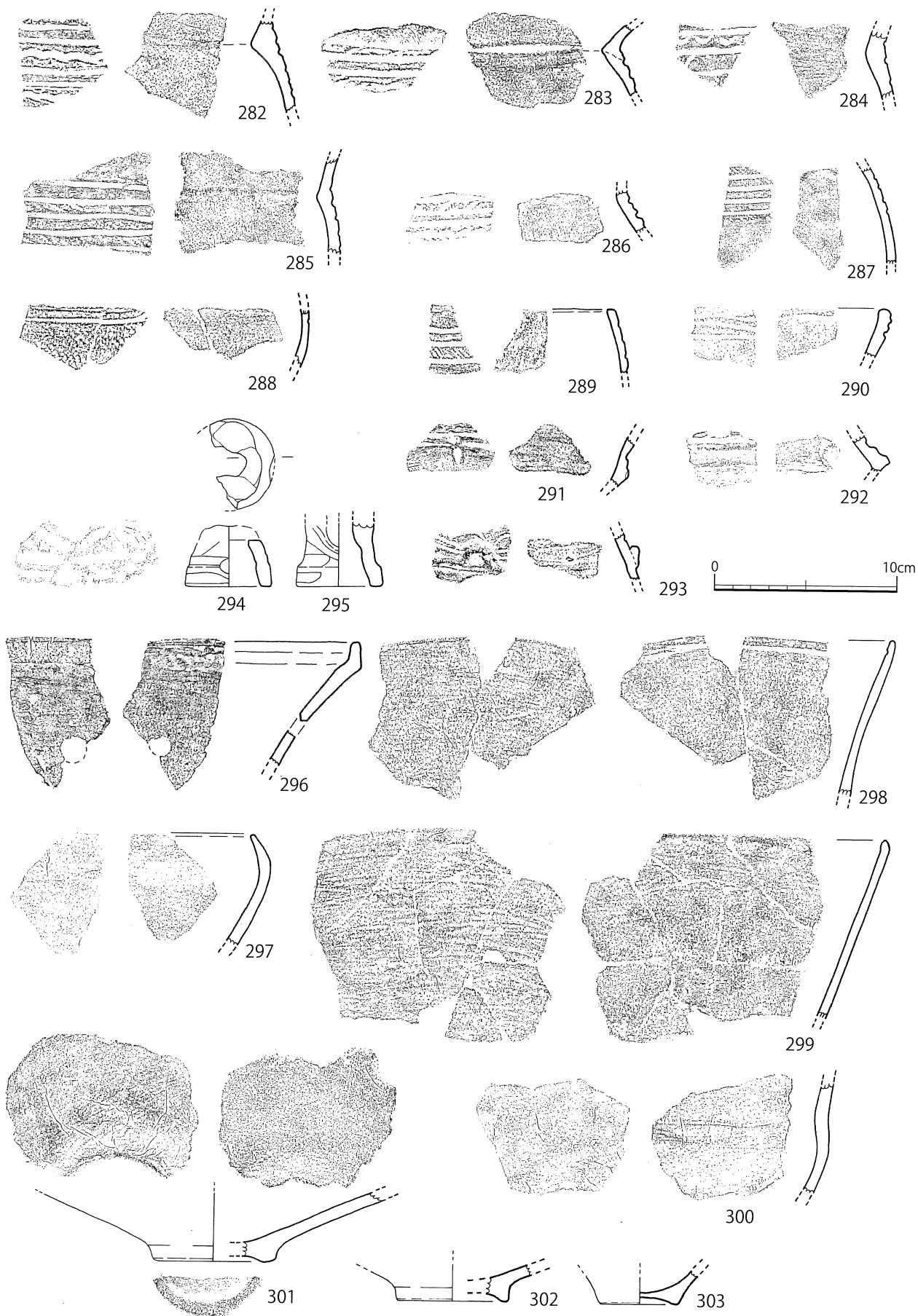
第107図370～377は扁平打製石斧で、特に完形に近い資料である。石材は安山岩と緑泥片岩であり、最大のもは約20cmである。比較的大型のもは370と371で371には中ほどがやや細くなる。刃部の形態からやや円形のものや隅丸方形のものがみられる。第110図378～389、第111図390～392も扁平打製石斧で、全体の一部を欠いている資料である。刃部の幅から382、384、386は大型の資料と考えられる。382は刃部に摺痕が残る。厚みから磨製石斧とは考え難いので、扁平打製石斧の一部を磨製した資料と考えたい。

393～395は蛇紋岩製の磨製石斧である。いずれも刃部を欠くが、393と394は全長が残る。393は全体が隅丸方形を呈し、395は刃部が広く、基部にかけて細くなる。

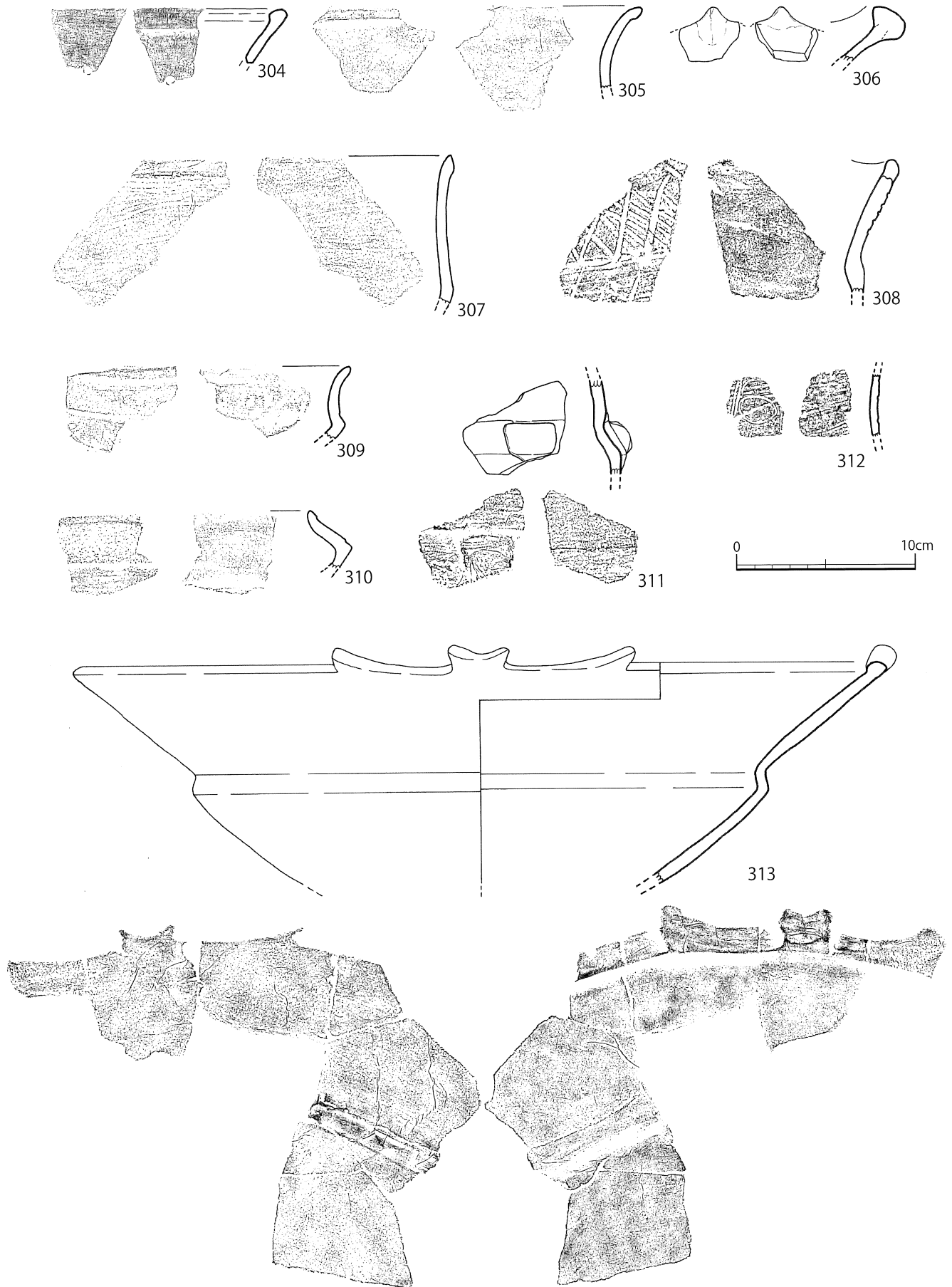
396、397は安山岩製の摺石である。いずれも楕円形の摺石で、397はおおよそ半部を欠く。



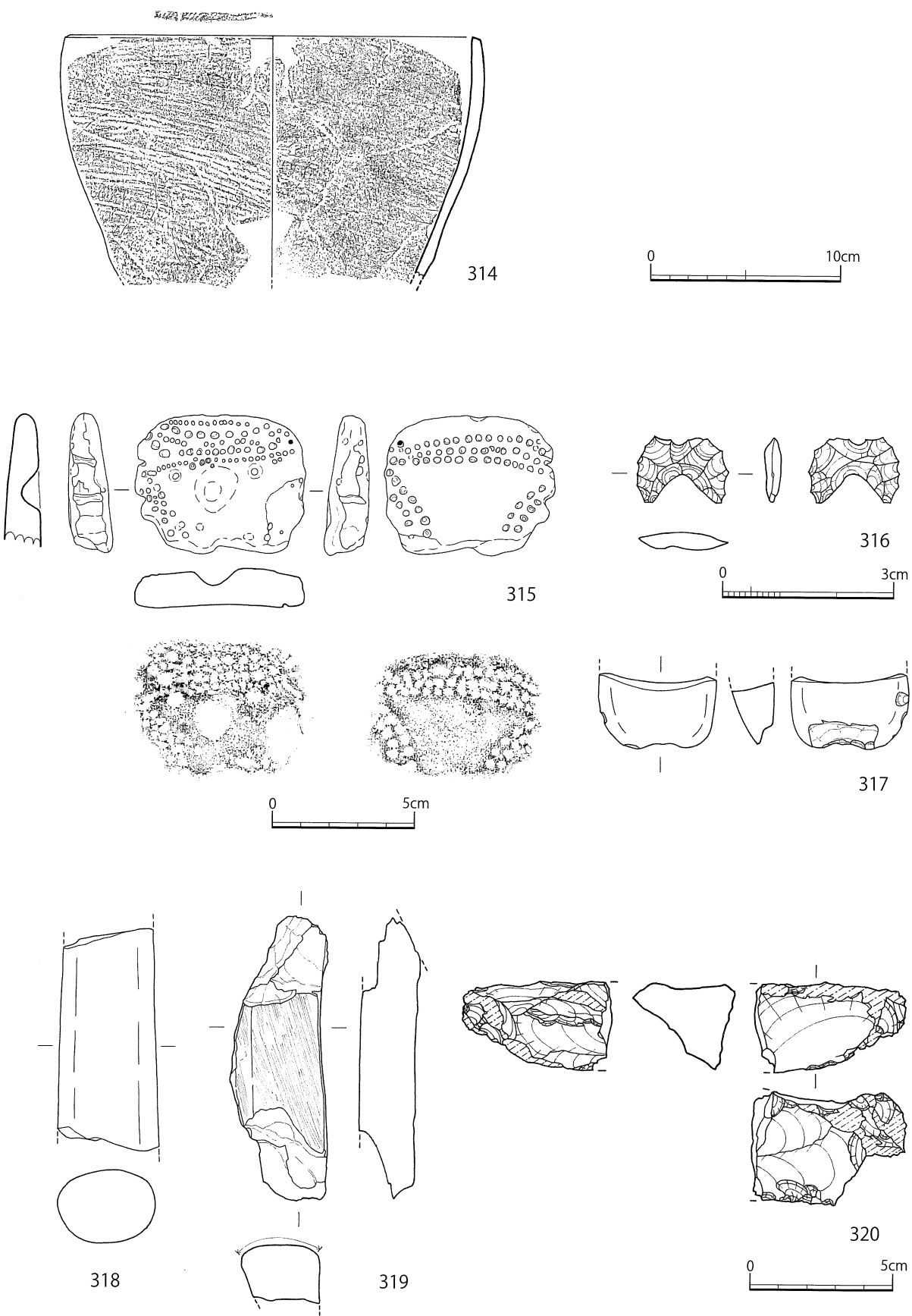
第100図 包含層出土遺物実測図(1)



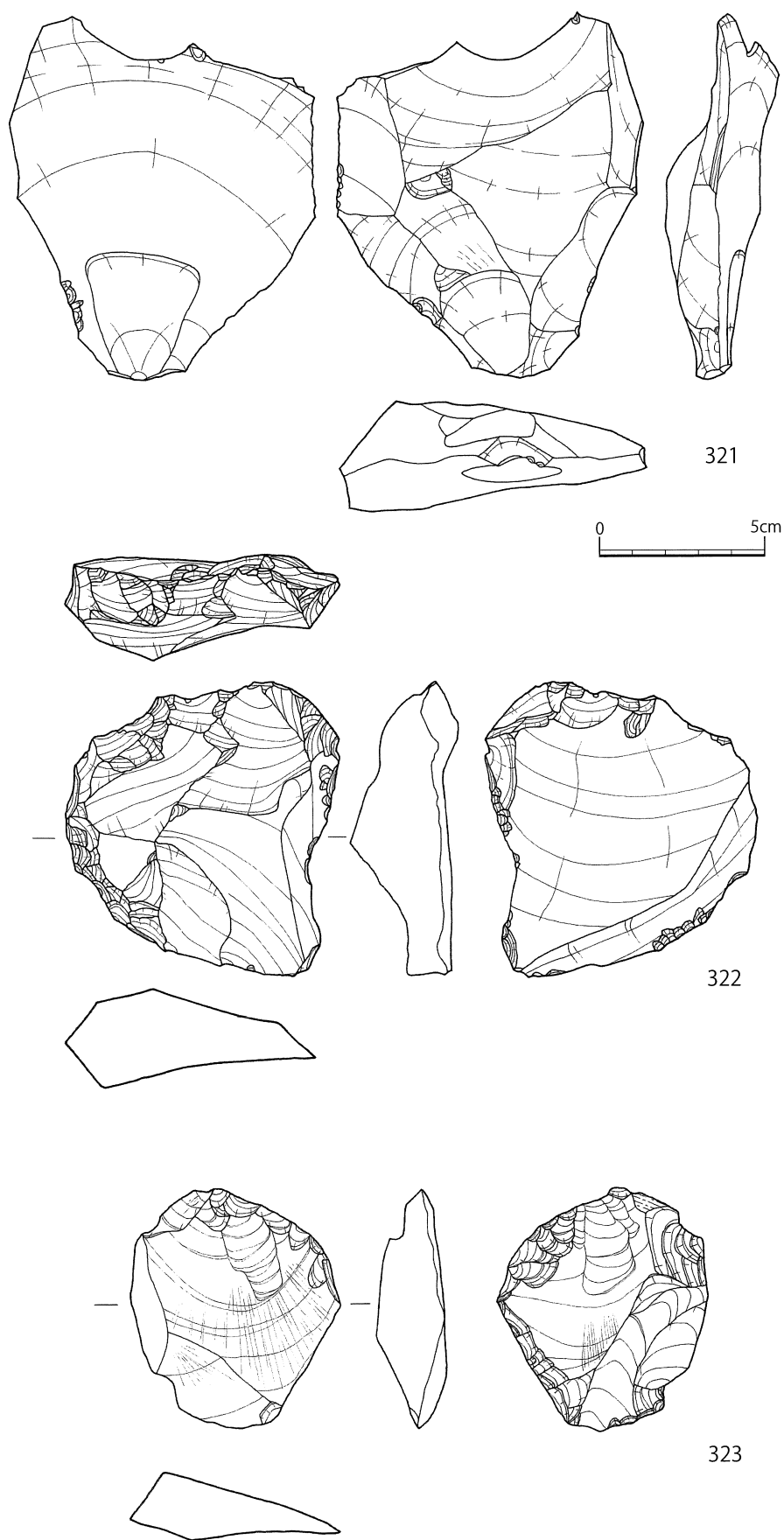
第101図 包含層出土遺物実測図(2)



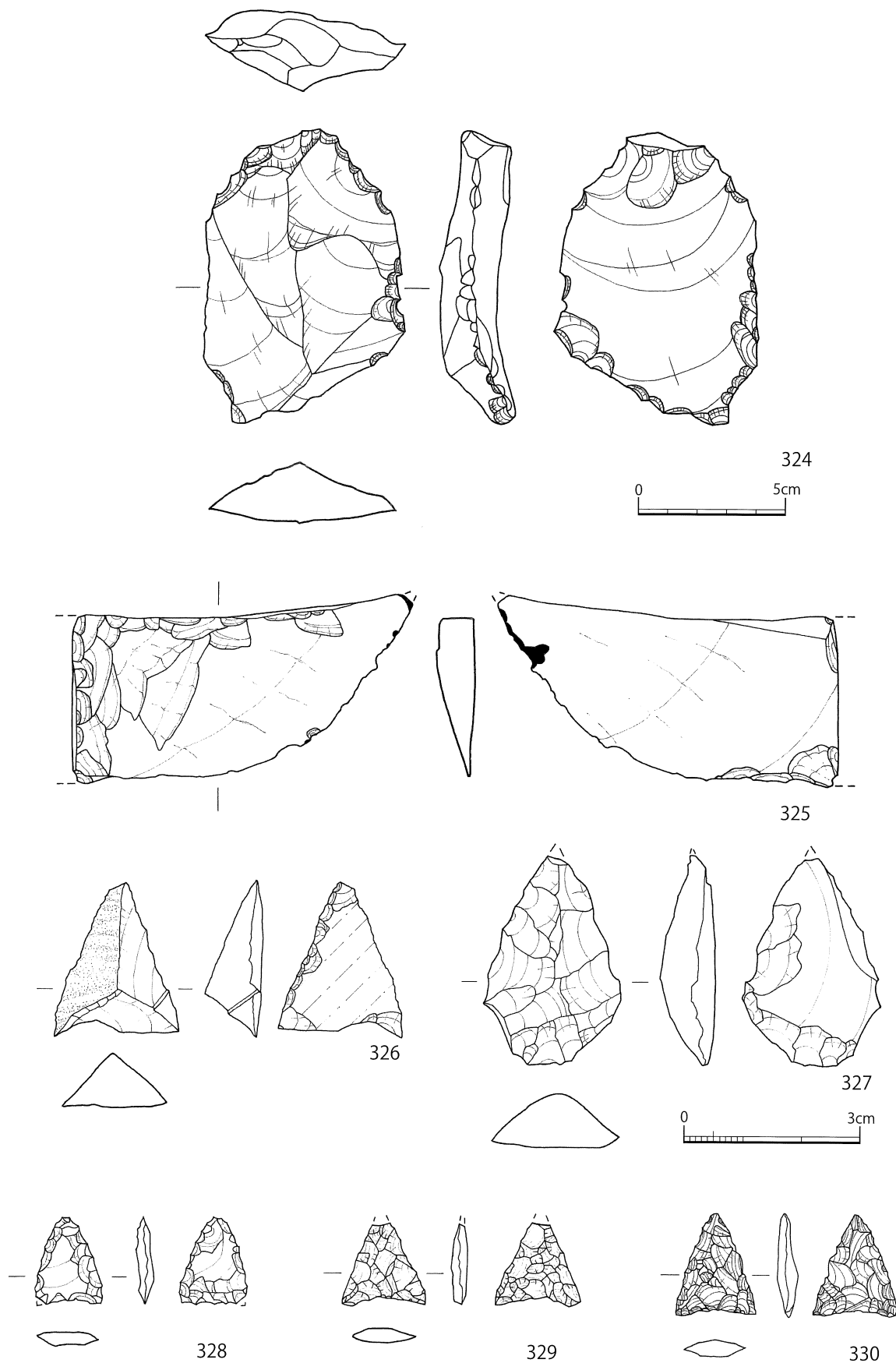
第 102 図 包含層出土遺物実測図(3)



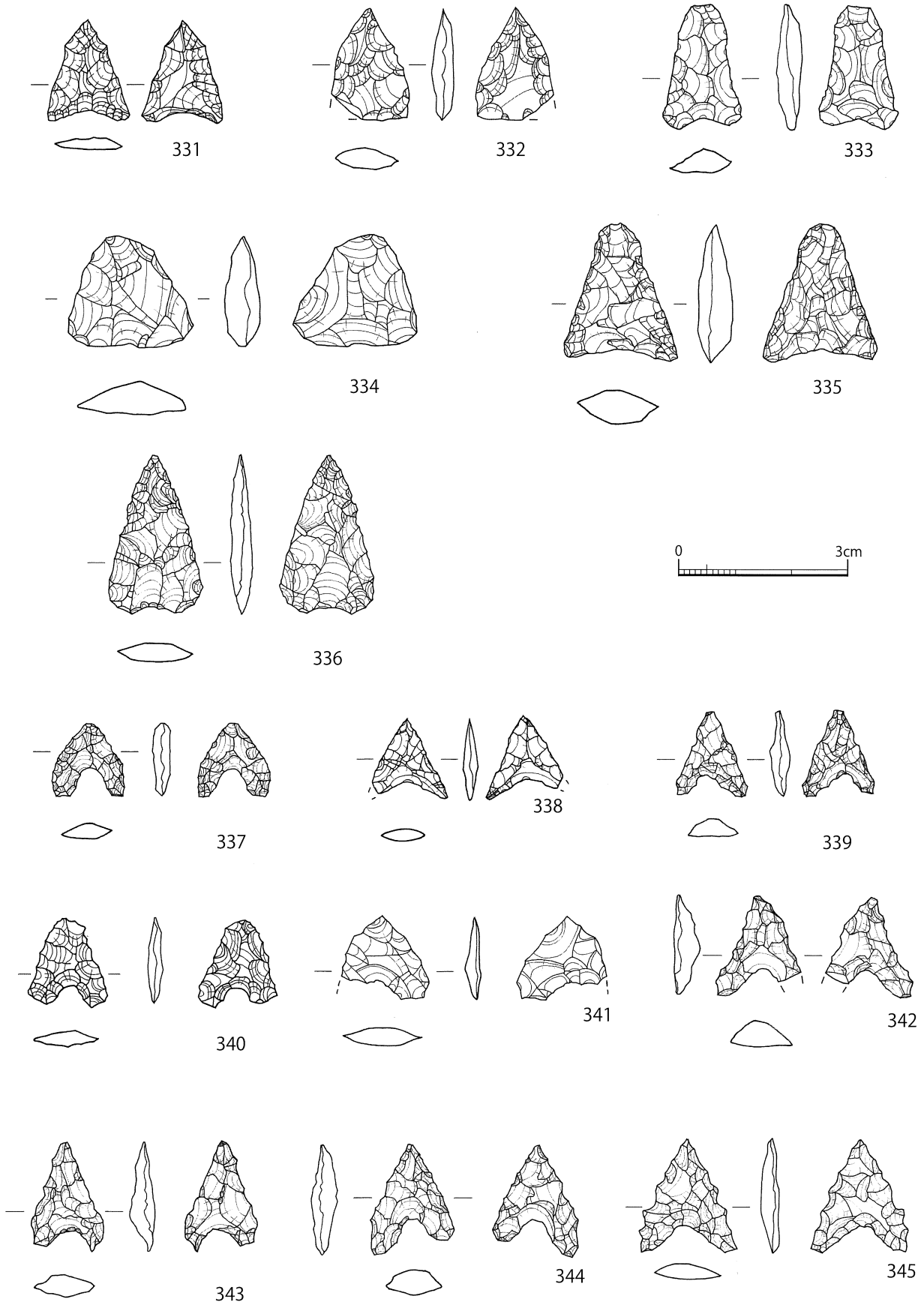
第 103 図 包含層出土遺物実測図(4)



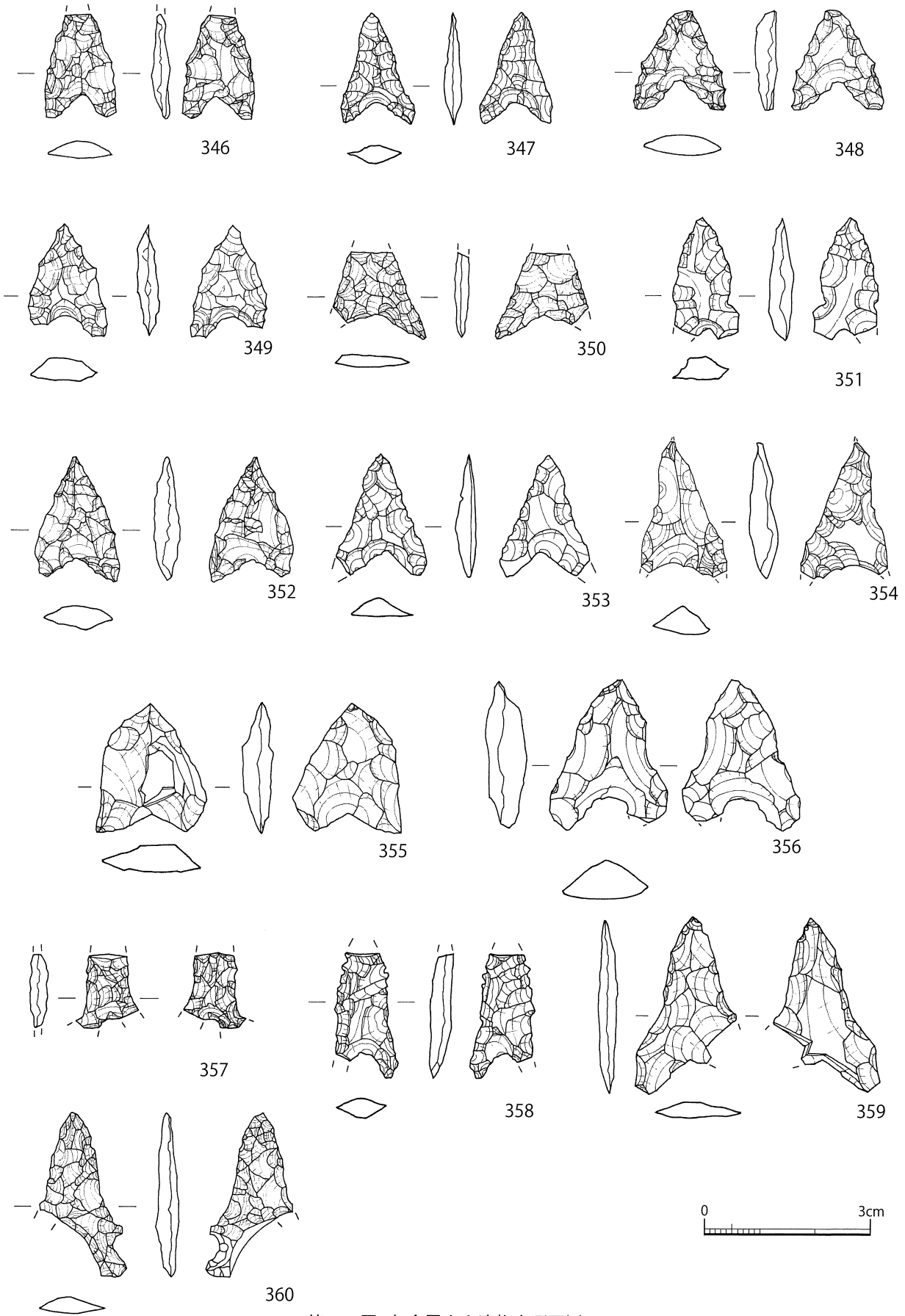
第104図 包含層出土遺物実測図(5)



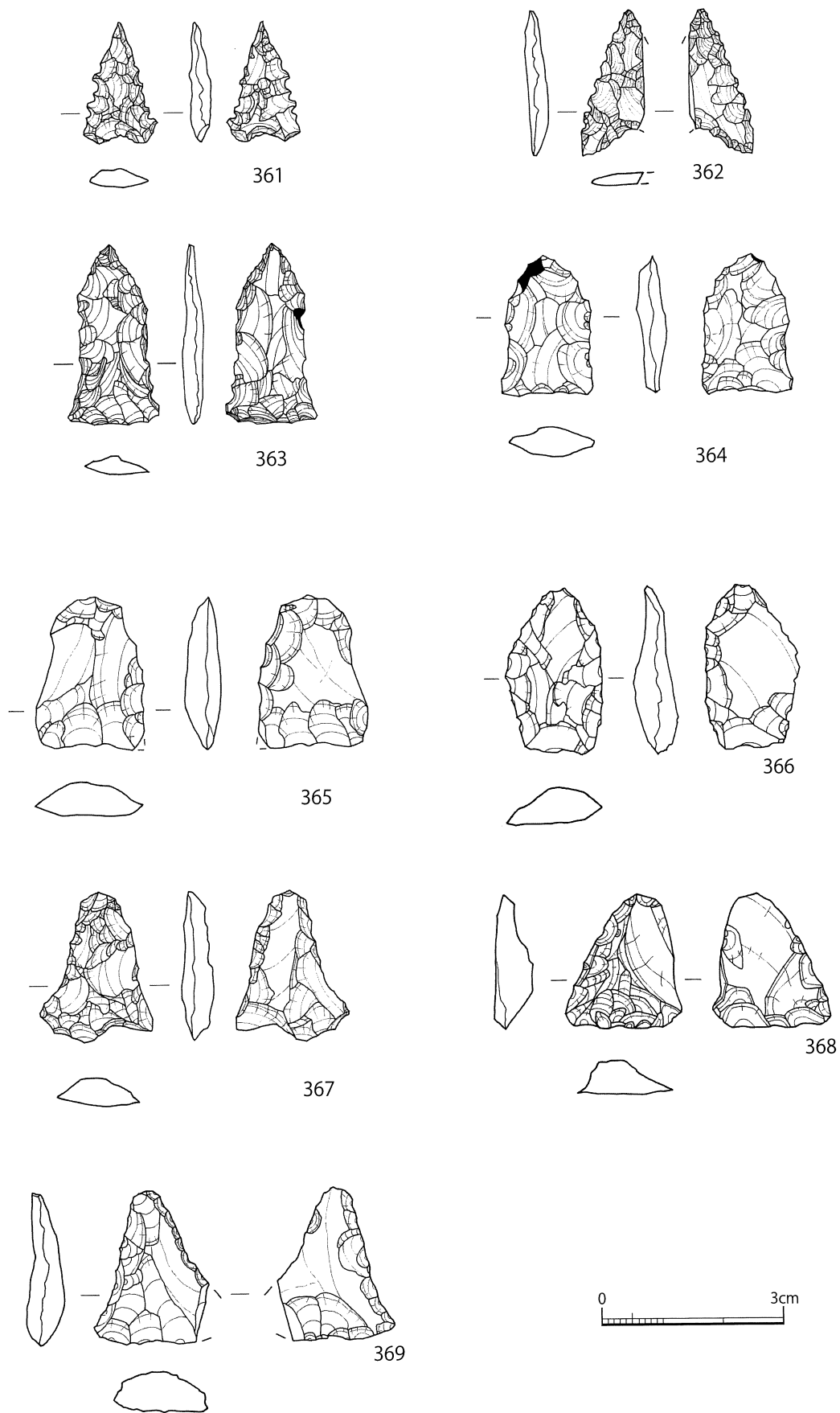
第 105 図 包含層出土遺物実測図(6)



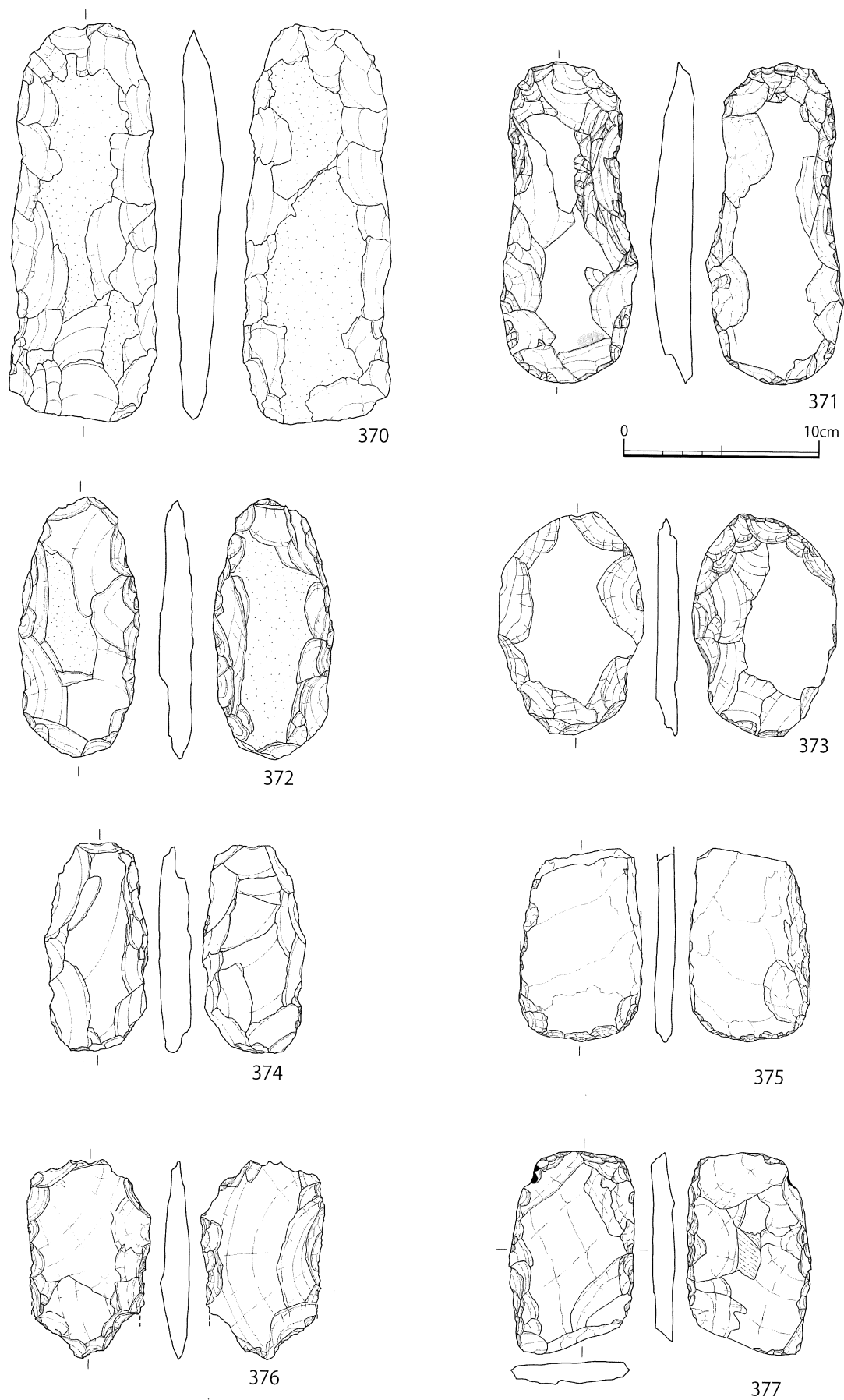
第106図 包含層出土遺物実測図(7)



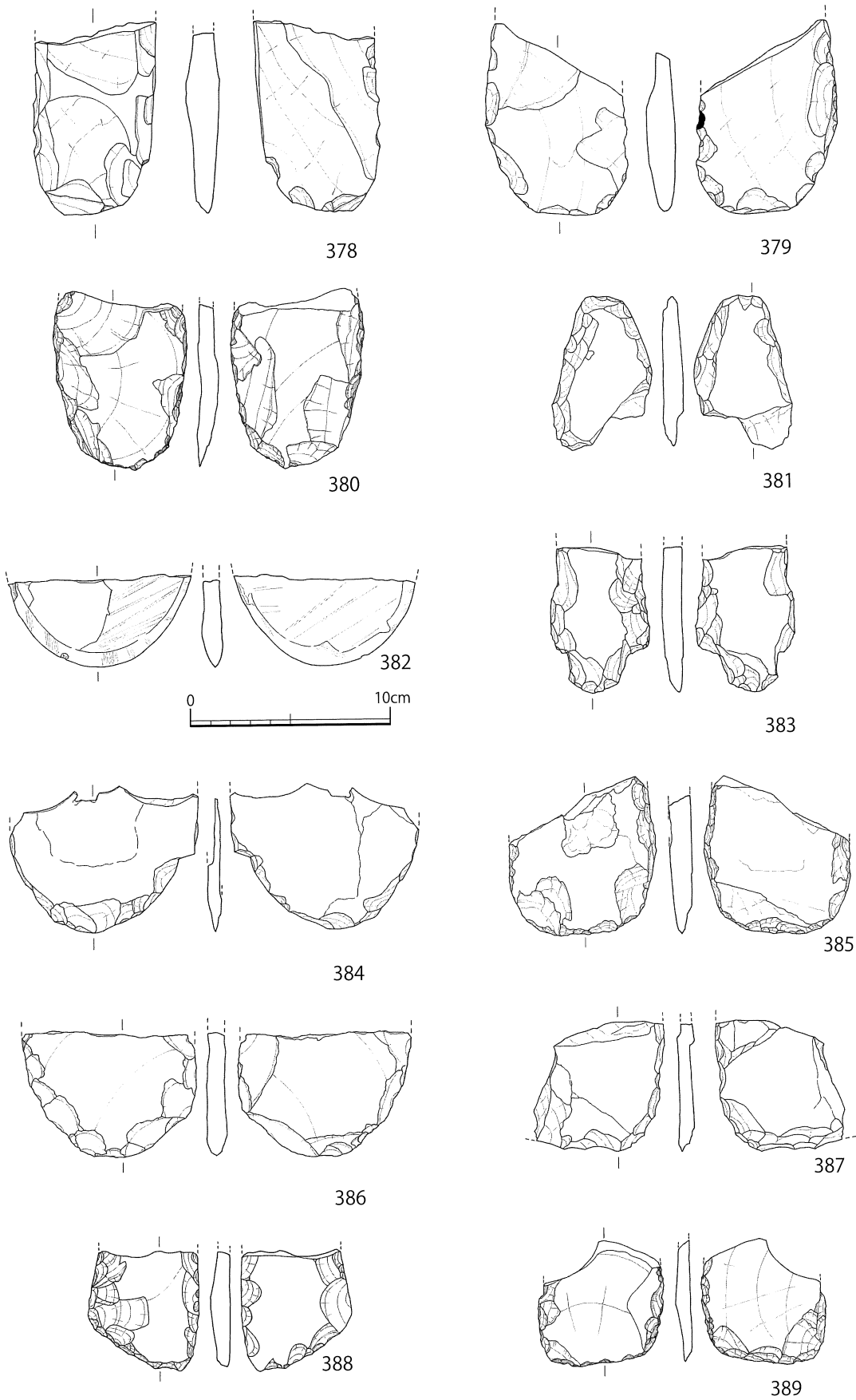
第107図 包含層出土遺物実測図(8)



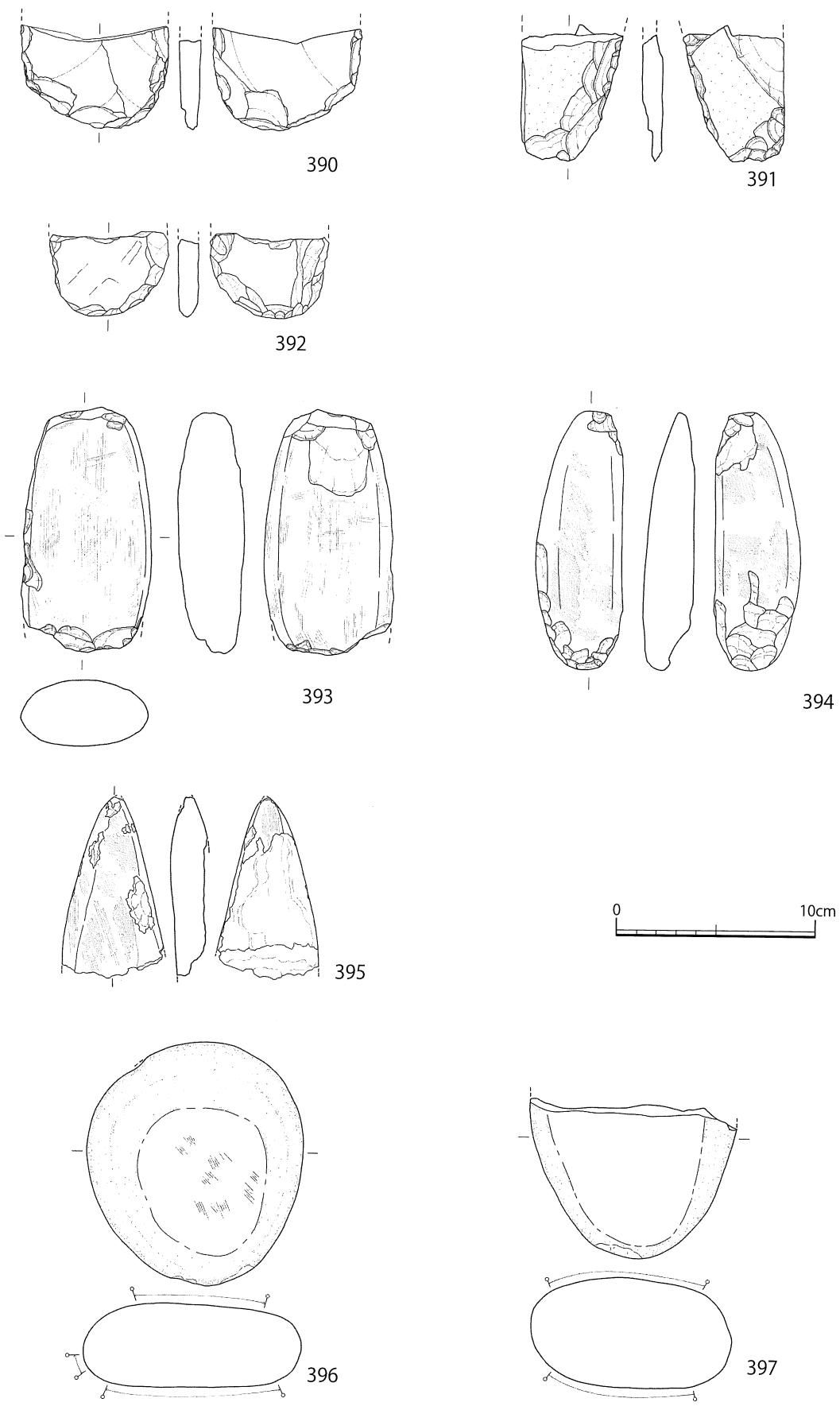
第 108 図 包含層出土遺物実測図(9)



第109図 包含層出土遺物実測図(10)



第110図 包含層出土遺物実測図(11)



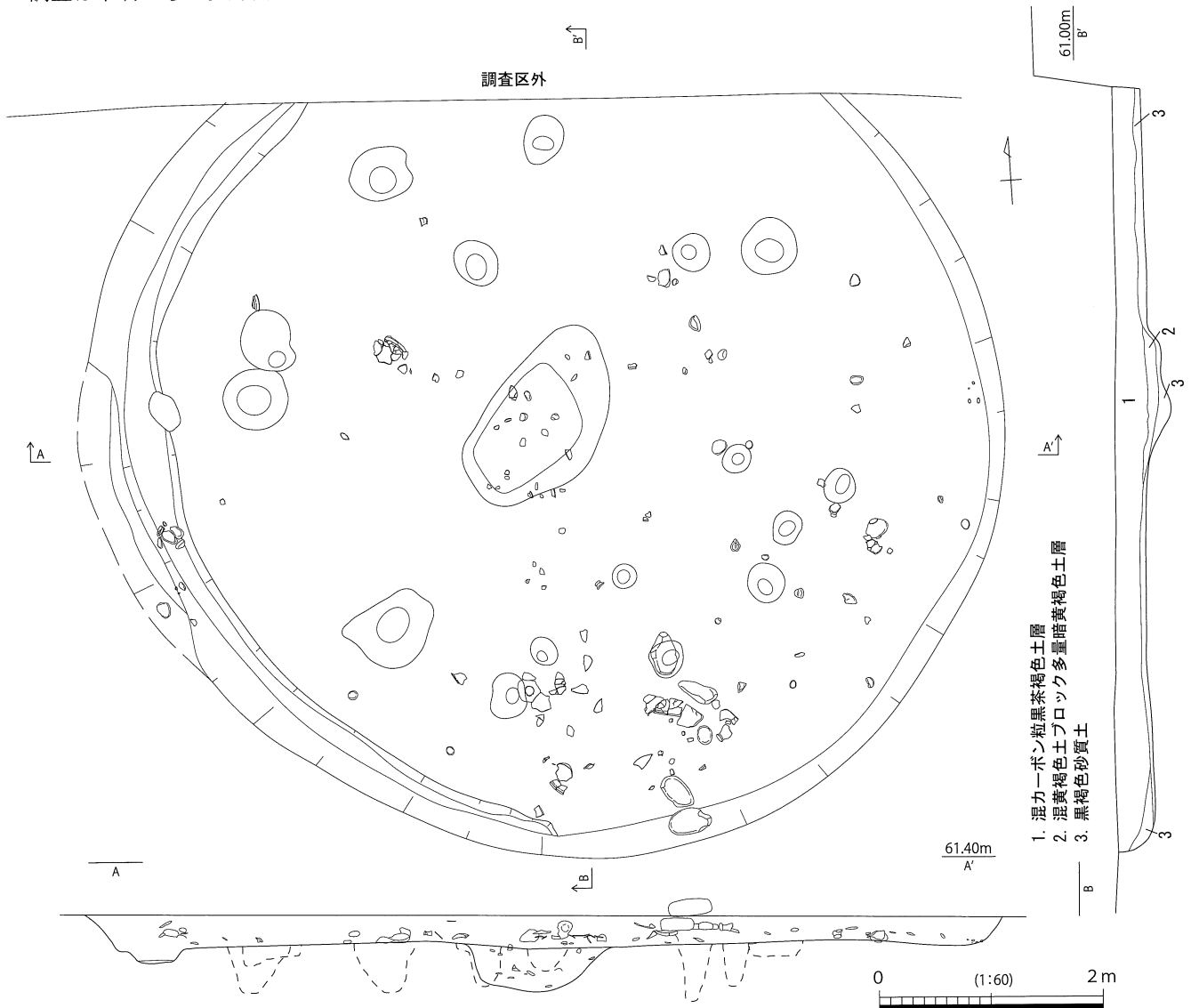
第 111 図 包含層出土遺物実測図(12)

第2節 弥生時代～古墳時代

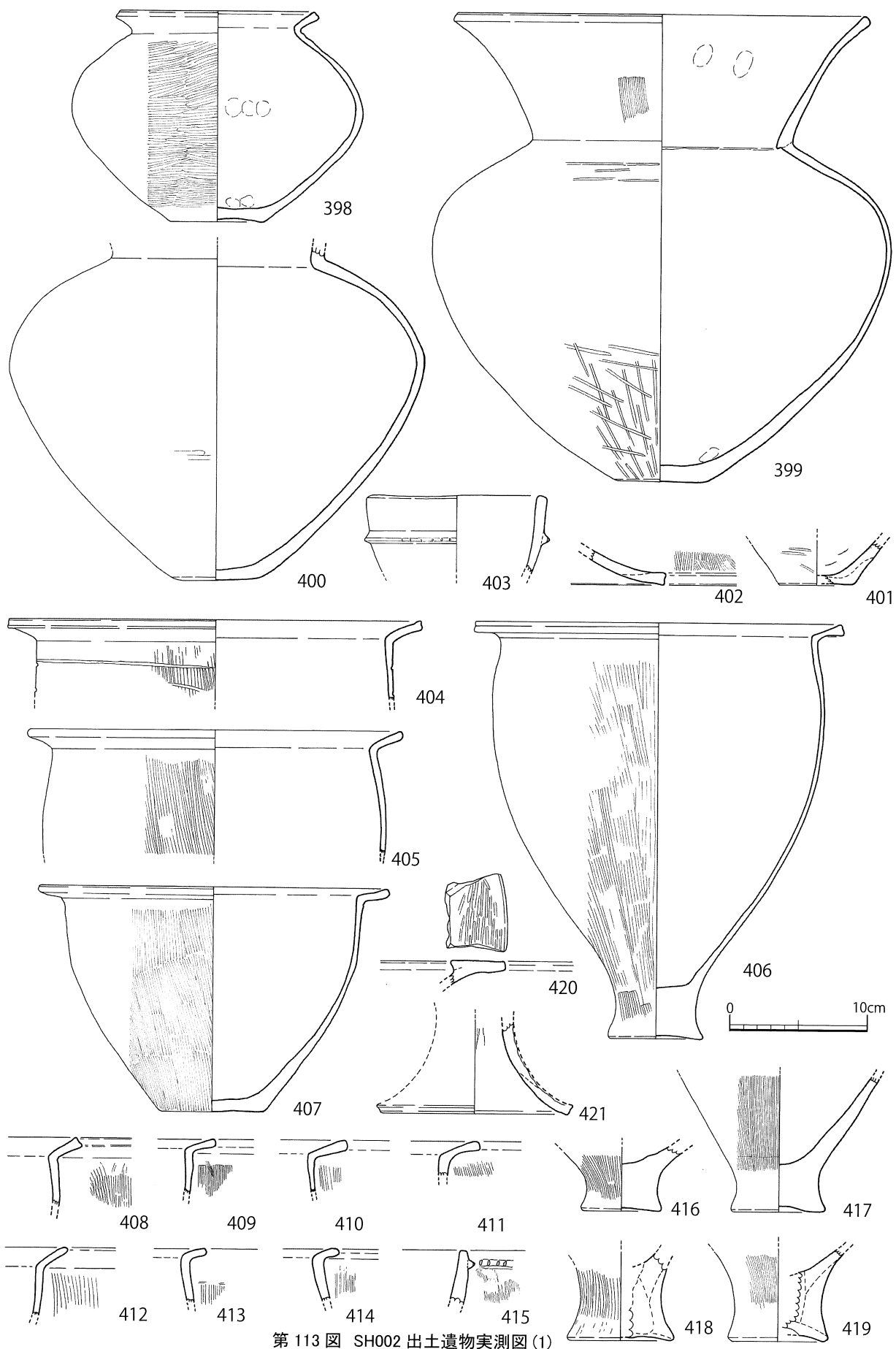
SH002

SH002は調査区1に位置する。直径約8.2mの円形の竪穴建物である。中心には長辺約1.8m、短辺約1mの不定形の中央土坑があり、内部からは多量の土器片と共に、最深部からは石剣の先端部が出土した。中心土坑を取り囲むように9本の柱穴が円形に配される。竪穴建物の西側には側壁溝が良好に残り、最大幅は50cm程であった。埋土からはほとんど時期差がなく埋没したと考えられ、発掘時も床面からほぼ一個体に復元可能な土器が複数検出された。しかし、中央土坑はそれより早く埋没したと考えられるが、出土に時期差は認められなかった。

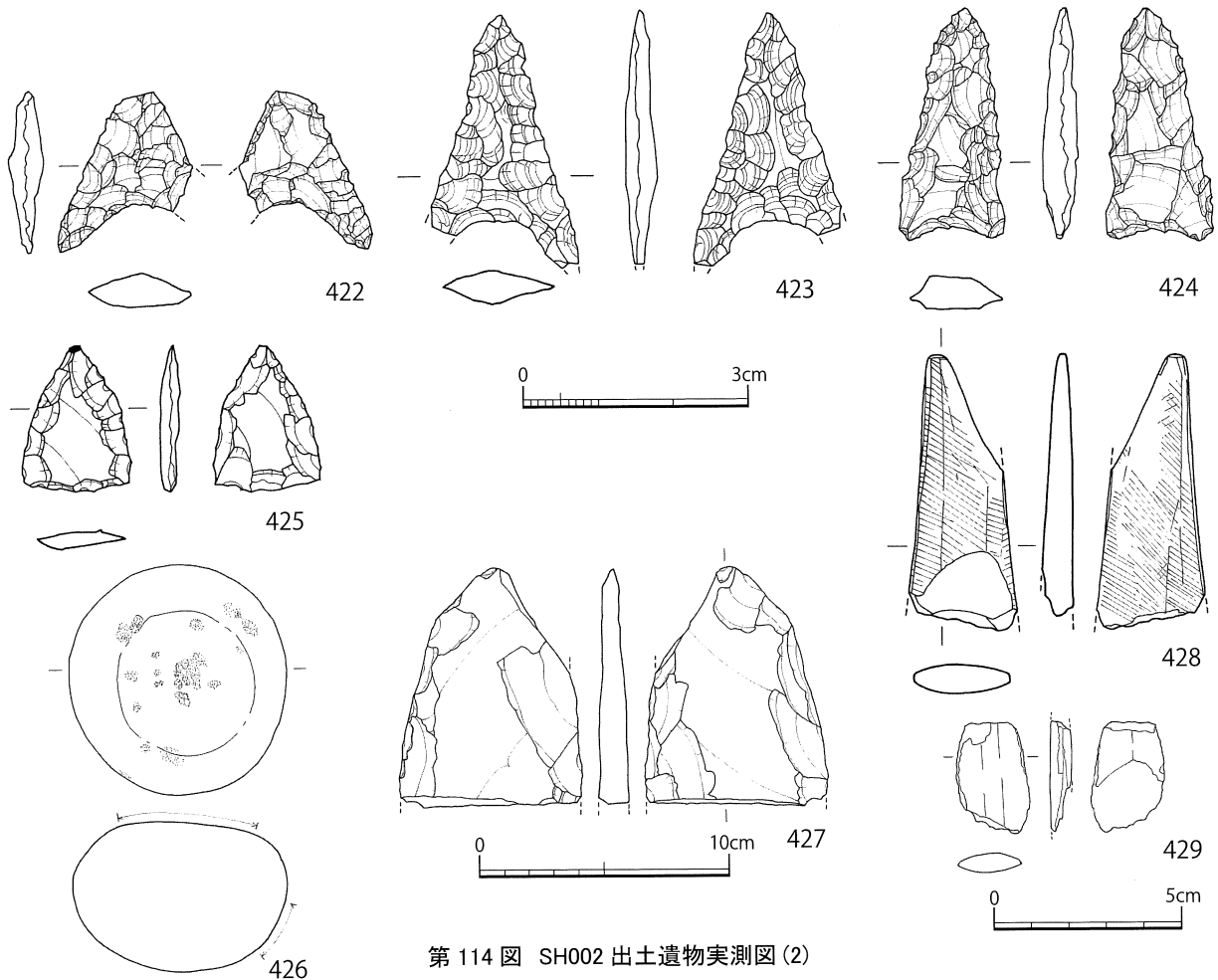
第113図398は無頸壺である。ほぼ完形の資料で、外面は丁寧な横方向のミガキがみられ、底部はやや上げ底で、口縁部はやや大きく開く。丹塗は施されていない。399、400は広口壺である。外面はハケメ調整後全体的にミガキが行われ、胴部の最大径はやや上部に位置し、肩が張る。口縁部はやや外反しながら大きく開く。401は壺の底部である。外面には丁寧なミガキが施される。402は蓋である。端部の資料で、外面にはハケメが施され、内面は丁寧なナデ調整が行われる。403は椀形の資料である。表面の摩耗が激しく、調整は不明である。外面には中位に一条のキザミ目突帯が巡り、約3～4mm間隔で施文される。



第 112 図 SH002 遺構実測図



第113図 SH002 出土遺物実測図(1)



第114図 SH002 出土遺物実測図(2)

404～407は甕である。404は口縁部下に一条の沈線が巡り、沈線の描きははじめと終わりは交わらない。406は甕の全体が完形に復元できる資料である。底部は非常に厚みがあり、口縁部は逆L字状を呈する。407は甕の中でも小型の資料で、底部は平坦で、厚さも1cm程である。口縁部は逆L字状を呈する。

408～415は甕の口縁部である。口縁部はやや跳ね上げのものが多く、いずれも外面は縦方向にハケメが施される。415は刻目突帯を巡らす資料で、口縁部はやや内湾する。

416～419は甕の底部である。外面には縦方向のハケメが施され、底部の端部はナデ調整が施される。

420、421は高坏である。420は鋤先状を呈する高坏の口縁部で、上面の平坦面には横方向にミガキが施される。体部にかけては比較的直線的に伸ると考えられる。421は高坏に脚部である。

第114図420～423は石鏃である。422は姫島産黒曜石製で基部には大きくやや丸みを帯びた刳込みが施される。

426は安山岩製の摺石である。片面の平坦面に摺痕が残り、一部には敲打痕もみられる。

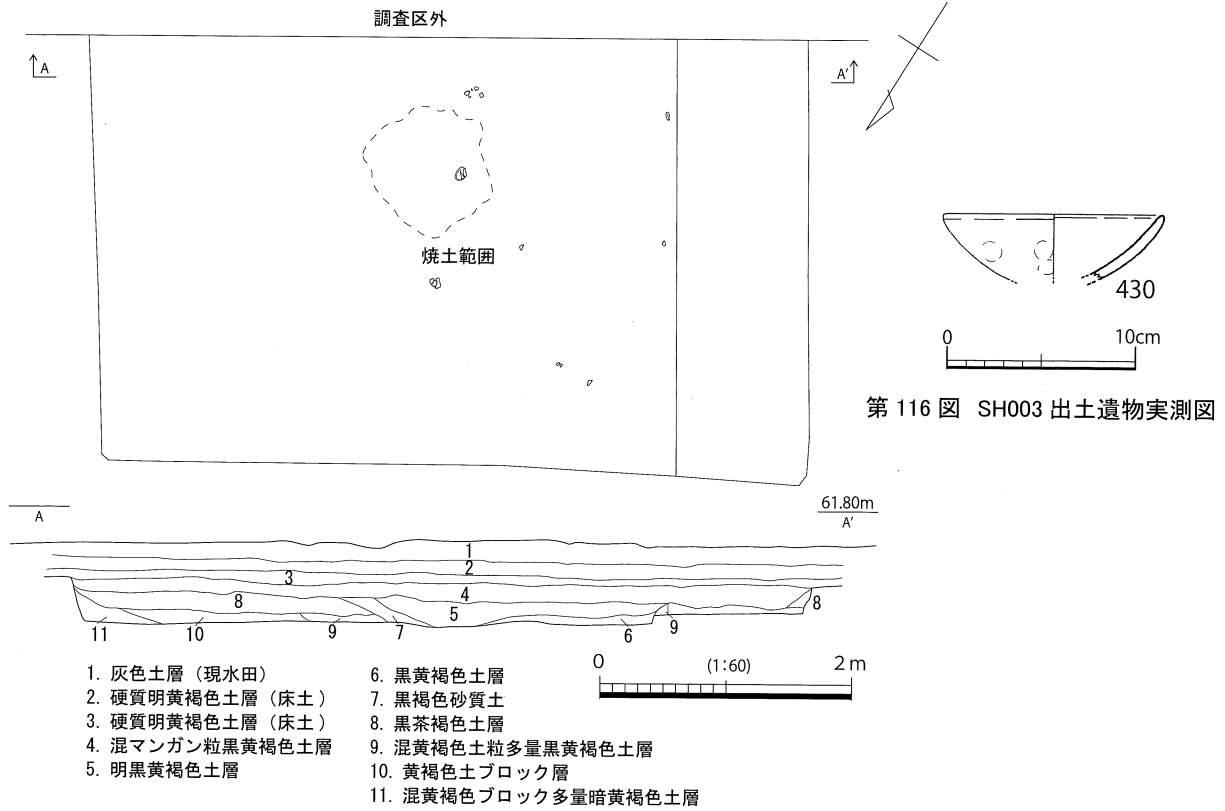
427は安山岩製の扁平打製石斧である。全体のおよそ半分を欠き、両面共に大きな剥離面が残る。荒い剥離が施され、刃部を成形する。

428は凝灰岩製の石剣である。石剣の先端部と考えられ、一部を欠く。両面に細かい摺痕が残り、先端に向かうにつれて細くなる。やや研ぎ減りした石剣である。

429は凝灰岩製の磨製石鏃である。先端と基部を一部欠くものの、全体の形は残す。両面の中心には稜がみられる。

これらの遺物から本遺構の時期は弥生時代中期後半と考えられる。

第4章 遺構と遺物



第116図 SH003 出土遺物実測図

第115図 SH003 遺構実測図

SH003

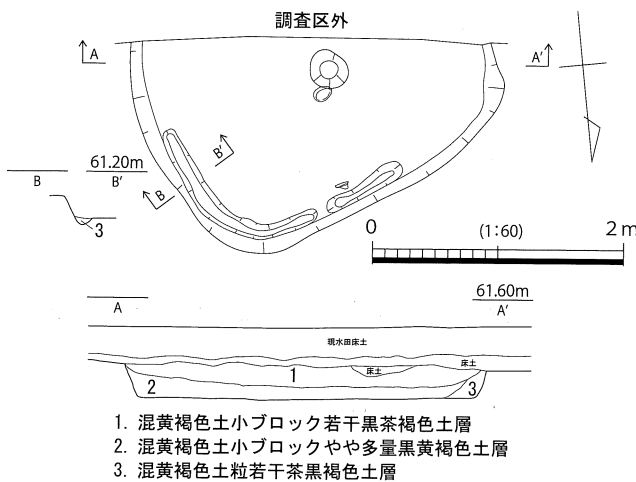
SH003は調査区1に位置する。方形の竪穴建物で遺構の残存状況が悪く、検出した際にはほとんど深さが無い状態でプランのみが確認でき、遺構の南東部が調査区の壁面に位置していたために土層によってその全体の様子が確認できた。竪穴建物の中央部には赤色顔料が不定形に広がっており、その周囲から椀形の土器が1点出土した。竪穴建物の南西部には長方形のベッド状遺構が確認される。

第116図430は椀形の土器である。小型の資料で、内外面共に丁寧な調整が施されている。

この資料から本遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期であると考えられる。

SH004

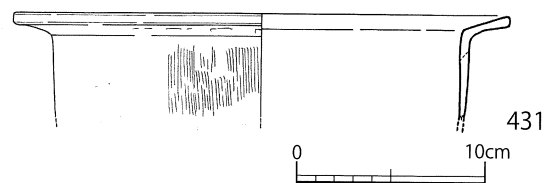
SH004は調査区1に位置する。長辺約2.7m短辺約2mの隅丸方形の竪穴建物で、中心には円形の柱穴、北部の壁面には側壁溝が残存する。側壁溝に近い床面から土器が1点出土している。



第117図 SH004 遺構実測図

第118図431は甕である。外面には縦方向に細かいハケメが施され、口縁部は逆L字状を呈する。

この遺物から本遺構は弥生時代中期後半（と考えられる）。



第118図 SH004 出土遺物実測図

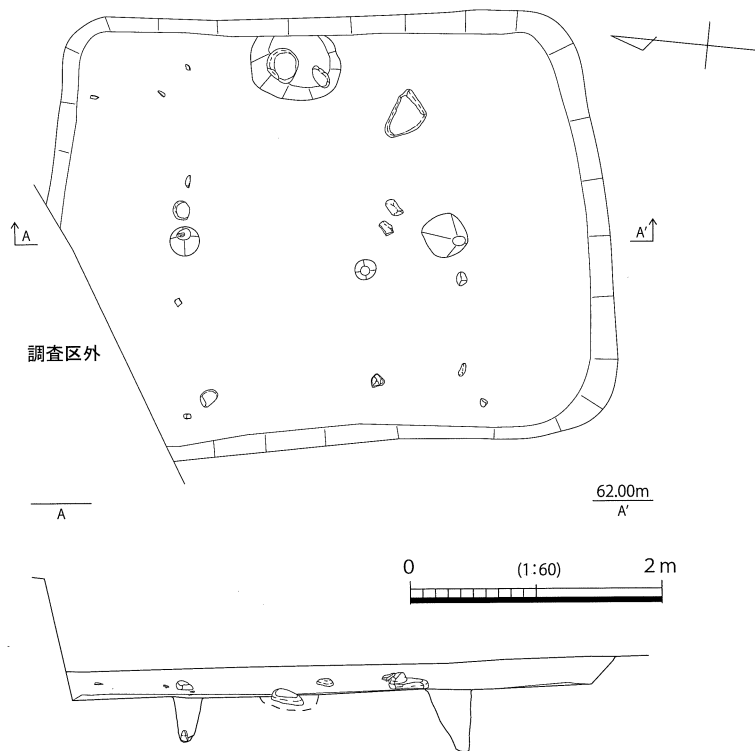
SH005

SH005は調査区1に位置する。長辺約4.5m、短辺約3.5mの隅丸方形の竪穴建物である。内部には2つの柱穴がみられ、東部の壁面に接してやや深い土坑がみられる。床面には比較的大型の礫が数点みられる。東側の土坑からは遺物は確認できず、床面直上を中心に数点出土した。

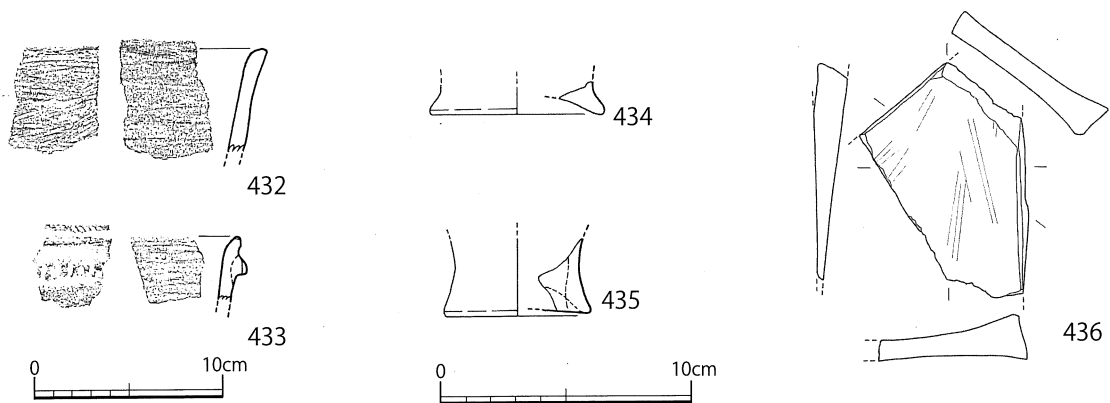
第120図432、433は深鉢である。両者共に内外面に横方向の貝殻条痕が施され、433はキザミ目突帯が施され、口縁端部にもキザミ目が施される。縄文時代晩期の資料と考えられ、埋土への混ざり込みと考えられる。

434、435は甕の底部である。表面の残存状況が悪く調整については判別できない。いずれも若干、上げ底を呈する。436は砂岩製の砥石で、裏表共に使用痕がみられる。

これらの遺物から、本遺構の時期は弥生時代中期後半と考えられる。

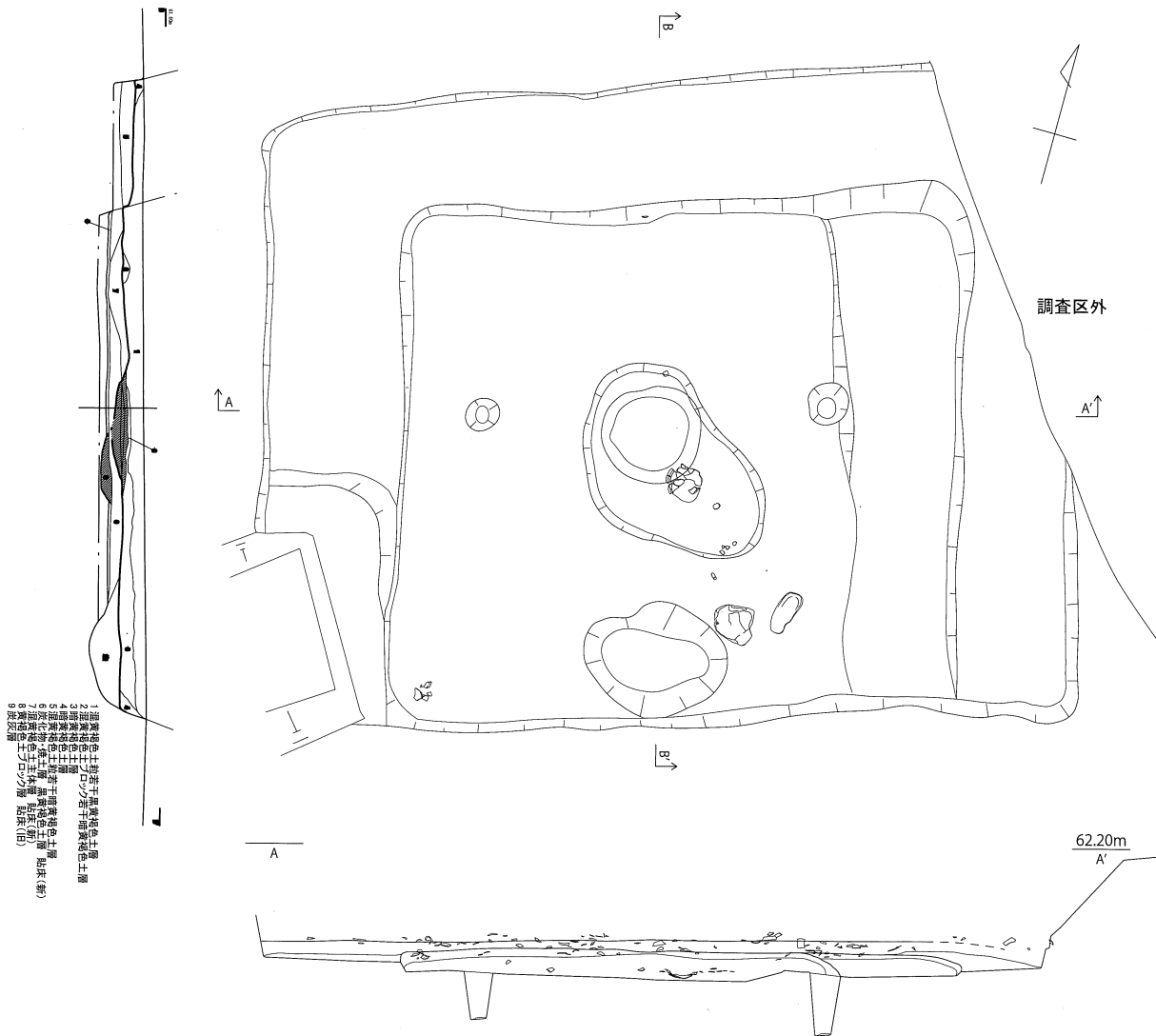


第119図 SH005 遺構実測図



第120図 SH005 出土遺物実測図

第4章 遺構と遺物



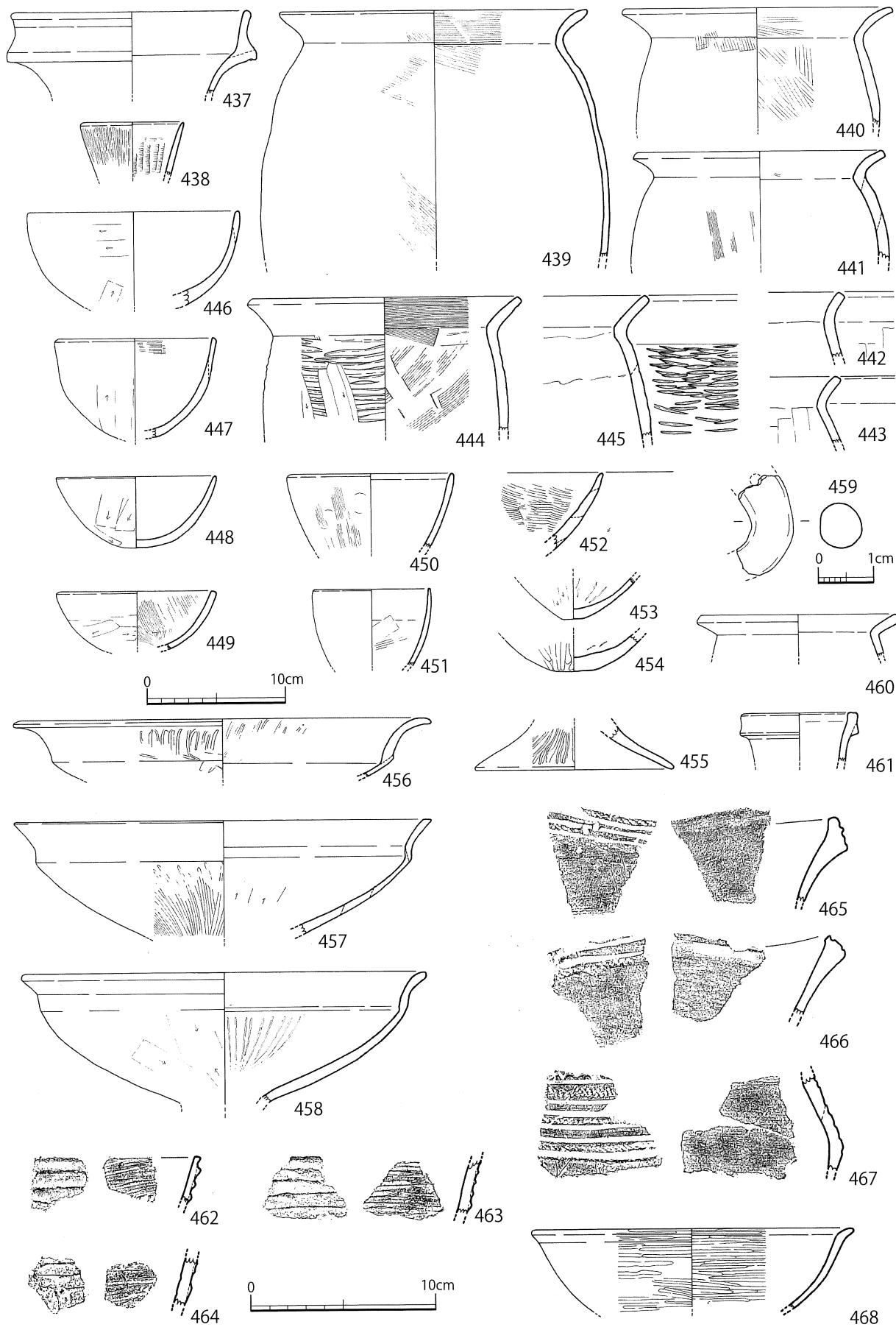
第121図 SH006 遺構実測図

SH006

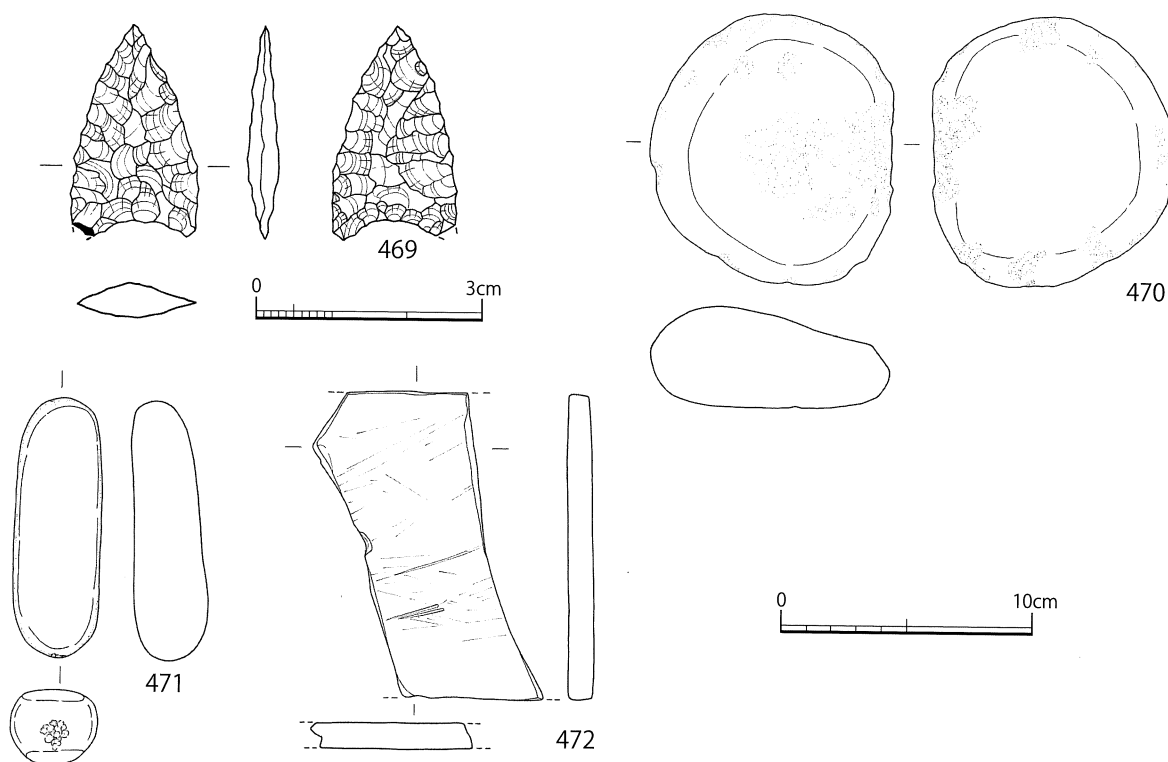
SH006は調査区2に位置する。長辺約6.6m、短辺約5.4mの方形の竪穴建物である。遺構の北東部は調査区の境に位置し、南西部のコーナーは現代のカクランにより、削平されている。埋土の状況から本遺構には大きく2つの時期が考えられる。初めに竪穴建物が造られた際には長辺が約4.2m、短辺が約4.2mの正方形を呈していたと考えられる。現状では周辺のベッド状遺構を除いた内側部分がそれにあたる。中心には不定形の土坑があり、内部には高坏の坏部が内面を上にして埋置してあり、内部からは炭化物で構成される層が認められた。このように炉として使用したか、もしくは祭祀的な使用の可能性が考えられる。柱穴は中央土坑を挟むように位置し、竪穴建物を拡張した際も同様の柱穴を使用している。遺構の頭部にはベッド上の遺構が付属する。その後、一度床面をベッド状遺構の高さまで埋め戻し、これを新たに拡張した床面の高さとしている。この周りにはコの字状にベッド状遺構が拡張され、遺構の南壁に接して新たに不定形の土坑が掘られる。この土坑は当初の竪穴建物の床面を掘り込み造られている。出土遺物の多くはこの拡張された遺構の埋土からである。拡張された遺構にも中央に円形の土坑がみられ、内部からは炭化物を多量に含んだ層が確認された。

第122図437は壺の口縁部である。複合口縁で、短く直線的に立ち上がる。

438は長頸壺の口縁部である。外面には細かいハケメと内面には横方向に何度も細かく動かしたハケメが残る。



第 122 図 SH006 出土遺物実測図 (1)



第123図 SH006 出土遺物実測図(2)

439～443は甕である。内外面共に細かいハケメが残る。胴部は丸みを帯び、口縁部はやや外反し大きく跳ね上げられる。444～445は、胴部の外面には荒いタタキが施され、口縁部は大きく跳ね上げられる。

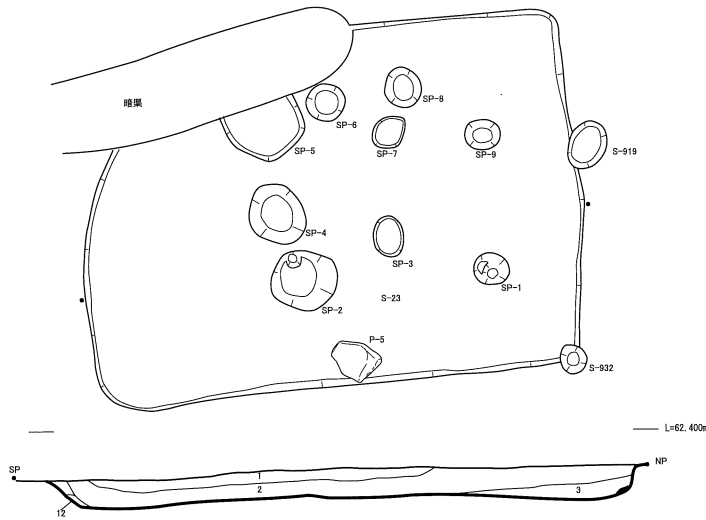
446～452は椀形の土器である。内外面共に丁寧な調整が施され、大小様々なタイプが認められる。

453、454は壺の底部である。いずれも丸底の底部で、内外面共に丁寧な調整が施される。内面にはハケ状の工具があたった痕跡が残る。455～458は高坏である。短く外側に開き、外面には丁寧なミガキ調整が認められる。456は口縁部が大きく外反する資料で、屈曲部より下部は緩やかに膨らむ。内外面共に丁寧な調整が施され、口縁部の外面には暗文状のミガキが施される。初期の住居の不定形土坑内から出土した資料である。457、458は口縁部が短く外反する資料である。459は土製の勾玉である。頭部と先端部の一部を欠くが、上部には円形の穴が残る。出土した土器の中ではこれらの資料が遺構の時期に伴うものと考えられる。これらの出土遺物から本遺構は弥生時代終末期～古墳時代前期と考えられる。

以下は埋土への混ざり込みと考えられる資料である。460は弥生時代中期後半にみられる小型の甕である。口縁部はやや跳ね上げられる。461は弥生時代中期後半にみられる長頸壺の口縁部である。口縁部下に突帯が巡る。462～464は縄文時代前期の轟B式の深鉢である。内面には条痕が施され、外面には微細な突帯が巡る。464には縦方向の微細な突帯も確認できる。465～466は波状口縁を呈する深鉢の口縁部である。いずれも口縁端部にかけて、器面が厚くなる。467は深鉢の胴部である。内外面共に丁寧な調整が施されたのち縄文と複数の沈線が巡る。468は瓦質の椀形土器である。内外面共に、横方向のミガキが丁寧に施され、口縁端部が短く外反する。12世紀の資料と考えられる。469～472は石器である。469は石鏃である。比較的大型の資料で両面とも非常に丁寧に剥離がなされ、刃部が成形される。470は摺石である。両面に作業面が認められる。471は敲石である、棒状の形状で、先端部に敲打痕が残る。472は砂岩製の砥石である。両面に摺痕が認められる。

SH007

SH007は調査区3に位置する。遺構の東側は調査区の境に位置しており、遺構の全体像は不明であるが、現状の残存状況から、隅丸方形を呈する竪穴建物と考えられる。現在確認できる遺構内部には長方形の一段高い面が確認でき、ベッド状遺構が付属するものと考えられる。壁面に残る土層から、レンズ状に埋没する様子がかげえ、内部からは図化に耐えうる遺物等は出土しなかったものの、同様のベッド状遺構が付属する調査区1の状況を踏まえれば、弥生時代終末期の竪穴建物と考えられる。



第124図 SH008 遺構実測図

SH008

SH008は調査区3に位置する。長辺約4m、短辺約2.9mの長方形の竪穴建物である。北西部のコーナーはカクランによって一部削平を受ける。内部にも複数土坑が認められるものの、この以降に伴うものではない。内部からは図化に耐えうる遺物等は出土しなかったものの、埋土から、東側から埋没したことがうかがえる。周辺遺構との切り合い状況からSH009の一部を切っており、遺構の時期としてはこれより新しいと考えられる。SH009は複数の竪穴建物が、複雑に切り合っている可能性が考えられ、出土遺物が、SH008と接する部分の遺構の時期かは不明であるが、SH009を弥生時代終末期と考えれば、本遺構の時期はこれより新しい弥生時代終末期～古墳時代前期と考えられる。

SH009

SH009は調査区3に位置する。遺構の内部に帯状のカクランが掘り込まれ、切り合い関係等が不明であるため、明確な竪穴建物のプランは確認できないが、張り出すベッド状の遺構が付属する方形の竪穴建物と考えられる。遺構の西側には幅1.2m程のベッド状遺構があり、このベッド状遺構の床面からは炭化した木材が検出された。遺構の北部には張り出し状のベッド状遺構が付属し、東側はカクランのため不明である。内部からは少数であるが、遺物の出土がみられた。

第125図473は複合口縁の壺である。ほぼ完形の資料である。口縁部は大きく開く複合口縁で、口縁端部に3～4mm程の間隔でキザミ目が施される。頸部にも斜めに大きくキザミ目を施した突帯が巡り、胴部は長胴で、底部は丸底である。全体的に内外面とも丁寧な調整が施される。

474は高坏である。脚部は細く、外面に縦方向のハケメが施される。

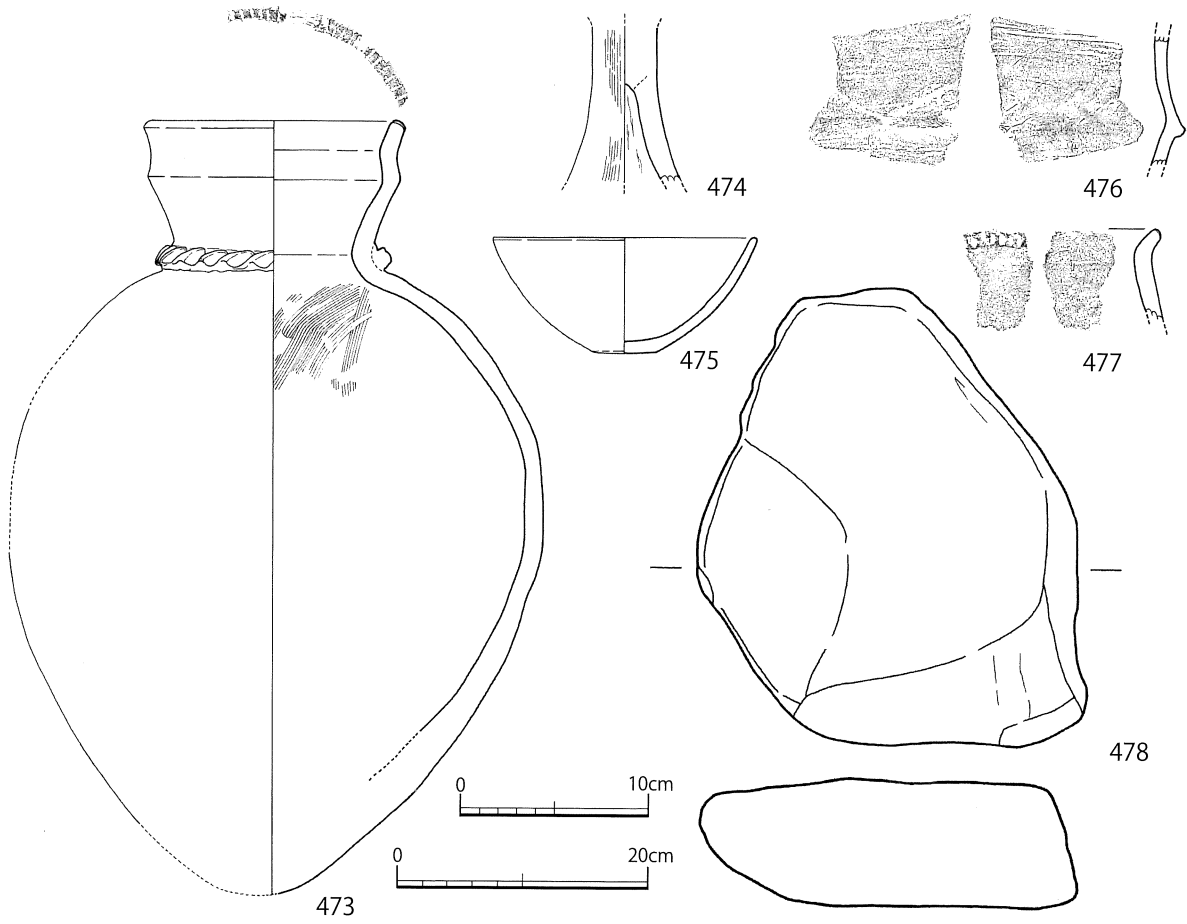
475は椀形土器である。大きく深く広がる器形で、底部は小さく平坦である。

476は深鉢の胴部である。内外面共に横方向に貝殻条痕が施され、屈曲部の外面はやや下垂する。突帯文土器の胴部と考えられ、弥生時代早期～前期の資料と考えられる。混ざり込んだ資料と思われる。

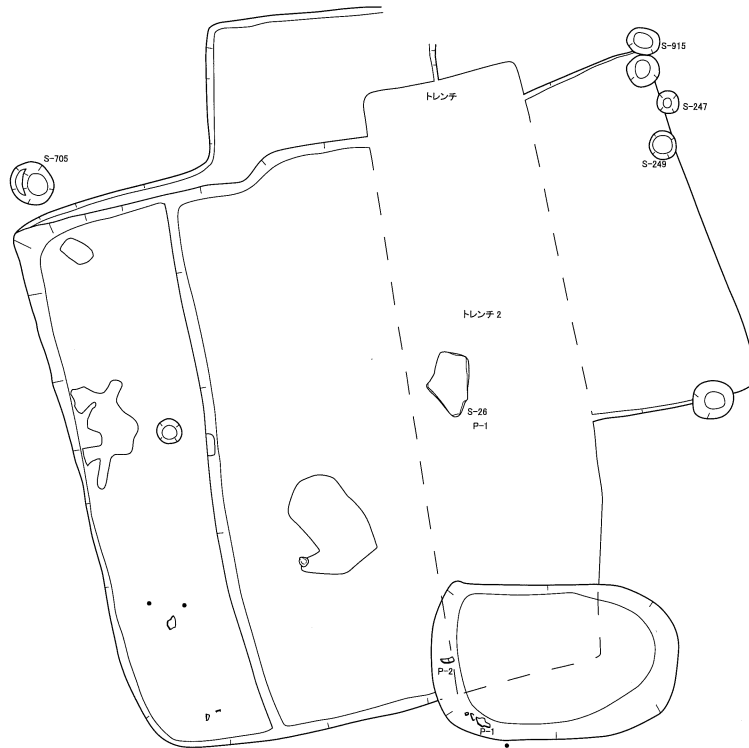
477は口縁端部にキザミ目を施す甕の口縁部で弥生時代前期の資料と考えられる。

478、479は安山岩製の台石である。上面に広い作業面が確認される。

以上の遺物から本遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。



第 125 図 SH008 出土遺物実測図



第 126 図 SH009 遺構実測図

SH010

SH010は調査区3に位置する。竪穴建物の北西部が調査区に接し、斜め方向に遺構の約半分を欠いている。残存状況は良くないものの、竪穴建物の内部の東側には幅1m程のベッド状遺構が付属する。ベッド状遺構の床面からはまともな炭化した木材が出土した。内部からは床面直上で複数の遺物が出土している。

第129図480は直口壺である。口縁部を欠くが、頸部には三角突帯が巡り、内外面共に細かいハケメで調整が施される。底部は丸底を呈する。

481は甕の口縁部である。やや外反し、跳ね上げられる。

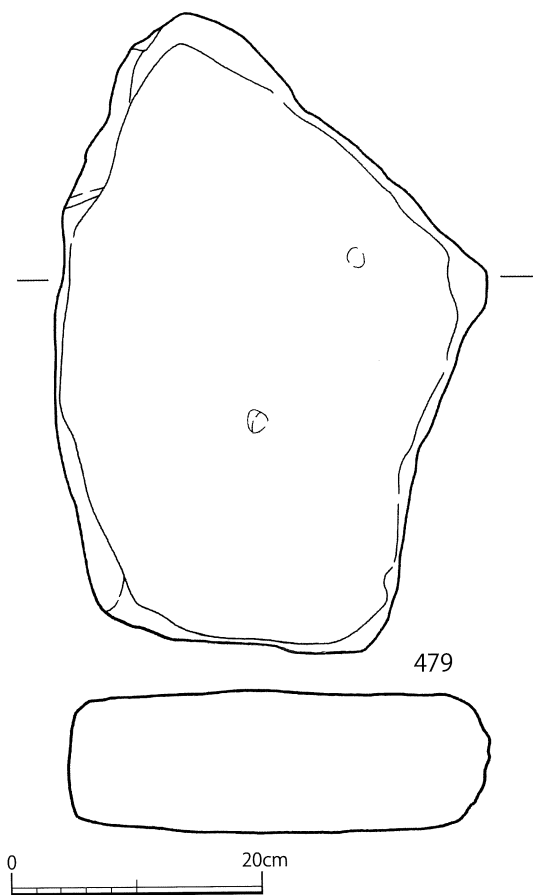
482～484は椀形の土器である。482は深い椀形で、484は口縁部が短く外傾する資料である。

485は土製の勾玉である。先端部を欠く。頭部には直径1mm程の穴が開けられる。

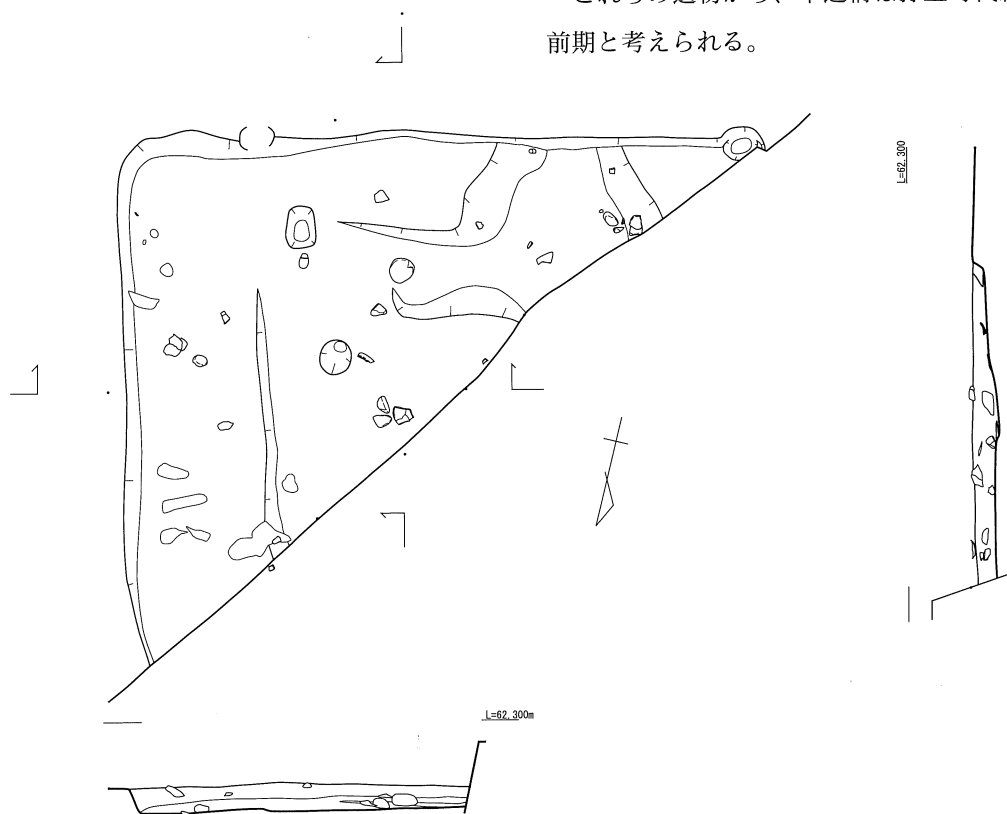
486は製塩土器と考えられる資料である。長胴形のタイプで、口縁部付近には内外面共に指オサエが認められる。口縁端部は内湾する。器面の摩耗が激しく調整は明確でない。

487は砂岩製の砥石である。細長い形状ですべての面に摺痕が認められる。

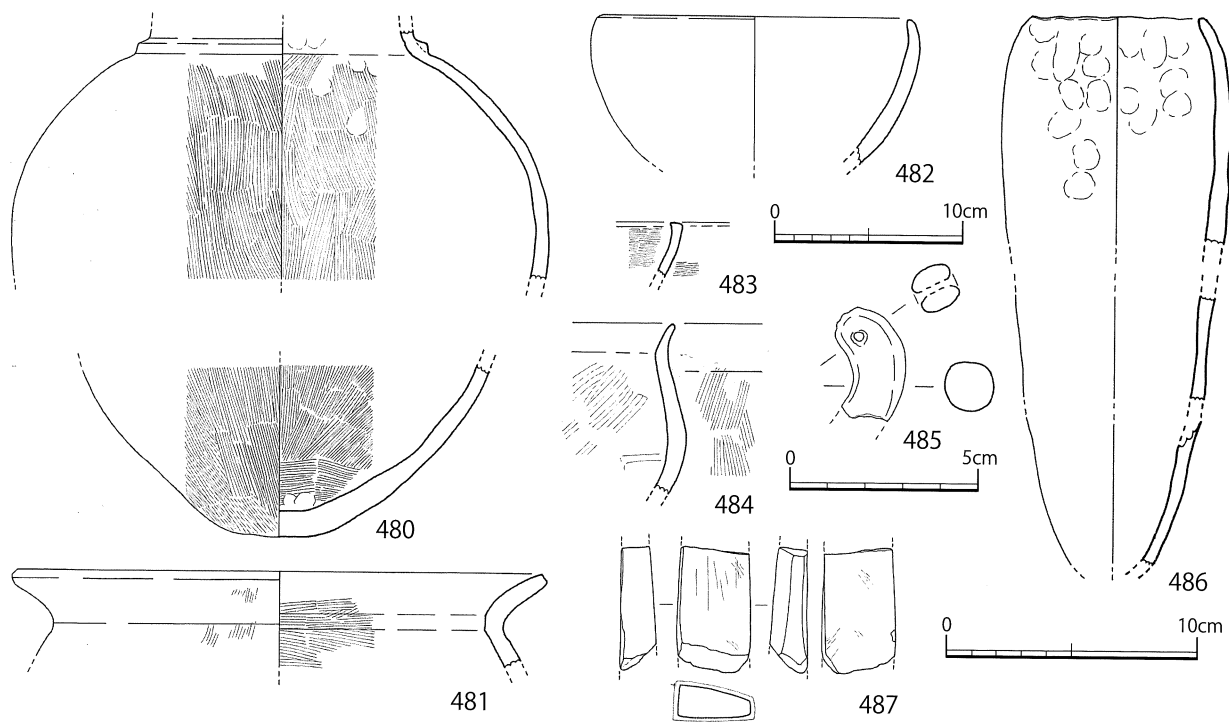
これらの遺物から、本遺構は弥生時代終末期～古墳時代前期と考えられる。



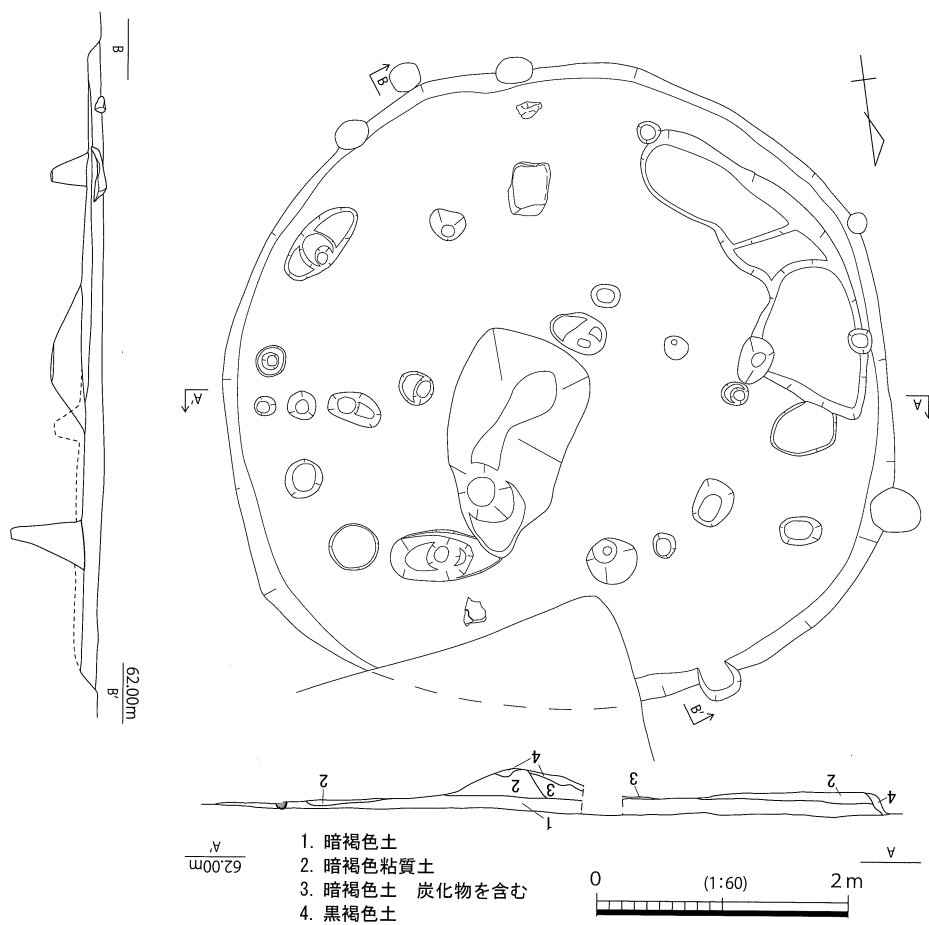
第127図 SH009 出土遺物実測図



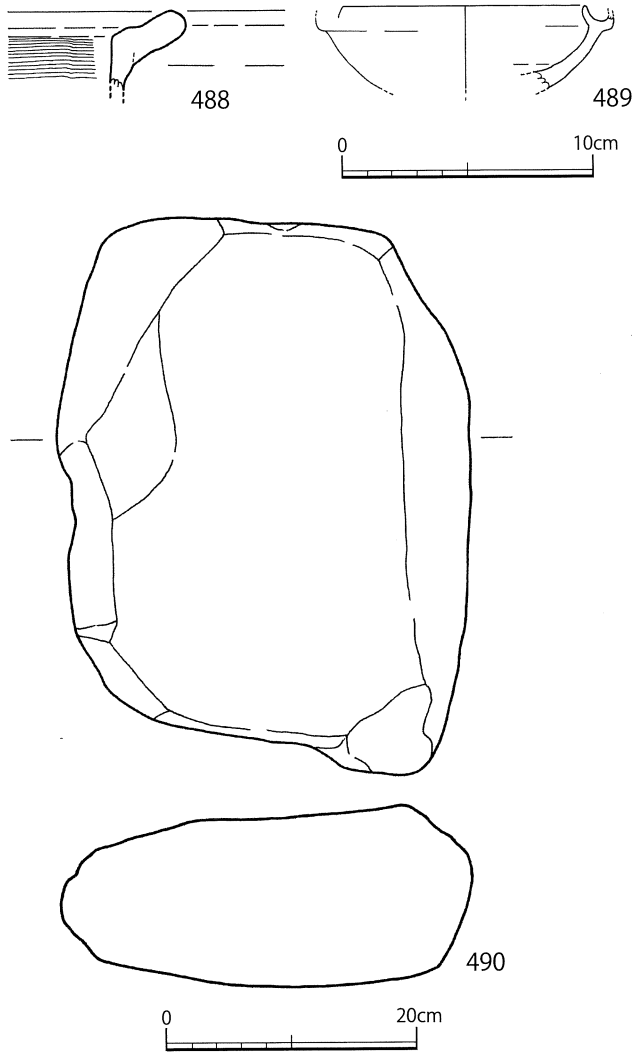
第128図 SH010 遺構実測図



第 129 図 SH010 出土遺物実測図



第 130 図 SH011 遺構実測図



第131図 SH011 出土遺物実測図

SH011

SH011は調査区3に位置する。直径5.4m程の円形の竪穴建物である。遺構の中央には不定形の中央土坑があり、遺構内部の西部にも不定形の土坑が掘り込まれる。中央の不定形土坑を取り囲むように7つの柱穴が円形に配され、床面には大きな台石が残る。遺構の北部はSH009に切られており、これより、以前の遺構であることがわかる。大型の遺構ではあるが、内部からこの住居の時期に伴うと思われる遺物は台石のみしか出土せず、明確に時期がわかる遺物は出土していない。埋土の上層からは数点後世の流れ込みと思われる遺物が出土した。

第131図488は中世の土鍋の口縁部で、逆L字状を呈し、内面には横方向にハケメが残る。

489は須恵器の坏身である。受部の端部が欠損するものの反転復元できた資料で、TK217併行と考えられる。

490は安山岩製の台石である。

同規模の円形住居が調査区1に位置することやその構造などから弥生時代中期の遺構と考えられる。

SH012

SH012は調査区3に位置する。長辺約4.7m、短辺約4.1mの方形の竪穴建物である。遺構のほぼ中心に帯状のカクランがあり、中心部の構造は不明であるが、土坑の端が一部残ることから、中央土坑の存在が想定される。竪穴建物内部西側には幅1.2m程のベッド状遺構が付属し、南壁に接する土坑も確認できる。内部からは関係に近い土器が、床面直上からまとまって出土した。

第133図491、492は壺である。491は口縁部が大きく外側に開く資料で、頸部には三角突帯を施す。胴部は丸く器面も胴部から口縁部にかけてほぼ同じ厚みである。492は口縁部が短く外側に開く資料である。胴部は長胴形で中央部よりやや下位に最大径が位置する。

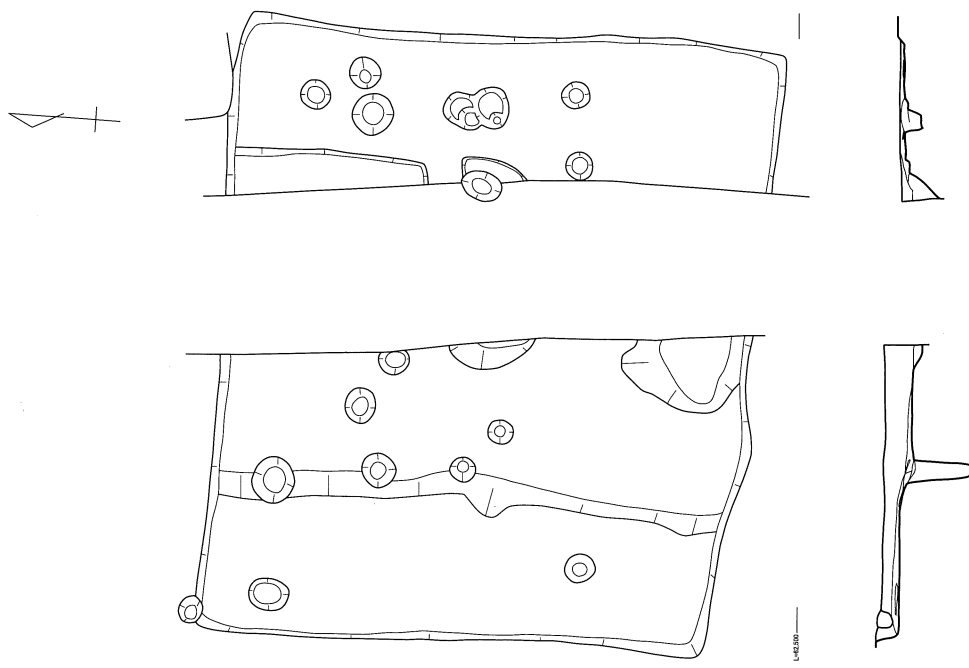
493は椀形の土器である。口縁部の端部はやや内湾する。内外面共に丁寧な調整が施される。

494は高坏の坏部である。口縁部は大きく外反し、大きく外側に開く。内面には放射状のミガキが、口縁部外面には鋸歯状の暗文が巡らされる。屈曲部より下の外面には縦方向にミガキが施される。

495は姫島産黒曜石製の剥片である。表面の端部には細かく丁寧な剥離が施され刃部を成形している。

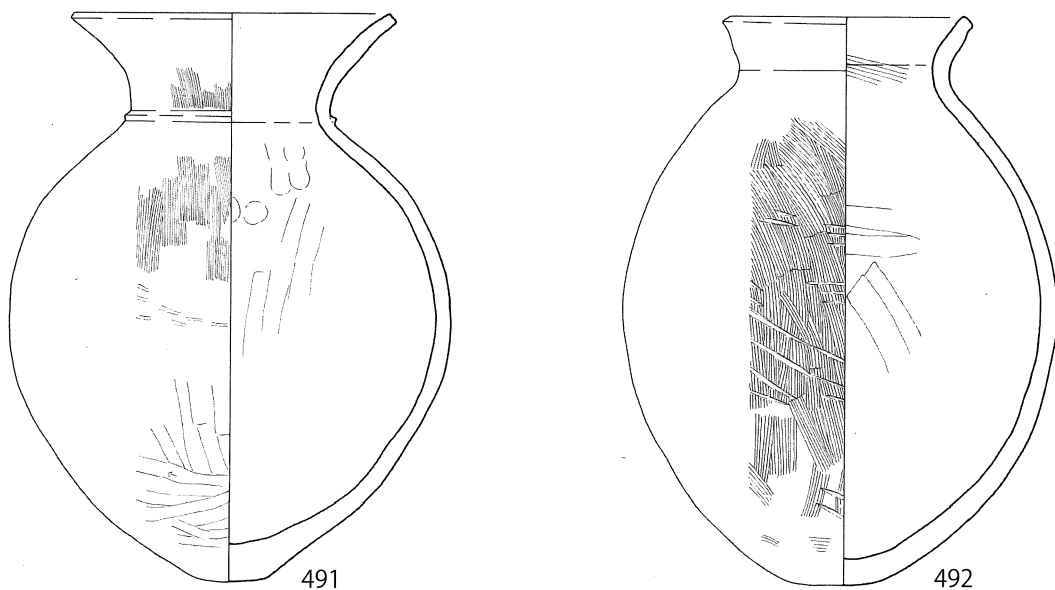
496は安山岩製の太形蛤刃石斧である。全長のおよそ半分を欠くが、刃部は完全に残っている。刃部の幅を維持しながら基部へとつながる。

これらの資料から、本遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。



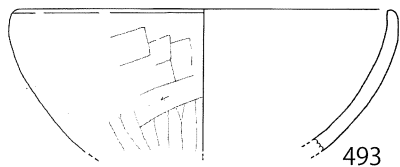
第132図 SH012 遺構実測図

SH012

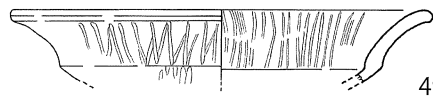


491

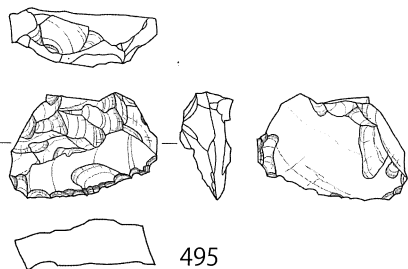
492



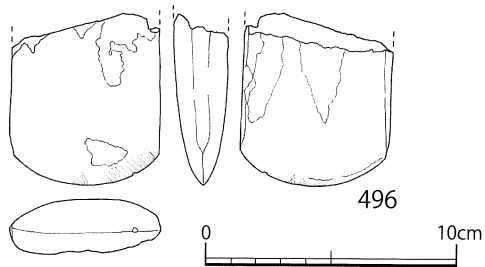
493



494



495



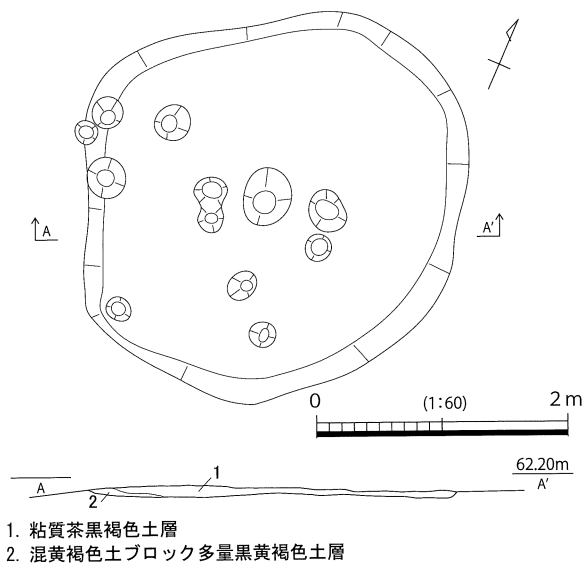
496



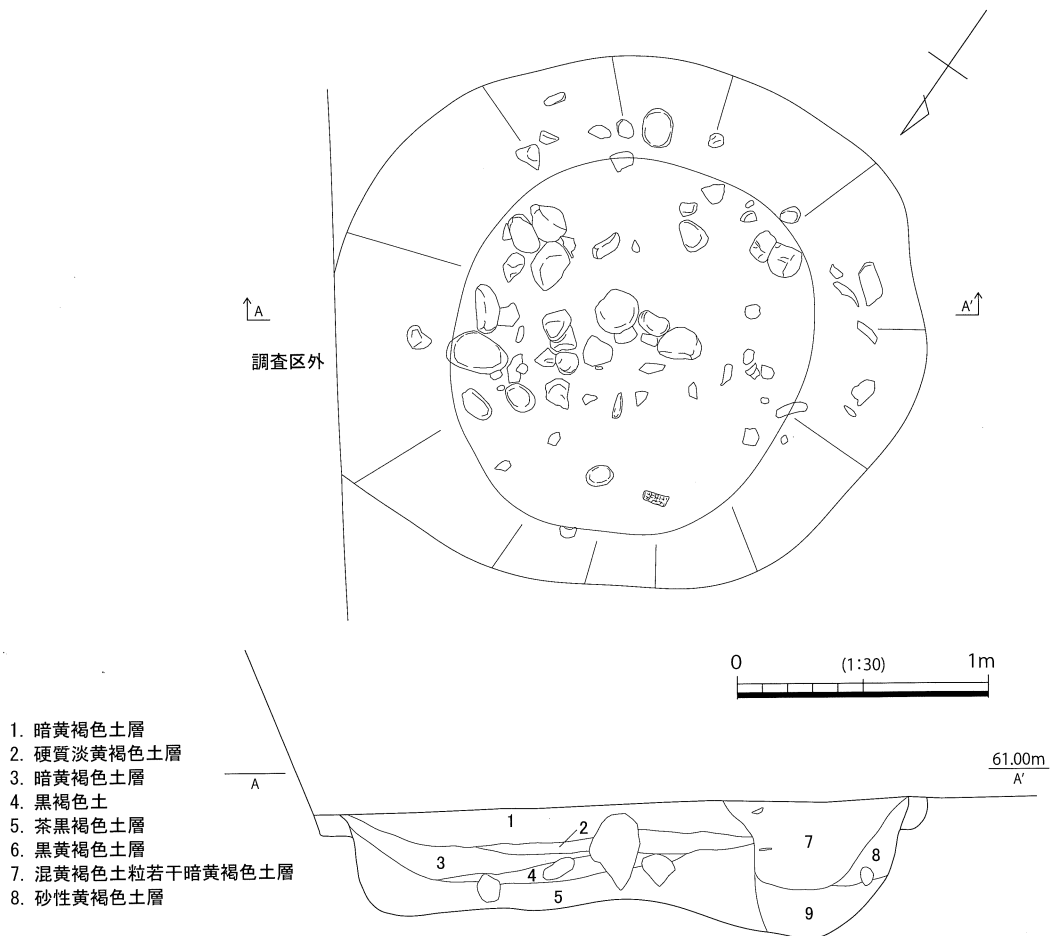
第133図 SH012 出土遺物実測図

SH013

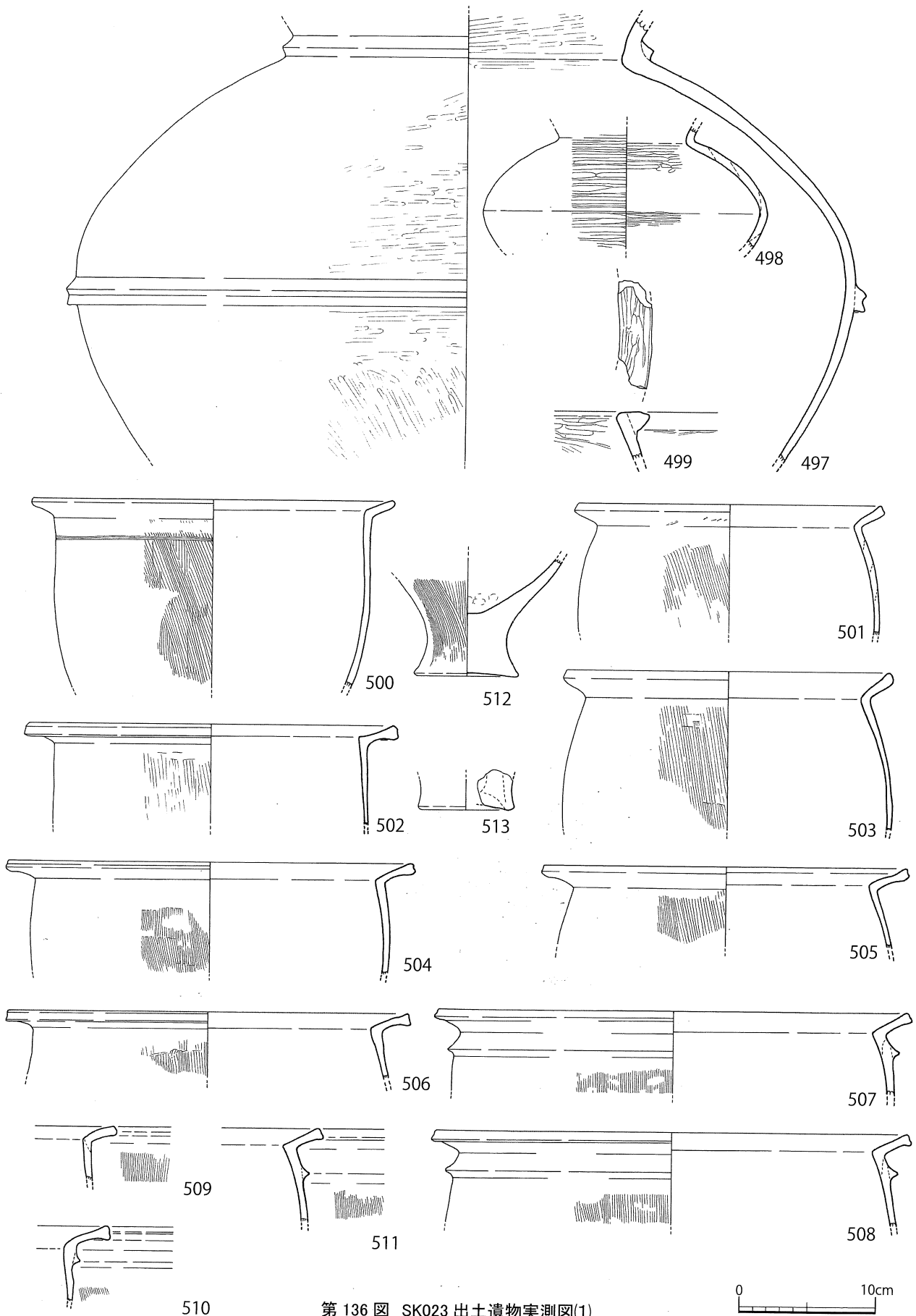
SH013は調査区3に位置する。直径約3mの円形の竪穴建物で、中心に円形の中央土坑が認められる。中央土坑を挟むように二本の柱穴が直線的に配される。遺構の残存状態が悪く床面に非常に近い位置で検出したために、埋土から遺物はほとんど見られなかった。弥生土器の小片が数点出土したものの図化に耐えうる資料ではなく、明確な遺構の時期については不明な点も多いが、同様の円形の遺構が調査区1でも出土していることから、その時期を考えれば、弥生時代中期に属する竪穴建物であると考えられる。



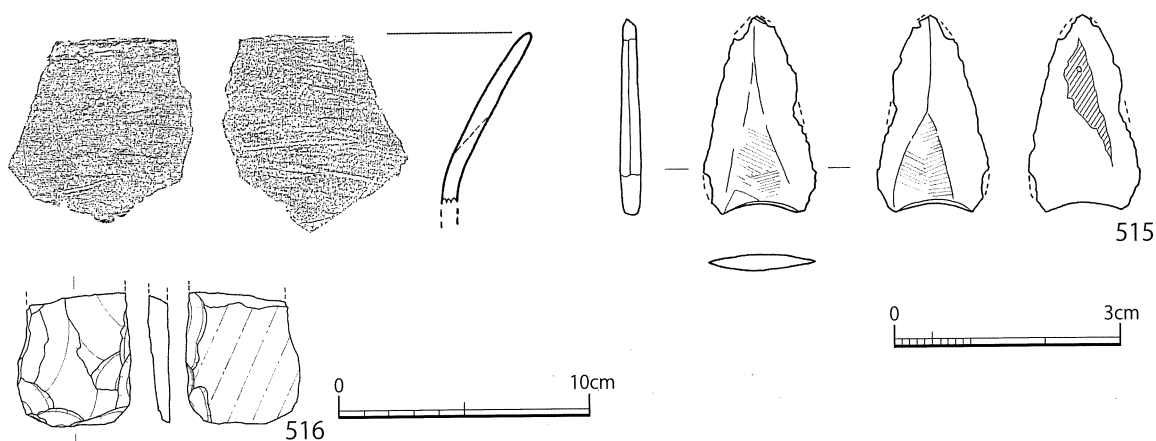
第 134 図 SH013 遺構実測図



第 135 図 SK023 遺構実測図



第 136 図 SK023 出土遺物実測図(1)



第137図 SK023 出土遺物実測図(2)

SK023

SK023は調査区1に位置する。直径約2.3mの円形の土坑で、約50cm掘り込まれる。内部からは多量の礫と共に土器が出土し、その多くは2~3層に集中する。土坑の南西部は再度掘りなおされた痕跡が土層に残り、この部分からはほとんど遺物の出土はみられず、数点混ざり込みと思われる縄文土器が確認された。埋土に含まれる礫は拳大のものから人頭大のものまで様々であった。

第136図497は大型の広口壺である。口縁部を欠くが、頸部には三角突帯が巡る。胴部の最大径は中心よりやや上部に位置し、その上に太いM字突帯が一条巡る。突帯はナデ調整がされ、やや下垂する。内外面ともに、丁寧なミガキが行われ、胴部から口縁部にかけて器面は次第に厚みを増す。

498は小型の広口壺である。497と形状はほぼ同じで、これも口縁部を欠く。内外面共に横方向に丁寧なミガキが施される。頸部には三角突帯はみられず、丹塗は施されない。

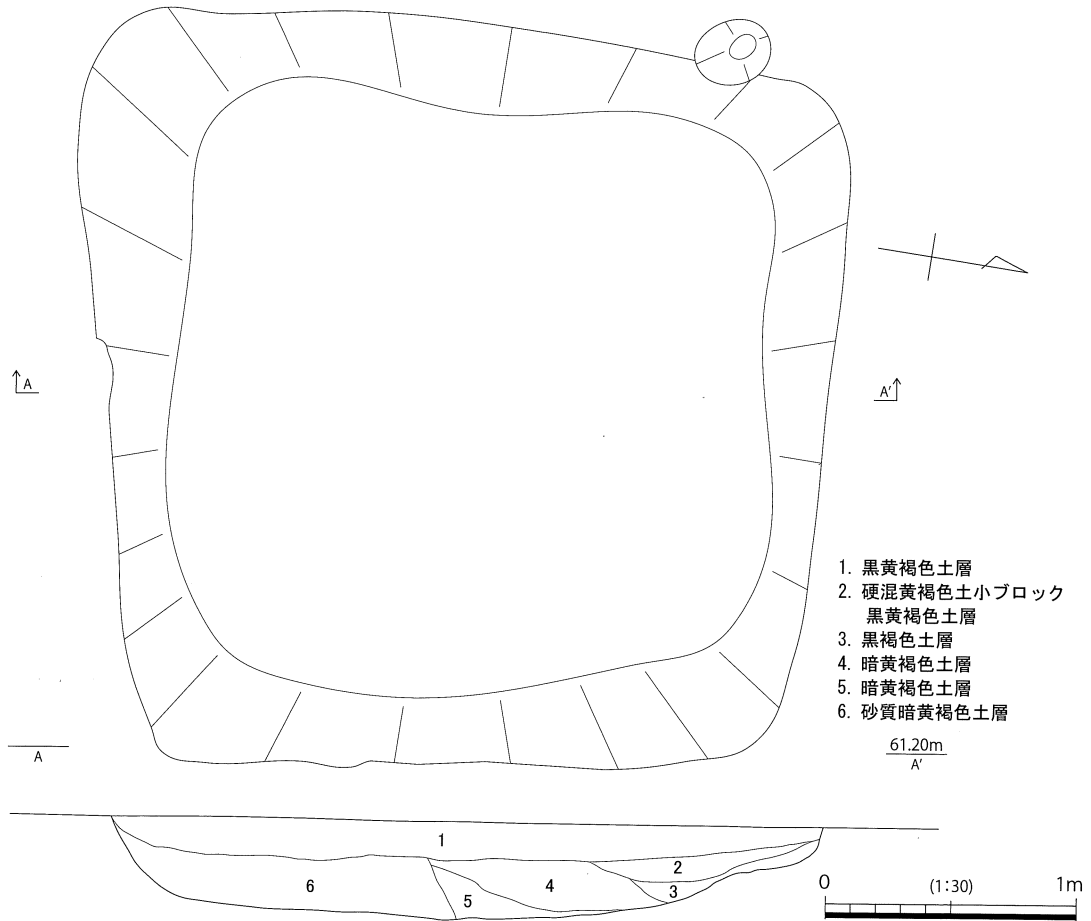
499は無頸壺である。口縁端部は玉縁状に肥厚し、内面と口縁部上面にはミガキが施される。口縁部は全体的に内傾する。器面には丹塗は施されない。

500~513は甕である。500は口縁部下に一条の沈線が巡る資料である。口縁部は逆L字状を呈し、胴部最大径から直線的に口縁部へつながる。501~506は口縁部が逆L字状を呈し、胴部最大径から口縁部にかけて内湾する資料である。外面に施されるハケメは比較的間隔が幅広のものを資料している。

507、508は口縁部下に三角突帯が巡る資料である。外面に丁寧なハケメ調整を施したのち、三角突帯を張り付ける。突帯付近のハケメはナデ消される。口縁部は逆L字状を呈する。

514は無文の深鉢である。遺構内の南西部で上面から掘り込まれた土層から出土した遺物で、遺構の時期には該当せず、埋土内に流れ込んだ資料と考えられる。内外面共に横方向に貝殻条痕がみられ、その上から丁寧なナデ調整が施される。口縁部はやや外反しながら大きく外側に開く。縄文時代後期の資料と考えられる。

515は青銅製の鏃である。長さは2.6cm、最大幅は1.5cmである。埋土の中位2~3層付近から出土した。刃部の先端や側面の一部を欠くもののほぼ完形に近い資料である。表面には基部から先端部にかけて鈍い稜線が確認でき、裏面にも同様の稜線がみられるがこちらの方が明瞭である。両面とも基部に近いやや平坦な部分に斜め方向に細い摺痕が確認できる。基部には浅い弧状の削り込みが認められ、あたかも磨製石鏃を模倣しているかのようである。縦方向の厚みはほぼ均一で、若干先端にかけて薄くなる。刃部の端には斑に黒色の付着物が認められるが、素材については不明である。注目すべきは青銅の残存状態で、全体は錆びた緑色であるが表面の一部（アミカケ部分）には黄金色の金属光沢を残す面がのぞいている。出土当初はこの表面に非常に脆い植物の葉のようなものが付着しており、これが接していた面は酸化が免れたものと考えられる。

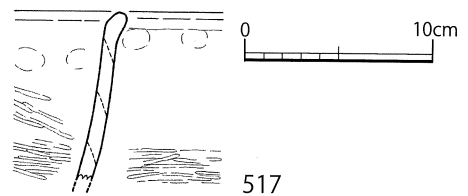


第138図 SK024 遺構実測図

銅剣や銅戈の切っ先を再加工し、銅鏃にした可能性が考慮される。

516は安山岩製の扁平打製石斧である。全体の約半分を欠き、刃部は荒い剥離によって成形される。

これらの出土遺物から本遺構の時期は弥生時代中期後半と考えられる。



第139図 SK024 出土遺物実測図

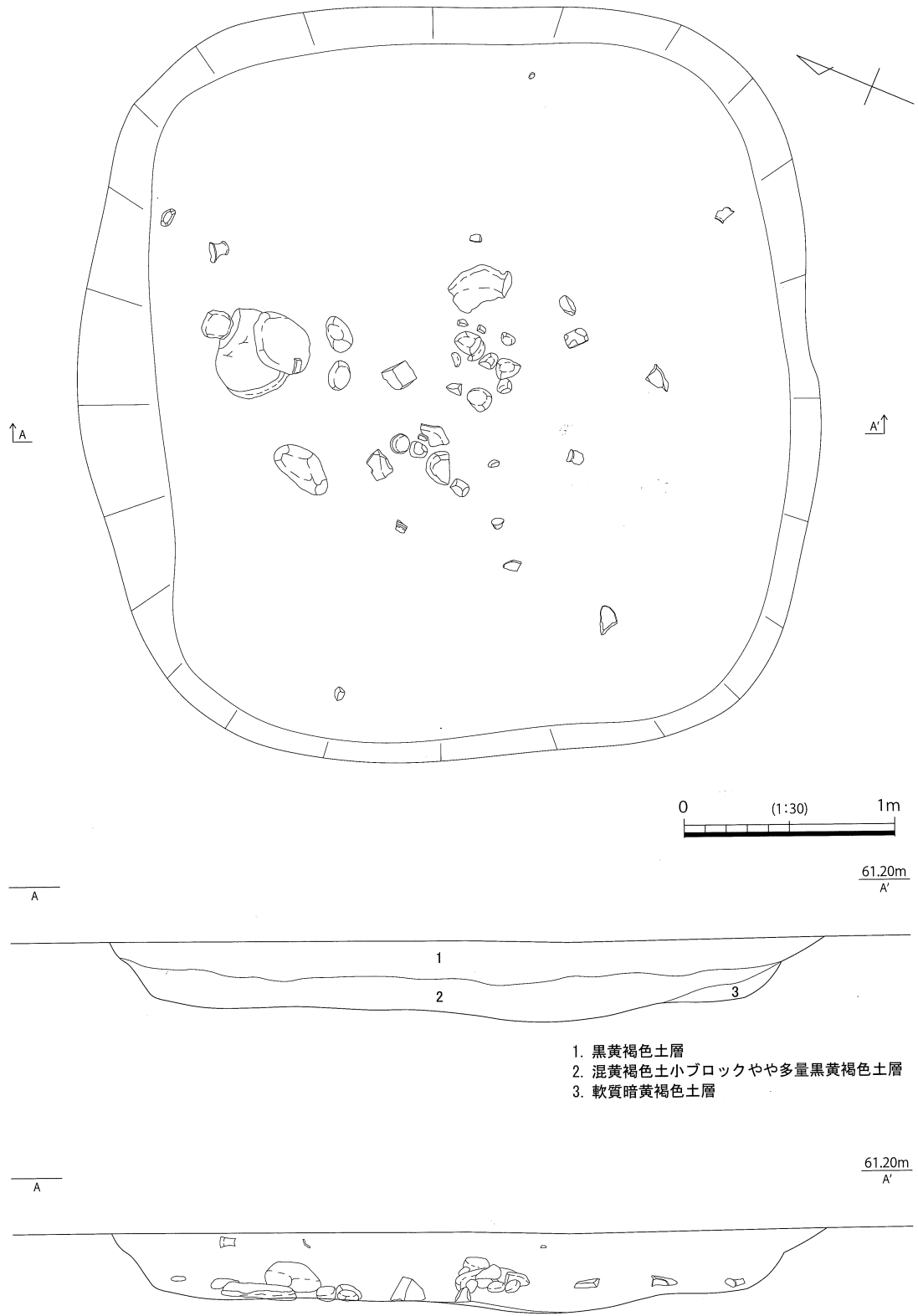
SK024

SK024は調査区1に位置する。一片約3mの正方形の土坑で、埋土の観察から、南側から次第に埋められ、若干の窪みを残し、最終的に全体が埋没したことがわかる。埋土中から遺物はほとんど出土せず、6層から1点弥生土器が出土した。

第139図517は甕の口縁部である。内外面共に丁寧な調整を施し、口縁部付近には指圧痕が残る。口縁端部や若干厚みが増し、やや外側に外反する。体部はやや膨らみをもち、底部へと延びる。胎土やその特徴から弥生時代前期の資料と考えられる。

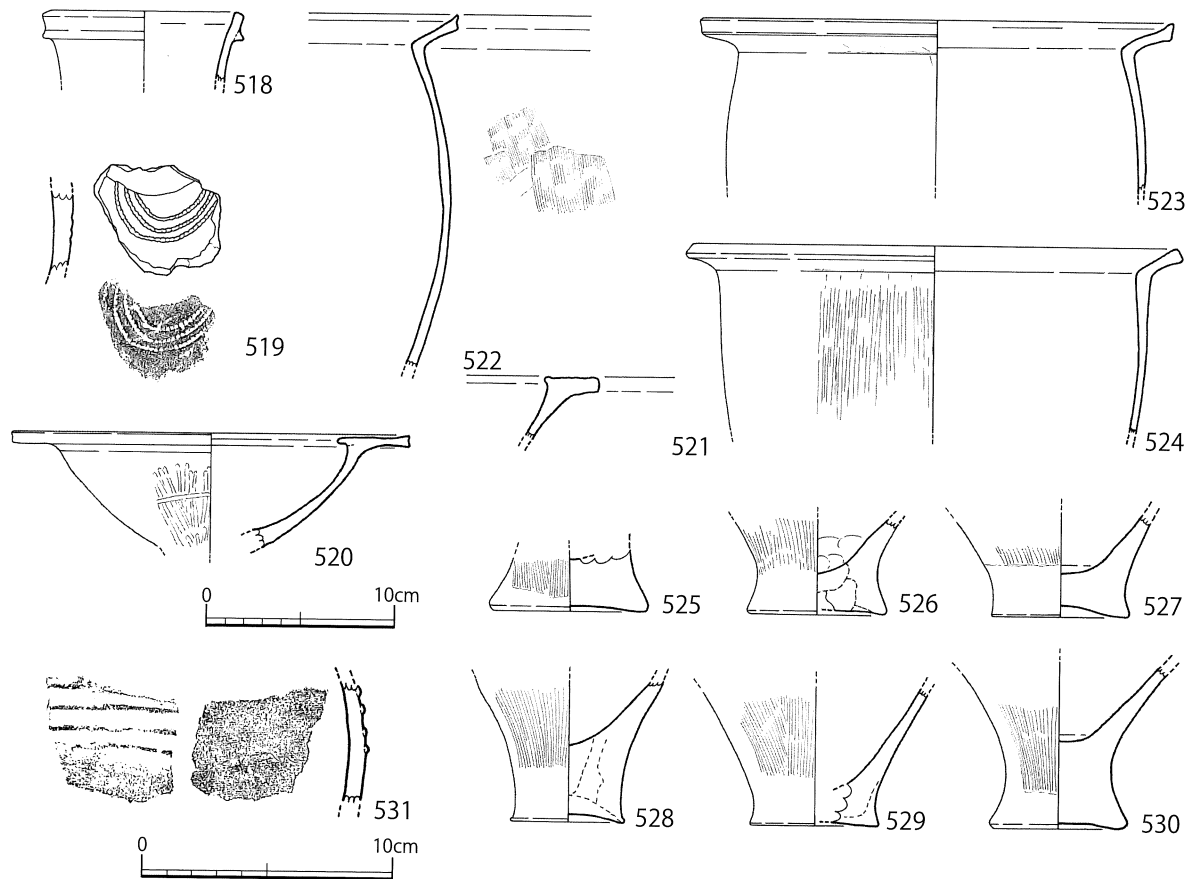
SK025

SK025は調査区1に位置する。一片約3.5mの正方形の土坑で、埋土の観察から大きく2回に分けて、埋まったことがわかる。埋土の下層からは拳大から人頭大の安山岩の礫を多数含み、図化した遺物のほとんどもこの層からの出土である。上層には礫の混入がほとんど認められず、遺物の出土も少なかった。



- 1. 黒黄褐色土層
- 2. 混黄褐色土小ブロックやや多量黒黄褐色土層
- 3. 軟質暗黄褐色土層

第140図 SK025 遺構実測図



第141図 SK025 出土遺物実測図

第141図518は長頸壺の口縁部である。口縁はやや外側に開き、口縁端部のやや下側には一条の三角突帯が巡る。器面には丹塗は施されない。遠賀川以東系の須玖式土器に多く見られる器種である。

519は壺の胴部である。外面に貝を用いた三条の重弧文が施される。その特徴から響灘沿岸地域に特徴的にみられる綾羅木Ⅲ式の壺と考えられる資料である。

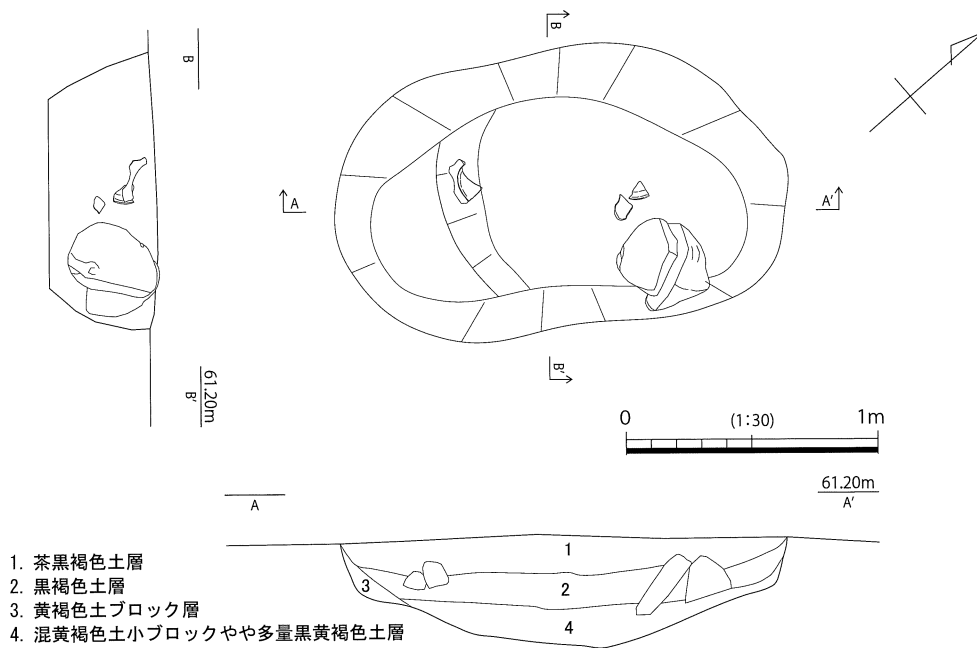
520、521は高坏である。520は坏部が深く鋤先状の口縁部はやや薄くつくられる。坏部の外面には脚部の基部を中心に放射状の丁寧なミガキが施される。内面は器面の残存状態が悪く詳細な調整は確認できない。521は口縁部の資料である。鋤先状の口縁はやや短く厚めに成形される。

522～524は甕である。521は胴部の外面に細かいハケメが比較的短い間隔で、縦方向に施される。胴部は大きく内湾し大きく開く口縁部へとつながる。523は胴部の膨らみが比較的弱い資料で、内外面共に丁寧な調整が施される。口縁部はやや跳ね上げ状である。524は胴部の膨らみが弱く、口縁部から底部へ直線的につながる資料である。外面には非常に細かい縦方向のハケメが施される。胴部から口縁部にかけて器面はやや厚みが増す。

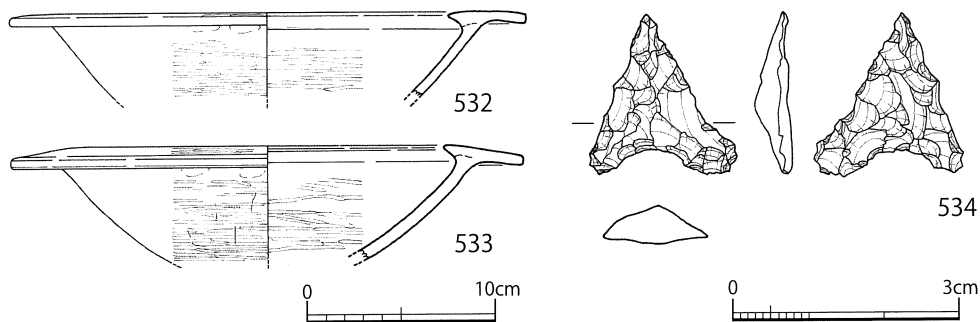
525～530は甕の底部である。いずれも底の中央部は若干の上げ底で、外面には縦方向のハケメが施される。端部は最終的なナデ調整によってハケメは消される。3～5cm程度の厚みをもって成形される。

531は外面に微細な突帯が施される資料である。胴部の資料と考えられ、大きく内湾する。外面には微細な四条の突帯が確認できる。その特徴から縄文時代前期の轟B式の深鉢と考えられ、埋土への混ざり込みと考えられる。

これらの遺物から本遺構の時期は弥生時代中期後半と考えられる。



第 142 図 SK026 遺構実測図



第 143 図 SK026 出土遺物実測図

SK026

SK026は調査区1に位置する。長辺約1.8m、短辺約1.1mの楕円形の土坑である。埋土はレンズ状に堆積し、中位には人頭大の礫が含まれる。遺物は2層と4層から出土している。

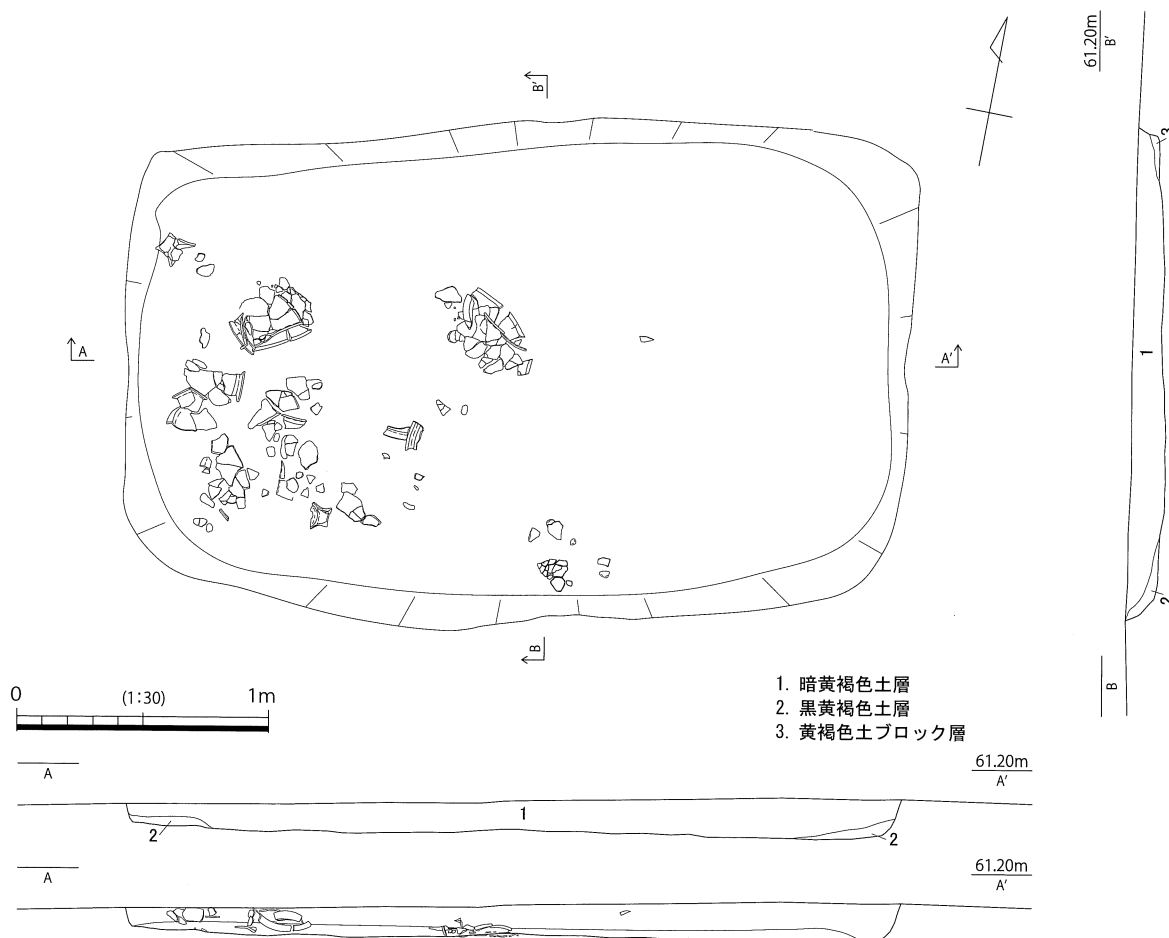
第143図532、533は高坏である。532は内外面共に横方向にミガキを施している。口縁部は鋤先状を呈し坏部はやや直線的に延びる。533も同様の高坏であるが、別個体である。内外面共に横方向にミガキが施され、鋤先状の口縁部はやや下垂する。坏部はやや内湾し脚部は欠いている。

534は姫島産黒曜石製の石鏃である。全長2.2cmを測り、両面共にやや丁寧な剥離で刃部を成形する。基部には丸みを帯びた刳込みを施す。

これらの遺物から、本遺構の時期は弥生時代中期後半であると考えられる。

SK027

SK027は調査区1に位置する。長辺約3.1m、短辺約1.9mを測る長方形の浅い土坑である。埋土の観察から全体はほとんど同一時期に埋没したことがわかる。遺物は土坑の西側に集中し、器種は甕のみである。甕は床面直上に数個の個体が横からつぶされた状態で出土し、多くは底部を欠いた状態であった。このような



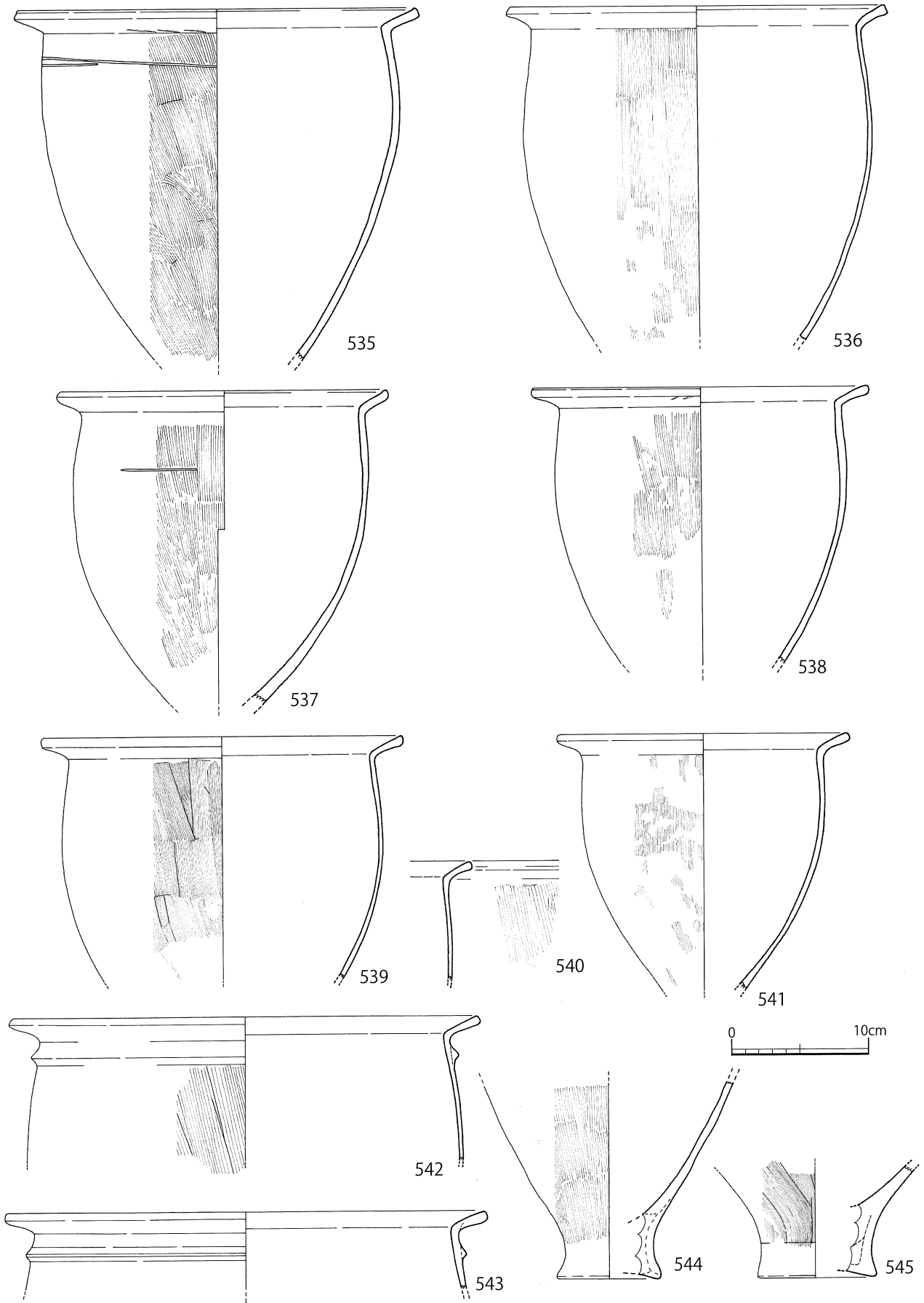
第144図 SK027 遺構実測図

出土状態で甕のみが出土することは稀で、土坑の性格は祭祀性が強い可能性が想定される。

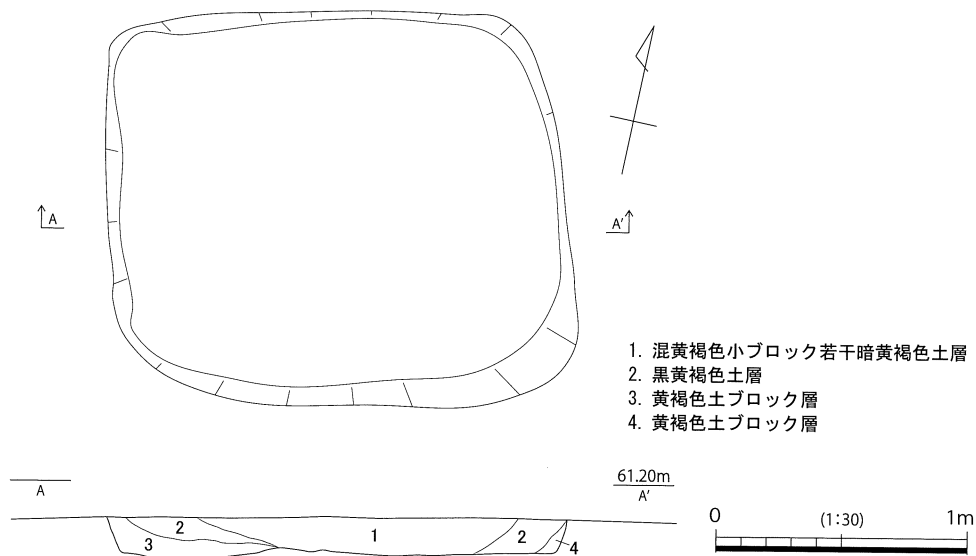
第145図535～545は甕である。535は口縁部の下に一条の沈線が巡る資料である。外面には比較的短い間隔で縦方向にハケメが施され、その上から沈線が巡る。沈線は描きはじめから反時計回りに一周し、繋がることなく5cm程二重になる。胴部はやや上位に最大径が位置し、口縁部はやや上に跳ね上がる。536は外面に直線的な細かいハケメが施される。胴部最大径は535よりやや下位にある。口縁部はやや上に跳ね上がる。537は口径が24cmとやや小型の資料である。口縁部の屈折部から約4cm下に約6cmの長さで沈線が施される。本来は535同様に胴部を全周すると考えられるがこの資料は途中で止まっている。頭部最大径から直線的に口縁部へと繋がる。538は口径24.8cmを測る資料で、外面には丁寧なハケメ調整が施される。口縁端部には丸みを帯びる。539はこの中で最も細かいハケメが施される資料である。胴部最大径からやや内湾し口縁部へ繋がり、口縁部はやや上に跳ね上げられる。541は口径21.5cmを測る小型の甕である。内外面共に丁寧な調整が施され、胴部から口縁部へは直線的に繋がる。比較的体部の下部まで残存はしているが、やはり底部を欠いている。542、543は口縁部下部に一条の三角突帯を巡らす資料である。542は口径34.5cm、543は口径35cmを測り、これらの甕の中では大型の資料である。

544、545は甕の底部である。胴部の資料に比べると残存状況が悪く意図的に底部のみが打ち割られている、いずれも底部は厚みがあり、やや上げ底である。

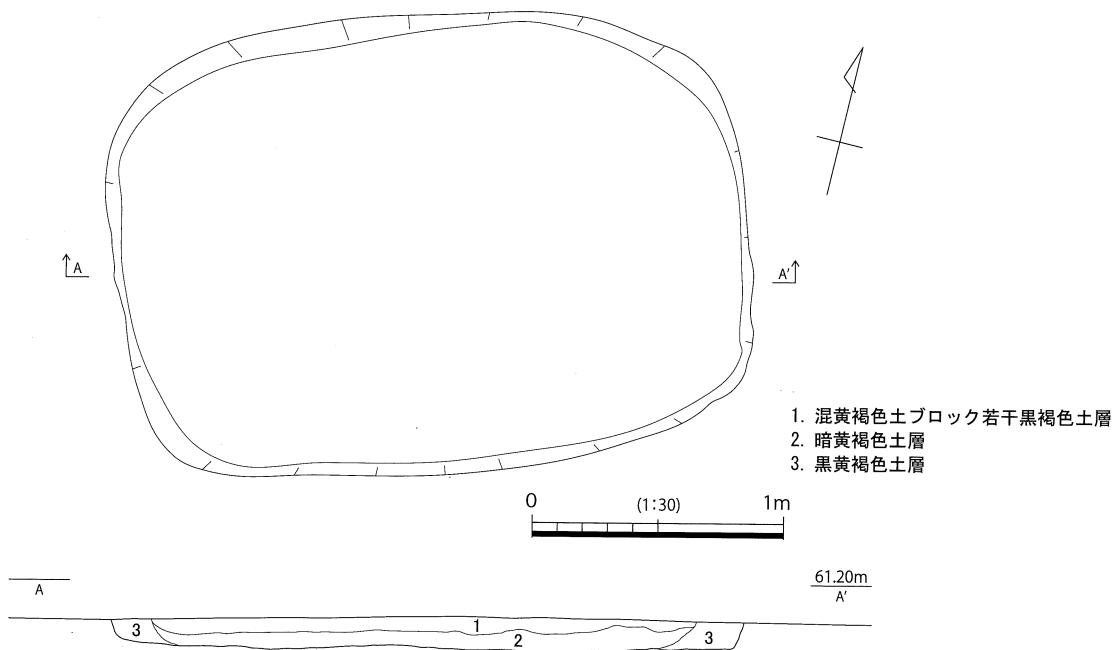
これらの遺物から、本遺構の時期は弥生時代中期後半であると考えられる。同時期の甕の一括資料として貴重である。



第145図 SK027 出土遺物実測図



第146図 SK028 遺構実測図



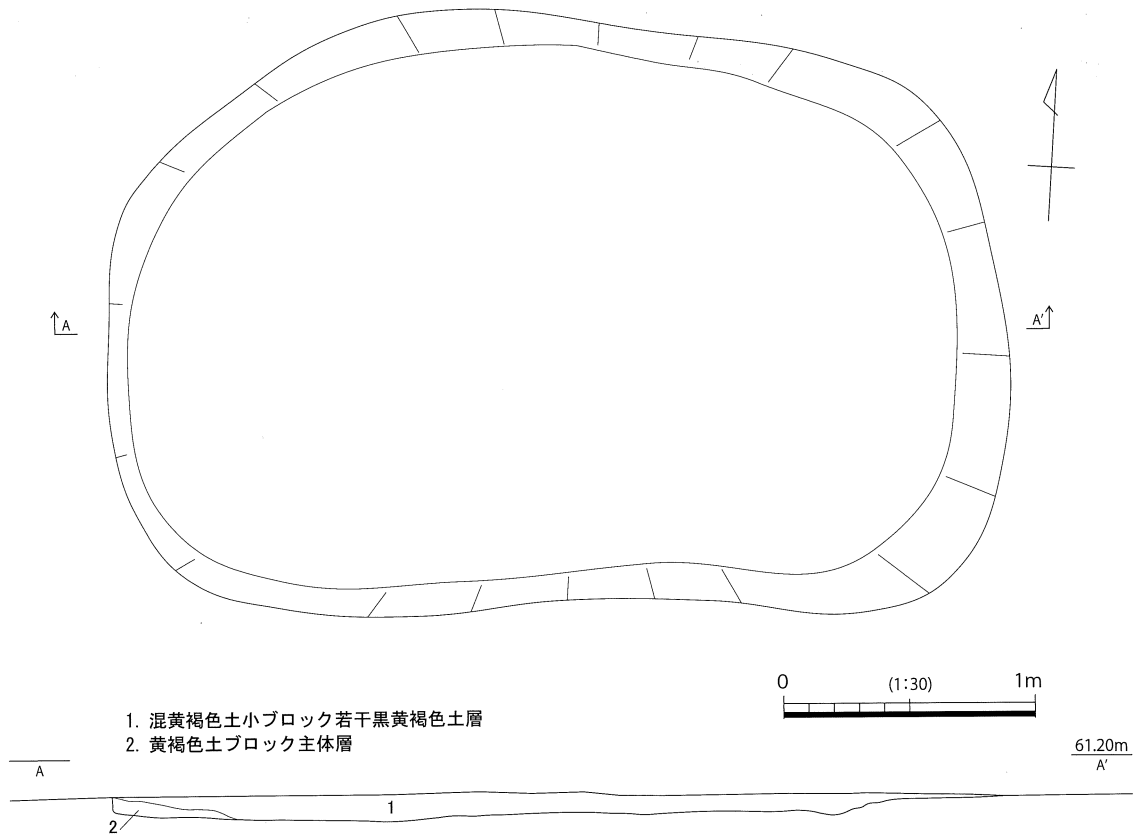
第147図 SK029 遺構実測図

SK028

SK028は調査区1に位置する。一片約1.8mの方形の土坑である。埋土の観察からレンズ状に土坑の端から埋まったことがわかり、内部からは数点の弥生土器が出土したが図化に耐えうるものではなかった。それらの遺物から本遺構の時期は弥生時代中期後半と考えられる。

SK029

SK029は調査区1に位置する。長辺約2.5m、短辺約1.85mを測る隅丸方形の土坑である。埋土から遺物の出土は認められず、周辺遺構との関係や土層の共通性から弥生時代中期後半の土坑と考えられる。



第148図 SK030 遺構実測図

SK030

SK030は調査区1に位置する。長辺約3.5m、短辺約2.3mを測る隅丸方形の浅い土坑である。埋土の観察から、ほとんど一時期で埋没したことがわかり、内部からは数点の弥生土器が出土したが図化に耐えるものではなかった。それらの遺物から本遺構の時期は弥生時代中期後半と考えられる。

SK031・SK032

SK031・SK032は調査区1に位置する。土層の観察からSK031をSK032が切り合っている状態で検出した。SK031は一辺約2.4mの方形の土坑であり、埋土には人頭大の礫が多く含まれる。遺物は主に2層を中心に出土し、完全に埋まった後でSK032が掘り込まれたことがわかる。

SK032は直径約1.7mを測るいびつな円形の土坑である。埋土の観察から北側から次第に埋められたことがわかり、3層からは拳大の礫が複数出土した。遺物も3層から数点弥生土器が出土したものの図化に耐える資料ではなかった。

第150図546～459は甕である。546は口縁部下部に一条の三角突帯が巡る資料である。内外面共に丁寧な調整が施され、口縁部は大きく跳ね上がる。三角突帯は同様の資料と比べるとやや小さい。

556は甕の底部である。外面には縦方向にハケメが施され、端部はナデ調整によって消えている。底は非常に厚みがあり、底の中央は1cm程へこみ上げ底である。

551は高坏である。器面の摩耗が激しく細かい調整の観察は困難であるが、外面の下部にはやや粗いミガキが残る。口縁部は鋤先状で、水平に横方向に延びる。坏部は口縁部から膨らみを持たず直線的に脚部へと繋がる。器面には丹塗は施されていない。これらの遺物から、本遺構の時期は弥生時代中期後半と考えられる。

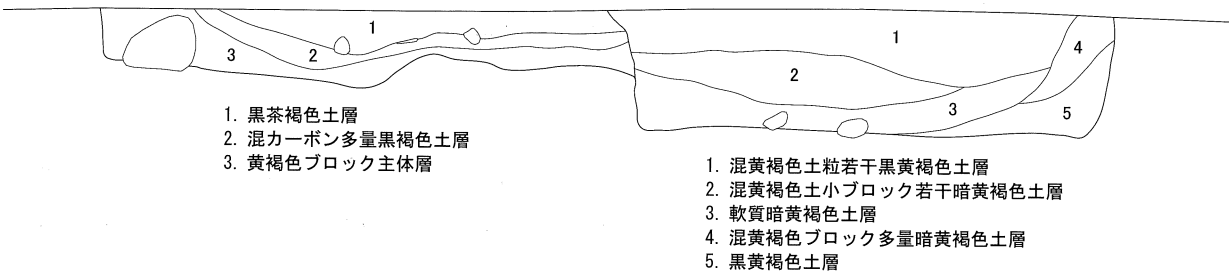
第4章 遺構と遺物

552は砂岩製の砥石である。自然石を利用した不定形の砥石であるが、表裏の両面に作業痕が認められる。遺物から本遺構の時期は弥生時代中期後半と考えられ、SK031とほとんど時期差は認められない。



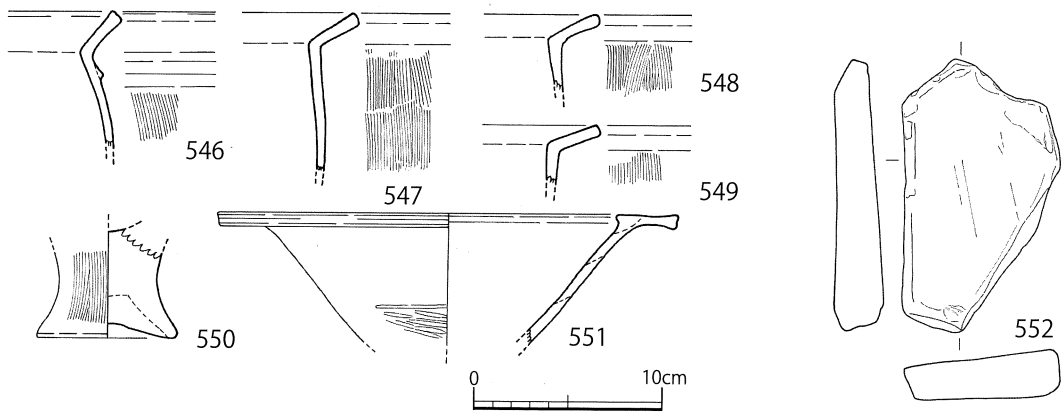
第149図 SK031・SK032 遺構実測図

61.00m
A'

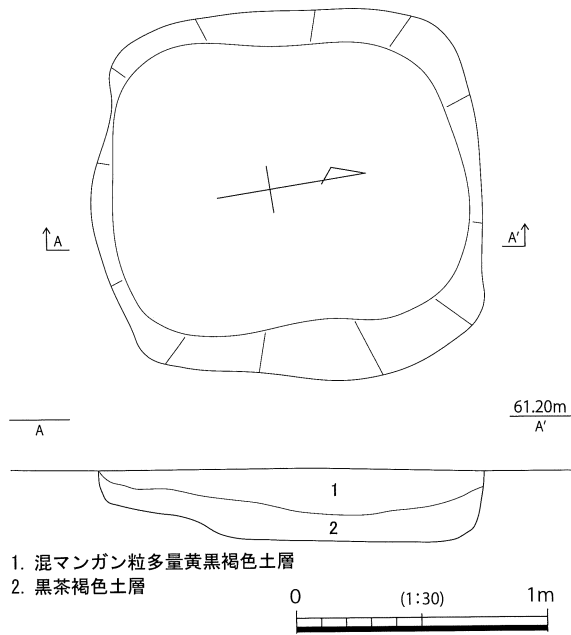


- 1. 黒茶褐色土層
- 2. 混カーボン多量黒褐色土層
- 3. 黄褐色ブロック主体層

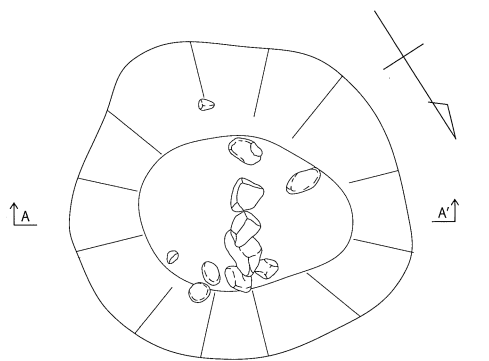
- 1. 混黄褐色土粒若干黒黄褐色土層
- 2. 混黄褐色土小ブロック若干暗黄褐色土層
- 3. 軟質暗黄褐色土層
- 4. 混黄褐色ブロック多量暗黄褐色土層
- 5. 黒黄褐色土層



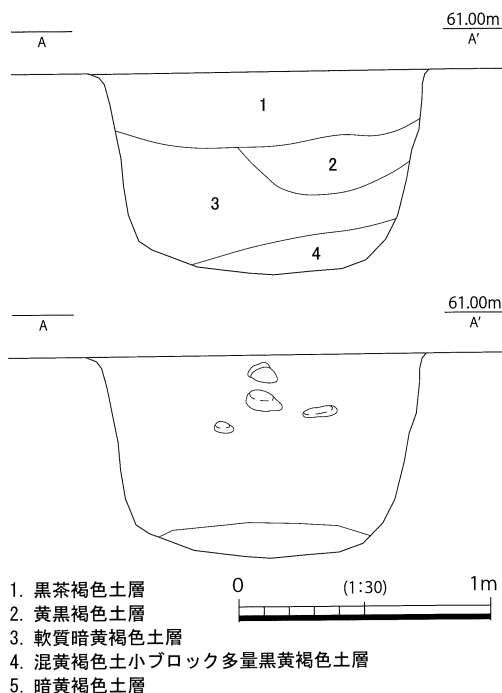
第150図 SK031・SK032 出土遺物実測図



第151図 SK035 遺構実測図



第152図 SK036 遺構実測図



1. 黒茶褐色土層
2. 黄黒褐色土層
3. 軟質暗黄褐色土層
4. 混黄褐色土小ブロック多量黒黄褐色土層
5. 暗黄褐色土層

SK033・SK034

SK033・SK034は調査区1に位置する。長辺約1.6m、短辺約1mの浅い不定形の土坑をSK034が上から掘り込んでいる。SK034は長辺約1.8m、短辺1.4mの楕円形の土坑で、はじめは南から埋められ、埋没の最終段階では北側から埋められる。内部からは数点の弥生土器が出土したが図化に耐えうるものではなかった。それらの遺物から本遺構の時期は弥生時代中期後半と考えられる。

SK035

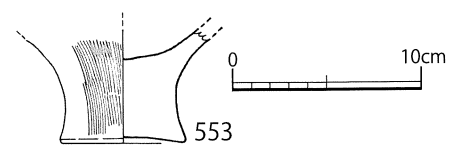
SK035は調査区1に位置する。一辺約1.6mの方形の土坑である。埋土からは遺物の出土は認められなかったが、周辺遺構と関係や埋土の観察から弥生時代中期後半の土坑と考えられる。

SK036

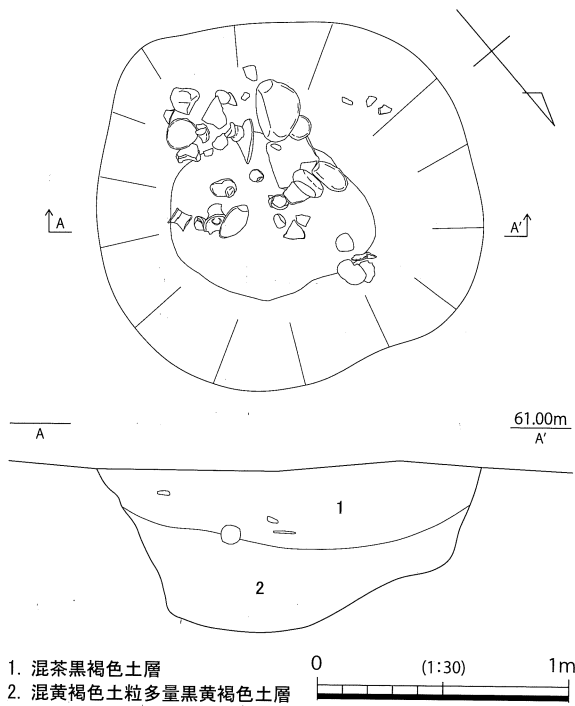
SK036は調査区1に位置する。直径約1.4mの円形の土坑である。内部からは甕の体部が出土した。

第153図553は甕の底部である。外面には縦方向のハケメがみられ、底はやや上げ底である。

これらの遺物から、本遺構の時期は弥生時代中期後半と考えられる。



第153図 SK036 出土遺物実測図



第 154 図 SK037 遺構実測図

SK037

SK037は調査区1に位置する。直径約1.5m、深さ0.6mの円形の土坑である。埋土からは多量の土器とともに拳大の礫が多量に含まれていた。

第155図554は蓋である。内外面共に丁寧な調整を施し、大きく広がる。

555～564は甕である。556は口縁部から胴部にかけての資料で、細かいハケメが外面に施される。563は胴部から底部にかけての資料である。底はやや上げ底で、丁寧な調整が内外面共に施される。

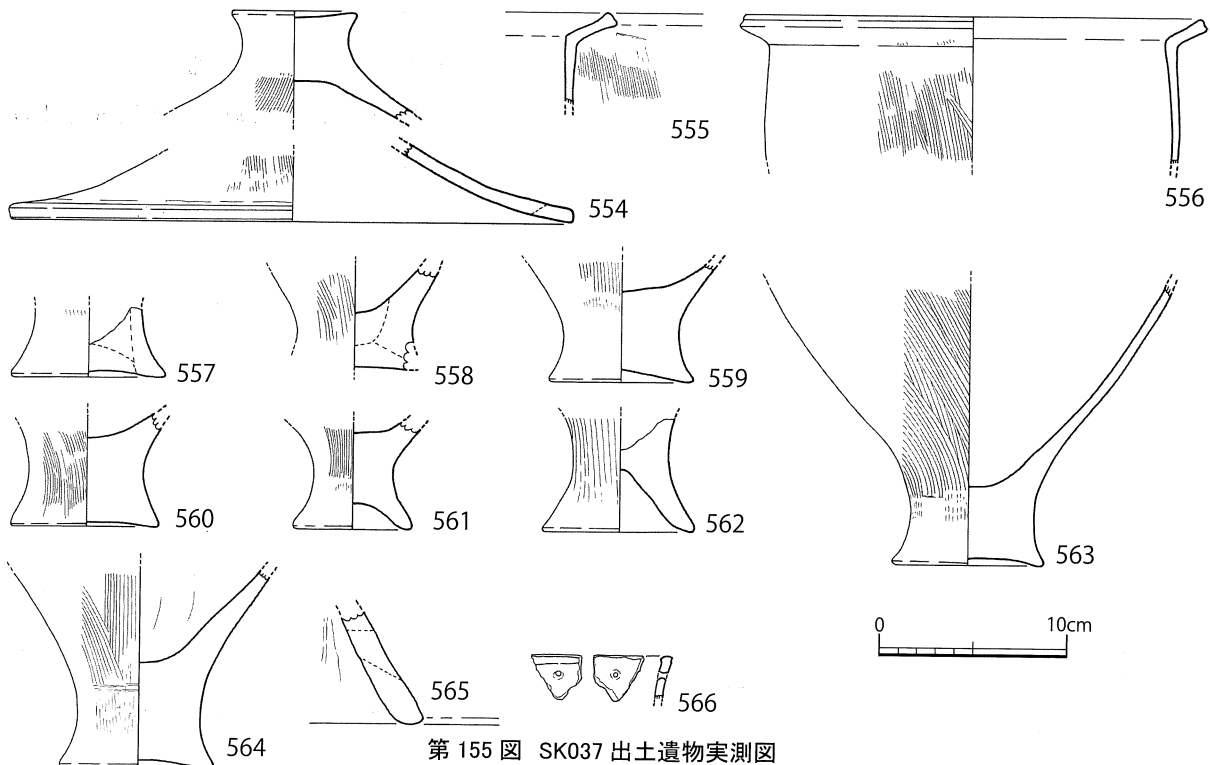
557～560、564は甕の底部で、非常に厚みのある資料である。いずれも底はやや上げ底で、外面には細かいハケメが施される。

561、562は中空脚台を呈する資料である。561は約1cm、562は約3cm内部に上げ底である。特に562は胎土も赤褐色で他の土器とは様相が異なる。

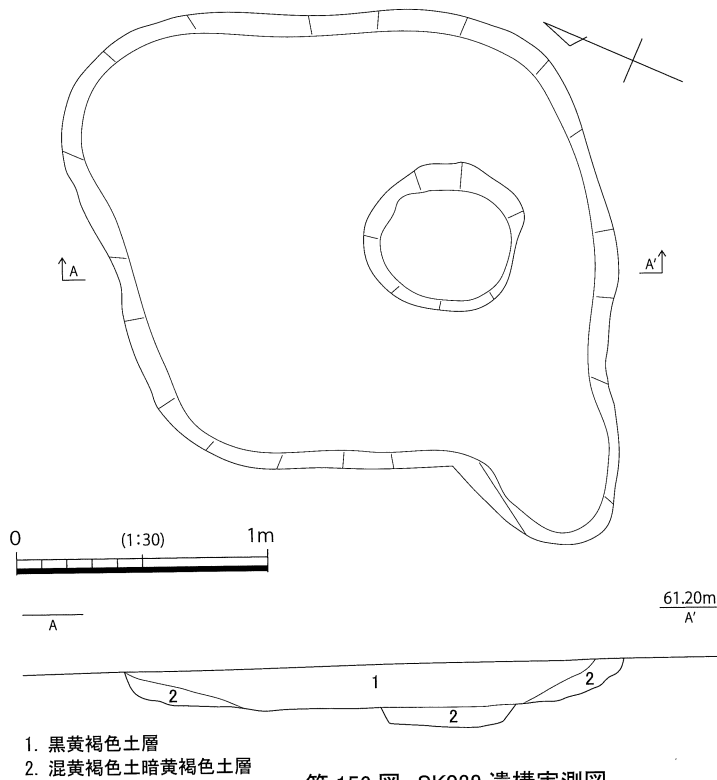
565は器台の脚部である。非常に器面は厚みがあり、直線的に広がる。古戸遺跡では唯一の器台資料である。

である。

566は口縁端部に穿孔の施される資料である。穿孔は焼成前に施されている。これらの資料から、本遺構の時期は弥生時代中期後半と考えられる。



第 155 図 SK037 出土遺物実測図



第156図 SK038 遺構実測図

SK038

SK038は調査区1に位置する。長辺約2m、短辺約1.8mの不定形土坑である。中心には円形の土坑が掘り込まれ、埋土の観察から遺構の端からレンズ状に埋没していることがわかる。1層からは数点の弥生土器が出土したが図化に耐えうるものではなかった。それらの遺物から本遺構の時期は弥生時代中期後半と考えられる。

SK039

SK039は調査区1に位置する。直径約3.6mの円形土坑である。遺構の北東部には壁面に接して長辺約2m、短辺約1.1mの楕円形の土坑が掘り込まれる。この土坑は床面の高さまで一度に埋め戻され、内部からは遺物の出土は認められなかった。埋土

の中位には人頭大から拳大の礫が多く含まれ、多くの遺物がこの中位の層から出土している。範囲も壁面の近くにはみられず、中央付近に集中し、埋土がレンズ状に堆積し、その過程で、遺物や礫が入り込んだことがわかる。出土した遺物は比較的大型の破片資料が多く、一括で廃棄された可能性が考えられる。

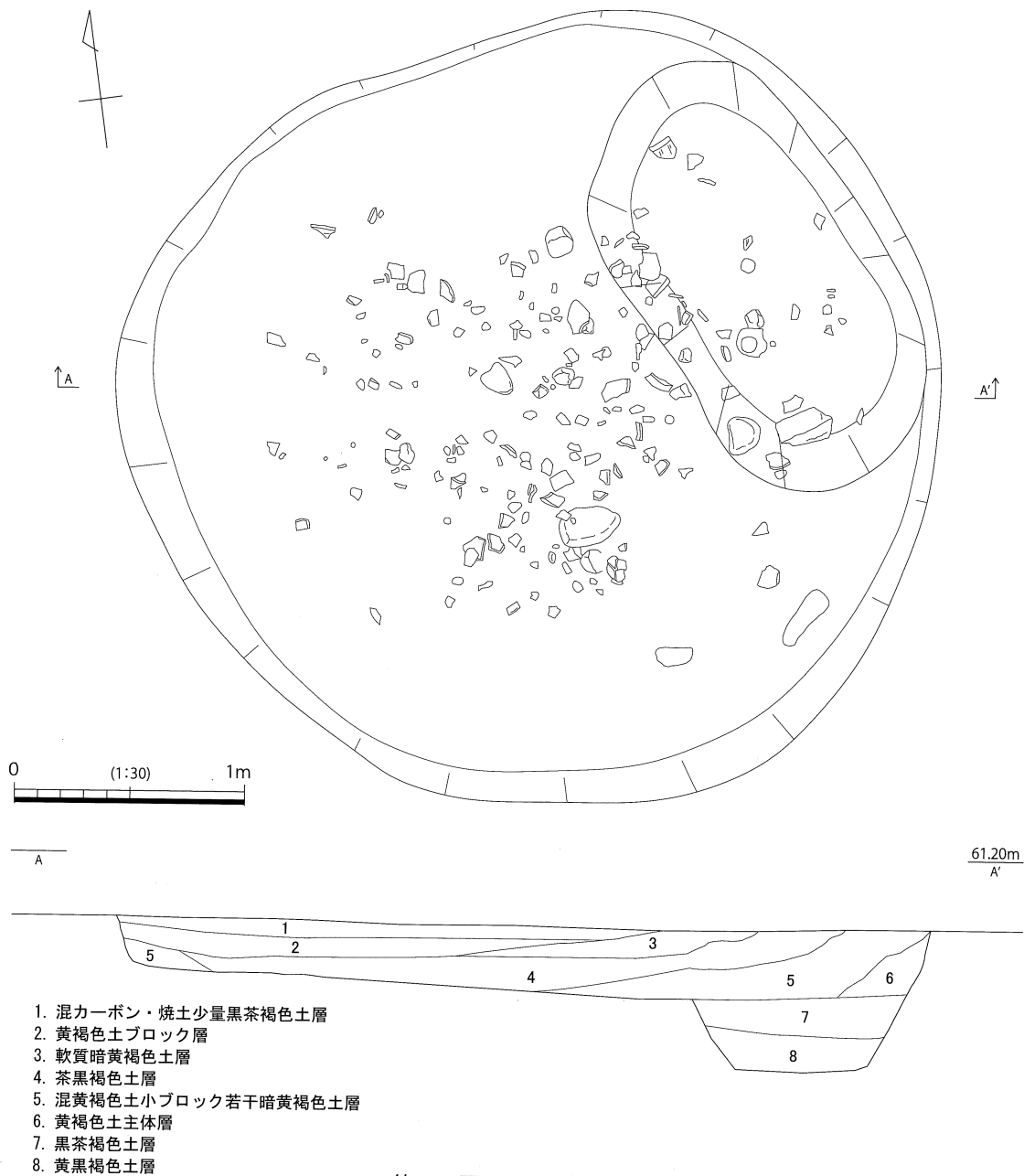
第158図567~570は壺である。567は壺の肩部から口縁部にかけての資料である。肩の部分は段が設けられ、その下には二条の沈線が巡る。沈線の下には右方向の羽状文が施される。口縁部は18cmに反転還元可能で、粘土を張り付け肥厚させる。外面はハケメを施したのちナデ調整が施され、内面には頸部から口縁部にかけて横方向のミガキがみられる。568は壺の肩部の破片資料である。肩の部分には段があり、その下には細い一条の沈線が施される。また、沈線から段に向けて細線で斜めに沈線が入る。内外面共に横方向の丁寧なミガキがみられる。569、570は壺の肩部の資料で右方向の羽状文がみられる。

571、572は刻目突帯があり、やや外反する甕の資料である。571は口縁端部に約5mm間隔でキザミ目が施され、約5cm下がった位置に三角突帯が巡る。572は口縁端部と三角突帯の両方にキザミ目が施される資料である。

573、574、578は刻目突帯が巡る資料である。573は荒いハケメが施されたのち、キザミ目が施された突帯が巡る。口縁部はやや内湾する。574も同様の資料であるが、口縁はやや直線的に広がる資料である。578は口径が17.8cmの甕である。外面には細かいハケメがみられる。

575、576、577、579は口縁端部にキザミ目が施される甕の資料である。576は口縁端部に二条の沈線が巡る。内外面共に比較的荒いハケメが施され、口縁端部には細かいキザミ目がみられる。577は底部から口縁部までの様相がわかる資料である。底部は平坦で、胴部は大きく膨らむ。口縁部は短く開き、2~3mm間隔でキザミ目が施される。内外面共にやや粗いミガキが施される。579は胴部から口縁部へ大きく開く資料である。外面には細かいハケメが施され、口縁部は短く外反する。口縁端部には4~5mm間隔でキザミ目が施される。

第4章 遺構と遺物

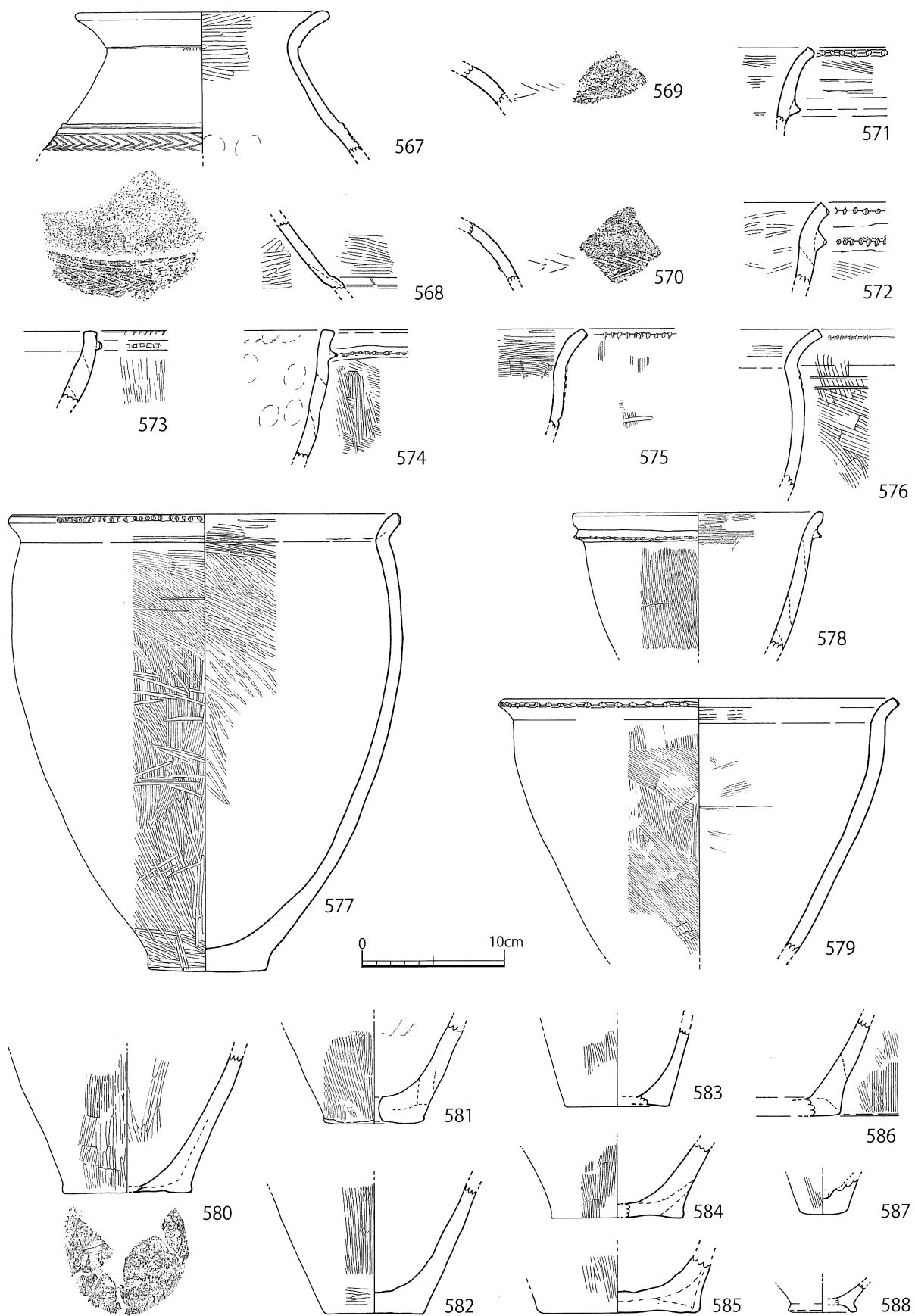


第 157 図 SK039 遺構実測図

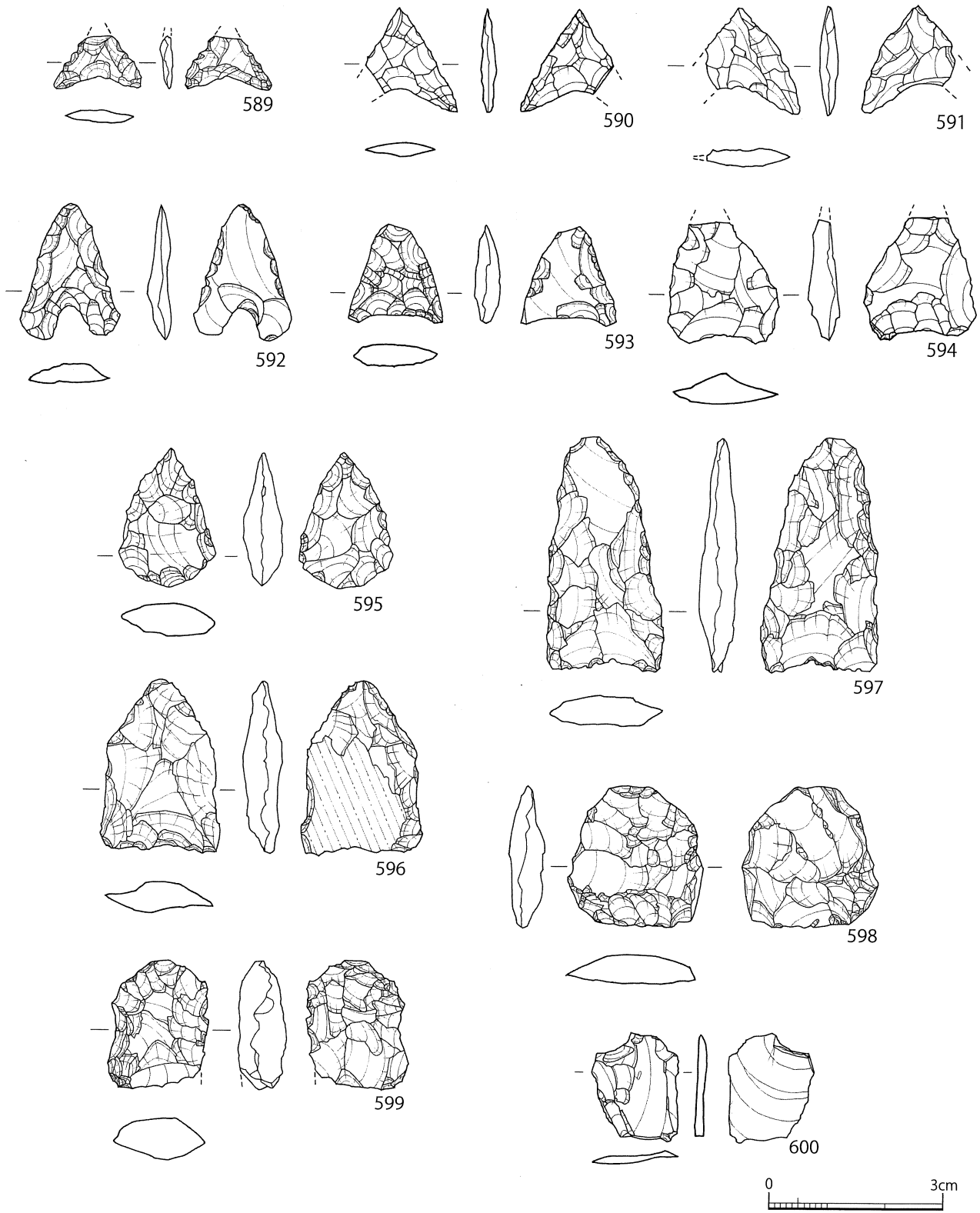
580～588は底部である。588以外は平底で、外面にはやや粗いハケメが施される。581には底の中央に焼成前に約1.5cmの円形穿孔が施される。588は上げ底状を呈する資料で、小型の壺の底部の可能性が考えられる。

第159図589～599は石鏃である。最も大型のものは597で全長4cmを測る。多くは三角形を呈するものであるが、595は涙形を呈し他に比べるとやや厚みが増す。596は五角形を呈し、縄文時代晩期に多くみられるものである。

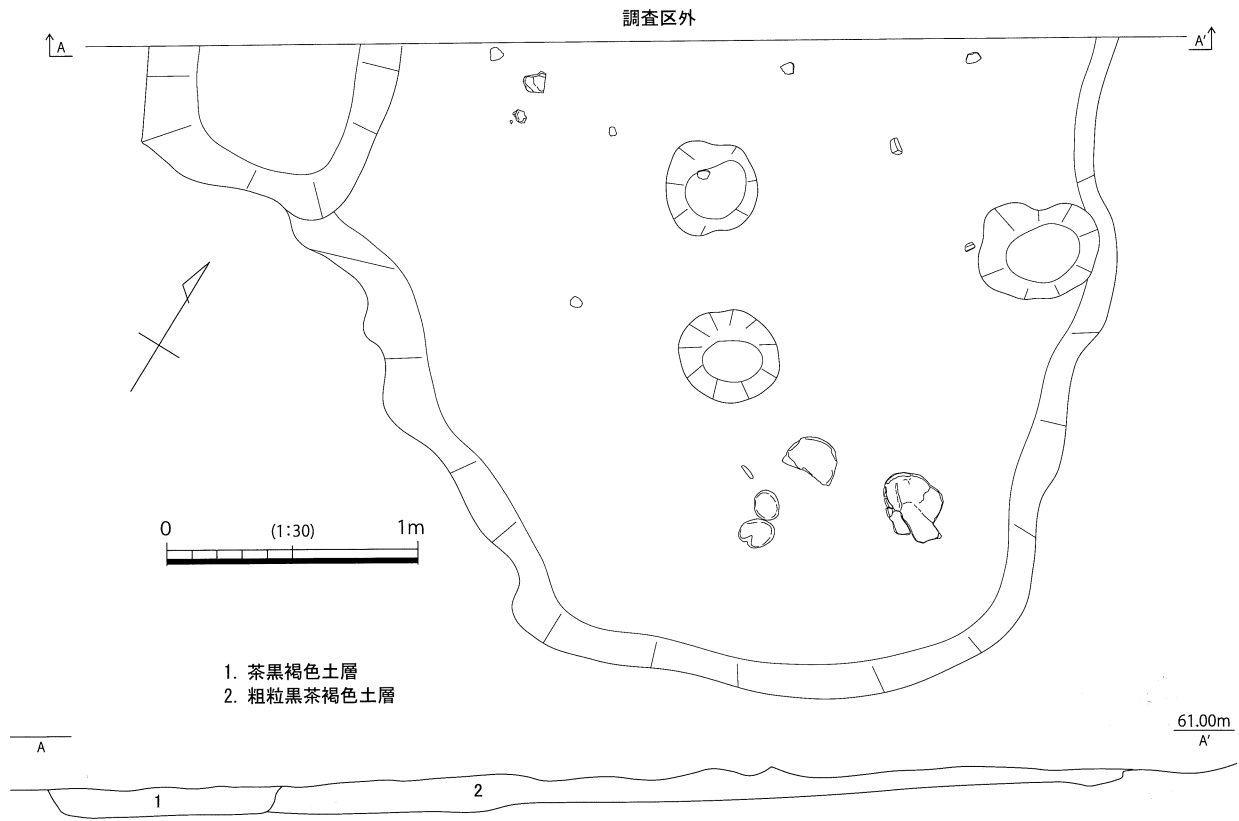
600は珪花木製の剥片である。製品ではないが、本遺構の出土石器の中では唯一の珪花木製の資料である。これらの資料から、本遺構の時期は弥生時代前期後半と考えられる。



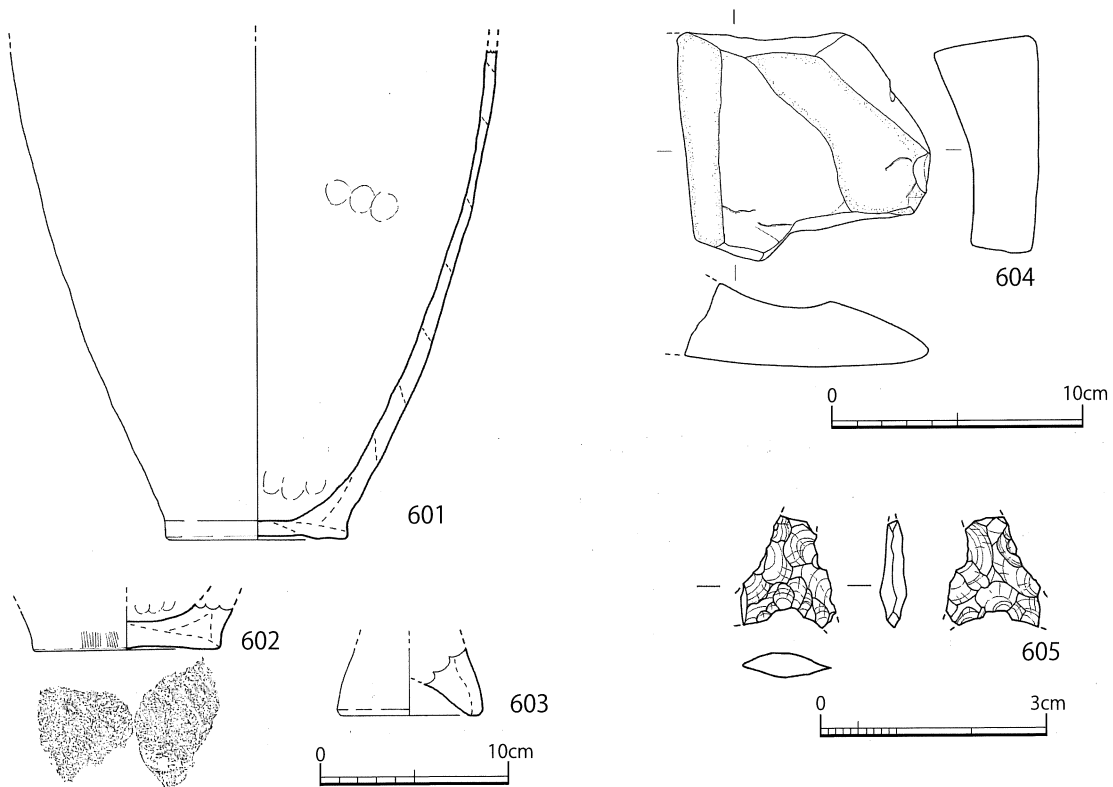
第158图 SK039 出土遺物実測図(1)



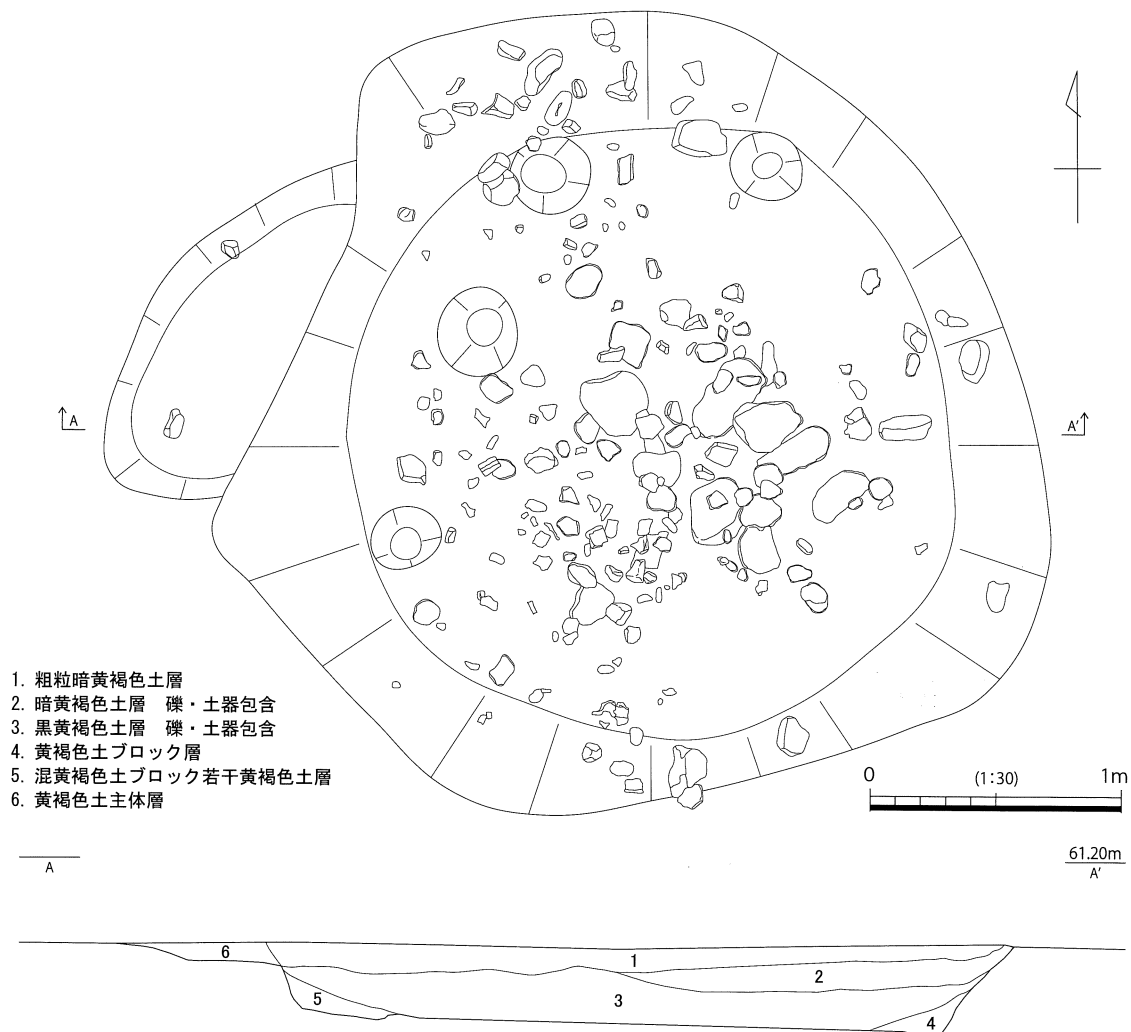
第 159 图 SK039 出土遺物実測図(2)



第 160 図 SK040 遺構実測図



第 161 図 SK040 出土遺物実測図



第162図 SK041 遺構実測図

SK040

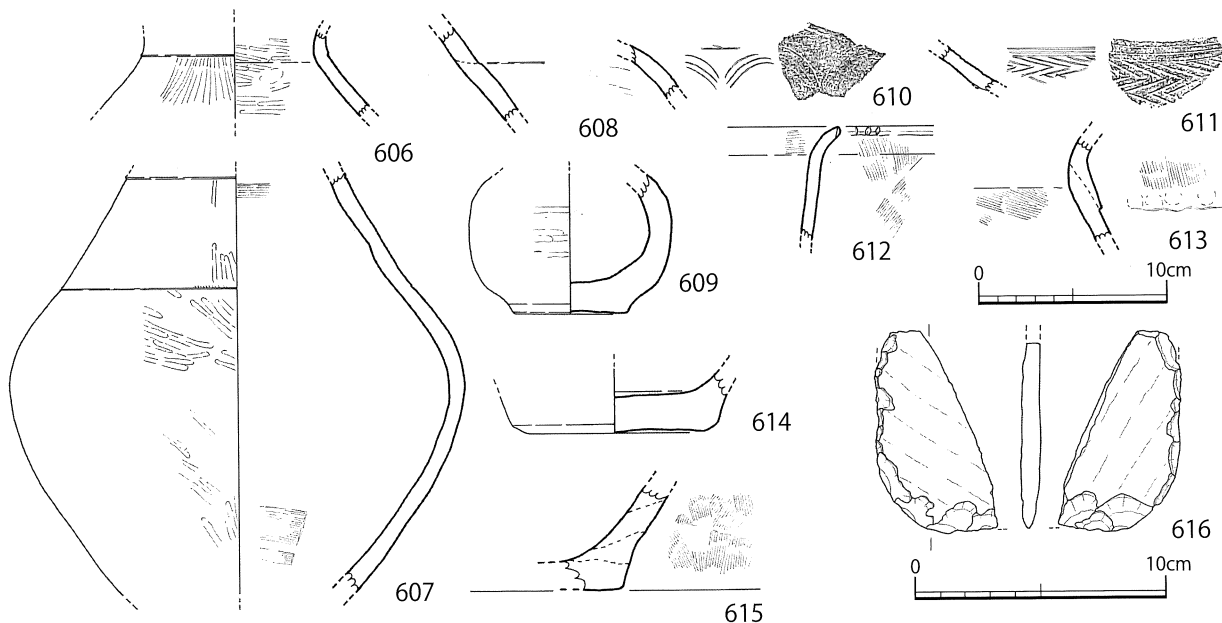
SK040は調査区1に位置する。全体のおよそ半分は調査区外であるため、その全体の形状を知ることは困難であるが、不定形の土坑と考えられる。中心には二つの小土坑があり、南側の小土坑の周辺から拳大の礫がまとまって出土した。土坑の南東部の壁際では形状を大きく残した甕が出土している。

第161図601、602、603は甕である。601は形状を大きく残していた甕で、砲弾状の形状を呈する。器面の摩耗が激しく内外面共に詳細な調整の観察はできない。胴部へかけて器面は次第に薄くなる。602は底部である。荒いハケメが外面に残る。底には粉殻と考えられる圧痕が残る。603は中空脚台を呈する甕の底部である。器面の摩耗が激しく内外面共に詳細な調整の観察はできなかった。約2cm上げ底である。

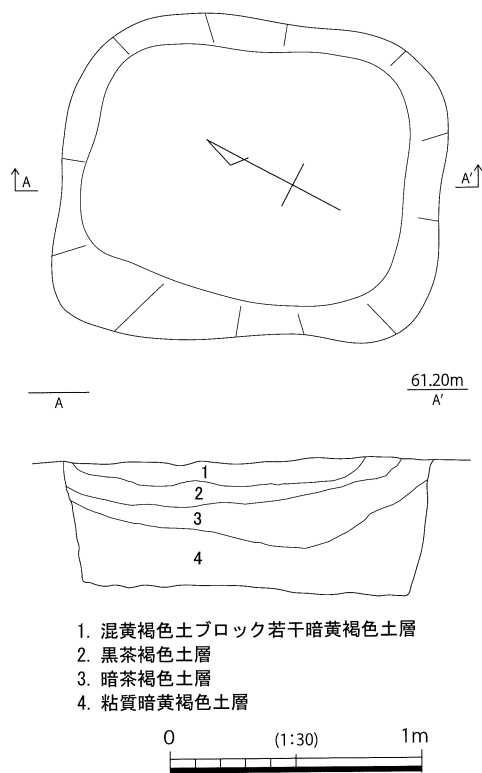
604は安山岩製の台石である。全体の半分を欠いているが、表面に大きく窪んだ作業面が認められる。

605は姫島産黒曜石製の石鏃である。先端と基部の一部を欠いているが、全体は三角形を呈する。両面ともやや粗い剥離がみられ、刃部を成形している。

これらの資料から、本遺構の時期は弥生時代前期後半と考えられる。

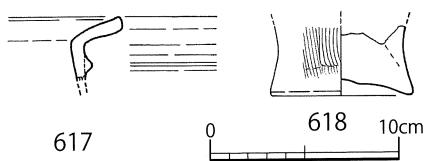


第163図 SK041 出土遺物実測図



- 1. 混黄褐色土ブロック若干暗黄褐色土層
- 2. 黒茶褐色土層
- 3. 暗茶褐色土層
- 4. 粘質暗黄褐色土層

第164図 SK042 遺構実測図



第165図 SK042 出土遺物実測図

SK041

SK041は調査区1に位置する。直径約3.1mの円形の土坑で、内部からは底からやや浮いた位置で人頭大や拳大の礫と共に多くの遺物が出土した。埋土の観察から遺構の端からレンズ状に堆積したことがわかる。

第163図606～611は壺である。606は頸部の資料である。外面は縦方向にミガキが施され、内面には横方向のミガキがみられる。607は頸部から底部へのびる資料である。口縁部の下には小さな段があり、肩部にも沈線状の段がみられる。外609は小型の壺である、口縁部を欠いているものの底部から胴部は良く残る。底はほぼ平坦で、外面には横方向にミガキが施される。610は重弧文が巡る資料である。弧線は三重の沈線で表現され、壺の肩部に施される。611は羽状文が巡る資料である。内外面共に丁寧な調整を施す。壺の肩部には三条の沈線を巡らしたのち、その下には右方向の羽状文が施される。

612、613は甕である。612は口縁端部にキザミ目が施される資料である。外面には細かいハケメが残り、口縁部は短く外反する、約2mm間隔でキザミ目が施される。613は口縁部を欠くものの、頸部の粘土が大きく垂れ下がり、接合痕が良く残る資料である。

616は安山岩製の扁平打製石斧である。両面とも端部を荒く剥離し、刃部を成形する。これらの資料から、本遺構の時期は弥生時代前期後半と考えられる。

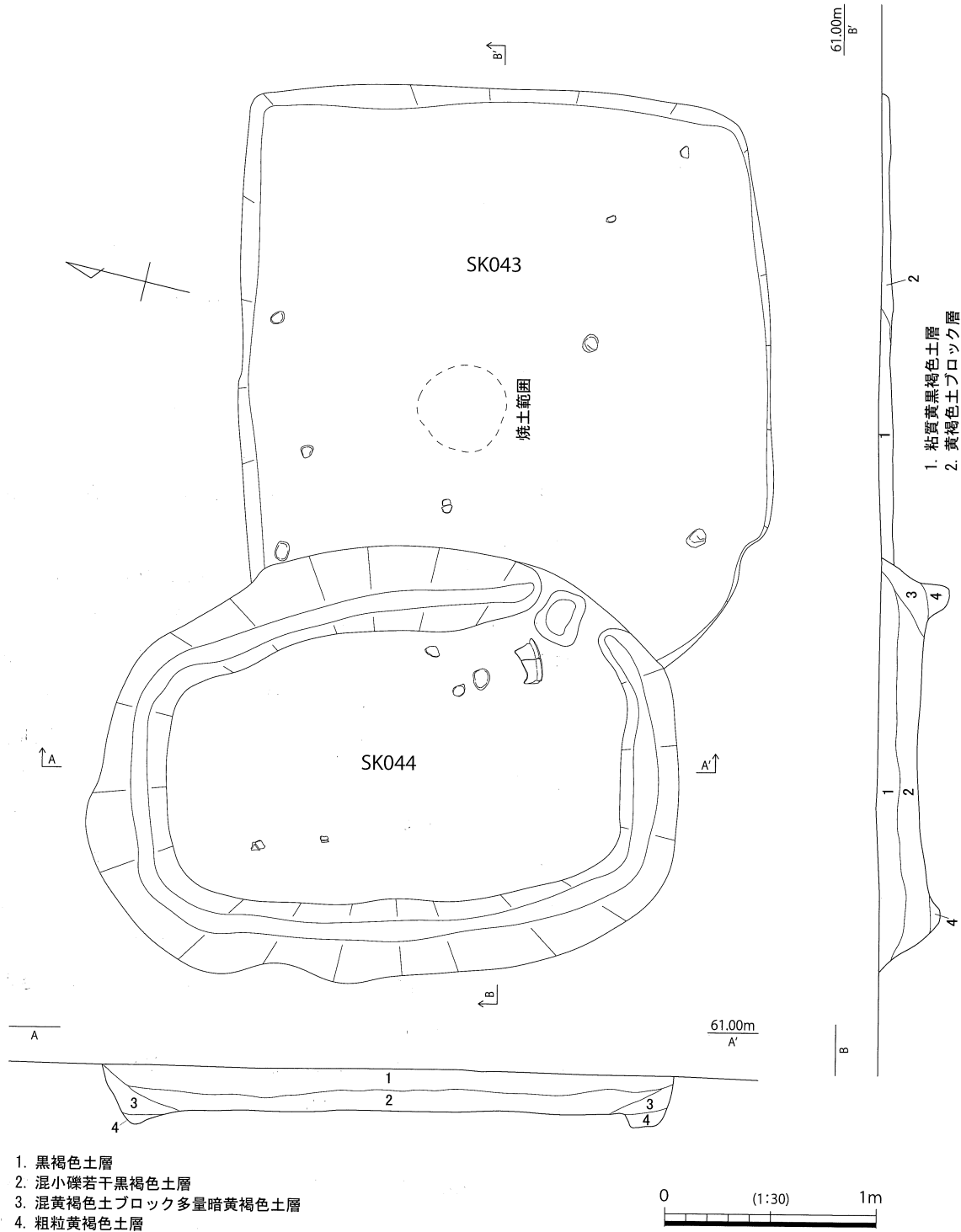
第4章 遺構と遺物

SK042

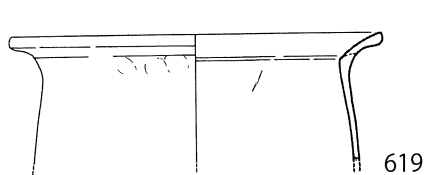
SK042は調査区1に位置する。長辺約1.5m、短辺1.3mの方形の土坑である。埋土はレンズ状に堆積し、3層から数点遺物の出土がみられた。

第165図617、618は甕である。617は口縁の下部に一条の三角突帯が巡る。口縁部は逆L字状を呈する。

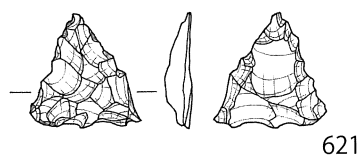
618は底がやや上げ底状を呈する資料である。外面には荒いハケメが残る。これらの資料から、本遺構の時期は弥生時代中期後半と考えられる。



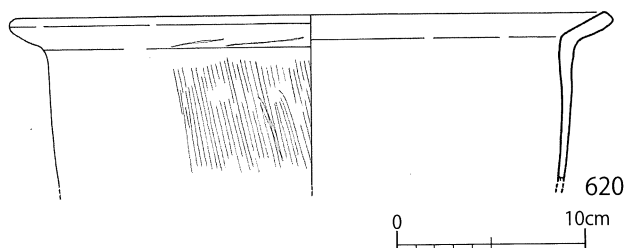
第166図 SK043 遺構実測図



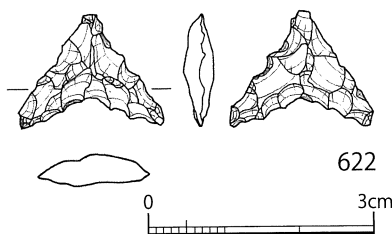
第167図 SK043 出土遺物実測図



621



第168図 SK044 出土遺物実測図



622

SK043・SK044

SK043・SK044は調査区1に位置する。SK043の西部はSK044と切り合っている。SK043は長辺約2.6m、短辺約2.5mの方形土坑である。非常に浅い土坑で、その中央部には炭化物が集中した範囲が認められた。遺物は非常に少なく、東壁に近接した位置で、甕の小片が出土した。

SK044は長辺約2.7m、短辺約2mの方形の土坑である。土坑内部の端には幅約20cmの側壁溝が認められ、埋土の観察から、この側壁溝が埋まったのち土坑の端からレンズ状に埋没したことがわかる。土坑も遺物の出土が少なく、土坑の東壁に近接した位置で、甕の小片が出土した。

第167図619は甕である。器面の残存状況が悪く細かい調整の観察は困難であるが、内面にはハケメの痕跡が認められる。胴部からやや内傾し口縁部へと繋がり、口縁部は外側へと開く。

この遺物から本遺構の時期は弥生時代中期後半と考えられる。

第168図620は甕である。外面には細かいハケメが縦方向に施される。口縁部にはその際のハケのあたりが残される。胴部から直線的に口縁部へと繋がり、口縁部はやや厚みを増し、外側へ開く。

621、622は姫島産黒曜石製の石鏃である。621は三角形を呈し、全長は1.5cmである。両面共に丁寧な剥離が施され、刃部が成形される。厚みは裏表均等ではなく表面が大きく膨らむ。基部に割り込みはなく平坦な形状を呈する。622は大きく基部が開く資料である。両面共に丁寧な剥離が施され、刃部が成形される。基部にはやや先端に丸みを帯びた割り込みが施され、断面は比較的厚みをもった形状である。

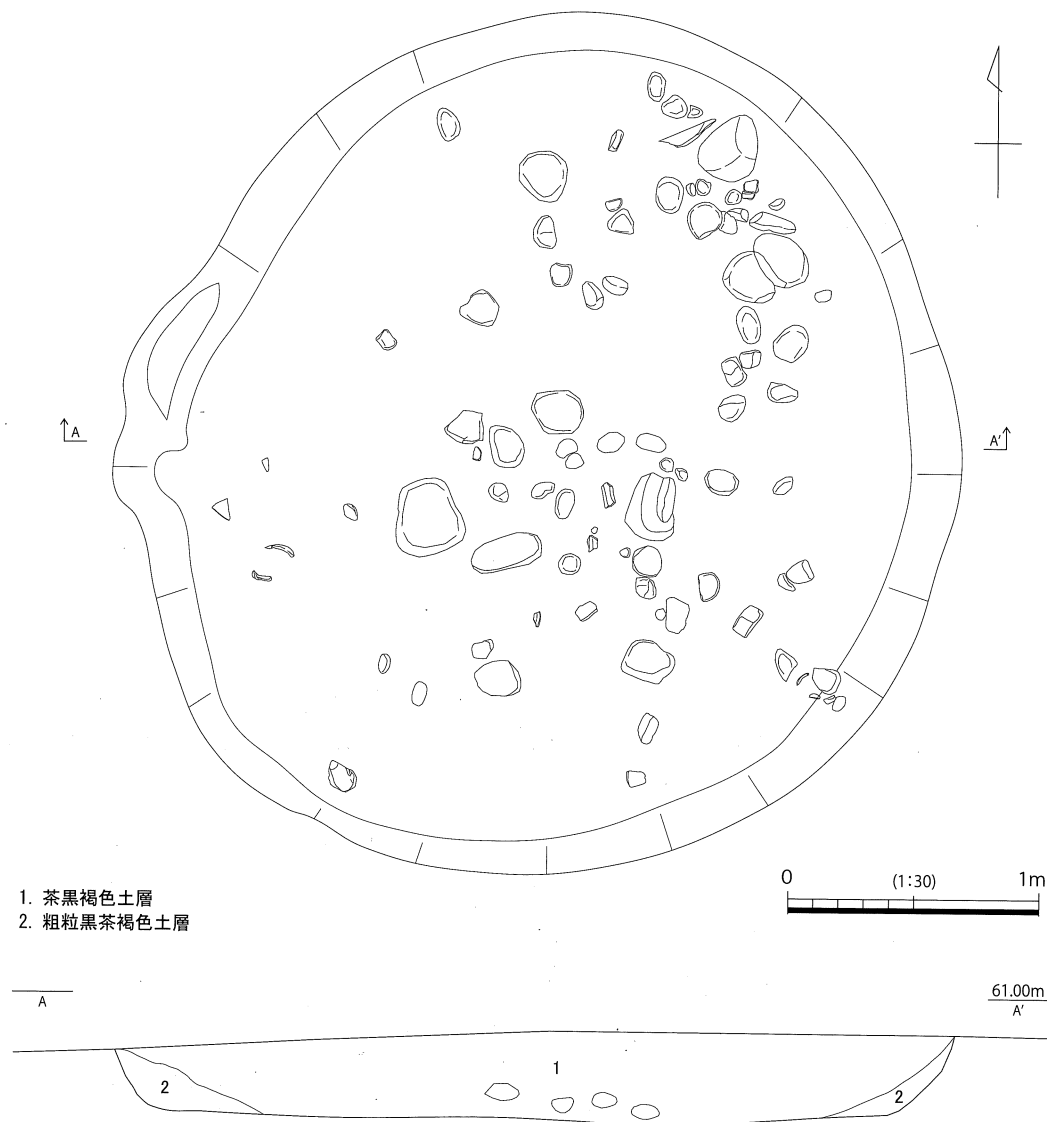
これらの資料から、本遺構は弥生時代中期後半と考えられる。

SK043とSK044には切り合いが確認できるものの、ほとんど時期差は確認できず、非常に近い時期にSK044が掘り込まれていることがわかる。

SK045

SK045は調査区1に位置する。直径約3.4mの円形土坑である。埋土の観察からほとんど一時期に埋まったことがわかり、内部からは人頭大の礫が多く出土した。遺物も同様の層から出土し、特に中心部に近い位置から多くの土器がみられた。

第170図623～625は甕である。623、624は口縁部下部に沈線が巡る資料である。口縁部は短く外反



第 169 図 SK045 遺構実測図

し、端部には非常に密なキザミ目が工具によって施される。623は外面にハケメを施し、624は内外面ともミガキがみられる。口縁部から5cm程下には鈍く太い沈線が一条巡り、胴部は丸みを帯びる。625は口縁部直下に三角突帯を巡らし、端部と突帯に非常に密なキザミ目が施される。

626～629は底部である。いずれも外面には粗いハケメが残り、626には底に直径約1cmの穿孔が焼成前に施される。

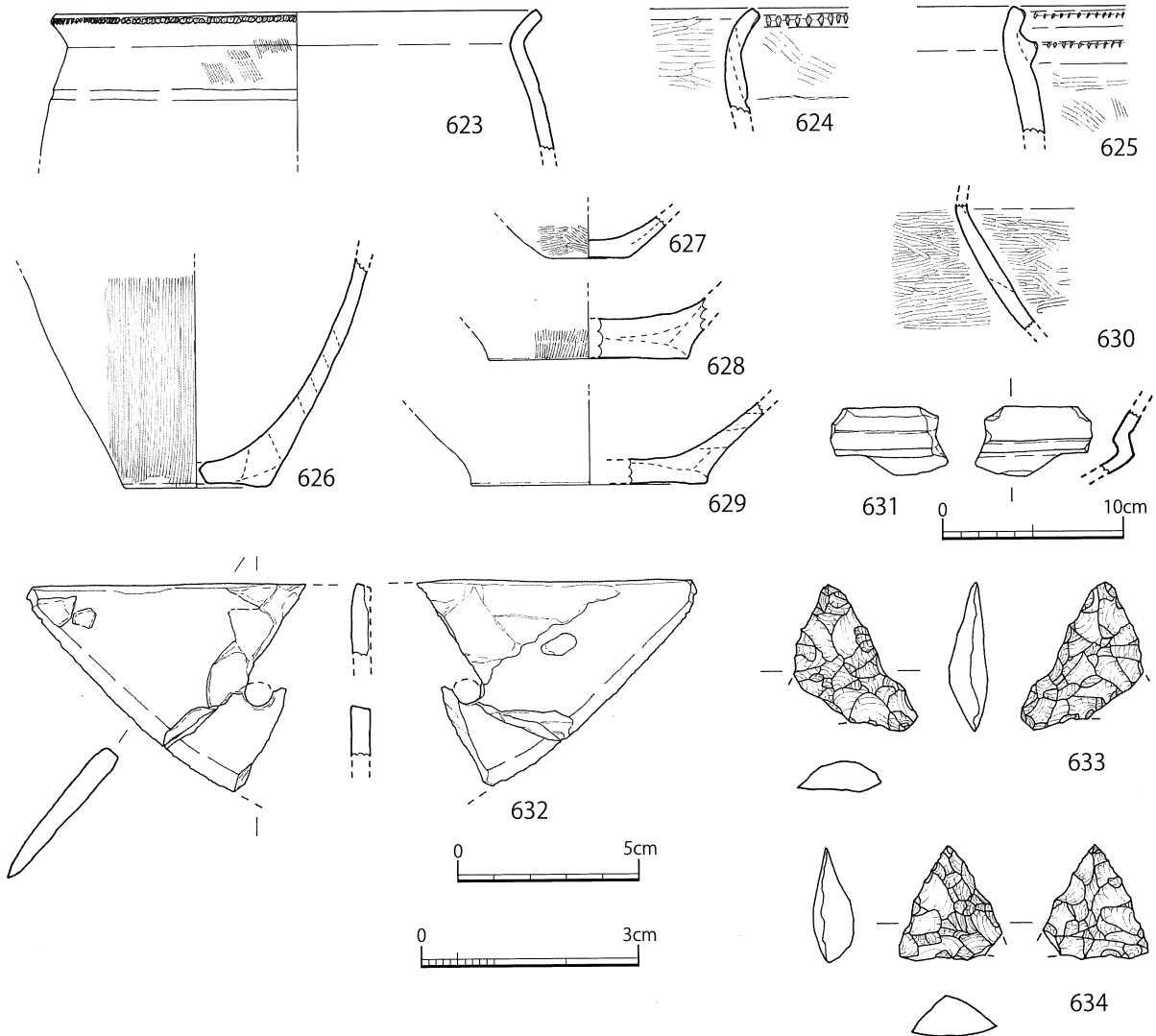
630は壺の頸部である。内外面共に丁寧なミガキ調整が施される。

631は浅鉢である。内外面共に丁寧な調整が施され、胴部は逆くの字状に屈曲する。

632はホルンフェルス製の石包丁である。石包丁の上部は非常に直線的であり、全体の半分程度が残存する。復元すれば三角形を呈すると考えられる。中心には直径7mmの穿孔が裏面からのみ施される。刃部も直線的で、先端部にかけてやや湾曲する。古戸遺跡では唯一の石包丁である。

633、634は姫島産黒曜石製の石鏃である。基部に割り込みはなくいずれの両面共に丁寧な剥離で刃部が成形される。

これらの遺物から、本遺構の時期は弥生時代前期後半と考えられる。



第170図 SK045 出土遺物実測図

SK046

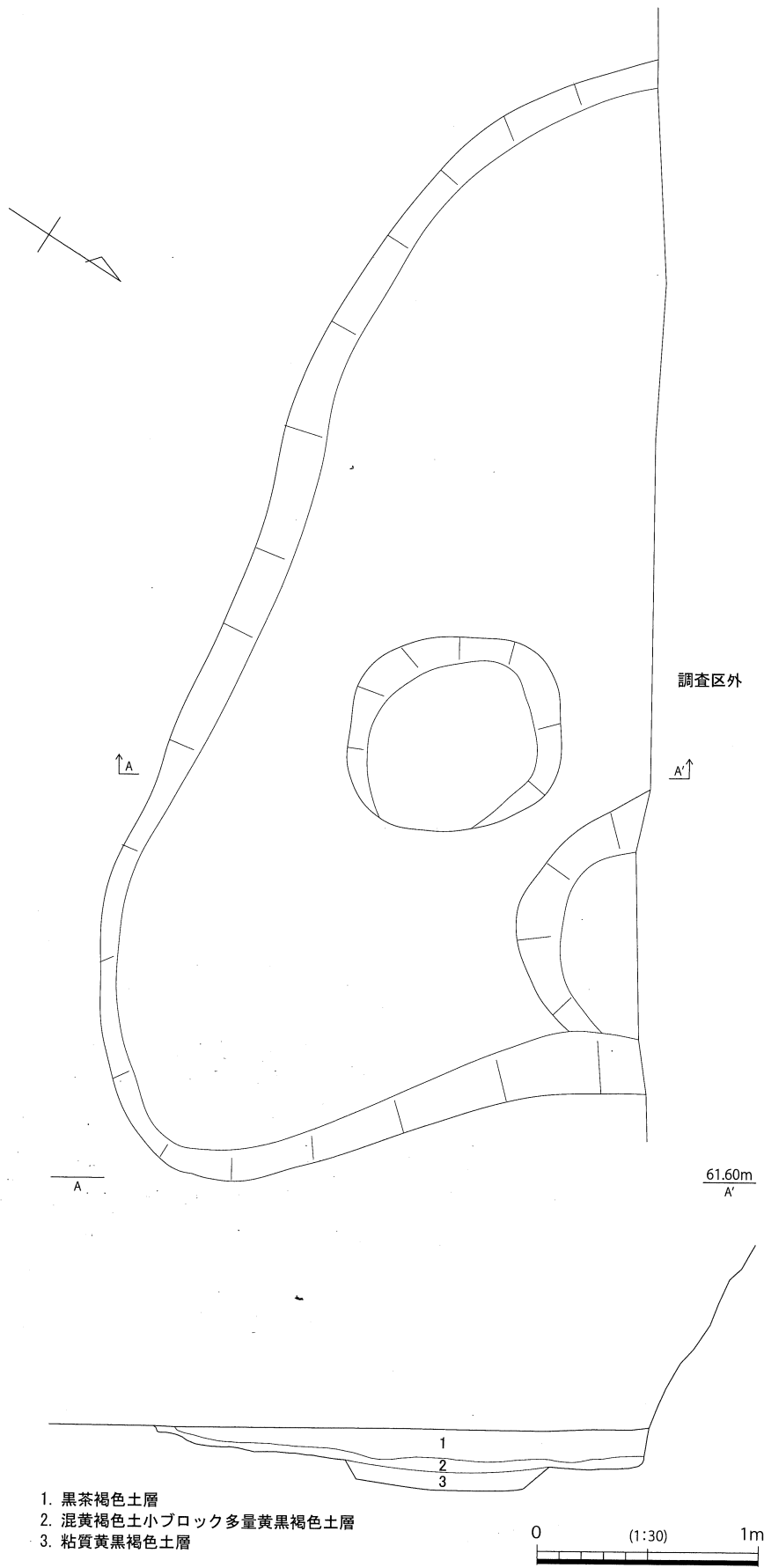
SK046は調査区1に位置する。土坑のおよそ半分は調査区外で、全容は不明であるが、残存状況から不定形の土坑であると考えられる。中心部には円形の土坑があり、この周囲から複数の遺物の出土がみられた。

第172図635～637は壺である。635は口径が25.2cmに反転復元可能な資料で、調整は内外面共に横方向のやや太いミガキがみられる。口縁部は短く外反し、粘土帯による肥厚はみられない。口縁部から5cmには鈍く太い沈線が一条巡る。637は外面に重弧文が施される資料である。

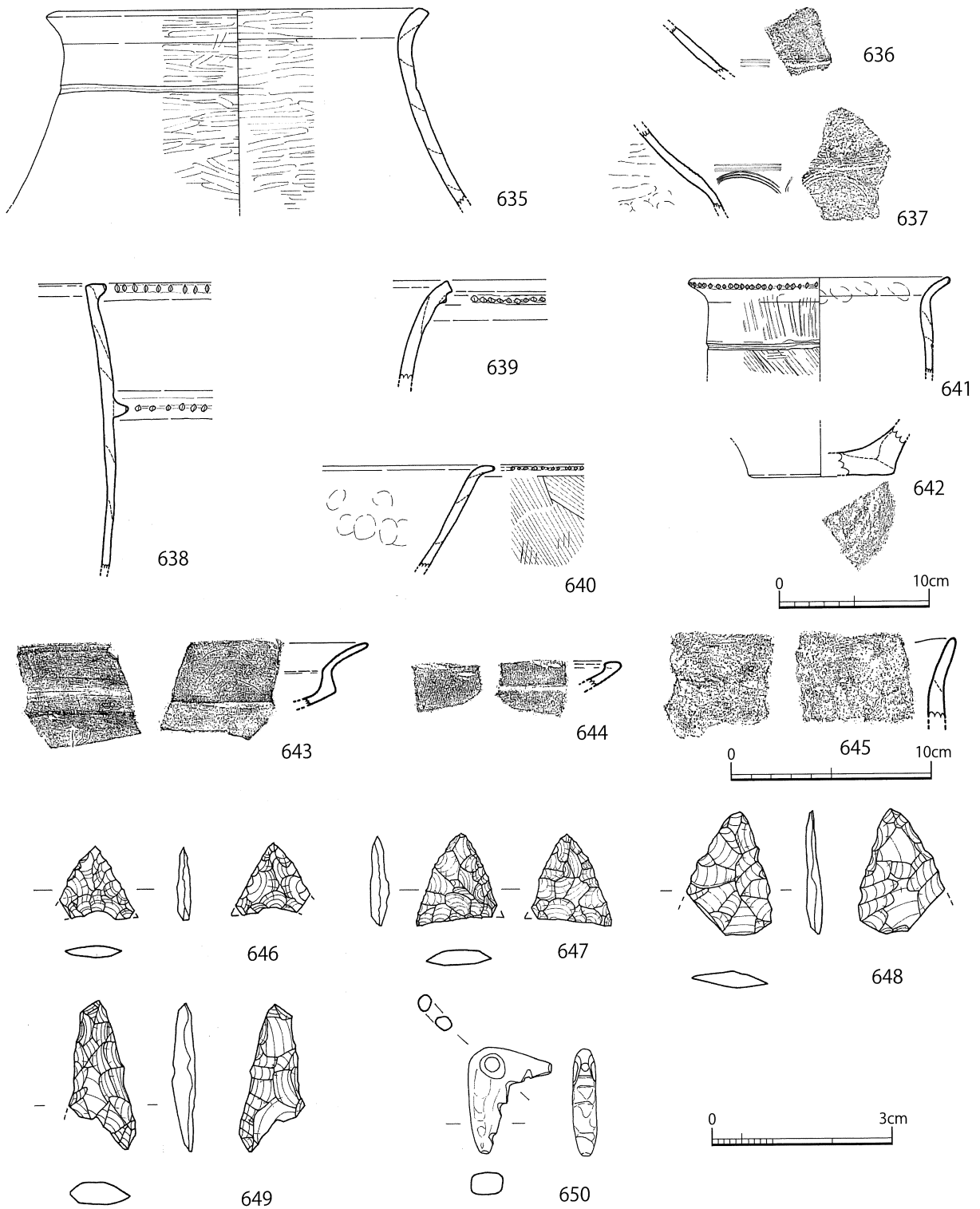
638～641は甕である。638は口縁端部と胴部に三角突帯を巡らし、やや間隔をあけキザミ目を施す。胴部から口縁部へかけてはやや内湾する。639は口縁端部直下に刻目突帯が巡る資料である。口縁部は大きく外反し、小さな三角突帯には密なキザミ目が施される。640は口縁端部にキザミ目が施される資料である。胴部は大きく外側へ開き口縁部は短く外反する。端部には細かいキザミ目が施される。641は口径が17.5cmに反転復元できる資料である。外面には非常に荒いハケメが施され、口縁部は大きく開き端部には密にキザミ目が施される。口縁部から5cm下には太い沈線が一条巡る。

642は底部である。平底で、器面の摩耗が激しく詳細な調整は確認できない。

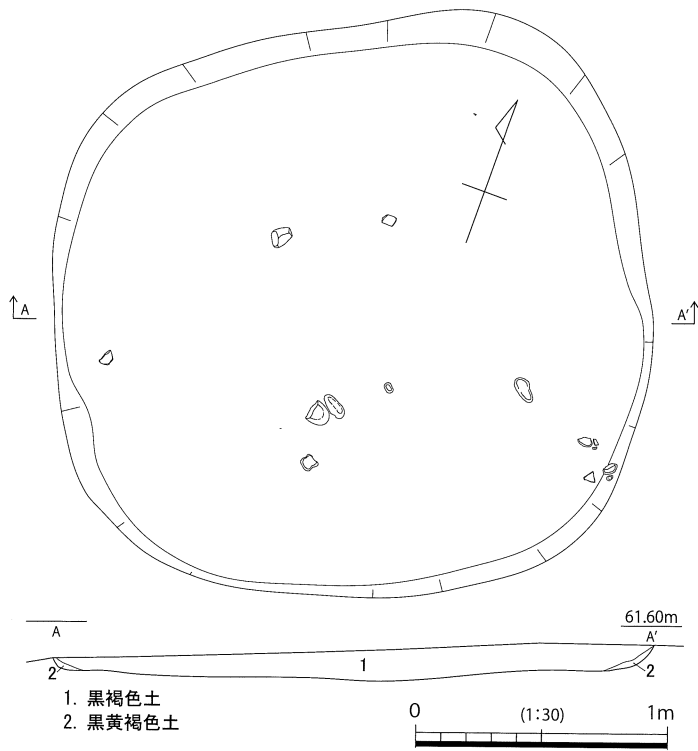
643、644は浅鉢である。内外面共に丁寧な調整が施され、643は口縁部が大きく外側へ開く。



第 171 図 SK046 遺構実測図



第172図 SK046 出土遺物実測図



第 173 図 SK047 遺構実測図

645は無文の深鉢である。口縁部は短く外側へ開き、内外面共に丁寧な調整が施される。

646～649は石鏃である。いずれも両面共に丁寧な剥離が施され刃部が成形される。

646、647は基部に浅い割り込みが施され、

648は全体が涙形である。649細長い石鏃で、基部には鋭角に割り込みが施される。

650はクロム白雲母製の異形勾玉である。全体は緑色で、上部と下部の先端は尖る。上部には2mm程の穿孔が施され、内側の側面には4つの溝が彫り込まれる。

これらの遺物から、本遺構の時期は弥生時代前期後半と考えられる。

SK047

SK047は調査区1に位置する。直径約2.3mの浅い円形の土坑で、埋土の観察からほとんど一時期に埋没したことがわかる。中心部付近の床面には炭化物が集中した部分が見られ、内部には拳大の礫が多くみられた。遺物も数点出土したものの図化に耐えうる資料はなかった。

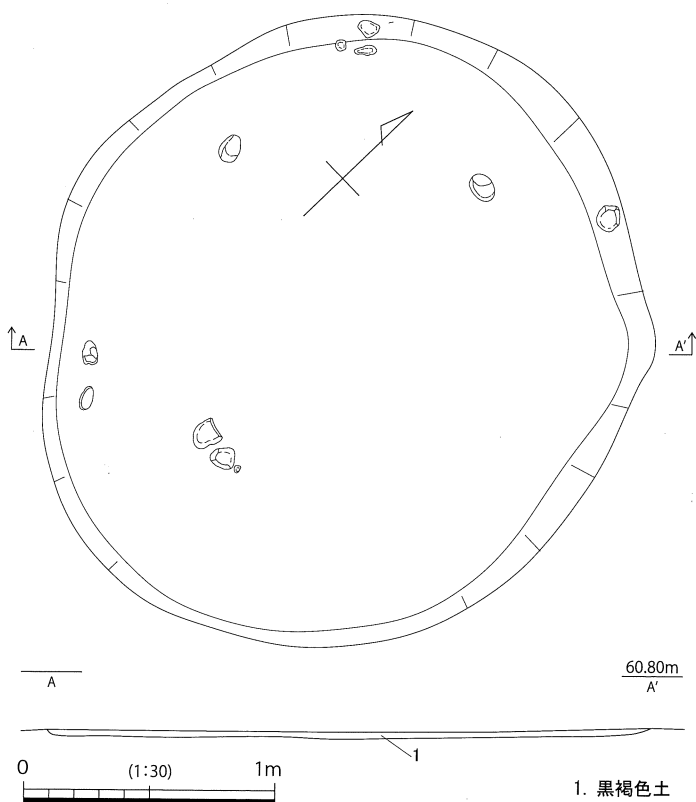
小片の弥生土器から本遺構の時期は弥生時代中期と考えられる。

SK048

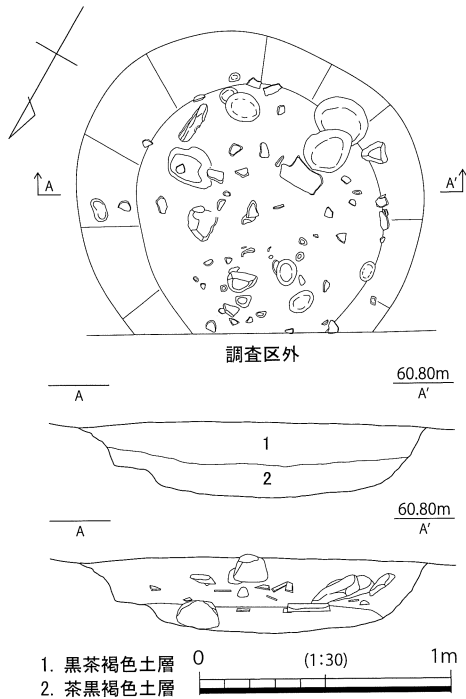
SK048は調査区1に位置する。直径約2.4mの浅い円形の土坑で、遺構の残存状況が悪く、ほぼ床面に近い位置で検出した。埋土には多くの土器が含まれ、遺物の出土は認められなかった、周辺遺構とのや埋土の観察から本遺構の時期は弥生時代中期と考えられる。

SK049

SK049は調査区1に位置する。直径約1.4mの円形の土坑で北西部の一部は調査区外に含まれる。埋土には人頭大の礫が多く含まれ、



第 174 図 SK048 遺構実測図



第 175 図 SK049 遺構実測図

埋土の観察から上層より遺物が多く出土している。土器片も複数出土したものの図化に耐えうるものは1点のみであった。

第176図651は甕である。口縁部は短く外反し、口縁端部にはやや細かいキザミ目が約3mm間隔で施される。胴部は丸みを帯び内外面共に丁寧な調整が施される。

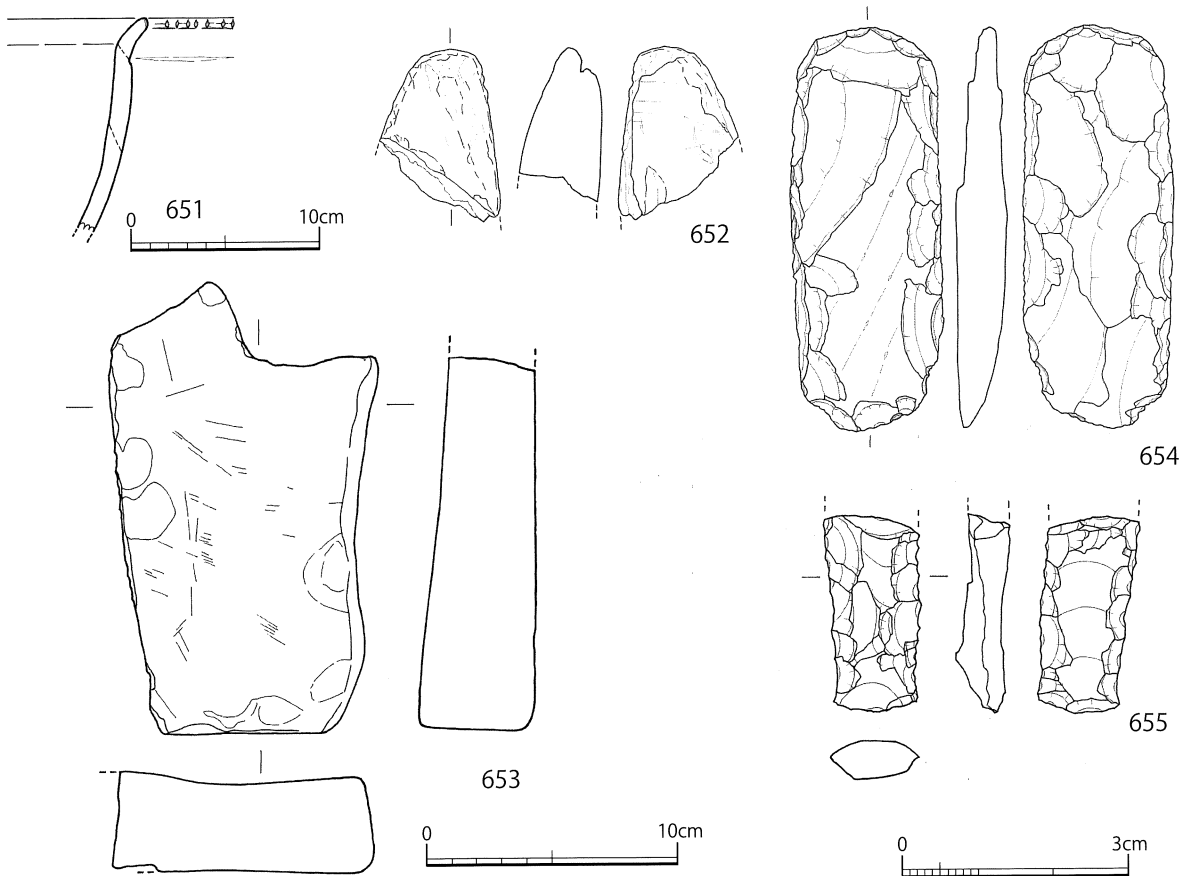
652は蛇紋岩製の磨製石鏃である。刃部を大きく欠くものの基部を残す。全体的に摺痕が残り、端部には敲打痕がみられる。

653は凝灰岩製の砥石である。表面には使用痕が認められ、中央部がややへこむ。

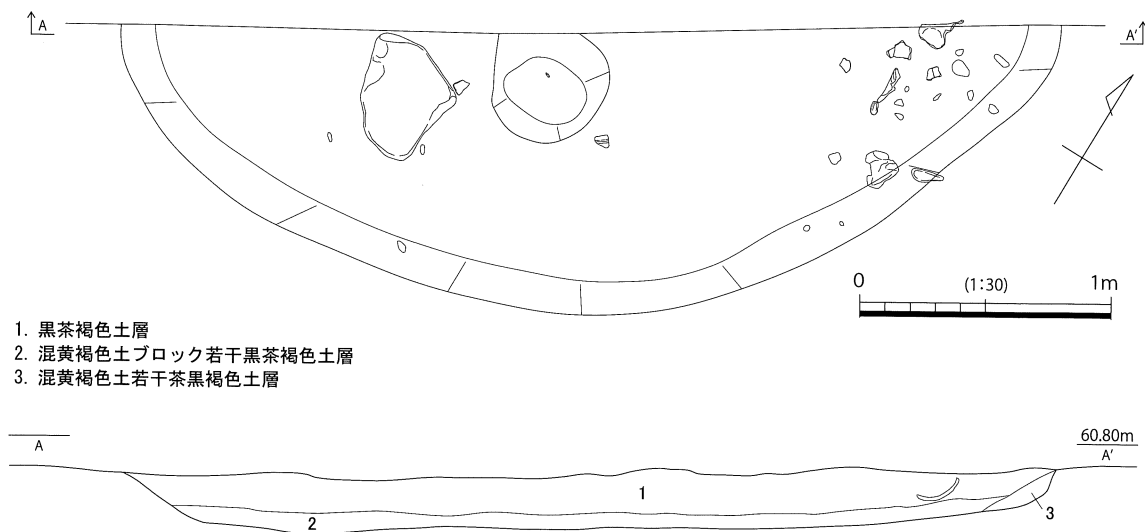
654は安山岩製の扁平打製石斧である。表面には中心の平坦面に自然面が残り、両面共に丁寧な剥離が行われ刃部が成形される。

655はサヌカイト製の削器である。先端は平坦で、両面共に丁寧な調整を施し刃部を成形している。

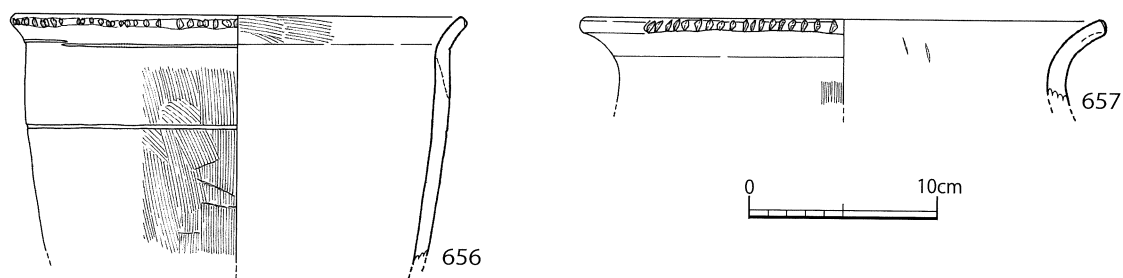
これらの遺物から、本遺構の時期は弥生時代前期後半と考えられる。



第 176 図 SK049 出土遺物実測図



第177図 SK050 遺構実測図



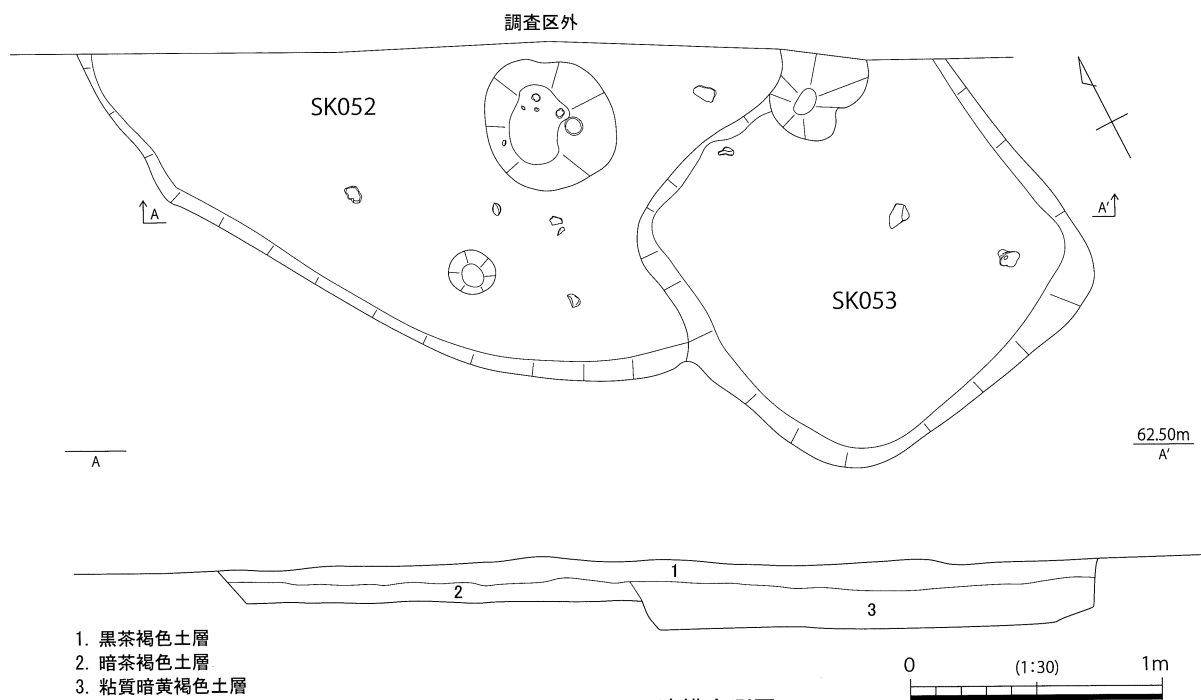
第178図 SK050 出土遺物実測図

SK050

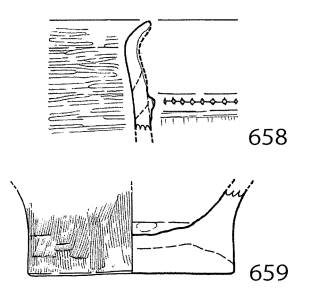
SK050は調査区1に位置する。土坑の全体の大部分が調査区外に位置し、その全容は不明であるが、円形の土坑であると考えられる。中央部には円形の土坑があり、その付近には床面から浮いた位置に人頭大の礫がみられた。遺物の多くは北東部の壁面近くから出土し、その付近には拳大の礫も多くみられた。埋土の観察から遺構の端から埋まりレンズ状に埋没したことがわかる。

第178図656、657は甕である。656は口径24.5cmに反転復元できる。口縁端部は短く外反し、口縁端部には間隔を均等にせず細かいキザミ目が施される。口縁部の屈曲部にはそれに沿ってやや細い沈線が一条施され、沈線の始まりと終わりが確認できる。胴部には荒いハケメが縦方向に施され、口縁部から6cm下がった位置にやや太い沈線が一条巡る。内面には口縁部に横方向にハケメが施される。胴部はやや膨らみを持つものの口縁部から直線的に底部へ繋がる。657は口縁部が大きく外反し、口縁端部には密にキザミ目が施される。外面には細かいハケメがみられ、口径は28cmに反転復元可能である。

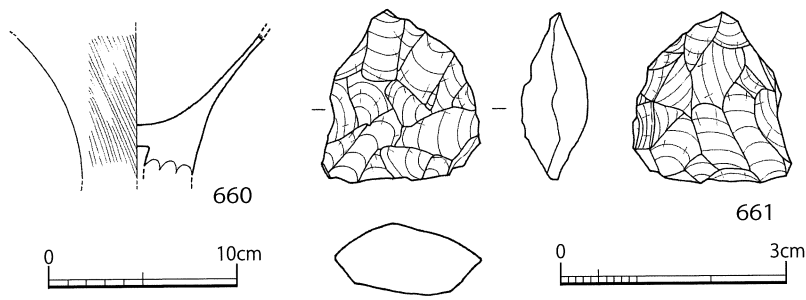
これらの遺物から、本遺構の時期は弥生時代前期後半と考えられる。



第179図 SK052・53 遺構実測図



第180図 SK052 出土遺物実測図



第181図 SK053 出土遺物実測図

SK052・SK053

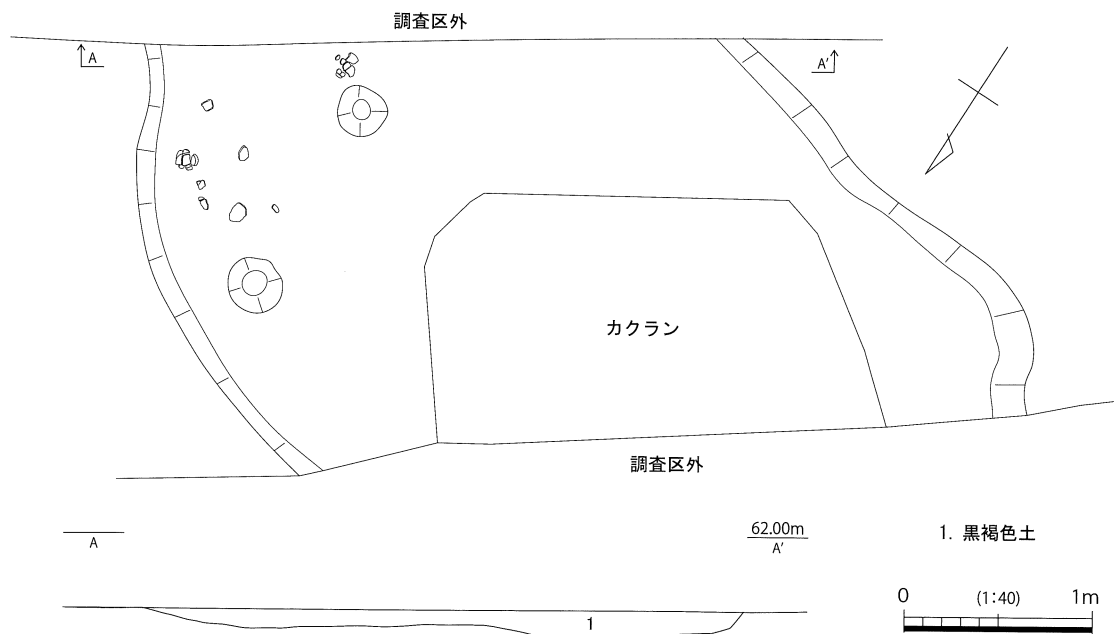
SK051・SK052は調査区2に位置する。SK051とSK052は切り合っており、SK051は全体のおよそ半分が調査区外に位置しているため全容は不明であるが、円形の土坑と考えられる。中心には円形の土坑がみられ、この内部からは2点の土器が出土した。埋土の観察からほとんど一時期に埋没したことがわかる。また、床面の上からは拳大の礫が多く出土している。

第180図658、659は甕である。658は口縁部の資料で、口縁部は短く外反する。外面の一部が剥落しているため、調整の観察は困難であるが、内面には横方向の丁寧なミガキがみられ、外面の下部には縦方向のハケメが残る。口縁部から5cm下には小さな突帯が巡り、密にキザミ目が施される。659は底部である。非常に細かいハケメが外面に施され、底は平坦である。2cm程の厚みがあり、内面と底面にも丁寧な調整が施される。胎土の類似や出土状況からこの両者は同一個体の可能性が考えられる。

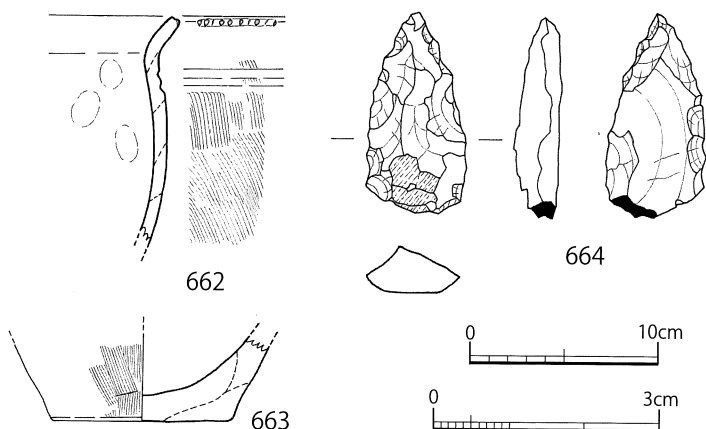
これらの遺物から、本遺構の時期は弥生時代前期後半と考えられる。

SK052は一辺約2mの正方形の土坑である。埋土の観察からSK051を上から掘り込み埋没の際はほとんど一時期に埋まったことがわかる。遺構内部の南東部壁面近くからは甕の底部片が出土した。

第181図660は甕の底部である。底面を欠くものの比較的全体の形状が残る資料である。外面には細かい



第182図 SK054 遺構実測図



第183図 SK054 出土遺物実測図

ハケメが斜め方向に施され、内面にも丁寧な調整がみられる。

661は姫島産黒曜石製の石鏃である。大型の資料で、両面共にやや粗い剥離が施され、刃部が成形される。

これらの資料から、本遺構の時期は弥生時代中期後半と考えられる。

SK054

SK054は調査区2に位置する。土坑の一部が調査区外に位置し、全体は不明な点が多いが、不定形の土坑であると考えられる。埋土の観察から土坑の北東部から埋まったことがわかり、北東部壁面付近からは土器片が集中して出土した。

第183図662、663は甕である。外面には細かいハケメが縦方向に施され、口縁部は短く外反する。口縁部の下には二条の鈍く太い沈線が巡る。663は底部である。外面には細かく短いハケメが施され、底は平底である。厚みは1.5cmを測り、内面には丁寧な調整が施される。胎土の共通性やハケメの共通性からこれらは同一個体と考えられる。

664はサヌカイト製の石鏃である。涙形を呈し裏面には大きく平坦な剥離面がみられる。厚みは表面に大きく厚みを持ち、基部には自然面が残る。

これらの遺物から、本遺構の時期は弥生時代前期後半と考えられる。

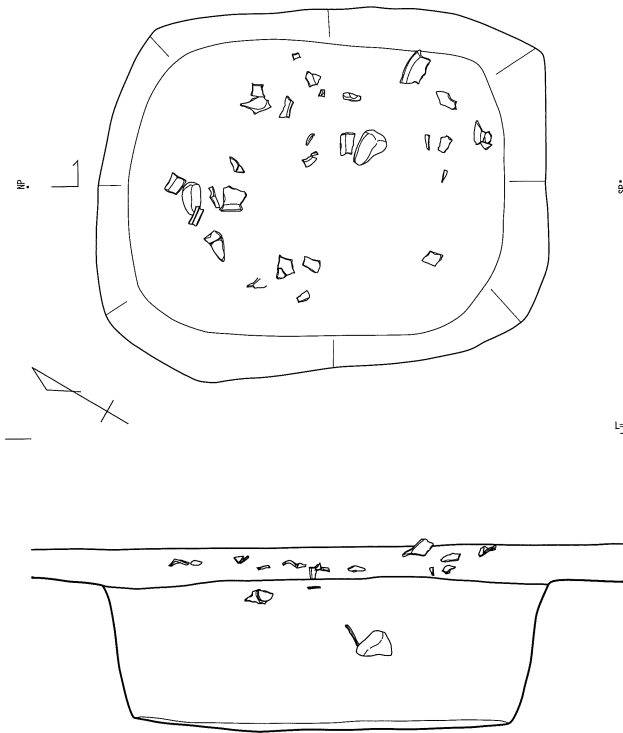
SK055

SK055は調査区3に位置する。方形土坑である。埋土の上から複数の土器が出土する。

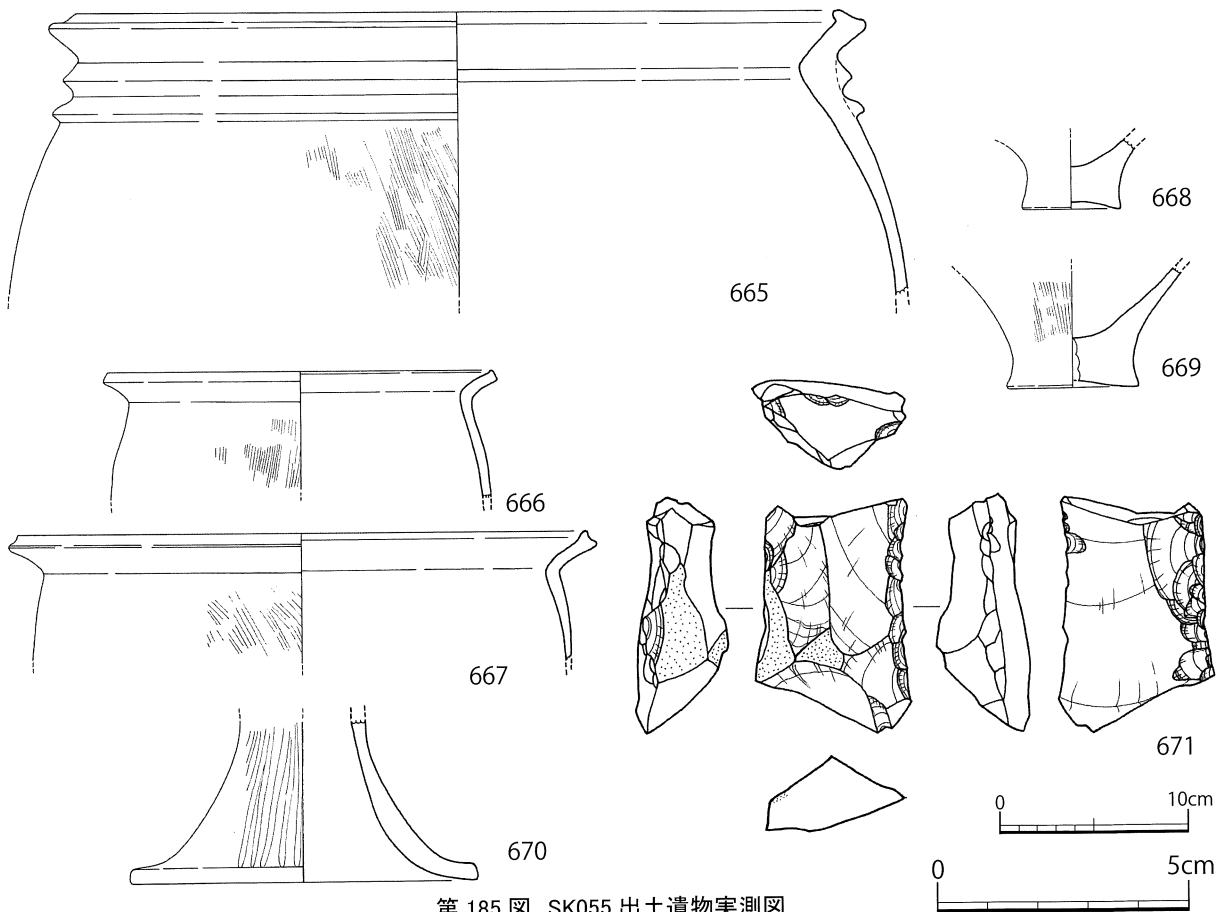
第185図665～669は甕である。665は口径43.4cmに反転復元可能な資料で口縁部の直下には二条の三角突帯が巡る。668、669は底部で、厚みがありやや上げ底である。

670は高坏の脚部である。外面には縦方向に丁寧なミガキが施され、器面には丹塗は施されない。

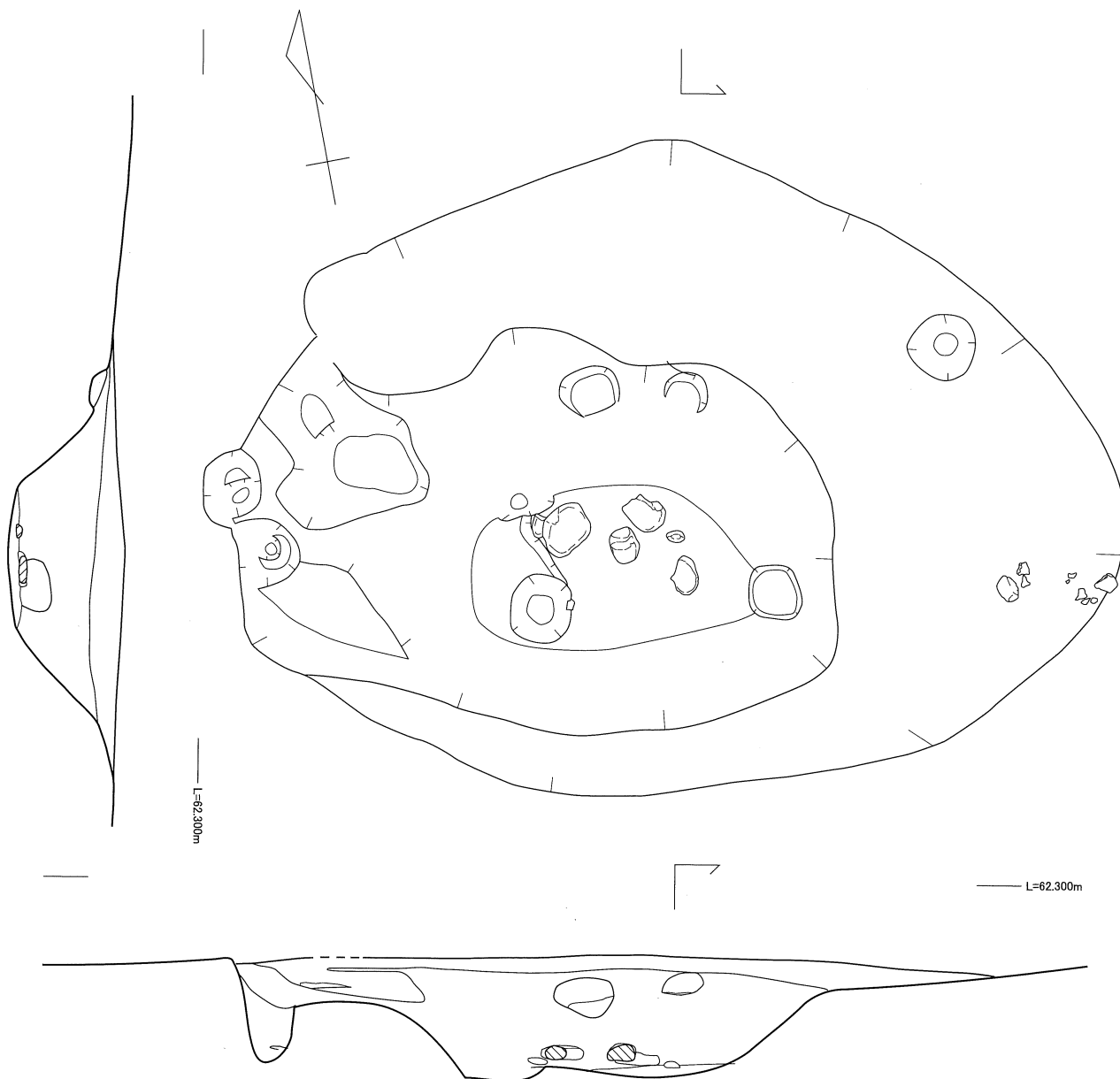
671は姫島産黒曜石製の削器である。表面には端部に丁寧な剥離が施され、刃部が成形される。これらの遺物から、本遺構の時期は弥生時代中期後半と考えられる。



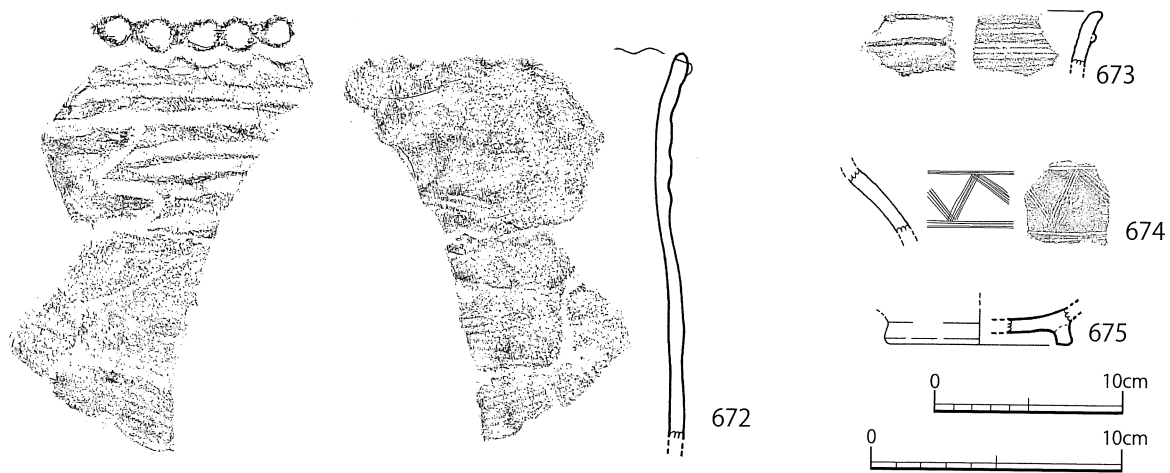
第184図 SK055 遺構実測図



第185図 SK055 出土遺物実測図



第 186 図 SK056 遺構実測図



第 187 図 SK056 出土遺物実測図

SK056

SK056は調査区3に位置する。長辺約4m、短辺約3mの楕円形の土坑で、断面は挿鉢状を呈する。中心の底に近い位置からは人頭大の礫が多く認められた。遺物は土坑の東部からまとまっていくつか遺物が出土し、底に近い位置からは673、674が出土した。

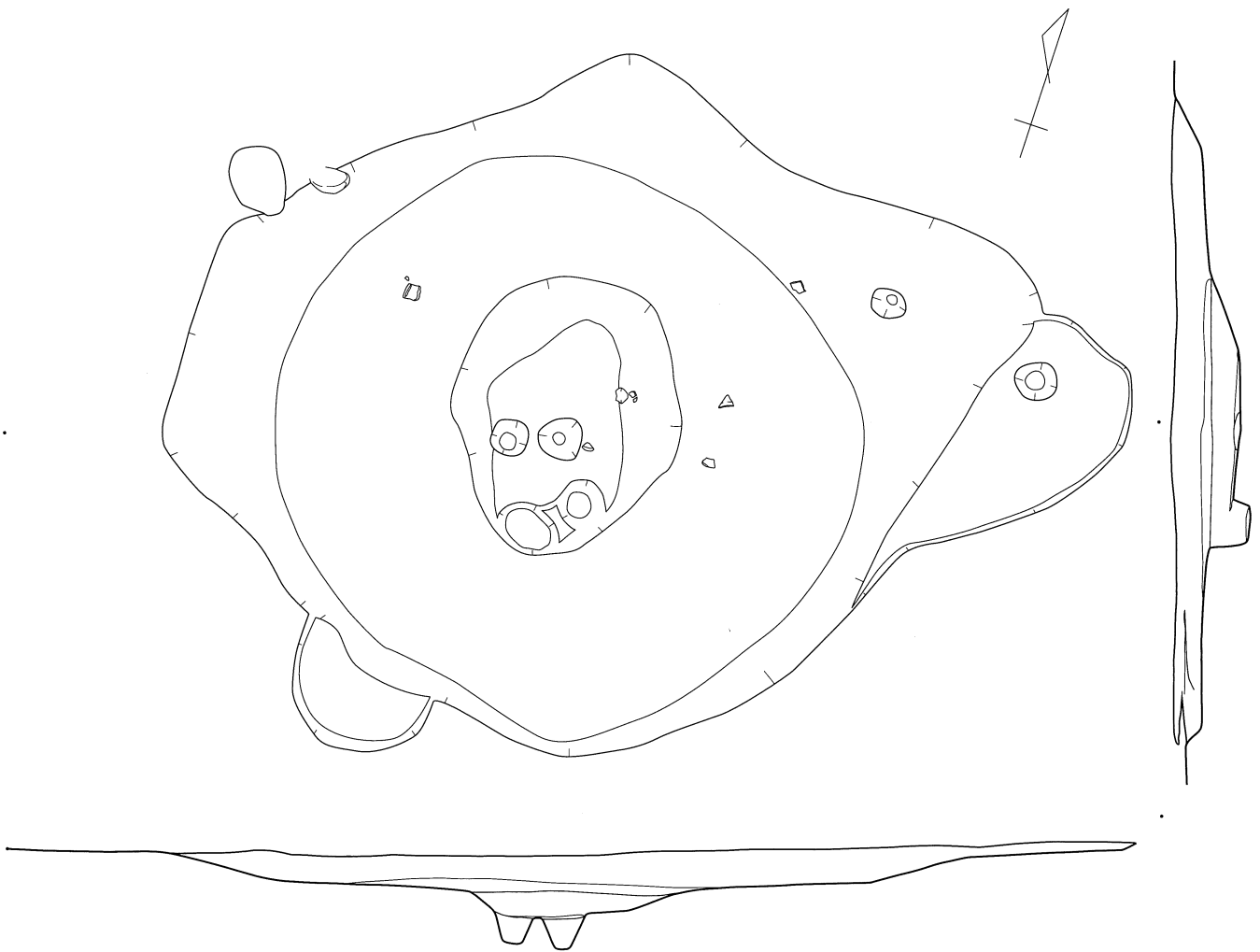
第187図672は深鉢である。内外面共に丁寧な調整が施され、口縁端部には指によってキザミ目が施される。外面には鈍い沈線が施され、縄文時代後期の資料と考えられ、混ざり込み資料と考えられる。

673は無刻目突帯の深鉢である。外面には横方向に貝殻条痕が施され、口縁部は外反する。口縁端部から1cm下に小さな突帯が巡る。

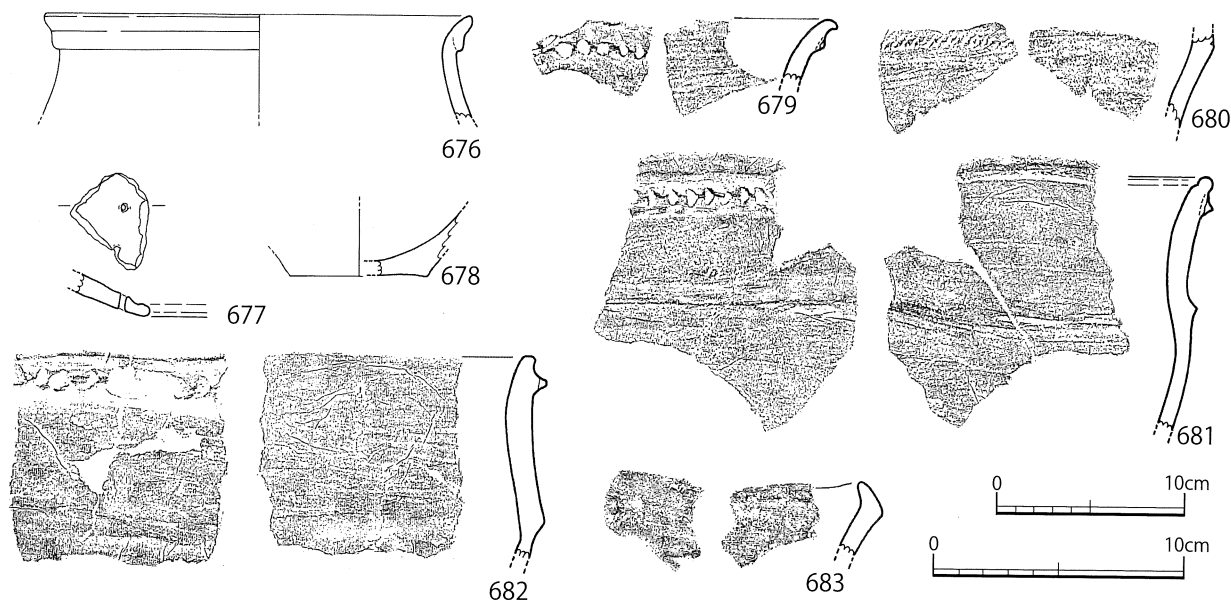
674は壺である。胴部の資料と考えられ、上下の沈線の間には三本の沈線で山形文が施される。

675は土師器碗の底部である。7mm程の高台が付き、内外面ともに丁寧な調整が施される。12世紀代の資料と考えられ、混ざり込み資料と考えられる。

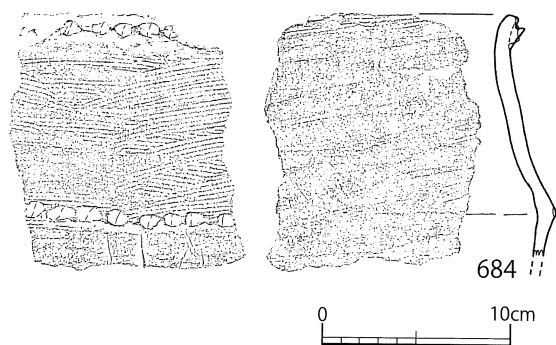
これらの資料や周辺遺構との関係から、本遺構の時期は弥生時代前期前半と考えられる。



第188図 SK057 遺構実測図



第189図 SK057 出土遺物実測図



第190図 SK058 出土遺物実測図

SK057

SK057は調査区3に位置する。直径約3.7mの円形の土坑で、中心部には楕円形の土坑があり、その中心には二つの柱穴が認められる。

第189図676は壺である。口径22.8cmに反転復元でき、口縁端部は肥厚させる。677は蓋である。端部に焼成前に穿孔が施され、器面に丹塗は施されない。678は底部である。内外面共に丁寧な調整が施され壺の底部と考えられる。

679～682は刻目突帯のある深鉢である。

679は大きく外側に開く資料で、キザミ目は小さい。680は胴部の屈曲部の資料で工具により細かいキザミ目が密に施される。681は大きく口縁部が立ち上がる資料であるが、口縁端部内面には一条の沈線が巡る。

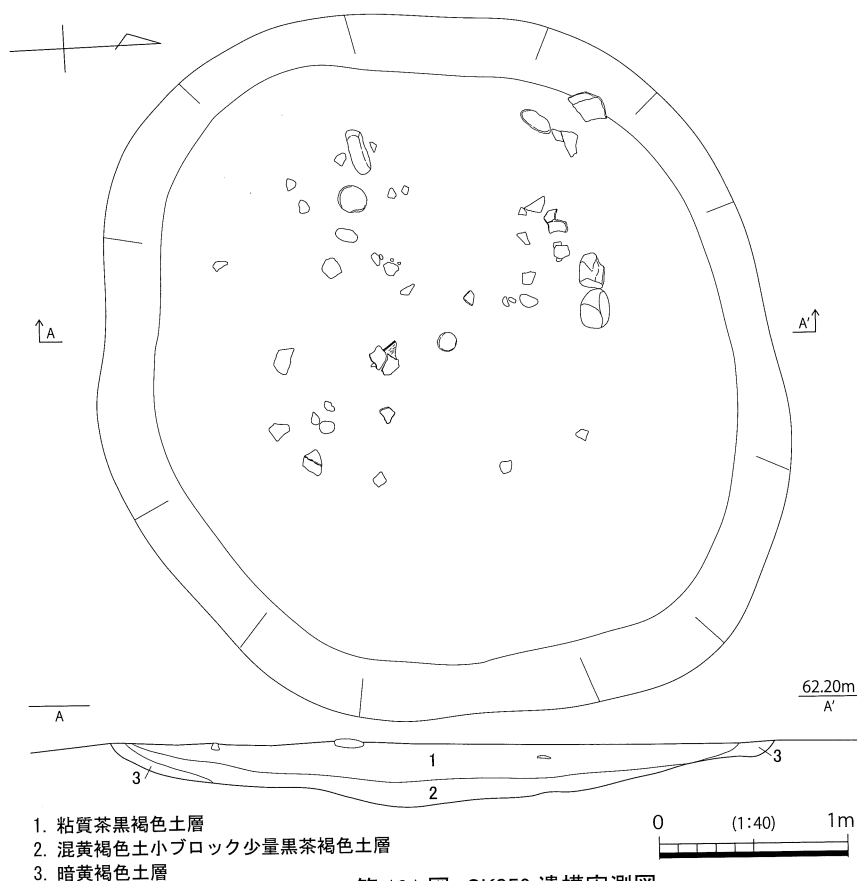
683は無文の深鉢である。波状口縁を呈する。縄文時代後期の資料と考えられ、混ざり込み資料である。

これらの遺物から、本遺構の時期は弥生時代前期前半と考えられる。

SK058

SK058は調査区3に位置する。円形土坑である。内部からは行け面に近い位置で遺物が1点出土した。

第190図684は刻目突帯のある深鉢である。外面には横方向に貝殻条痕が施され、内面には条痕後ナデ調整が施される。口縁部は大きく内傾し、緩やかに外反する。口縁端部の突帯と胴部屈曲部に工具によって密にキザミ目が施される。弥生時代早期の資料であると考えられる。



第 191 図 SK059 遺構実測図

SK059

SK059は調査区3に位置する。直径約3.7mの円形の土坑である。断面は播鉢状を呈しており、内部からは拳大の礫と共遺物が多数出土した。埋土の観察から遺構の端からレンズ状に埋没したことがわかる。

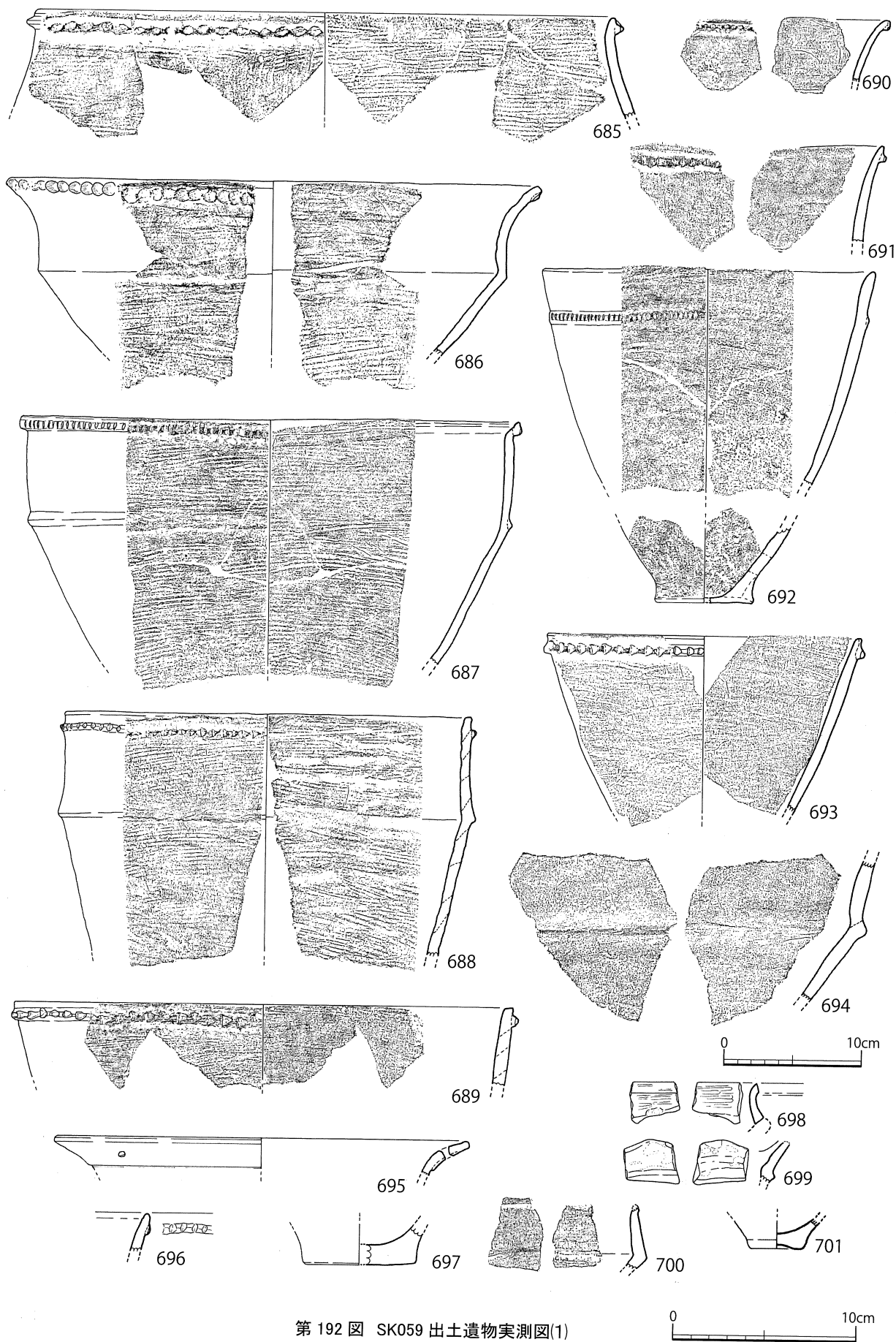
第192図685～694は刻目突帯のある深鉢である。685は内外面共に横方向に貝殻条痕が施され、口径が42cmに反転復元される資料で、口縁部直下の突帯には指によって密にキザミ目が施される。口縁部は大きく内傾しやや外反する。686は口縁部が大きく外反し、外側に開く資料で、キザミ目は二枚貝の背面基部を用いて密に施される。687は胴部に突帯が施され、口縁部へ直線的に立ち上がる。口縁端部は外側に折れ曲がり、内面には一条の沈線が、外面には工具で密にキザミ目が施される。胴部はやや膨らみをもつ。688は胴部の屈曲部から口縁部へ直線的に立ち上がり、口縁端部からやや下の位置に小さい突帯が巡る。キザミ目は細かく密に施される。689、693は全体が砲弾型を呈する資料である。口縁端部からやや下がった位置に突帯が巡る。690、691は口縁部が大きく外反する資料である。内外面共に丁寧なナデ調整によって成形され、キザミ目も非常に細かい。692は砲弾型を呈する資料である。内外面共に条痕後ナデ調整が施され、口縁部から4cm下がった位置に鈍くい小さい突帯が巡り、工具により、細いキザミ目が施される底部は平底で、非常に器面は薄い。694は深鉢の胴部である。屈曲部の資料で、内外面共に丁寧なナデ調整が施される。屈曲部はやや下垂する。

695は壺の口縁部である。口縁部はやや肥厚し、焼成後に穿孔が施される。口径は30cmに復元できる。

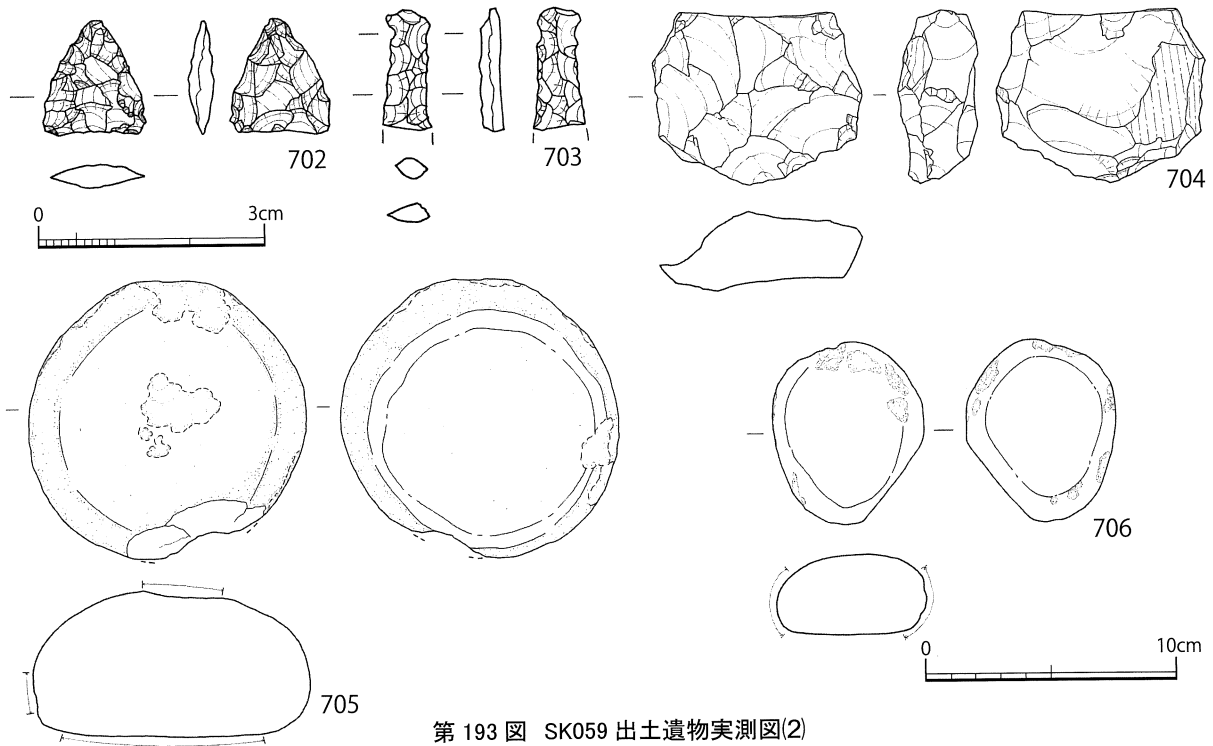
696は外面にハケメの施される刻目突帯のある深鉢である。口縁部の資料で、小さな突帯が巡る。

698、699は方形浅鉢である。胎土や調整から同一個体と考えられる資料で、699は波状口縁の頂部と考えられる。内外面共に丁寧なミガキが施され、外面の一部には赤色顔料が残る。

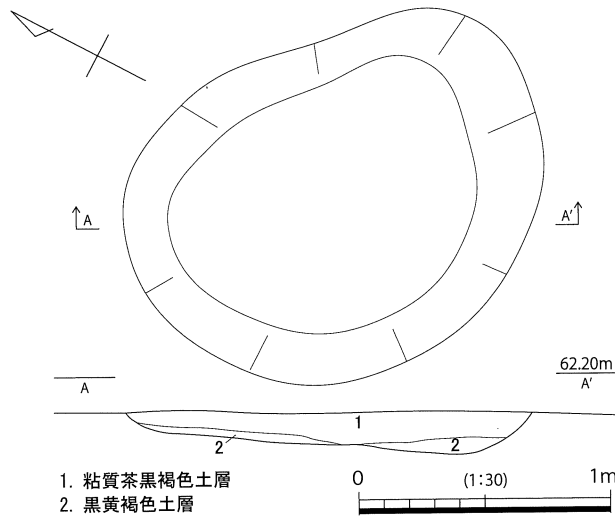
700は浅鉢である。水平口縁を呈し、口縁部は特選的に立ち上がる。口縁端部の外面には一条の沈線が巡



第 192 図 SK059 出土遺物実測図(1)

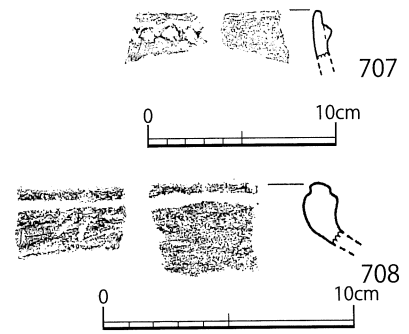


第193図 SK059 出土遺物実測図(2)

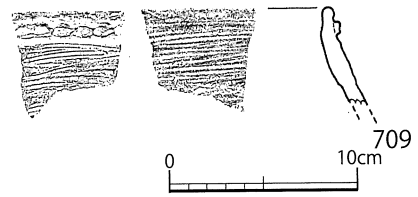


- 1. 粘質茶黒褐色土層
- 2. 黒黄褐色土層

第194図 SK060 遺構実測図



第195図 SK060 出土遺物実測図



第196図 SK061 出土遺物実測図

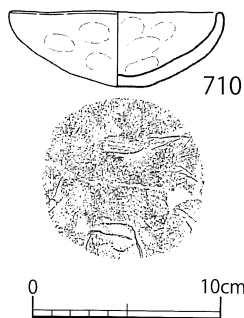
り、内外面共に丁寧な調子が施される。
701は底部である。やや上げ底状を呈し、内外面共に丁寧な調整が施される。

702は姫島産黒曜石製の石鏃である。三角形を呈し、基部は平坦である。703は姫島産黒曜石製の異形石器である。棒状を呈し、上部には両方側面から割り込みが施される。両面とも丁寧な剥離が施され、刃部が成形される。

704は花崗岩製の石核である。上部に平坦面が成形され、裏面の一部には自然面を残す。埋土からは花崗岩製の剥片は確認されていない。

705、706は安山岩製の摺石である。両面に作業面が確認でき、端部には敲打痕がみられる。これらの遺物から、本遺構の時期は弥生時代前期前半と考えられる。

第4章 遺構と遺物



第 197 図 SK062 出土遺物実測図

SK060

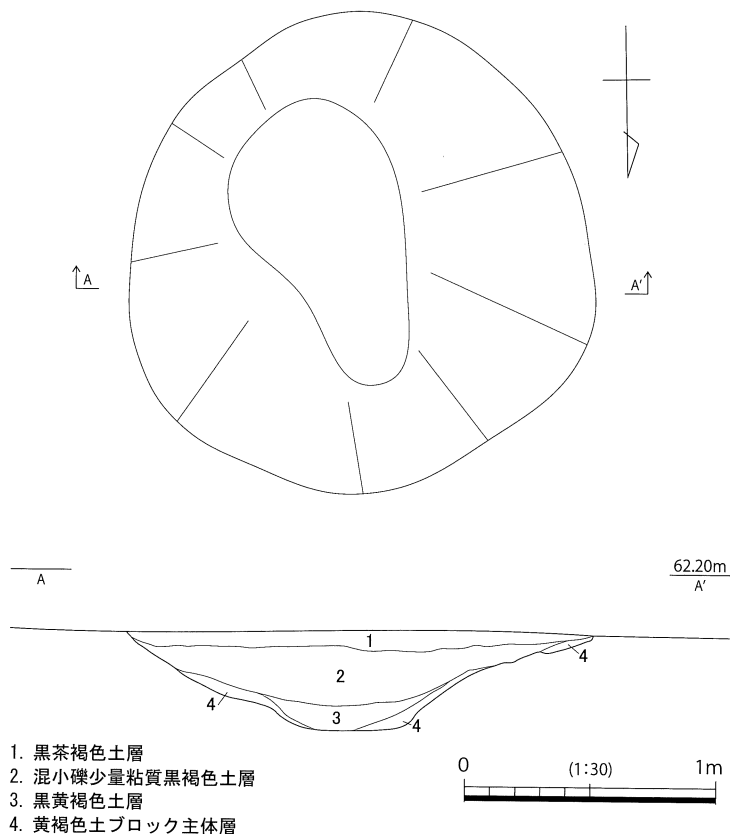
第195図707は刻目突帯のある深鉢である。口縁部はやや内傾し、指によるキザミ目が施される。708は深鉢で、口縁端部に沈線を施す。縄文時代後期の資料であり、混ざり込みと考えられる。

SK061

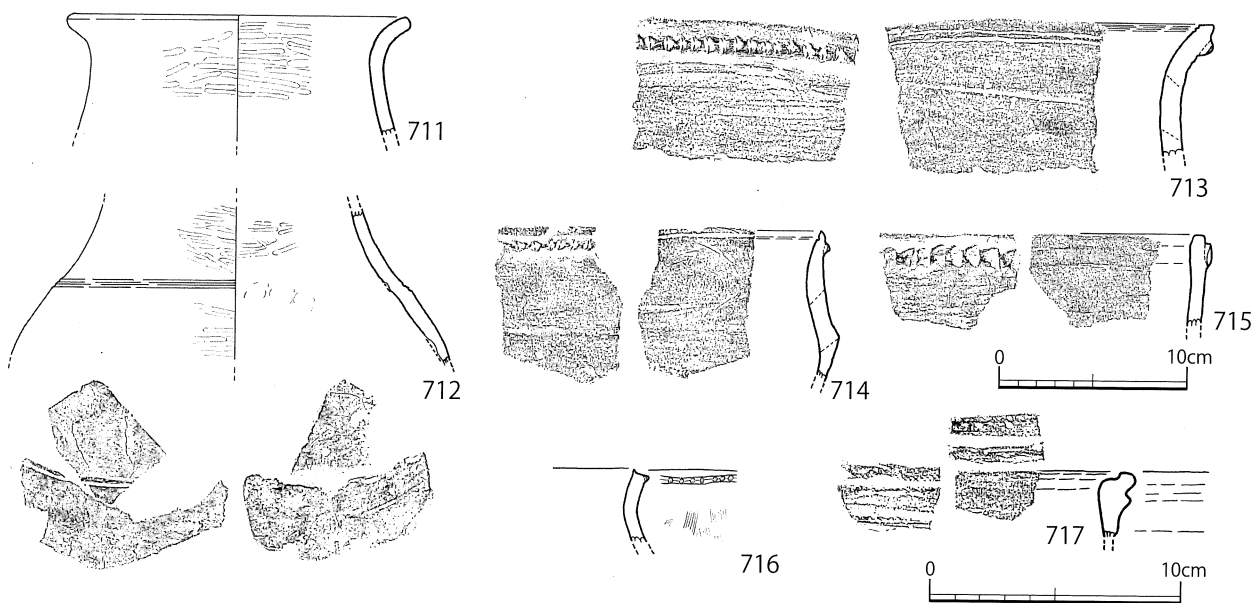
第196図709は刻目突帯のある深鉢である。口縁部はやや内傾し、指によるキザミ目が施される。

SK062

第197図710は鉢である。土坑の内部から出土し、内外面共に丁寧な調整が施される。口縁部や内湾し、底部に平行な筋状の圧痕がみられる。古墳時代前期前半の資料と考えられる。



第 198 図 SK063 遺構実測図



第 199 図 SK063 出土遺物実測図

SK063

SK063は調査区3に位置する。直径約1.9mの円形土坑である。断面は挿鉢状を呈し、埋土の観察からレンズ状に埋没したことがわかる。最下層の床面に近い位置からは拳大の礫が出土し、多くの遺物は2層から出土した。

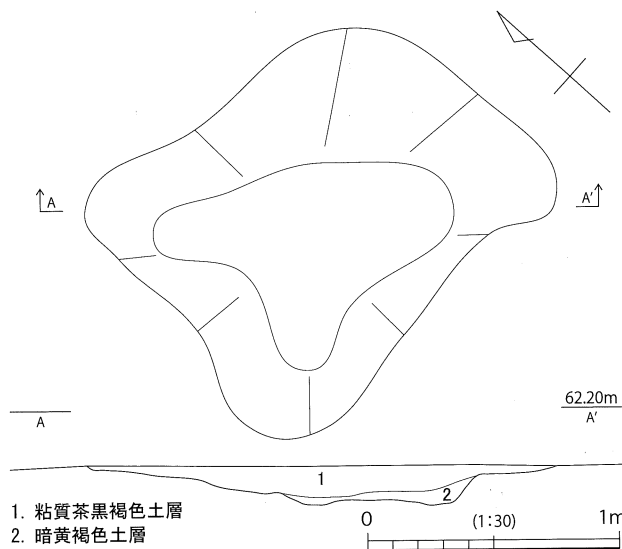
第199図711、712は壺である。711は口縁部の資料で口径は18.2cmを測る。口縁部は大きく外反し、その端部は肥厚しない。内外面共に横方向に太いミガキが施される。712は肩部に小さな段が形成され、その上に三条の沈線が巡る。胴部は丸みを帯び、頸部へと繋がる。内外面共に丁寧な調子が施される。

713～715は刻目突帯のある深鉢である。いずれも横方向に貝殻条痕が施され、その後ナデ調整が行われる。713は口縁端部が大きく外反する資料で、内面には二本の沈線が巡る。キザミ目は非常に密に施され、突帯は小さい。714は胴部の屈曲部から口縁部へ直線的に立ち上がる資料で、口縁端部内面には一条の沈線が巡る。キザミ目は非常に密に施され、突帯は小さい。715は直線的な口縁部である。突帯はやや幅広で平坦であり、やや大きいキザミ目を工具によって施す。

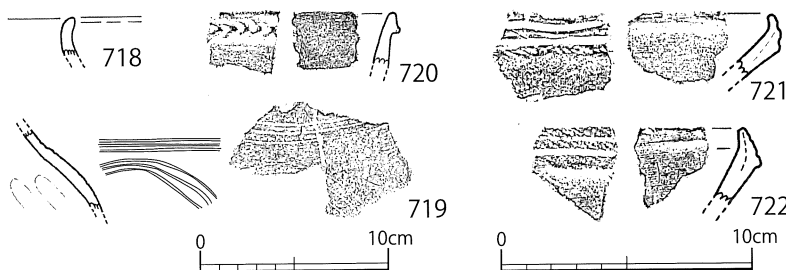
716はハケメのある深鉢である。外面には細かいハケメが施され、口縁部は大きく外反する。口縁端部には非常に細かく密にキザミ目が施される。

717は深鉢である。水平口縁を呈し、口縁部の外面と上面に太い沈線が施される。縄文時代後期の資料と考えられ、混ざり込みの資料と考えられる。

これらの資料から、本遺構の時期は弥生時代前期前半と考えられる。



第200図 SK064 遺構実測図



第201図 SK064 出土遺物実測図

SK064

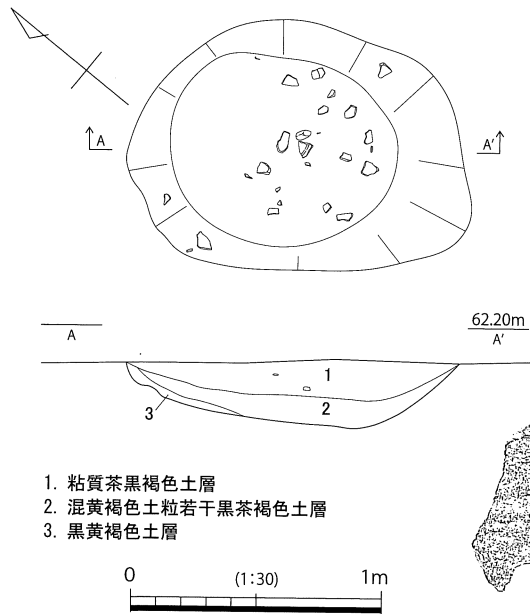
SK064は調査区3に位置する。長辺約1.8m、短辺約1.3mを測る不定形の土坑で、内部からは小片の土器が複数出土した。

第201図718、719は壺の口縁部である。口縁端部は短く外反し、内外面共に丁寧な調子が施される。719は肩部の資料で、小さな段が形成されその下に三条の沈線が巡る。重弧文は三本の沈線によって施される。

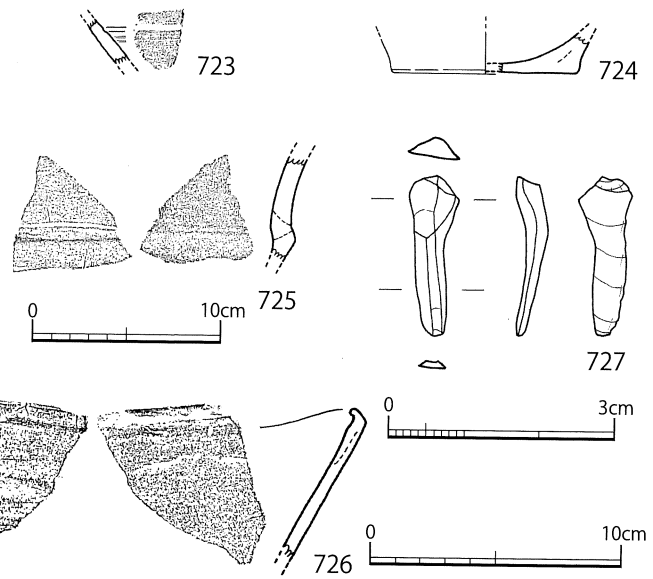
720は刻目突帯のある深鉢である。直線的に広がり、口縁端部直下には細かいキザミ目が密に施される。

721、722は深鉢の口縁部である。縄文時代後期の資料であり、混ざり込みと考えられる。

これらの遺物から、本遺構の時期は弥生時代前期前半と考えられる。



第202図 SK065 遺構実測図



第203図 SK065 出土遺物実測図

SK065

SK065は調査区3に位置する。直径約1.3mを測る円形の土坑である。埋土の観察から北西方向から埋没したことがわかり、1層から多くの土器が出土した。

第203図723は壺である肩部の資料で、三条の沈線が巡る。724は底部である。平底で、器面は非常に薄い。725は突帯文土器の深鉢胴部である。内外面共に条痕後ナデ調整を行い、屈曲部の上部には一条の沈線が巡る。

726は姫島産黒曜石製の石錐である。両面とも大きな縦方向の剥離がみられ、基部がやや厚みを持つ。縦断面は湾曲する。

727は無文の深鉢である。波状口縁を呈し、口縁端部は鉤形に内傾する。埋土への混ざり込み資料である。これらの遺物から、本遺構の時期は弥生時代前期前半と考えられる。

SK066

SK066は調査区3に位置する。直径約2.2mの円形の土坑である。1層からは拳大の礫が多く出土し、遺物もそれに多く混じって出土した。遺構の西部は縄文時代の土坑SK013の一部を掘り込んでいる。

第205図728は刻目突帯のある深鉢である。内外面共に横方向の貝殻条痕が施され、口縁端部からやや下の位置に密なキザミ目を施した突帯を巡らす。器面も薄く。突帯も非常に小さい。口縁部は大きく外反する。

729は条痕のある深鉢である。貝殻条痕が施され、口縁部は大きく外側へ開き直線的である。

730は深鉢胴部である。内外面共に条痕後ナデ調整を行い、屈曲部の上部には二条の沈線が巡る。屈曲部から上部は大きく外反する。

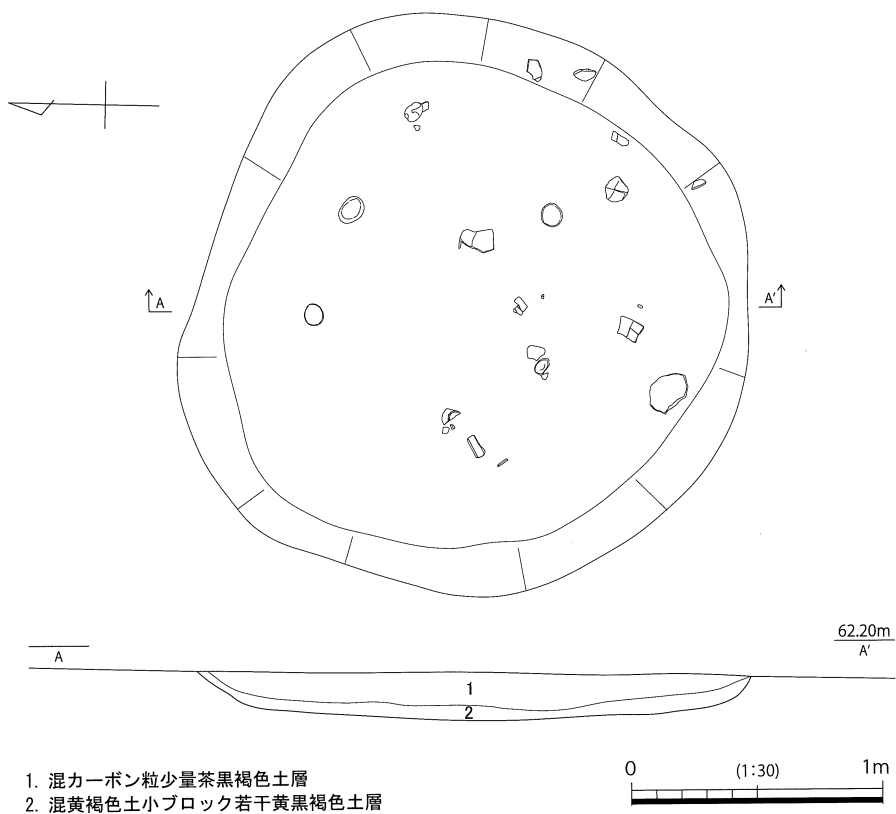
731は無文の深鉢である。水平口縁を呈し、口縁端部は短く立ち上がる。内外面共に丁寧な調整を施す。縄文時代後期の資料と考えられ、埋土への混ざり込み資料である。

732は浅鉢である。口縁部は屈曲部から大きく外反する、口縁部内面には段がみられる。

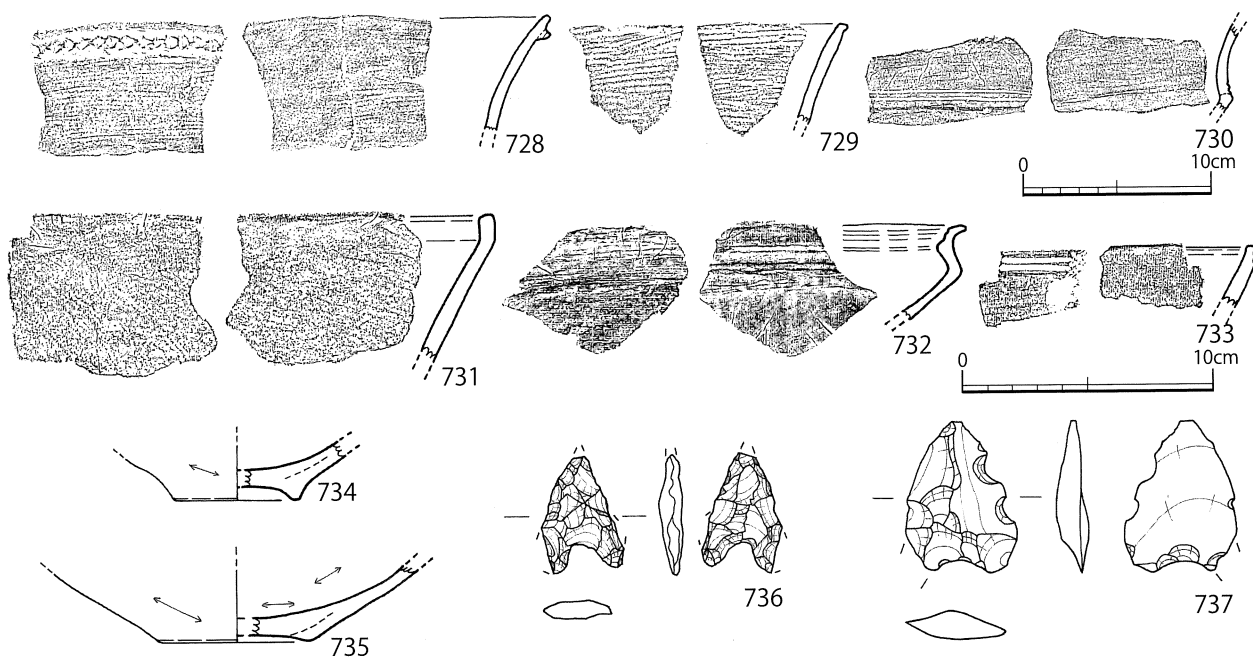
733は深鉢の口縁部である。口縁端部には二条の沈線が巡る。734、735は底部である。

第205図736、737、第206図738～741は石鏃である。742～744は安山岩製の摺石である。

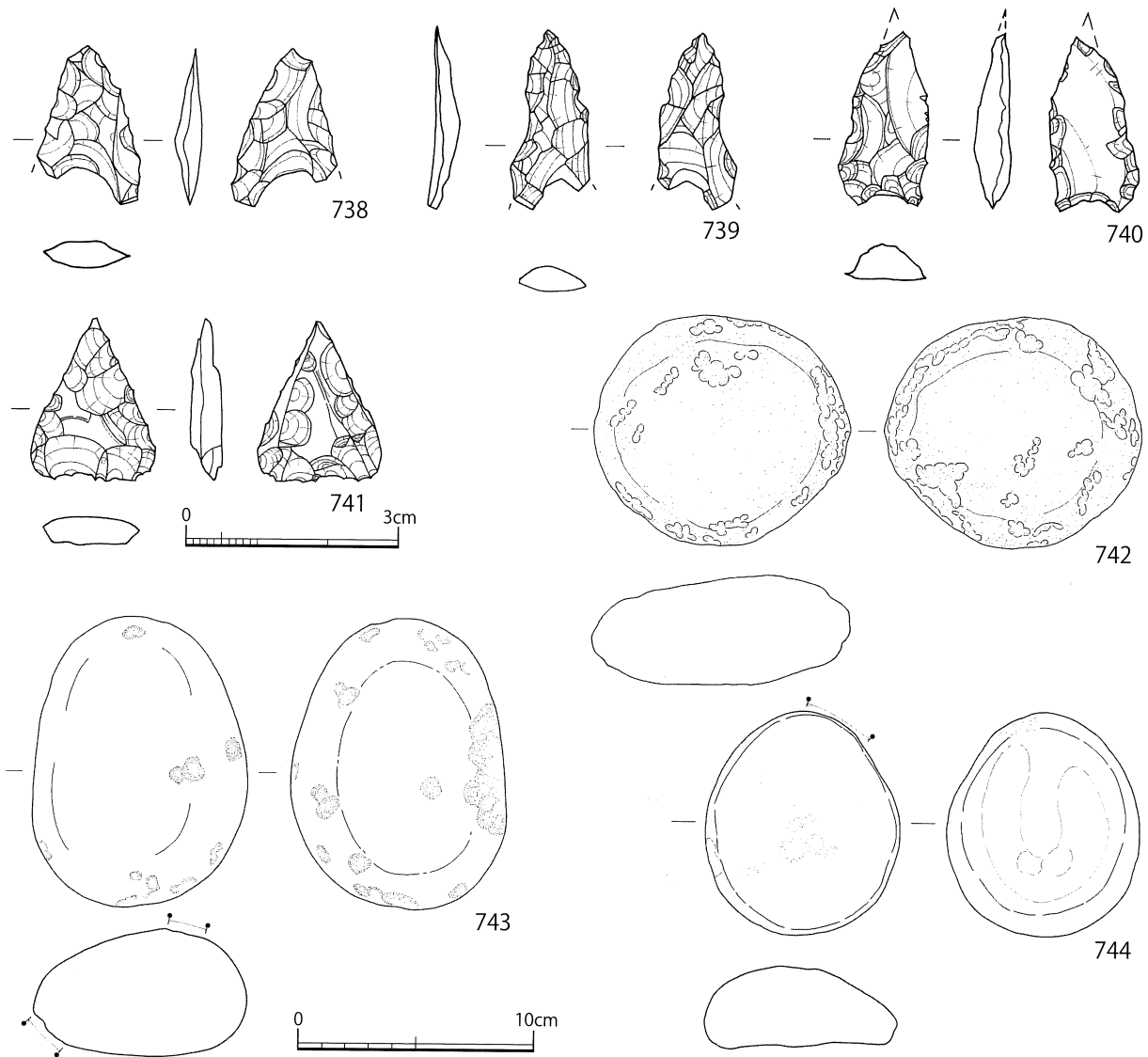
これらの遺物から、本遺構の時期は弥生時代前期前半と考えられる。



第204図 SK066 遺構実測図



第205図 SK066 出土遺物実測図(1)



第206図 SK066 出土遺物実測図(2)

SK067

SK067は調査区3に位置する。円形の土坑である。内部からは上層から複数の遺物の出土がみられた。

第207図745は深鉢である。内外面に共に横方向の貝殻条痕が施され、口縁部は内傾する。口縁端部は短く外反し、外面には非常に細かい線で格子状の線刻がみられる。縄文時代晩期の資料と考えられ、瀬戸内系の影響が考えられる資料である。

746はハケメがみられる深鉢である。口縁部は大きく外側に開き細かいキザミ目が施された突帯が巡る。

747、748は底部の資料である。749、754は石鏃である。751や752など非常に類似した形状もみられる。

これらの資料から、本遺構の時期は弥生時代早期～前期前半と考えられる。

SK068

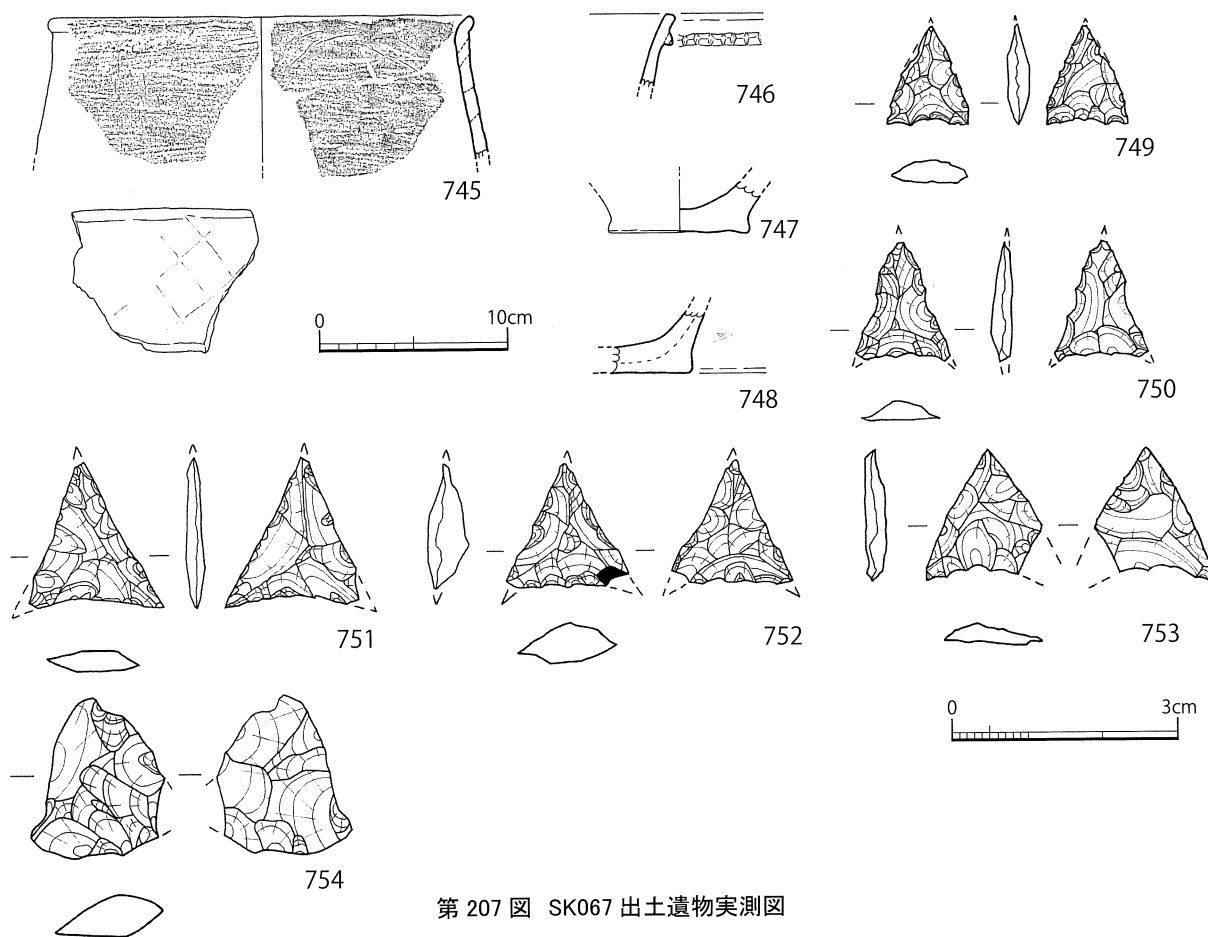
SK068は調査区4に位置する。円形の土坑で、内部からはまとめて弥生土器が出土した。

第208図755～758は甕である。755は口径28cmに反転復元でき口縁部はやや肥厚し、外側に開く。757は外面に細かいハケメが縦方向に施される資料で、胴部はほとんど膨らむことなく底部へと延びる。758は底部

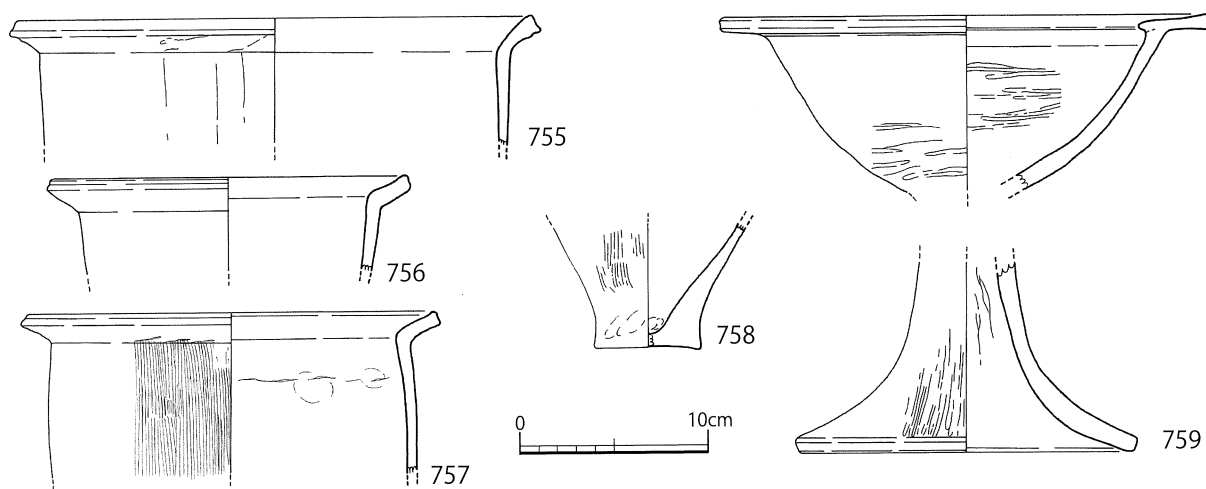
である。

759は高坏である。口縁部は鋤先状を呈し、坏部は深く膨らむ。前面にミガキが施され、丹塗はみられない。

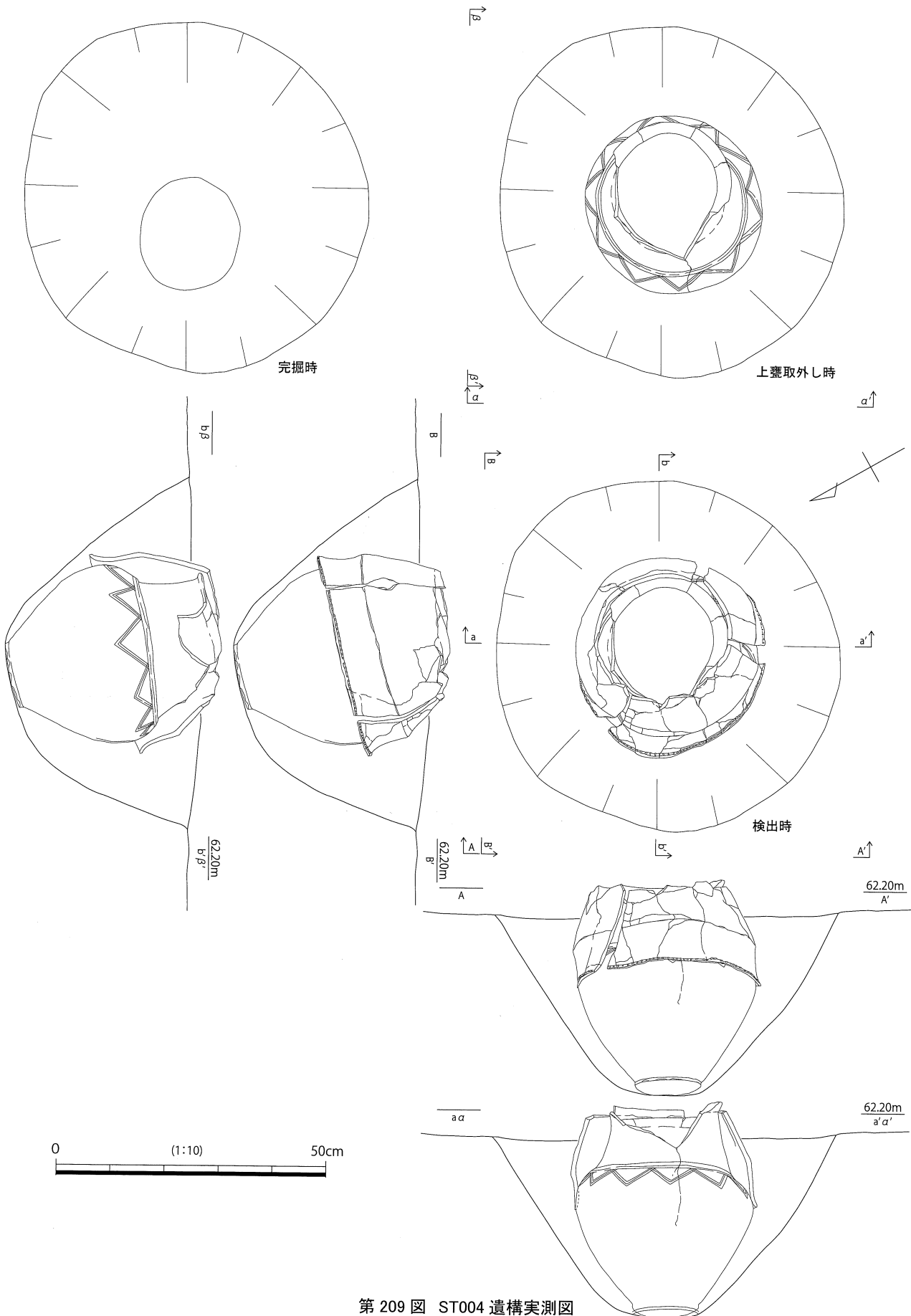
これら遺物から本遺構の時期は弥生時代中期後半と考えられる。

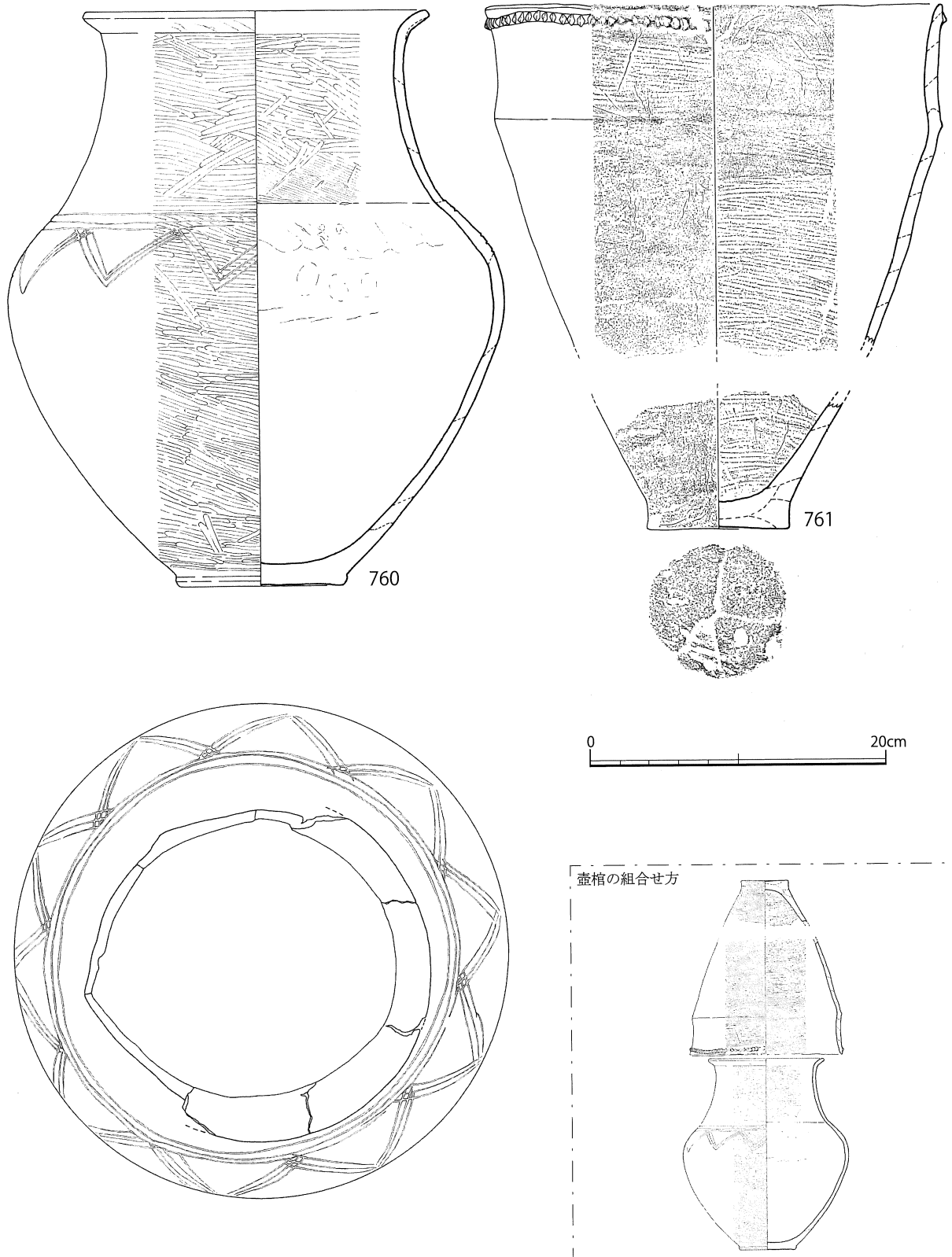


第 207 図 SK067 出土遺物実測図



第 208 図 SK068 出土遺物実測図





第 210 図 ST004 出土遺物実測図

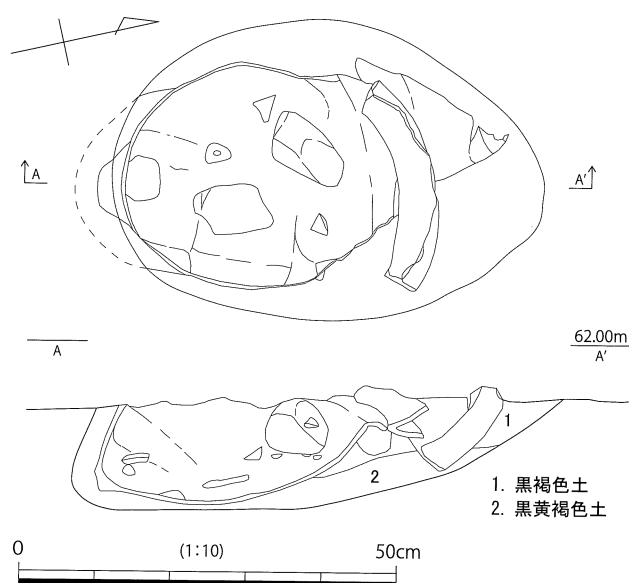
ST004

ST004は調査区3に位置する。直径約65センチの円形土坑で、断面は播鉢状を呈する。小児用の壺棺墓と考えられる。検出時は深鉢の底部断面がリング状に確認でき、内部には壺の口縁部の一部がのぞいていた。土器の外側の埋土からは遺物の出土はみられなかった。下の壺はやや南側に傾いて埋置され、その上から刻目突帯のある深鉢がさかさまに被せられていた。深鉢は土圧により大きく割れていたが、ほとんど形状を保っていた。深鉢を取り外すと下からは胎土が赤褐色の壺が現れ、口縁部を一部打ち欠いていた。おそらく埋葬に伴っての祭祀行為と考えられる。図面と写真の記録を済ませたのち、壺は内部に土を残した状態で、取り上げ、木綿等で養生を施したのち埋蔵文化財センターに持ち帰り内部の土を取り出した。壺の内部から中頃より、上に被されていた深鉢の底部出土し、比較的早い段階で、土圧により、内部に落ちていたことがわかった。また内部からは数点炭化物の出土をみたので、理化学分析を実施したが、土坑が縄文時代の包含層の上から掘り込まれていたために埋土に含まれる炭化物の可能性も考えられる。

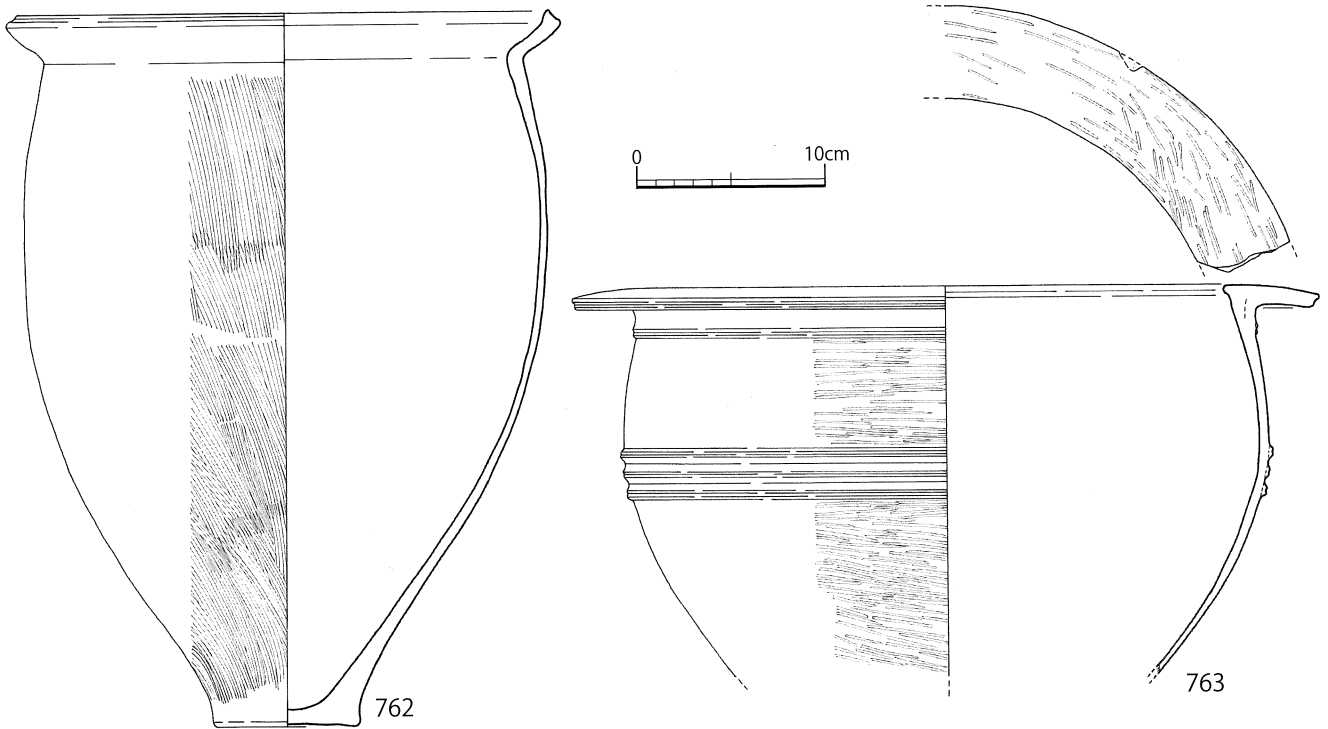
第210図760は壺である。外面には横方向を基調として丁寧なミガキが施される。内面も頸部の中位までは同様のミガキが施されるが、それより下にはやや粗いハケメが施されている。胴部の中位にもハケによる痕跡がみられ、ハケ調整を施したのちナデやミガキを行っていることがわかる。頸部にはやや鈍い段が形成され、その上には三条の沈線が巡る、三番目の沈線は途中で止まり完結しない。その下には山形文が施され、一部は一度描いたものの再度線を消し、山形文を描いた部分がみられる。一片は三本の直線であり、連続して山形文を描くことはなく、一辺ごとに描く。底部は平坦であり、口縁端部は短く外反し、断面の観察からやや肥厚させている。

761は刻目突帯のある深鉢である。内外面共に横方向の貝殻条痕が施され、外面の屈曲部から下はナデ調整が行われる。屈曲部から口縁部へは直線的に延び、やや外反する。口縁端部からやや下に突帯を巡らし、密に工具によってキザミ目が施される。底部は厚みが2cm程で平底である。底には殻斗果（ドングリか？）と考えられる圧痕が残る。

これらの遺物から、本遺構の時期は弥生時代前期前半と考えられる。



第 211 図 ST005 遺構実測図



第 212 図 ST005 出土遺物実測図

ST005

ST005は調査区4に位置する。長辺約62cm、短辺約40cmの楕円形の土坑で、小児用の甕棺墓である。甕棺の内部からは遺物の出土はみられなかった。主軸はやや東側に触れた南北方向で、上甕には丹塗を施した甕を用いる。埋土の観察から下甕を一度北側に傾け埋置したのちおよそ半部まで埋め、その後上甕を被せ、埋めたことがわかる。

第212図762は甕である。外面には細かいハケメが全体に施され、内面は丁寧にナデ調整が施される。底部は平坦で、厚みは1cm程である。胴部は丸みを帯び、口縁部は大きく跳ね上げられる。

763は丹塗が施される甕である。外面と口縁部上面には丁寧なミガキが施され、口縁部は鋤先状を呈する。口縁部直下には一条、胴部には三条の鈍いM字突帯が巡る。胴部は非常に丸みを帯び、外面には丹塗が施される。このような胴部に三条のM字突帯を持つ資料は宇佐の野口遺跡等で多く見られ、須玖Ⅱ式土器の遠賀川東系の中でも特に宇佐周辺に多く見られる。

これらの遺物から、本遺構の時期は弥生時代中期後半と考えられる。

第 214 図 764 ~ 766 は線刻絵画土器である。いずれも同一小土坑から出土したものの接合する資料はなく全容は不明である。同一個体と考えられる破片は五つあり、そのうち三つに線刻が確認された。内面には荒いハケメがはっきりと残り、黒色を呈する。外面はナデ調整を丁寧に施す。傾きは不明であるので、直立させ図化した。残存状態が悪いので全容は不明であるが、器種は壺と考えられる。764には数本の線刻があり、カーブを持ちながら描かれる。765は曲線の部分であり、楕円形の端の部分であろうか。766は平行に三本の線刻が施される資料で、これらの中では直線的な線で描かれる。

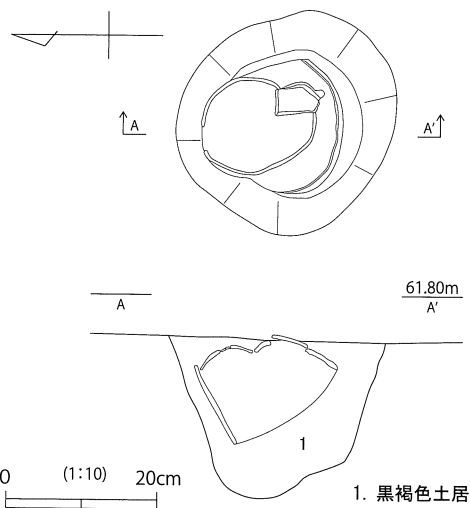
これらの遺物は弥生時代終末期と考えたい。

第4章 遺構と遺物

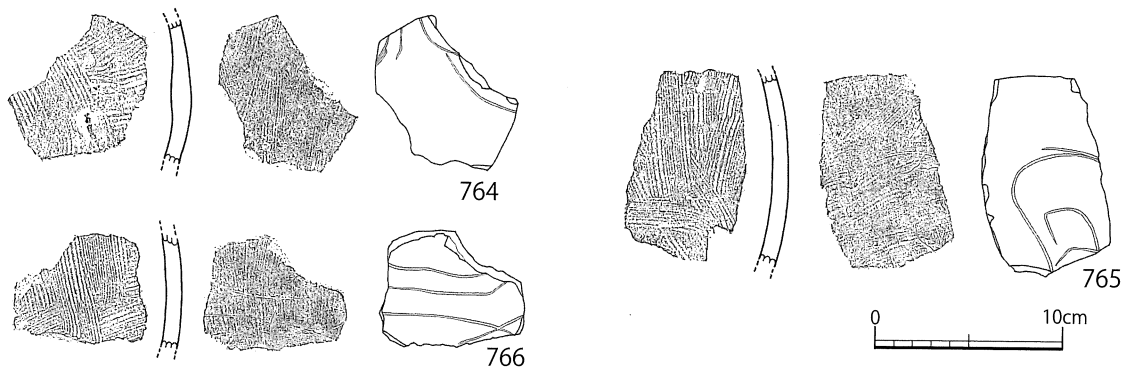
第215図767は甕である。口縁部下に段を持つ資料で、口縁端部と段の先端に非常に密なキザミ目が施される。口縁端部は短く外反する。

第216図768は壺の底部である。内外面共に斜め方向に丁寧なミガキ調整が施され、底部の端部のみはナデ消される。底はやや上げ底で、底部から胴部は大きく開く。弥生時代前期の資料と考えられる。

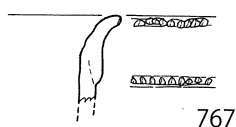
第217図769は広口壺である。口縁部、肩部、底部と三辺からなり接合点はみられないものの胎土や、調整から同一個体と考えられる。外面には所々に横方向のミガキがみられ、内面はナデ調整で仕上げられる。口縁部は大きく外側へ開き、やや外反する。胴部は丸みを帯び、底部へと延びる。底部は平底で、厚みは約1cmを測る。弥生時代中期後半の資料と考えられる。



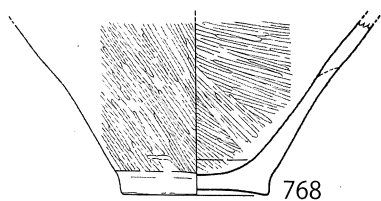
第213図 SP049 遺構実測図



第214図 SP041 出土遺物実測図



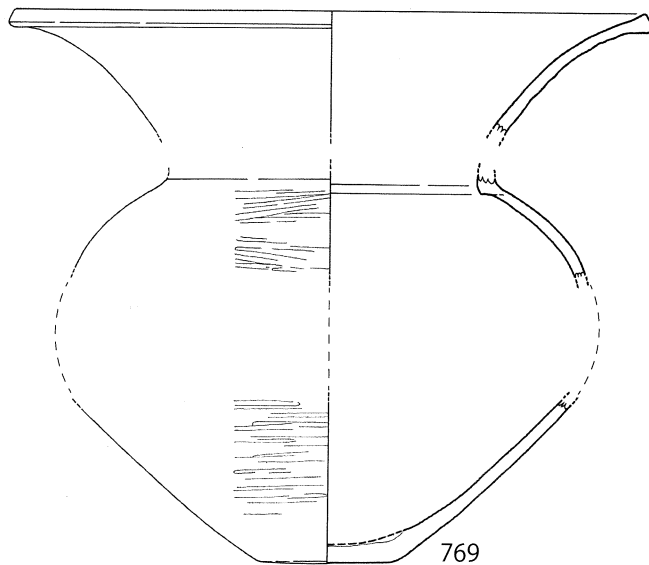
第215図 SP042 出土遺物実測図



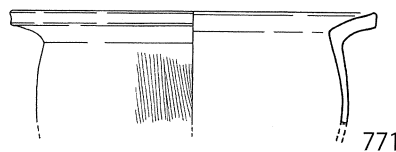
第216図 SP043 出土遺物実測図



第218図 SP045 出土遺物実測図



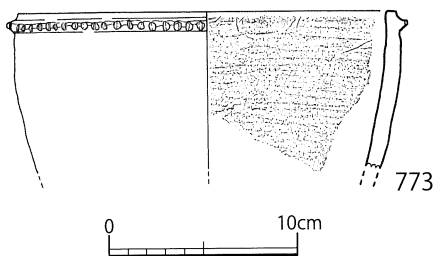
第217図 SP044 出土遺物実測図



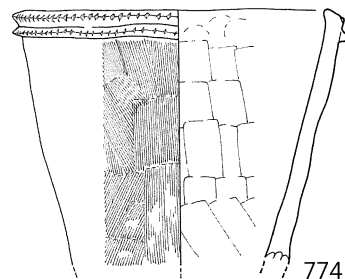
第219図 SP046 出土遺物実測図



第220図 SP047 出土遺物実測図



第221図 SP048 出土遺物実測図



第222図 SP049 出土遺物実測図

第218図770は刻目突帯のある深鉢である。内外面共に横方向の貝殻条痕が施され、口縁部のやや下がった位置に小さな突帯が巡る。やや大きなキザミ目を施す。弥生時代早期～前期の資料と考えられる。

第219図771は甕である。口径19.8cmを測る資料で、比較的小型の甕である。外面には縦方向にハケメがあり、内面はナデ調整が施される。口縁部はやや跳ね上げ状で、胴部は丸みを帯びる。弥生時代中期後半の資料と考えられる。

第220図772は刻目突帯のある深鉢である。胴部の屈曲部から口縁部へ直線的に延びる資料で、口縁端部はやや外反する。

第221図773は刻目突帯のある深鉢である砲弾形を呈する資料で、内外面共に横方向の貝殻条痕が施され、その上からナデ調整が行われる。口縁部はやや内湾し、端部に近接した位置にキザミ目が施される。弥生時代前期前半の資料である。

第222図774は小土坑の内部から逆さまに伏せられた状態で出土した。外面には荒いハケメが残り、口縁端部とその下の突帯に小さなキザミ目が施される。弥生時代中期の資料である。

第223図775～783は刻目突帯のある深鉢である。775は胴部の屈曲部から口縁部が直線的に内傾する資料である。口縁端部に接し鈍い突帯を巡らし、荒いキザミ目を施す。776は屈曲部から大きく外反する資料である。内面は条痕の上からナデ調整を施す。777は胴部の屈曲部から口縁部が外反しながら内傾する資料である。ほかの資料と比較すると器面は非常に薄く、口縁端部からやや下がった位置に突帯を巡らし、二枚貝の背面基部を利用してキザミ目を施す。刻目突帯文土器の中では比較的古層の資料と考えられる。778、779は口縁部が外反しながら内傾する資料である。778は口縁端部に接して突帯を巡らす。780は口縁部が直線的に開く資料である。突帯が非常に高さをもって施され、間隔をあけてキザミ目を施す。781は口縁部が大きく外反する資料である。口縁端部に接し細かいキザミ目を施した突帯が巡る。器面は非常に薄い783は口縁部が大きく開く資料である。キザミ目は非常に鋭く内面には一条の沈線が巡る。これらの資料は弥生時代早期～前期の資料と考えられる。

784は深鉢である。内外面共に貝殻条痕が施され、口縁部は直線的に内傾する。口縁端部に突帯は巡らない。

785～788は底部である。785は前面に条痕を施す資料である。底は平底で厚みは約2cmを測る。

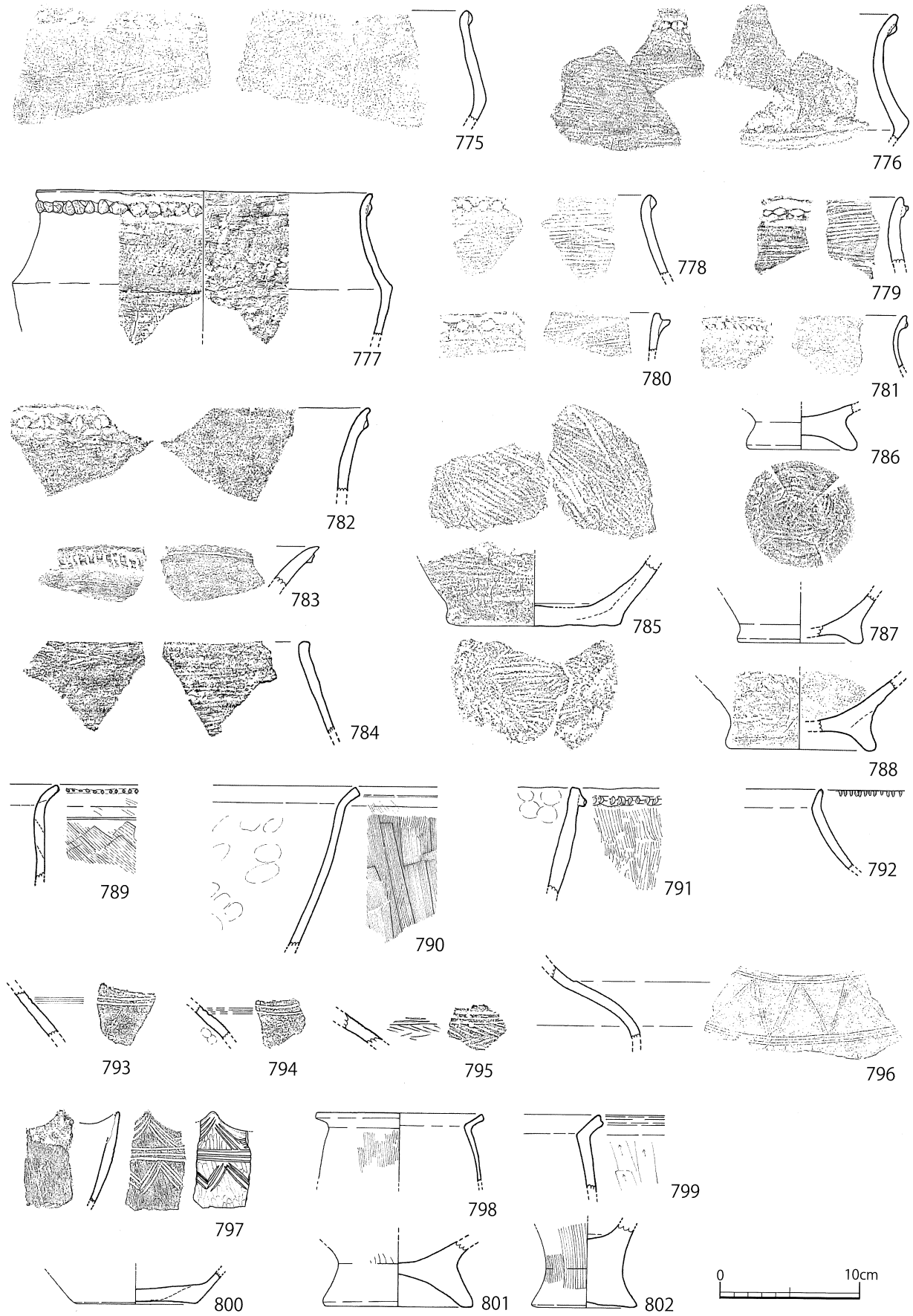
789～791は甕である。789口縁部は短く外反し、口縁端部には細かいキザミ目が2～3mm間隔で施され、その下には一条の沈線が巡る。791は口縁部下部にキザミ目を施した突帯が巡る資料である。これらの資料は弥生時代前期の資料と考えられる。

792～796は壺である。792は口縁端部にキザミ目が施された資料で、内外面共に丁寧な調整が施される。口縁端部は短く外反する。795は外面に羽状文が施される。792は大型の壺で、肩部には直線的な線刻で沈線間に山形文が施される。山形文の上部には明確な段がみられる。これらの資料は弥生時代早期～前期の資料と考えられる。

797は鉢と考えられる。口縁部は波状を呈し、その下部には波状に対応する様に山形文が施される。その下には三条の沈線が巡り、また山形文が施される。弥生時代前期の資料と考えられ、波状口縁を呈する点などは瀬戸内系の影響が考えられる。

798、799は小型の甕である。口縁部はやや跳ね上げられる。弥生時代中期後半と考えられる。

800～802は底部である。801は中空脚台を呈し、外面には荒いハケメが残る。802は非常に厚みのある底部で、底の中心部ややへこむ。外面にはハケメが残る。これらの資料は弥生時代中期後半と考えられる。



第 223 図 包含層出土遺物実測図

第3節 平安時代～鎌倉時代

SK069

SK069は調査区1に位置する。長辺約1.9m、短辺約0.9mの長楕円形の土坑で、埋土の観察から、一時期に埋没したことがわかる。内部からは瓦器椀の底部が出土した。

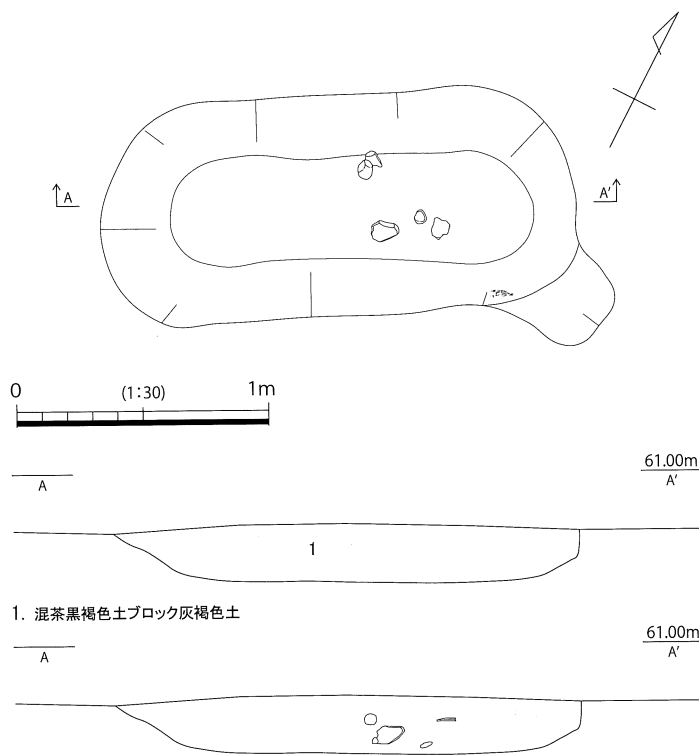
第225図803は瓦器椀の底部である。反転復元から比較的大型の資料と考えられ、高台は三角形を呈する。器面の摩耗が激しく詳細な調整は確認できない。12世紀の資料と考えられる。

SK070

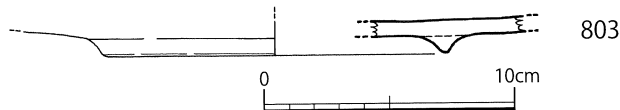
SK070は調査区3に位置する。直径約1mの円形土坑である。内部からは埋土へ流入したと考えられる縄文土器と瓦器椀がそれぞれ一点ずつ出土した。

第226図804は無文の深鉢である。口縁部は緩やかに外反し、内外面共に貝殻条痕が施される。縄文時代晩期の資料と考えられる。

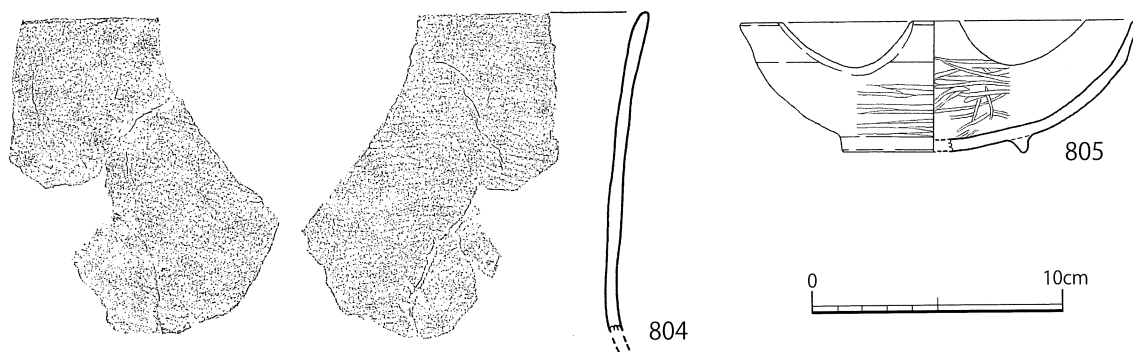
805は瓦器椀である。全体のおよそ半分が残存し、口縁部の一部を欠く。内外面共にミガキが施され、高台は三角形を呈する。12世紀の資料と考えられる。



第 224 図 SK069 遺構実測図

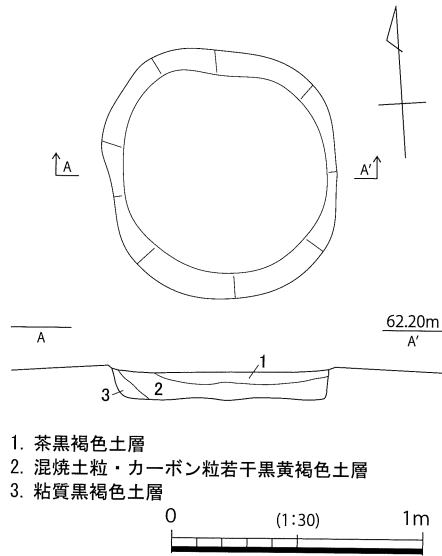


第 225 図 SK069 出土遺物実測図



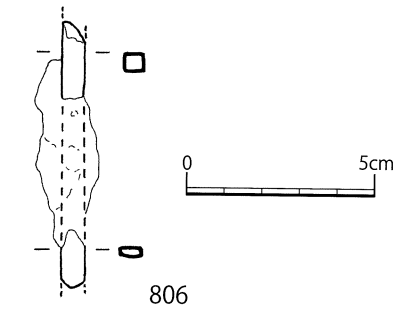
第 226 図 SK070 出土遺物実測図

第4章 遺構と遺物



- 1. 茶黒褐色土層
- 2. 混焼土粒・カーボン粒若干黒黄褐色土層
- 3. 粘質黒褐色土層

第 227 図 SK071 遺構実測図



第 228 図 SK071 出土遺物実測図

SK071

SK071は調査区3に位置する。直径約90cmの円形土坑である。底は皿状で、埋土の観察から西側から次第に埋没したことがわかる。底の中央部からは鉄器が出土した。埋土からは他に土器等の出土はみなかった。

第228図806は不明鉄器である。全体は錆により膨らみ、先端部の一部は原形を保っている。上部の断面は正方形を呈し、下部の断面は長方形を呈する。釘等の可能性が考えられる。埋土の観察や、周辺遺構との関係から中世の土坑と考えられる。

SK072

SK072は調査区3に位置する。直径約1mの円形土坑で、底は皿状を呈する。深さは約40cmを測り、SK073の上から掘り込まれている。埋土の観察から北側より埋められたことがわかり、内部からは2層を中心に遺物が複数出土している。小片が非常に多く、比較的大型の資料を図化した。

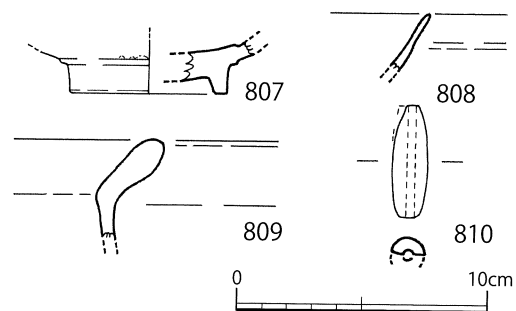
第229図807は白磁碗の底部である。外面の一部に若干の釉がみられ、大部分は釉が掛からず地肌が見えている。底にはコの字を呈する高台が削り出される。

808は瓦器碗である。口縁部の資料で、外面に緩やかな段が巡る。器面の摩耗が激しく詳細な調整は確認できない。

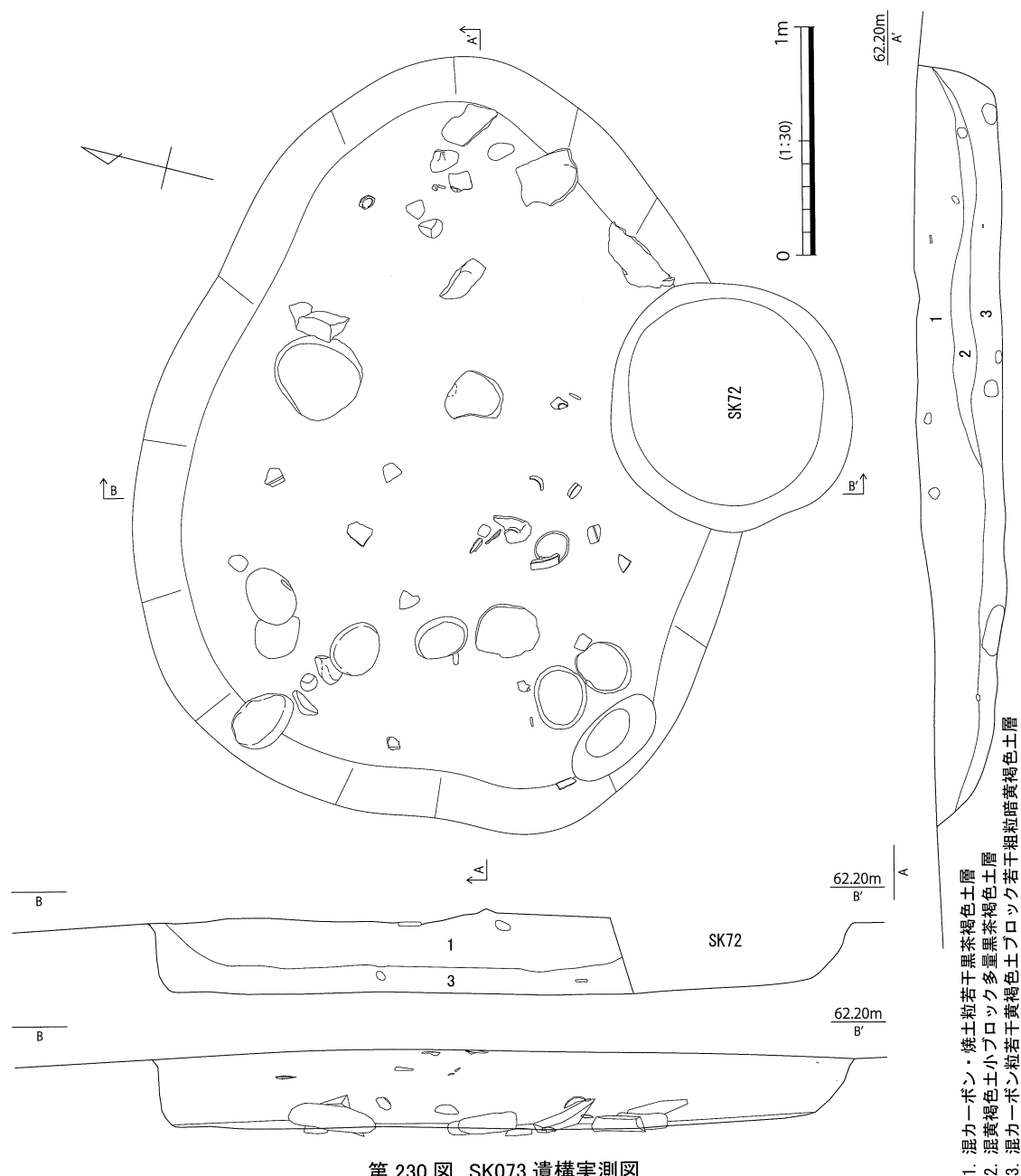
809は土鍋である。口縁部の資料で、内外面共に丁寧な調子が施される。口縁部は肥厚し、大きく外側に開く。

810は土錘である。全体のおよそ半部を欠き、やや太さのある形状である。

これらの資料から、本遺構の時期は12世紀と考えられる。



第 229 図 SK072 出土遺物実測図



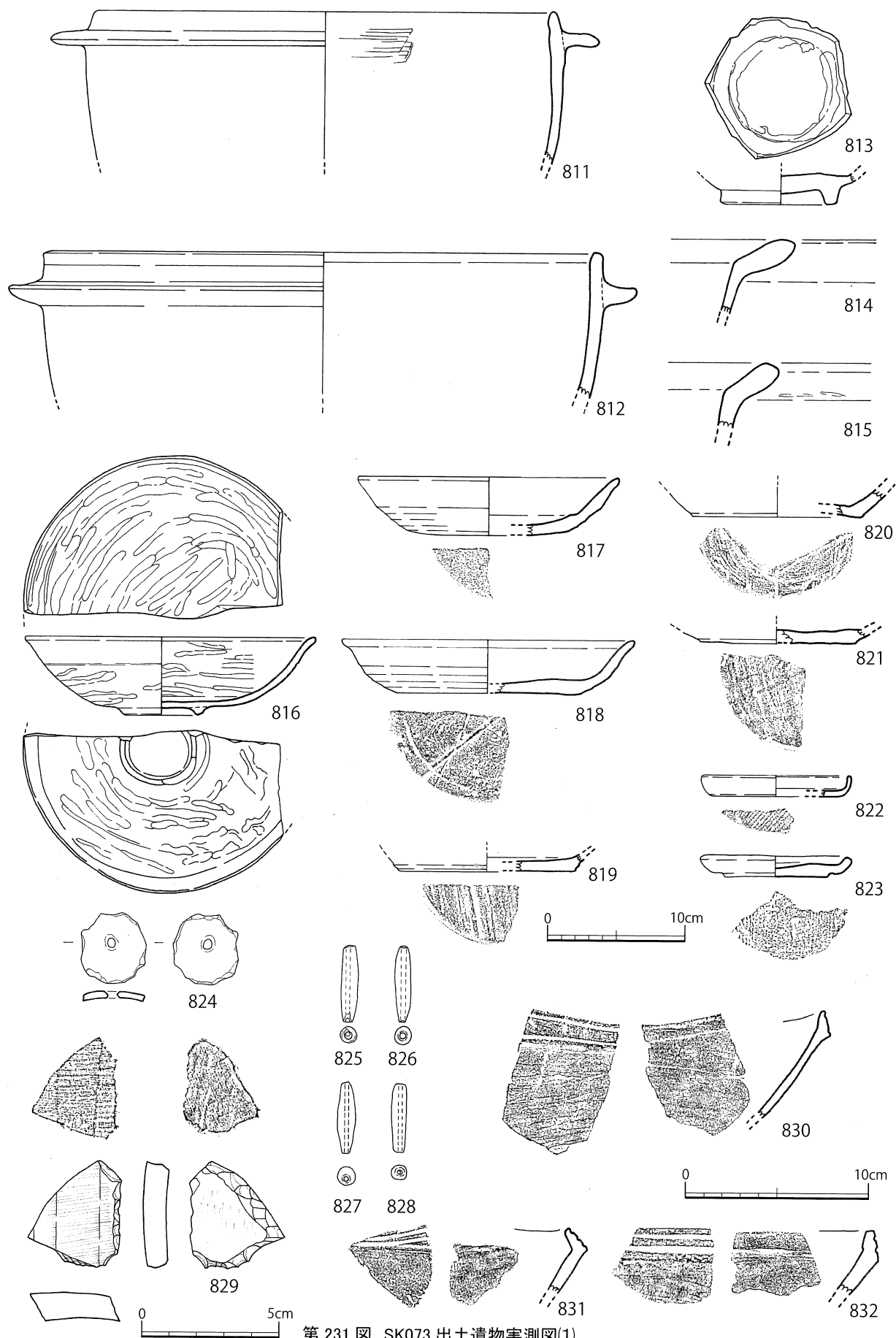
第 230 図 SK073 遺構実測図

SK073

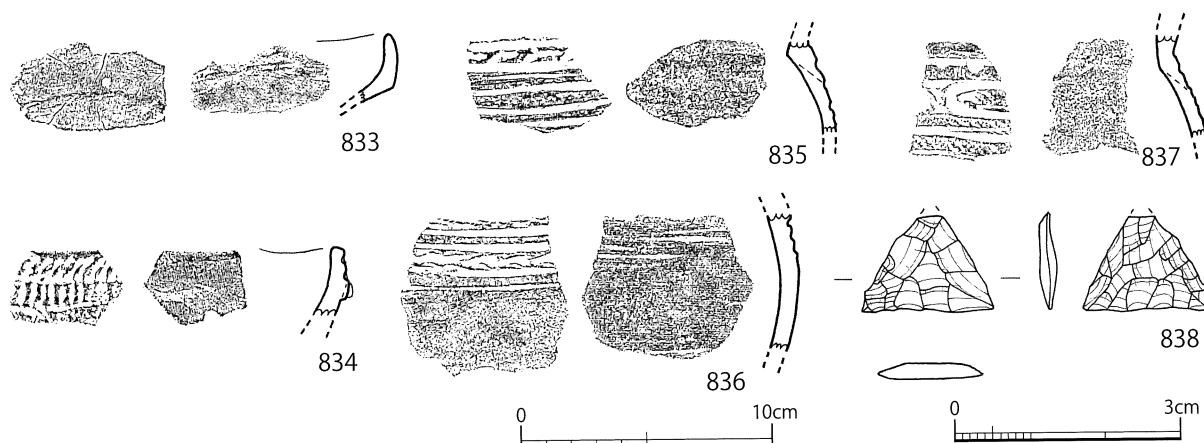
SK073は調査区3に位置する。長辺約3.4m、短辺約2.7mを測る楕円形の土坑である。内部からは底に張り付いたように人頭大の礫が多く出土した。埋土の観察から、東側から埋められたと考えられ、土坑の一部をSK072に切られている。遺物は主に1層と3層から出土し、3層からの出土遺物には縄文土器がほとんど見られなかった。

第231図811、812は土師質の羽釜である。811は羽釜の上部の資料で、内面には荒いハケメが一部に残る。外面は丁寧にナデ調整が施される。口縁部はやや内湾し口縁端部から約2cm下がった位置に錨状の突帯が巡る。この突帯は約2cmの長さで、丁寧にナデられている。812は口縁部が直線的に延びる資料で、これも同様に口縁端部から約2cm下がった位置に長さ約2cmの錨上の突帯が巡る。突帯はやや上向きである。内外面共に丁寧な調整が施される。

813は白磁碗の底部である。乳白色の釉が内面に掛かり、見込みには環状に釉が掛からない部分がみられる。



第 231 图 SK073 出土遺物実測図(1)



第232図 SK073 出土遺物実測図(2)

814、815は土鍋である。口縁部は肥厚し、大きく外側へ開く。内外面共に丁寧な調整が施される。

816は瓦器椀である。全体のおよそ半分が残存し、内外面には非常に太いミガキが一定方向に施される。高台は4cmを測り、口径は15.9cmを測る。口縁端部は緩やかに外反し、大きく開く。高台はやや退化し小さくなるものの三角形を呈する。高台の一部は指に抑えられ潰れている。

817～821は土師器の坏である。817、818は底部が丸みを帯びる資料で、体部が底部と同じ厚みで続き口縁部は大きく開く。いずれも底部には板状圧痕が残る。819～821は底部が平底のタイプである。いずれも口縁部を欠き全体像は不明である。820の底には糸切り痕が残り、819、821には板状圧痕が残る。

822、823は土師器の小皿である。822は非常に器面が薄く、底部から短く直線的に口縁部が立ち上がる。823は底部に厚みを持つ資料で、そのまま厚みを保持して口縁部は短く外側へ開く。

824は土器片を再加工品した有孔円盤である。体部と考えられる破片を円形に加工し、中心部には直径約5mmの孔が穿たれる。土器片は胎土や器面の特徴から弥生時代中期の甕を利用したものか。

825～828は土錘である。細身の土錘で、いずれも完形である。

829は滑石製の石鍋である。破片にはなっているが、外面には加工痕が残る。

これらの資料から本遺構の時期は12世紀末から13世紀初頭と考えられる。以下の遺物は1層を中心に出土したもので、埋土への流入と考えられる。

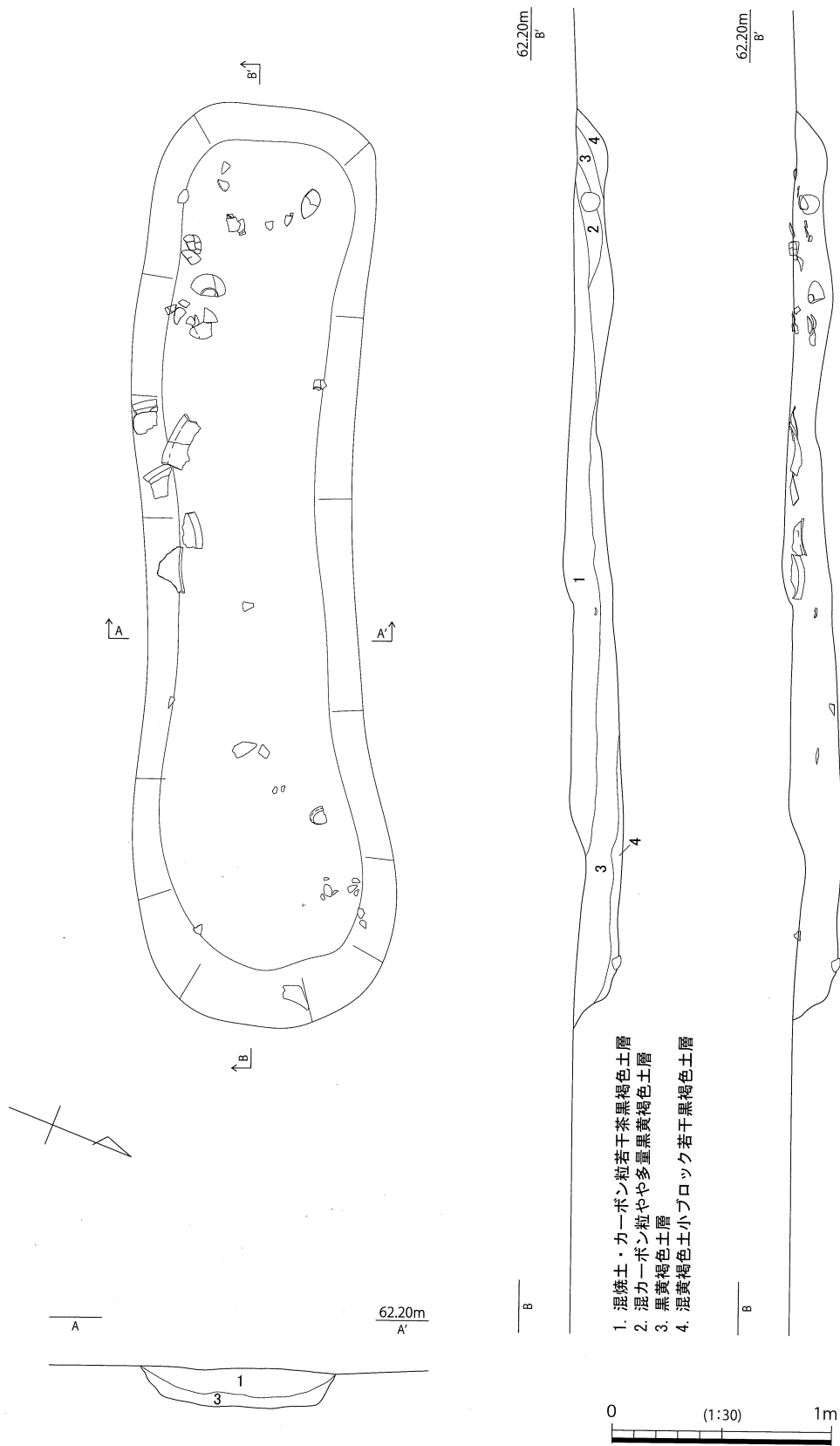
830、831は波状口縁を呈する深鉢である。口縁部には二条の沈線が巡る。832は水平口縁を呈する深鉢である。短く立ち上がった口縁部には太い二条の沈線が巡る。

第232図833は無文の波状口縁を呈する深鉢である。頂部に円形の刺突がみられる。内外面共に丁寧な調整が施される。

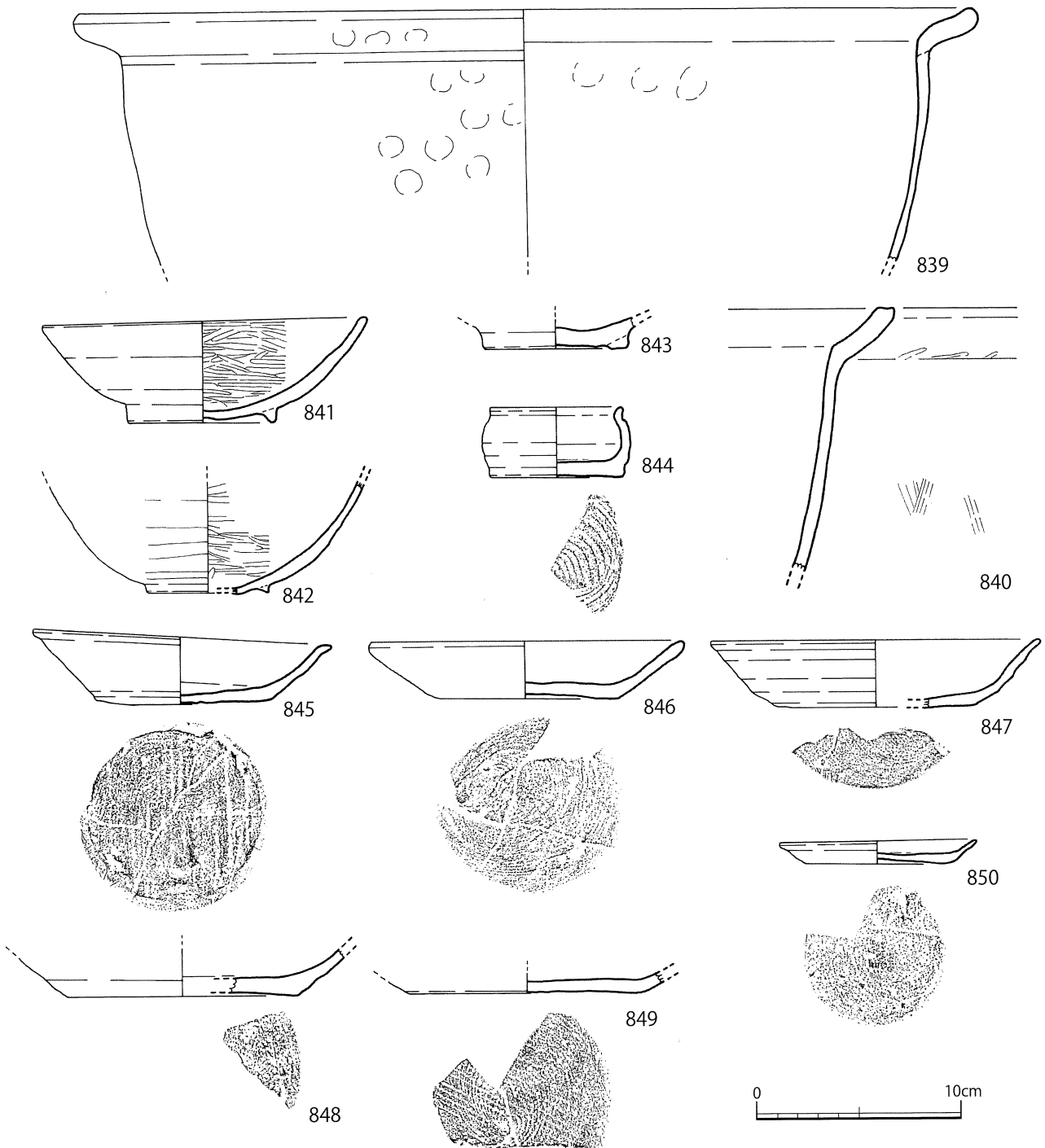
834は口縁端部に押し引き文が施される資料である。口縁部は波状を呈し、外面には連続した押し引き文がみられる。船元式の深鉢にみられる特徴である。

835～837は深鉢の胴部である。沈線や縄文等の施文を施し、内外面共に丁寧な調整が施される。

838は姫島産黒曜石製の石鏃である。



第 233 図 SK074 遺構実測図



第234図 SK074 出土遺物実測図

SK074

SK074は調査区3に位置する。長辺約4.2m、短辺約1mの長楕円形の土坑で、横方向の断面はU字状を呈する。埋土の観察からレンズ状に埋没したことがわかり、西側を中心に比較的形状を保った土器が多量に出土している。遺物は底の直上ではなく、1層を中心に出土している。

第234図839、840は土師質の土鍋である。839は内外面共に丁寧な調整を施し、胴部の器面は薄く、口縁部は肥厚させている。胴部は丸みを帯び底部へと延び、口縁部は大きく外側へ開く。840も同様の資料であるが、外面には荒いハケメが一部に残り、口縁部はやや立ち上がる。

第4章 遺構と遺物

841は土師器の椀である。内面は丁寧なミガキが横方向に施され、外面はナデ調整により仕上げられる。内面は黒色を呈している。高台はやや丸みを帯びた三角形を呈しており、ほぼ完形の資料である。

842は瓦器椀である。口縁部を欠く資料で、内面には荒いミガキが施される。体部は深くつくられており、退化し小さな高台がつけられる。

843は白磁椀の底部である。高台は非常に短く、見込みの中心部はやや盛り上がる。

844は土師器の小坏である。底は平底で、糸切り痕が残る。体部はやや膨らみ、口縁端部は短く外反する。底部から口縁部へかけ器面はやや薄くなる。類例をあまり見ない資料で、大きさや口縁部が短く立ち上がる点などは青磁製の合子を模倣した可能性も考えられる。

845～849は土師器の坏である。845は底面に板状圧痕が残る資料で、体部が底部と同じ厚みで続き口縁部は大きく開き口縁端部は短く外反する。846は底面に糸切り痕が残る資料である。口縁部は直線的に広がる。

850は土師器の小皿である。底面には糸切り合痕が残り、やや中心部がへこむ。口縁部は短く立ち上がり、やや外側へ開く。

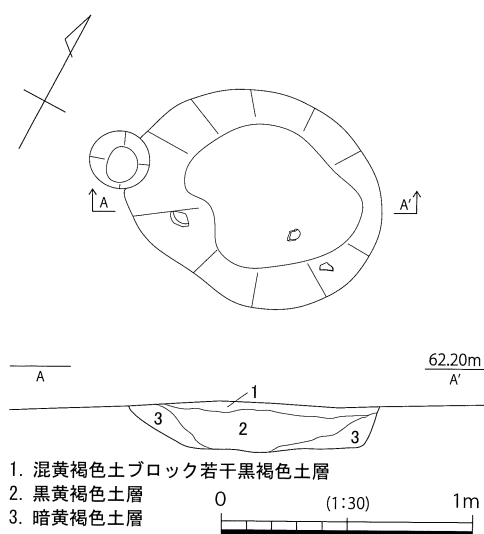
これらの資料から、本遺構の時期は13世紀と考えられる。

SK075

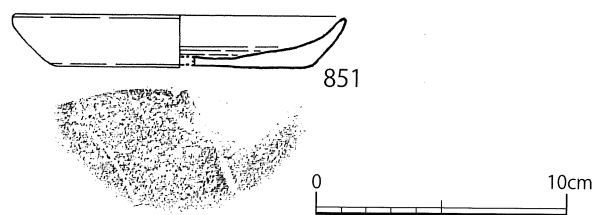
SK075は調査区3に位置する。直径約90cmの円形の土坑で、埋土の観察からレンズ状に埋没したことがわかる。内部からは数点の土師器が出土したものの、図化に耐えうるものは1点のみであった。

第236図851は土師器の坏である。底面には板状圧痕が残り、底部の中心はやや薄い。口縁部は短く立ち上がり、外側へ開く。

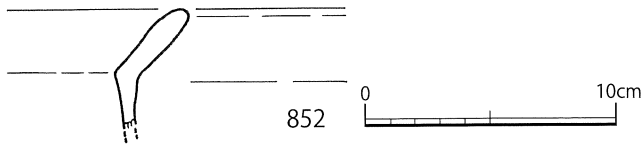
この資料から、本遺構の時期は12世紀～13世紀と考えられる。



第235図 SK075 遺構実測図



第236図 SK075 出土遺物実測図

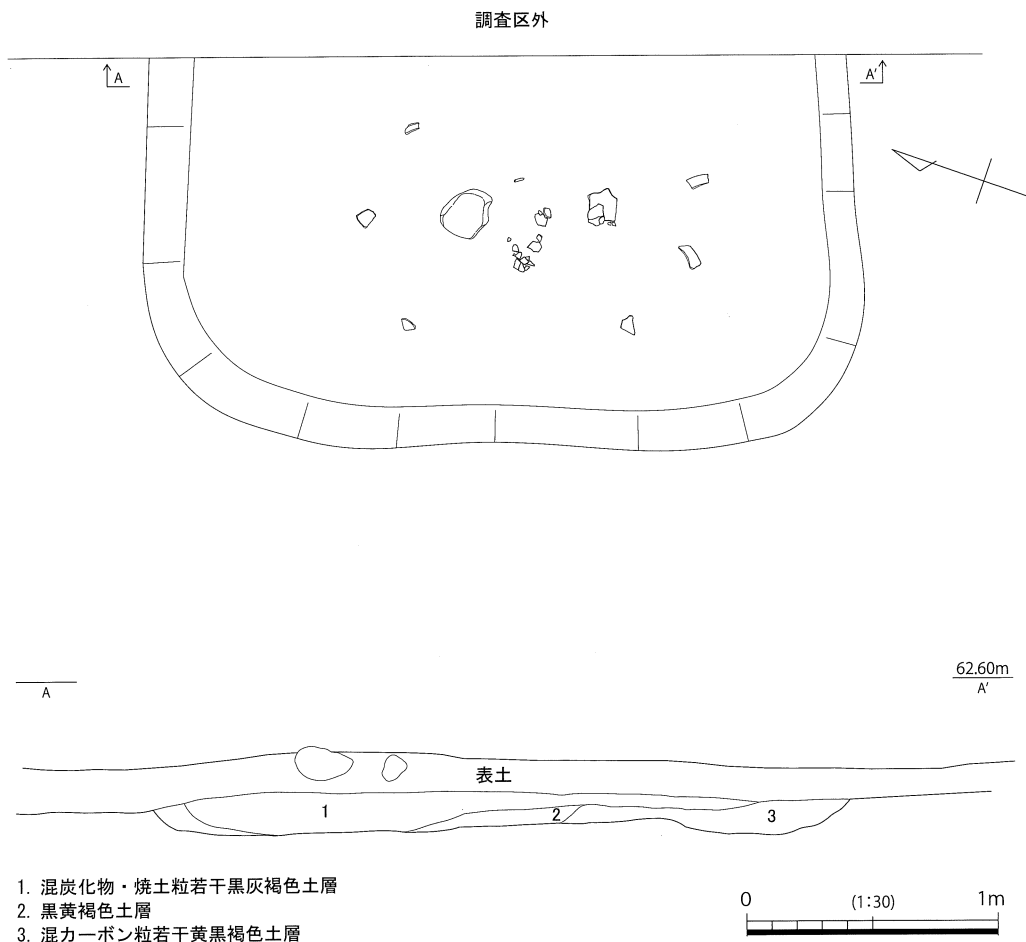


第237図 SK075 出土遺物実測図

SK076

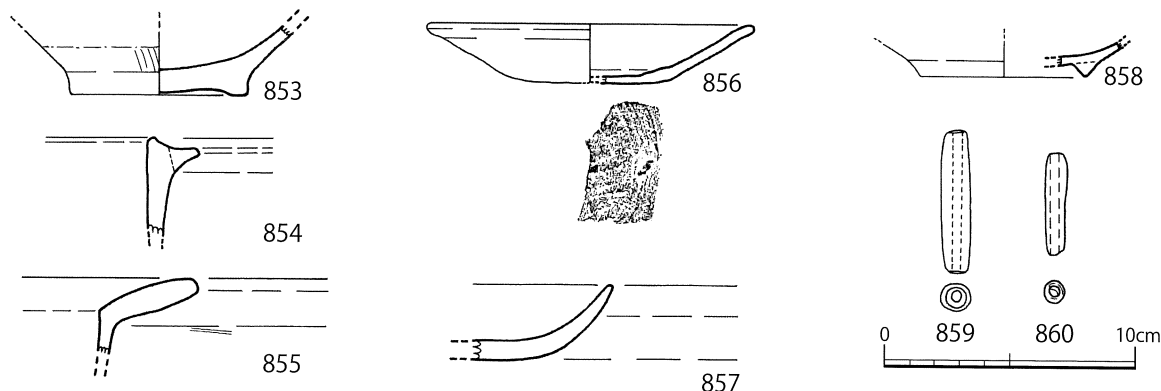
SK076は調査区3に位置する。直径約90cmの円形の土坑である。底に近い位置からは土器片が数点出土した。

第237図852は土鍋である。口縁部は肥厚し、大きく外側へ開く。12世紀から13世紀の資料と考えられる。



- 1. 混炭化物・焼土粒若干黒灰褐色土層
- 2. 黒黄褐色土層
- 3. 混カーボン粒若干黄黒褐色土層

第238図 SK077 遺構実測図



第239図 SK077 出土遺物実測図

SK077

SK077は調査区3に位置する。全体のおよそ半分は調査区外であり、残存する状況から方形の土坑であると考えられる。遺物は床面の直上から多く出土しており、人頭大の礫も複数埋土には含まれていた。埋土の観察から北側から次第に埋没したと考えられる。

第239図853は白磁の椀である。内外面に乳白色の釉がかかり、高台は短く幅は約9mmである。底の中央部がやや張り出す。

854は土師質の羽釜である。口縁端部から約2cm下がった位置に鏝状の突帯が巡る。この突帯は約2cmの長さで、丁寧にナデられている。

855は土師質の土鍋である。内外面共に丁寧な調整を施し、胴部の器面は薄く、口縁部は肥厚させている。

856、857は土師器の土鍋である。856は底面に板状圧痕が残る資料で、体部が底部と同じ厚みで続き口縁部は大きく。857は口縁部が短く立ち上がる資料で、器面の摩耗が激しく細かい調整は観察できない。

858は土師器の椀である。内外面共に丁寧な調整を施し、高台は三角形を呈している。

859、860は土錘である。細身の土錘で、いずれも完形である

この資料から、本遺構の時期は12世紀～13世紀と考えられる。

SK078

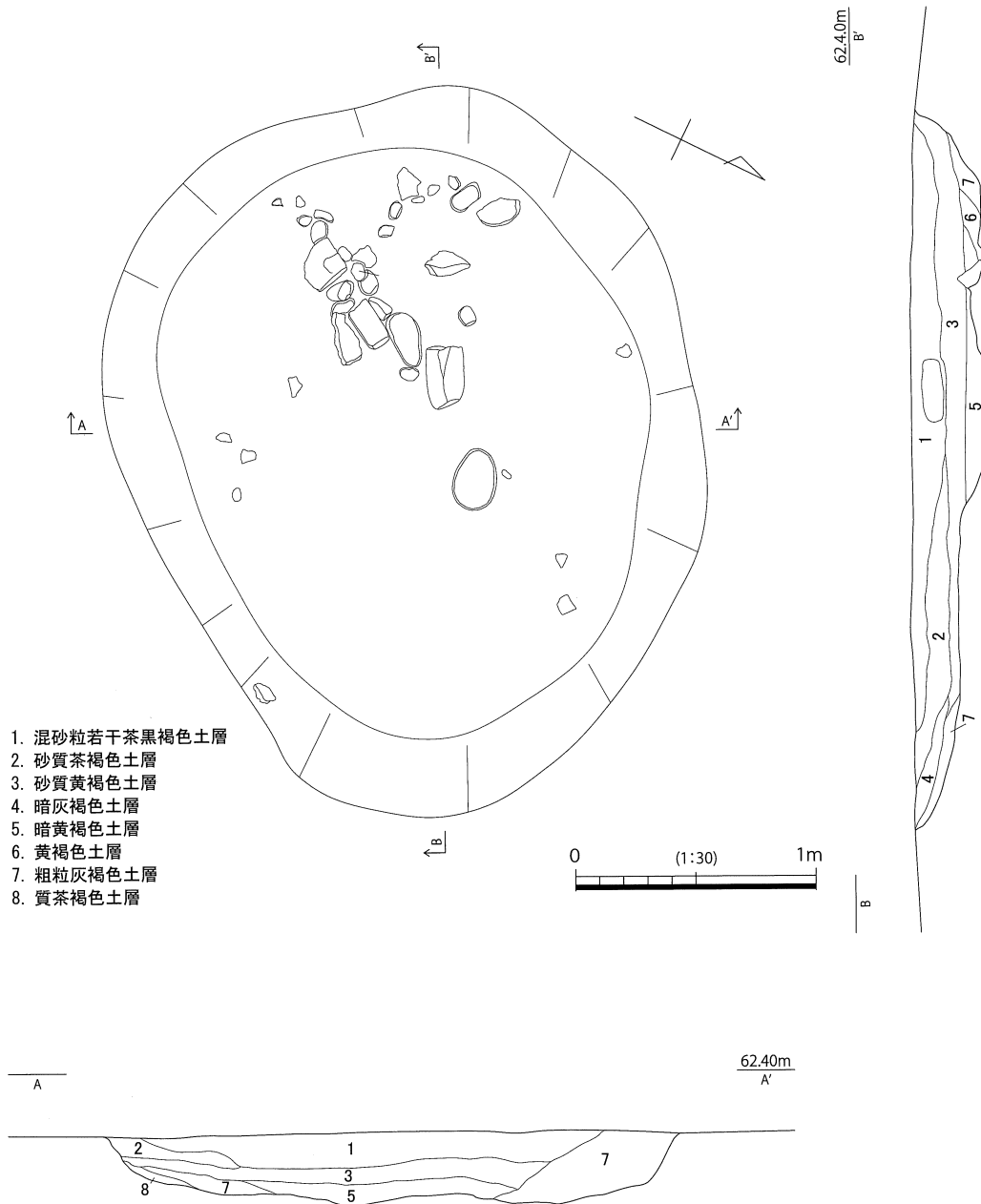
SK078は調査区3に位置する。長辺約3m、短辺約2.5mの楕円形の土坑である。床面には人頭大の礫が集中して配されている。遺物もこの礫が集中する3～5層に集中している。埋土の観察から一度北側から遺物をほとんど含まない土で埋められ、その後次第に埋没したと考えられる。

第241図861は白磁の椀である。内外面共に乳白色の釉が施され、口縁部は玉縁状を呈する。小片で反転復元はできないが、比較的口径の大きな資料と考えられる。

862は瓦器椀である。内外面ともに口縁部の資料で、外面に緩やかな段が巡る。内外面共に丁寧な調整が施される。

863は土師器の坏である。底部が丸みを帯びる資料で、体部が底部と同じ厚みで続き口縁部は大きく開く。底には糸切り痕が残る。

864、865は須恵器である。864は坏蓋、865は焼成不良の高坏の脚部である。



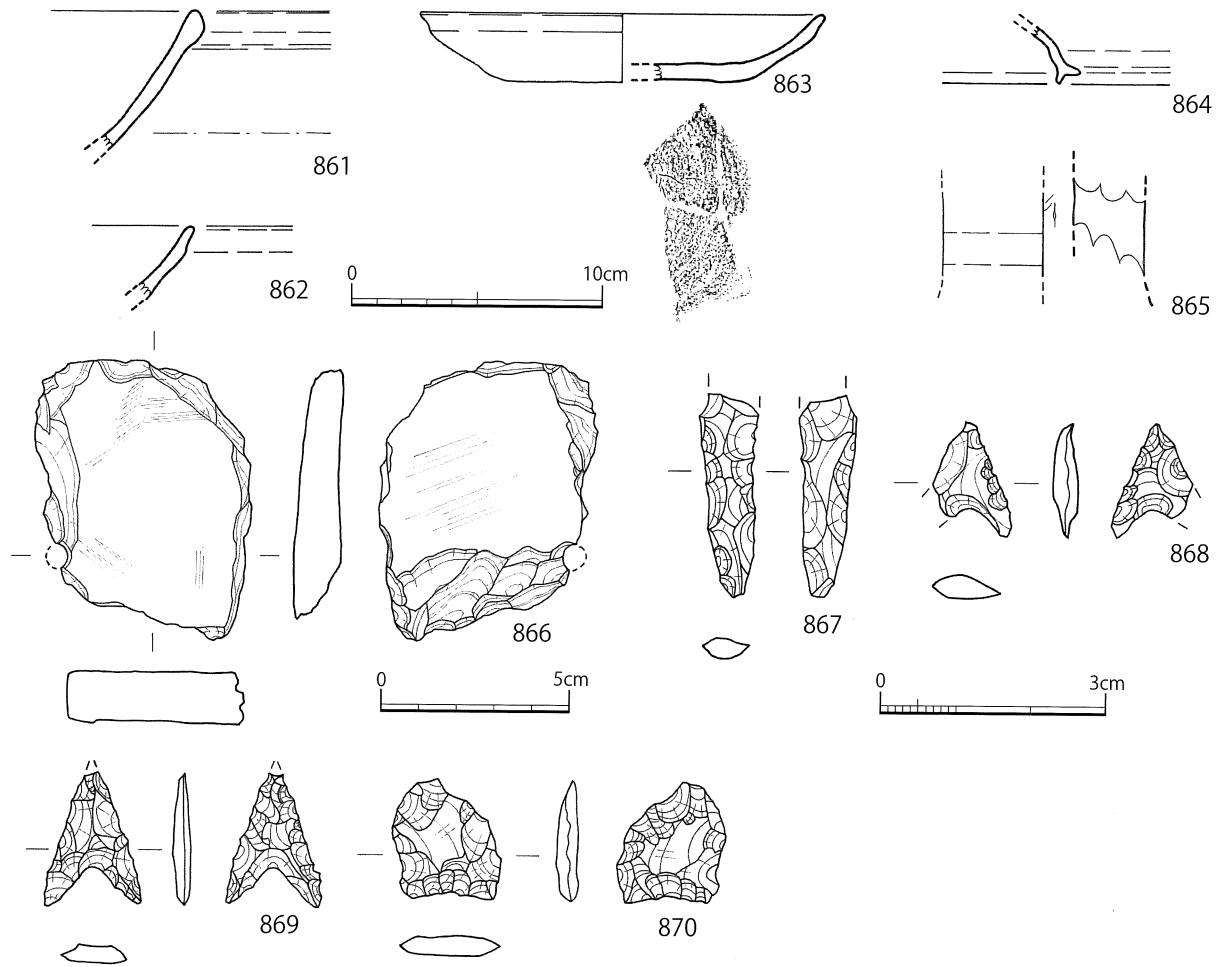
第 240 図 SK078 遺構実測図

866は滑石製の温石である。全体はやや湾曲しており、本来は石鍋であったと考えられる。表面には細かい削痕が残り、断面の一部には直径約6mmの穿孔が認められる。

867はサヌカイト製の石錐である。基部が折れており残存していない。刃部は細かい剥離によって成形されている。

868～870は石鏃である。868、869は両面共に丁寧な剥離がなされ刃部が成形されている。基部には鋭角の削込みが施されている。

この資料から、本遺構の時期は12世紀と考えられる。



第241図 SK075 出土遺物実測図

小土坑・柱穴出土遺物

第242図871は土錘である。細身の土錘で、中ほどがやや膨らんでおり、上部の一部を欠いている。

第243図872は土師器の坏である。底部は平坦で糸切り痕が残る。

第244図873は土師器の碗である。口縁部を欠くものの比較的大きな破片で反転復元可能であった。内外面共に丁寧な調整が施され、高台は三角形を呈している。

第245図874は土師器の小皿である。完形の資料で、底には糸切り痕が残るが全体に摩滅している。底部の中心はやや薄くつくられ、口縁部は短く外側へ開く。

第246図875は土師器の小皿である。底には糸切り痕が残る、体部が底部と同じ厚みで続き口縁部は大きく開く。876は土師器の坏である。底には糸切り痕が残る。

第247図877は瓦器碗である。内外面ともに口縁部の資料で、外面に緩やかな段が巡る。また、外面に三条の横方向の線刻が施される。

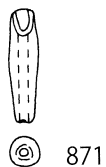
第248図878は土師器の小皿である。底には糸切り痕が残る、体部が底部と同じ厚みで続き口縁部は大きく開く。

第249図879は土師質の土鍋である。内外面共に丁寧な調整を施し、胴部の器面は薄く、口縁部は肥厚させている。

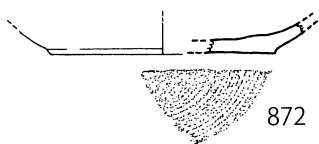
第250図880は土錘である。細身の土錘で、中ほどがやや膨らんでおり、上部の一部を欠いている。

第251図881は土師器の小皿である。底には糸切り痕が残る、体部が底部と同じ厚みで続き口縁部は大きく開く。

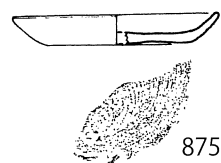
第252図882は瓦器碗である。内面にはミガキが全面に施され、高台は短くやや変形した三角形を呈する。



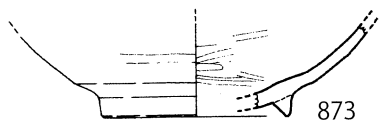
第 242 図 S246 出土遺物実測図



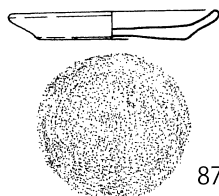
第 243 図 S242 出土遺物実測図



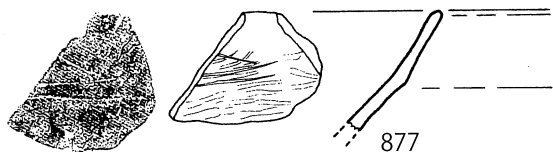
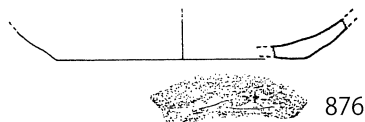
第 246 図 S57 出土遺物実測図



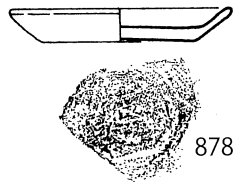
第 244 図 S114 出土遺物実測図



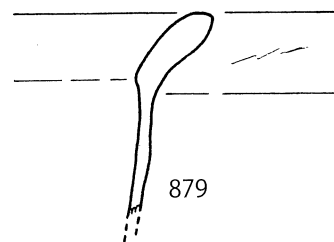
第 245 図 S11 出土遺物実測図



第 247 図 S45 出土遺物実測図



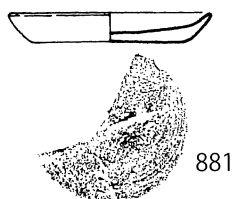
第 248 図 S3128 出土遺物実測図



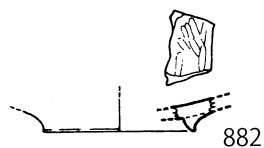
第 249 図 S3824 出土遺物実測図



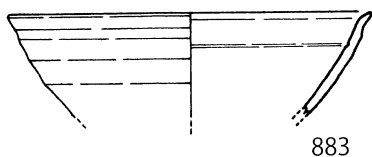
第 250 図 S3983 出土遺物実測図



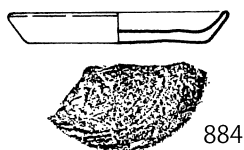
第 251 図 S3142 出土遺物実測図



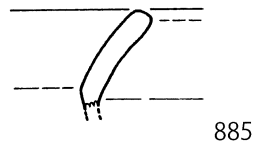
第 252 図 S3987 出土遺物実測図



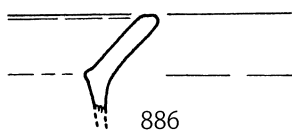
第 253 図 S3198 出土遺物実測図



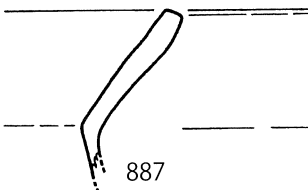
第 254 図 S3267 出土遺物実測図



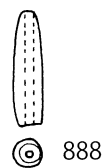
第 255 図 S3262 出土遺物実測図



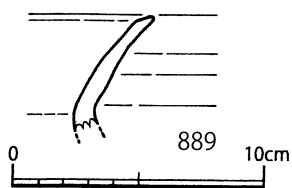
第 256 図 S3272 出土遺物実測図



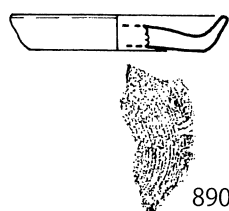
第 257 図 S3276 出土遺物実測図



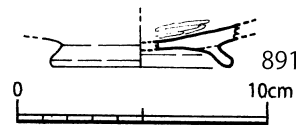
第 258 図 S3298 出土遺物実測図



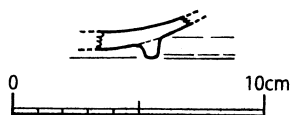
第 259 図 S3307 出土遺物実測図



第 260 図 S4096 出土遺物実測図



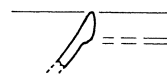
第 261 図 S3714 出土遺物実測図



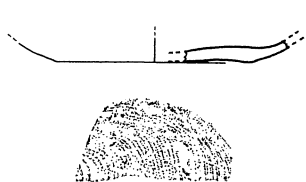
第 262 図 S3715 出土遺物実測図



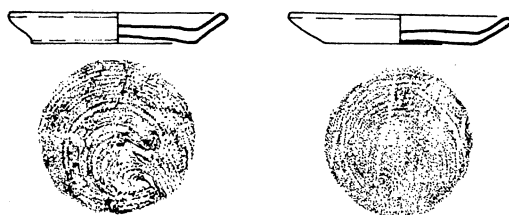
第 263 図 S3310 出土遺物実測図



第 264 図 S85 出土遺物実測図



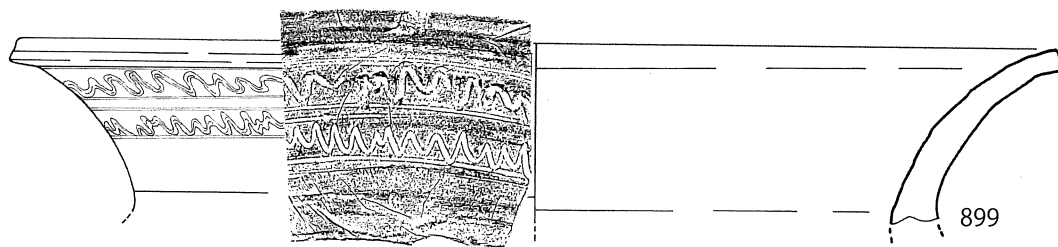
第 265 図 S83 出土遺物実測図



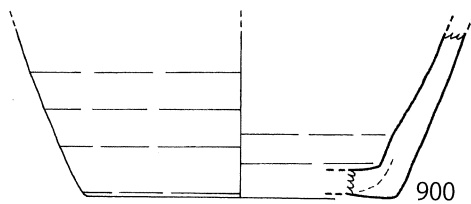
第 266 図 S4186 出土遺物実測図



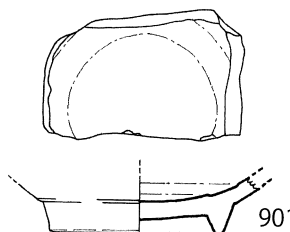
第 267 図 S4527 出土遺物実測図



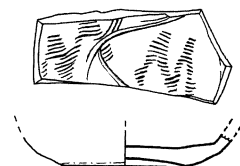
899



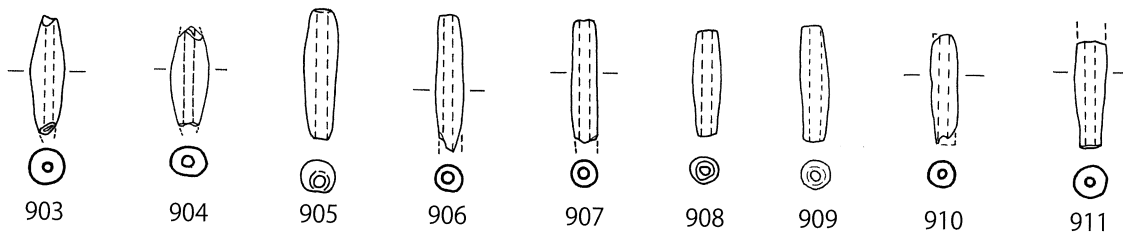
900



901



902



903

904

905

906

907

908

909

910

911

第 268 図 包含層出土遺物

第253図883は白磁の椀である。内外面共に乳白色の釉が施され、内面には口縁部から約2cm下がった位置に沈線が巡る。口縁端部は短く外反する。13世紀代の資料と考えられる。

第254図884は土師器の小皿である。底には糸切り痕が残り、体部が底部と同じ厚みで続き口縁部は大きく開く。

第255図885は土師質の土鍋である。内外面共に丁寧な調整を施し、胴部の器面は薄く、口縁部は肥厚させている。

第256図886は土師質の土鍋である。口縁部は厚みを均一にしたまま、やや短く開き内面の屈曲部は摘み上げられたように若干突出する。

第257図887は土師質の土鍋である。886と比較すると口縁部は若干長い。口縁端部にかけやや厚みが増し、端部の形状は角張っている。

第258図888は土錘である。細身の土錘で、中ほどがやや膨らんでおり、完形の資料である。

第259図889は須恵器の甕口縁部である。焼成は良好で口縁部は直線的に大きく開く。口縁端部にかけ次第に薄くつくられる。破片が小さいために口径は不明である。

第260図890は土師器の小皿である。底には糸切り痕が残り、体部が底部と同じ厚みで続き口縁部は大きく開く。

第261図891は土師器の椀である。内外面共に丁寧な調整を施し、高台は短く開く細い形状のものである。

第262図892は瓦器椀である。内面にはミガキが全面に施され、高台は短くやや変形した三角形を呈する。

第263図893は瓦器椀の口縁部片である。内外面共に丁寧な調整が施される。

第264図894は白磁の椀である。内外面共に乳白色の釉が施され、口縁部は玉縁状に膨らむ。小片のため口径は不明である。

第265図895は土師器の坏である。底には糸切り痕が残り、体部が底部と同じ厚みで続き口縁部は大きく開く。

第266図896、867は土師器の小皿である底には糸切り痕が残り、体部が底部と同じ厚みで続き口縁部は大きく開く。

第267図898は瓦器椀である。内面にはミガキが全面に施され、高台は短くやや変形した三角形を呈する。

包含層出土遺物

第268図899は須恵器の大甕の口縁部である。口縁部は外反しながら大きく開き、先端にかけ次第に厚みは薄くなる。外面には三条の沈線がみられ、沈線の間にはややいびつな波状文がそれぞれ施される。口縁部下部の破面は非常にきれいで、胴部との接合面ではがれたことがわかる。8世紀～9世紀の資料と考えられる。

900は須恵器の瓶である。底部の資料で、平底であることがわかる。底部から胴部へかけては厚みを同じくして屈曲しており、上部へと伸びる。9世紀の資料と考えられる。

901は白磁の椀の底部である。内面には乳白色の釉が施され、蛇の目状に胎土がのぞいている。12世紀の資料と考えられる。

902は同安窯の青磁小皿である。内面には櫛描文がみられる。12世紀の資料と考えられる。

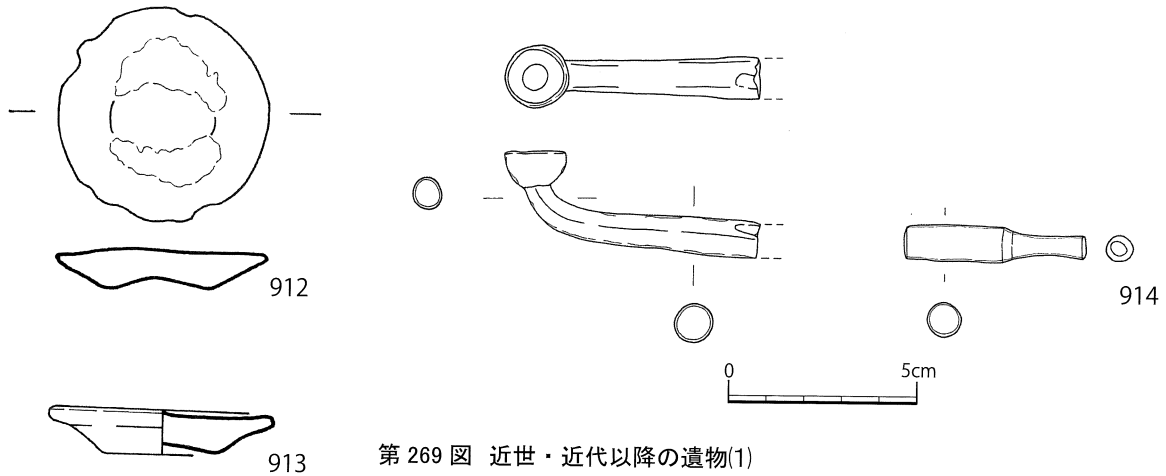
903～911は土錘である。すべて細身の土錘で、中ほどがやや膨らんでおり、一部は先端が欠損している。

第4節 近世・近代以降

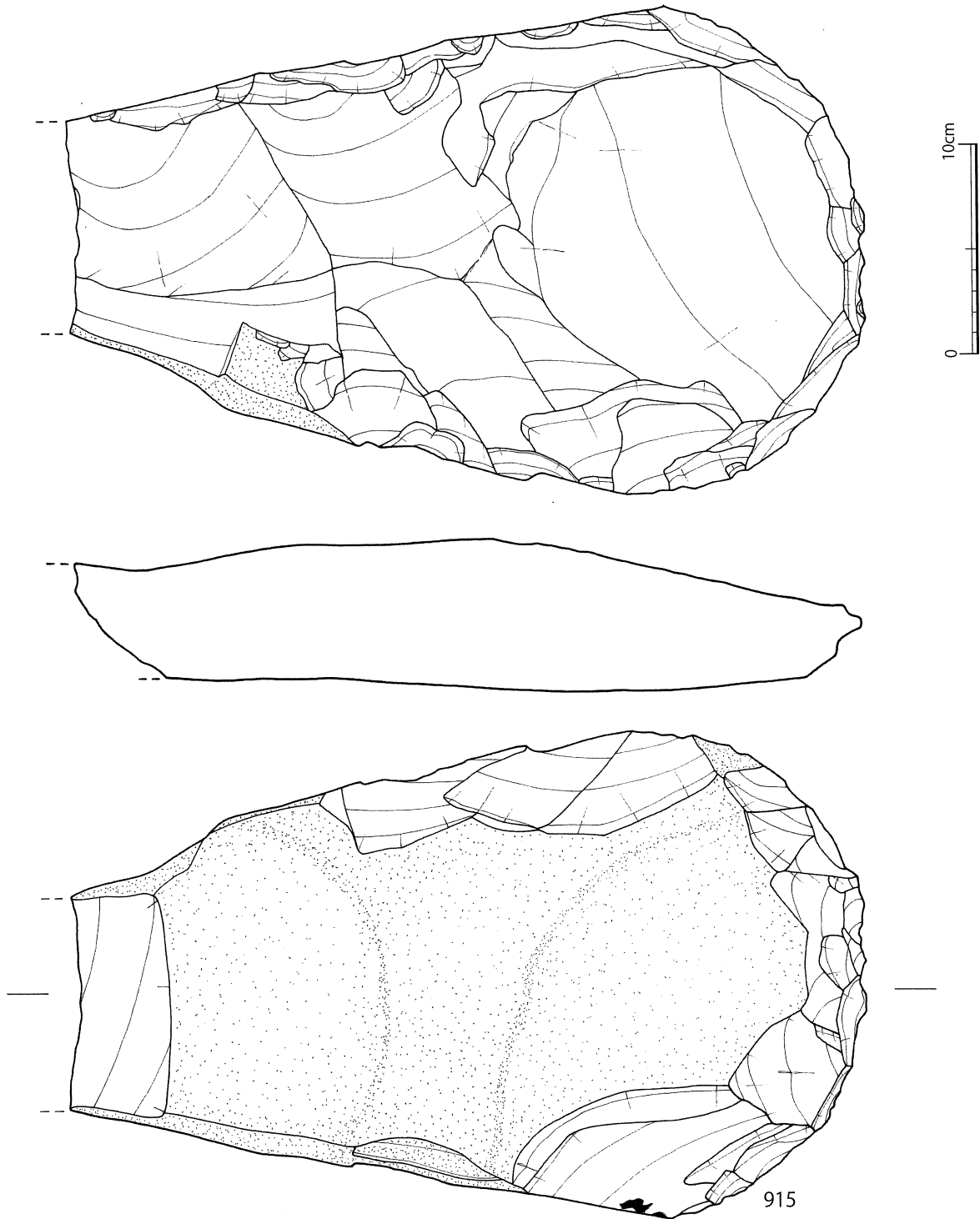
第269図912、913は窯道具のハマと考えられる資料である。直径5cm程の円形を呈するもので、底は小さく中心部がへこんだ形状をしている。周辺には1902年に波佐見焼の陶工であった吉村左楽によって耶馬溪焼という窯が開かれている。当初は耶馬溪町柿坂に開窯したものの、ほどなくして本耶馬溪町青に移転してきたようである。初代左楽は表千家の茶人としても著名であり、当初は茶器の製作が中心であった。本耶馬溪町青と遺跡の位置する跡田は川を挟み800m程離れた位置にあり、どうしてここに窯道具が持ち込まれたのかは不明であるが、地元の住民への聞き取り調査によると、調査をした地点には以前、製材所があり、ここで出る破材を窯の薪とするため頻りに吉村氏が訪れていたようである。それらの関係性から耶馬溪焼に関連する遺物の可能性が考えられるが、製品ではなく窯道具が出土する点は不明である。

914は青銅製の煙管である。雁首と吸口は調査区6の近接した位置から出土しており、同一個体を構成する資料と考えられる。

915は扁平片刃石斧である。調査区6の暗渠に敷かれたれ石列の中に含まれていた。非常に大型の扁平打製石斧であるため、暗渠を造る際に礫として利用されたと考えられる。安山岩製の扁平片刃石斧で転石を利用しており、荒い剥離が行われ、先端の刃部は丁寧に細かい剥離を行っている。裏面や側面の一部には自然面を残している。



第269図 近世・近代以降の遺物(1)



第 270 図 近世・近代以降の遺物(2)

第5章 自然科学分析

第1節 古戸遺跡第2次調査出土炭化材の放射性炭素年代測定

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

1区で検出されたSH006、SH003、2区で検出されたSK073、SK077から検出された炭化材について、放射性炭素年代測定を行ったので、その年代値を報告する。

1. 試料

今回年代測定を行う試料は、SH006、SH003、SK073、SK077の4点である。

SH006は5～10mm角の炭化材片が10片以上ある。全てスダジイに同定され、樹皮の残る破片は認められないことから、最大の破片1片（3年分）を測定に用いる。

SH003は、土混じりの炭質物であり、組織の残る破片は認められない。土壌を除けて、可能な限り炭質物を集めて測定試料とする。

SK073はミカン割状の炭化材片が7片認められる。全てアカガシ亜属であり、本来は同一個体の可能性が高い。この中から最大の破片1片（2年分）を測定試料とする。

SK077は土壌混じりの炭質物で、所々に植物の繊維が認められるが、同定可能な組織が残る破片は認められない。炭質物のみを集めて測定試料とする。

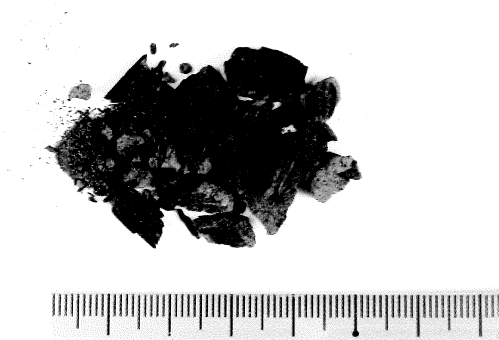


写真1 SH006

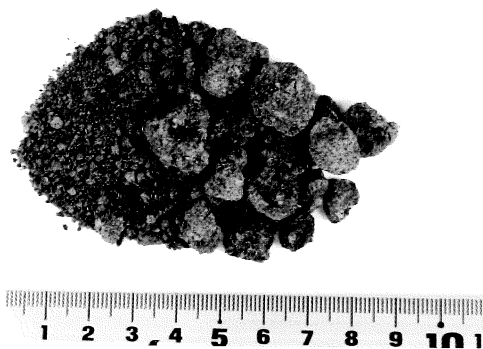


写真2 SH003

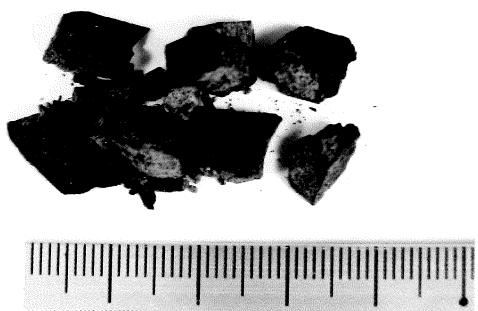


写真3 SK073



写真4 SK077

2.分析方法

炭化物に付着する土壌を、できるだけ取り除く。塩酸 (HCl) により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム (NaOH) により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する (酸・アルカリ・酸処理 AAA: Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に最大1mol/Lである。なお、試料が脆弱で、アルカリ処理の際に試料が溶解する可能性が高いものは、水酸化ナトリウムの濃度を下げて処理する。表中にはAaAと記載する。試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化 (鉄を触媒とし水素で還元する) はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置 (NEC社製) を用いて、14Cの計数、13C濃度 (13C/12C)、14C濃度 (14C/12C) を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局 (NIST) から提供される標準試料 (HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料 (IAEA-C6等)、バックグラウンド試料 (IAEA-C1) の測定も行う。

$\delta^{13}C$ は試料炭素の13C濃度 (13C/12C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma; 68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver and Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。

暦年較正に用いるソフトウェアは、Oxcal4.2 (Bronk & Lee, 2013) を用いる。較正曲線はIntcal13 (Reimer et al., 2013) を用いる。

3.結果

結果を表1と図1に示す。S-3002、S3112の2試料は、脆弱であるためアルカリ処理の際に濃度を下げたが、他の2試料は定法でのAAA処理が可能であった。また、いずれの試料も年代測定を行うのに十分な炭素を回収できた。同位体補正を行った年代測定の結果、SH006出土は $1,925 \pm 20$ BP、SH003炉跡は $1,845 \pm 20$ BP、SK073は 905 ± 20 BP、SK077は 955 ± 25 BPである。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び実際の半減期との違い (14Cの半減期 5730 ± 40 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪 (年輪は細胞壁のみなので、形成当時の14C年代を反映している) 等を用いて作られており、最新のものは2013年に発表されたIntcal13 (Reimer et al., 2013) である。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが (Stuiver and Polach 1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う比較、再計算がしやすいように、表には丸めない値 (1年単位) を記す (表1)。2 σ の値は、SH006出土はcal AD 25~130、SH003炉跡はcal AD 90~235、SK073はcal AD 1,040~1,190、SK077はcal AD 1,020~1,150である。

1区の遺構、2区の遺構から検出された炭化材は、それぞれ暦年較正の結果が一部重なっている。年代値にもとづくと、遺構から検出された炭化材については、SH006、SH003でほぼ1~2世紀、SK073、SK077はほぼ11~12世紀頃を示すと判断される。

第5章 自然科学分析

表 2. 放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	処理	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) BP	暦年較正結果				測定番号
					誤差	cal BC/AD		cal BP	
SH006	炭化材 (スダジイ)	AAA	-28.83 ± 0.26	1,925 ± 20 (1,924 ± 22)	σ	cal AD 55 - cal AD 89	cal BP 1,895 - 1,861	0.473	pal-10183 (PLD-33015)
						cal AD 102 - cal AD 122	cal BP 1,848 - 1,828	0.209	
SH003	炭質物	AaA	-24.41 ± 0.25	1,845 ± 20 (1,846 ± 19)	σ	cal AD 131 - cal AD 179	cal BP 1,819 - 1,771	0.441	pal-10184 (PLD-33016)
						cal AD 187 - cal AD 213	cal BP 1,763 - 1,737	0.241	
SK073	炭化材 (アカガシ亜属)	AAA	-26.09 ± 0.21	905 ± 20 (903 ± 18)	σ	cal AD 1,049 - cal AD 1,085	cal BP 901 - 865	0.422	pal-10185 (PLD-33017)
						cal AD 1,124 - cal AD 1,137	cal BP 826 - 813	0.108	
SK077	炭質物 (植物繊維有)	AaA	-21.49 ± 0.20	955 ± 25 (955 ± 24)	σ	cal AD 1,150 - cal AD 1,164	cal BP 800 - 786	0.152	pal-10186 (PLD-33018)
						cal AD 1,041 - cal AD 1,107	cal BP 909 - 843	0.527	
					σ	cal AD 1,116 - cal AD 1,189	cal BP 834 - 761	0.427	
						cal AD 1,027 - cal AD 1,049	cal BP 923 - 901	0.206	
					σ	cal AD 1,085 - cal AD 1,124	cal BP 865 - 826	0.367	
						cal AD 1,137 - cal AD 1,150	cal BP 813 - 800	0.109	
					σ	cal AD 1,022 - cal AD 1,059	cal BP 928 - 891	0.284	
						cal AD 1,065 - cal AD 1,154	cal BP 885 - 796	0.670	

- 1) 酸-アルカリ-酸処理のうち、AAAは定法による分析、AaAは脆弱であるためアルカリの濃度を下げた分析。
- 2) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 3) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 4) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal4.2を使用した。
- 6) 暦年の計算には、補正年代に()で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。
- 7) 年代値は、暦年較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算に備え、1桁目を丸めていない。
- 8) 統計的に真の値が入る確率は σ は68.3%、 2σ は95.4%である(確率参照)。

OxCal v4.2.4 Bronk Ramsey (2013); r:5 IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)

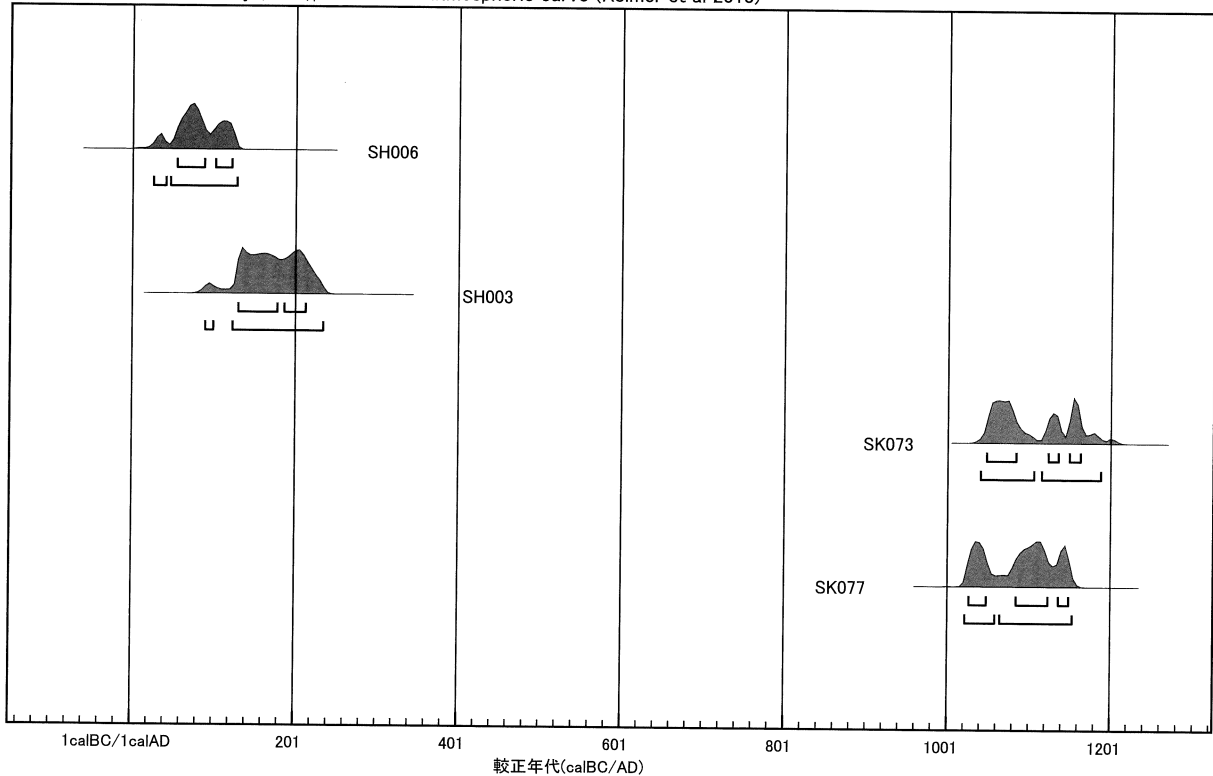


図 1. 暦年較正結果 (上段は σ の範囲、下段が 2σ の範囲を示す)

引用文献

Bronk Ramsey, C., & Lee, S. ,2013, Recent and Planned Developments of the Program OxCal. Radiocarbon, 55, 720-730.

Reimer PJ et al,2013,IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon ,55,1869-1887.

Stuiver Minze and Polach A Henry,1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon ,19, 355-363.

第5章 自然科学分析

第2節 古戸遺跡第2・3次調査出土炭化材の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadze・黒沼保子

1. はじめに

中津市の古戸遺跡よりから出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、炭化材8点である。いずれも最終形成年輪は残存しておらず、部位不明であった。

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理放射性炭素年代測定結果

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-34991	グリッド：調査区6暗渠 試料No.1	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-34992	グリッド：調査区6暗渠 試料No.2	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-34993	位置：調査区6暗渠 試料No.3	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-34994	位置：調査区6暗渠 試料No.4	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-34995	位置：ST004 試料No.5	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：0.1N,塩酸：1.2N)
PLD-34996	位置：ST004 試料No.6	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-34997	位置：ST004 試料No.7	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：0.1N,塩酸：1.2N)
PLD-34998	位置：ST004 試料No.8	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、

図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代 (yrBP) の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差 (±1σ) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い (¹⁴Cの半減期5730±40年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.3 (較正曲線データ: IntCal13、暦年較正結果が1950年以降にのびる試料についてはPost-bomb atmospheric NH2) を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ ¹³ C (%)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-34991 試料No.1	-22.44±0.21	311±17	310±15	1523-1573 cal AD (55.3%) 1629-1642 cal AD (12.9%)	1499-1503 cal AD (0.8%) 1513-1600 cal AD (73.0%) 1616-1645 cal AD (21.7%)
PLD-34992 試料No.2	-23.30±0.18	1028±18	1030±20	995-1021 cal AD (68.2%)	986-1026 cal AD (95.4%)
PLD-34993 試料No.3	-23.70±0.11	234±16	235±15	Post-bomb NH2 2013: 1651-1664 cal AD (50.2%) 1786-1793 cal AD (18.0%)	Post-bomb NH2 2013: 1646-1668 cal AD (62.7%) 1782-1797 cal AD (32.5%) 1950-1950 cal AD (0.1%)
PLD-34994 試料No.4	-25.15±0.18	215±17	215±15	Post-bomb NH2 2013: 1657-1668 cal AD (24.5%) 1781-1797 cal AD (42.1%) 1949-1950 cal AD (1.7%)	Post-bomb NH2 2013: 1649-1677 cal AD (35.6%) 1765-1772 cal AD (1.9%) 1777-1799 cal AD (46.3%) 1940-1952 cal AD (11.0%) 1952-1954 cal AD (0.5%)
PLD-34995 試料No.5	-22.81±0.17	2689±18	2690±20	842-809 cal BC (68.2%)	896-807 cal BC (95.4%)
PLD-34996 試料No.6	-21.85±0.29	2501±21	2500±20	765-748 cal BC (10.3%) 685-666 cal BC (11.0%) 642-587 cal BC (33.2%) 581-556 cal BC (13.7%)	776-727 cal BC (19.8%) 718-706 cal BC (1.4%) 695-541 cal BC (74.2%)
PLD-34997 試料No.7	-21.68±0.12	2771±29	2770±30	973-957 cal BC (10.7%) 941-893 cal BC (41.9%) 876-849 cal BC (15.6%)	996-840 cal BC (95.4%)
PLD-34998 試料No.8	-26.18±0.15	2809±21	2810±20	996-927 cal BC (68.2%)	1012-907 cal BC (95.4%)

第5章 自然科学分析

4. 考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち2 σ 暦年代範囲（確率95.4%）に着目して、遺構ごとに結果を整理する。なお、縄文時代と弥生時代については藤尾（2009）を参照した。

試料No.1 (PLD-34991) は、1499-1503 cal AD（0.8%）、1513-1600 cal AD（73.0%）、1616-1645 cal AD（21.7%）で、15世紀末～17世紀中頃の暦年代範囲であった。これは室町時代～江戸時代前期に相当する。

試料No.2 (PLD-34992) は、986-1026 cal AD（95.4%）で、10世紀後半～11世紀前半の暦年代範囲であった。これは、平安時代中期に相当する。

試料No.3 (PLD-34993) は、1646-1668 cal AD（62.7%）、1782-1797 cal AD（32.5%）、1950-1950 cal AD（0.1%）で、17世紀中頃～後半と、18世紀後半、20世紀中頃の暦年代範囲であった。これは江戸時代～現代に相当する。

試料No.4 (PLD-34994) は、1649-1677 cal AD（35.6%）、1765-1772 cal AD（1.9%）、1777-1799 cal AD（46.3%）、1940-1952 cal AD（11.0%）、1952-1954 cal AD（0.5%）で、17世紀中頃～後半と、18世紀後半、20世紀前半～中頃の暦年代範囲であった。これは江戸時代～現代に相当する。

試料No.5 (PLD-34995) は、896-807 cal BC（95.4%）の暦年代範囲であった。これは縄文時代晩期に相当する。

試料No.6 (PLD-34996) は、776-727 cal BC（19.8%）、718-706 cal BC（1.4%）、695-541 cal BC（74.2%）の暦年代範囲であった。これは弥生時代前期に相当する。

試料No.7 (PLD-34997) は、996-840 cal BC（95.4%）の暦年代範囲であった。これは縄文時代晩期に相当する。

試料No.8 (PLD-34998) は、1012-907 cal BC（95.4%）の暦年代範囲であった。これは縄文時代晩期に相当する。

木材は最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料は、いずれも最終形成年輪を欠く部位不明の炭化材であり、年代測定の結果が古木効果の影響を受け、木材が枯死もしくは伐採された年代よりもやや古い年代を示している可能性がある。

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.

藤尾慎一郎 (2009) 弥生時代の実年代. 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」: 9-54, 雄山閣.

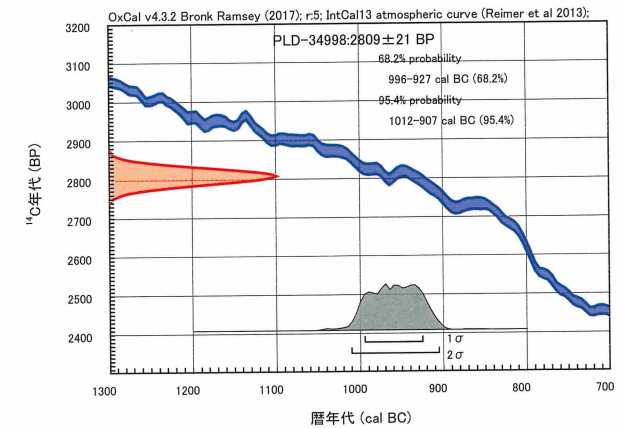
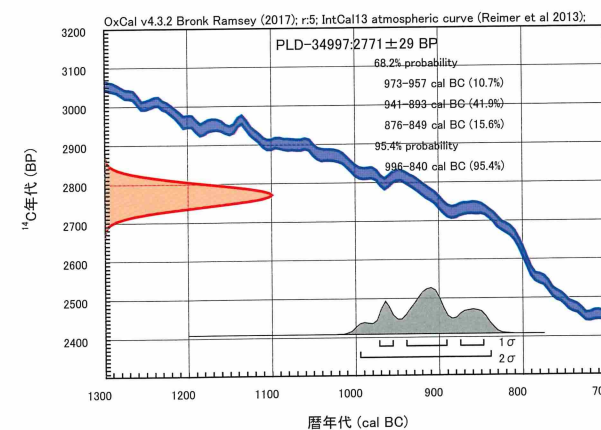
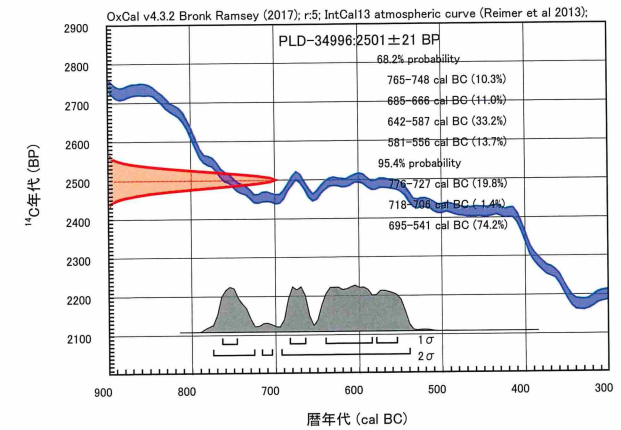
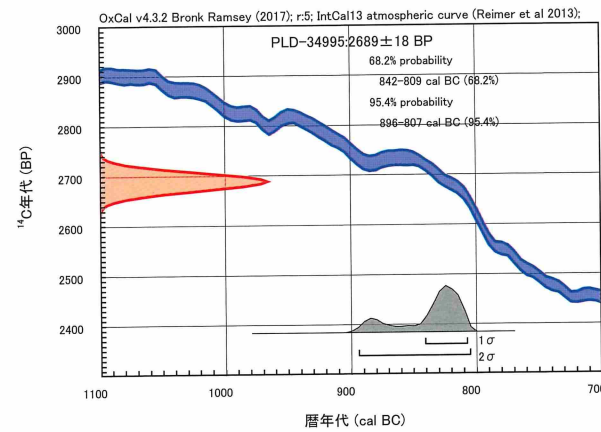
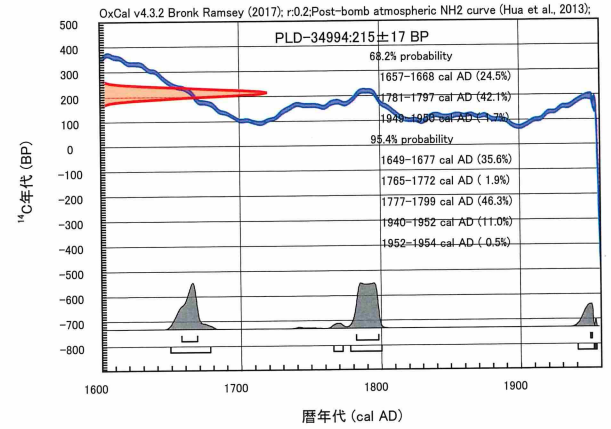
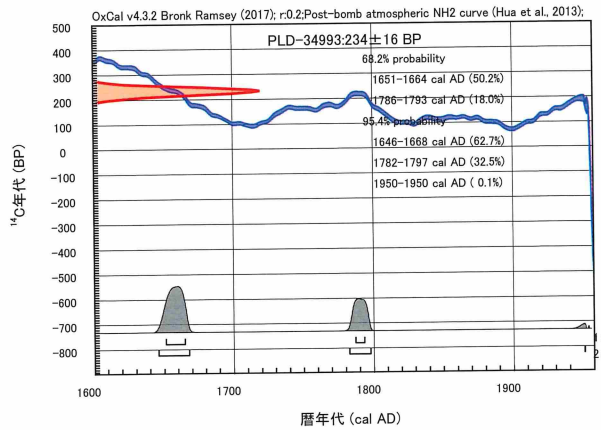
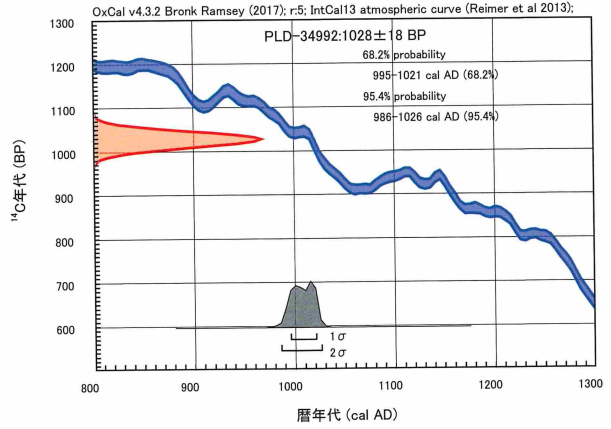
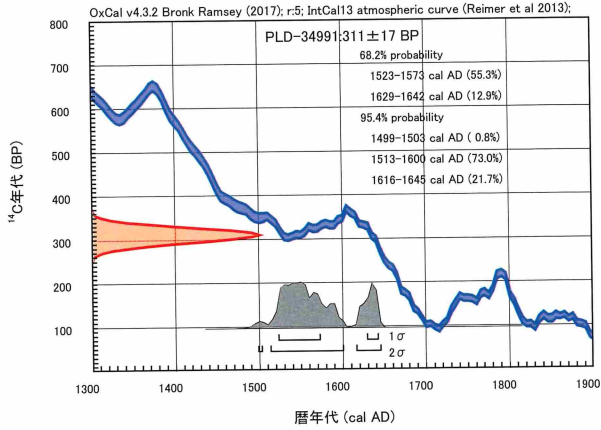
Hua, Q., Barbetti, M. Rakowski, A.Z. (2013) Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950–2010. *Radiocarbon*, 55 (4), 1-14.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E.,

Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haffidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55 (4) , 1869-1887.

第5章 自然科学分析

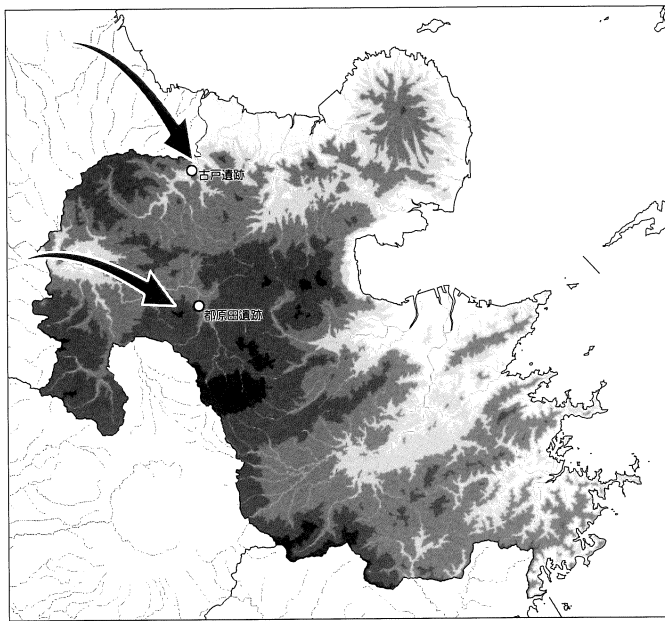


第6章 総括

第1節 古戸遺跡から出土した弥生時代前期の石包丁について

今回の調査では調査区1に位置するSK45から遺跡全体でも唯一の石包丁が出土している。全体の半分程度が残存し、石包丁の上端は平坦で全体は三角形を呈すると考えられる。共伴する土器は古戸II期（前期後半）の資料で、弥生時代前期の石包丁としては県下でも出土例が少なく貴重である。ここでは他の出土例と比較して古戸遺跡の石包丁について論じたい。

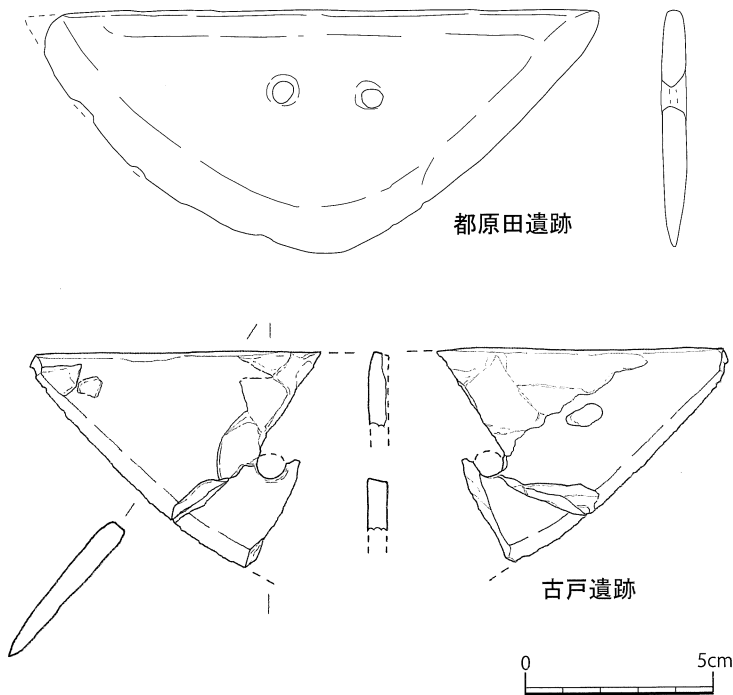
県内ではほかに三角形を呈する弥生時代前期と考えられる石包丁は都原田遺跡（九重町）からの出土がみられる。都原田遺跡は弥生時代後期～古墳時代前期にかけての集落遺跡で、この石包丁も後期の竪穴建物埋土から



からの出土であった。しかし、その形状から弥生時代前期の所産と考えられ、周辺から埋土へ混入したと考えられる。都原田遺跡からは前期の土器は出土していないものの同町内の釘野千軒遺跡からは刻目突帯文土器や夜白式の壺、高坏がまとめて出土しており縄文時代晩期から早期にかけて北部九州からの人的交流があったことがうかがえる。穿孔は両面から施されており、石材は砂岩である。

古戸遺跡出土の石包丁は先述したように共伴する土器から前期後半の所産であると考えられる。石材はホルンフェルスで穿孔は片方からあけられている。

このように県内では弥生時代前期の石包丁は中津と九重という全く別の場所から出土している。石包丁は水稻栽培に利用された大陸系磨製石器であり、これら石包丁の出土は東九州への稲作の伝播を意味する。したがってこの二つの地点からの三角形を呈する石包丁の出土は弥生文化の北部九州への伝播の過程が二通りあることを示しており、一つは周防灘を介したルートであり、もう一つは筑後川を遡上する内陸のルートである。いずれの地域でも前期の土器や石包丁の出土は非常に少なく稲作が盛んに行われたとは考えにくいだが、北部九州との交流の中で先行的に手に入れたものだろう。



第 271 図 大分県における三角形を呈する石包丁

第2節 古戸遺跡出土の弥生時代前期の土器について

古戸遺跡では、ST004に代表されるように貝殻条痕が施された刻み目突帯文の深鉢と板付式の壺が伴って出土した。周辺の遺構でもこれらの土器が共伴する様相がみられ、県北での弥生時代前期の土器様相を知るうえで重要な知見が得られた。ここでは弥生時代前期の土器様相について詳細な検討を行いたいと考える。

・古戸0期

従来の中九州の土器編年では下黒野式（弥生時代早期）に該当する時期である。壺については非常に出土数が少なく、1点口縁端部にキザミ目を施した資料（792）が出土している。胎土も非常に良好で器面は丁寧に調整されている。深鉢は内外面共に貝殻条痕が明瞭に残り、口縁端部のキザミ目方法は二枚貝の背面や工具を利用したものなど様々だがキザミ目の間隔が比較的広いことは共通している。深鉢の器形はほとんどが今回規定したA類に属し、あまりバラエティはみられない。0期のA類資料は口縁部の上部が最も内傾し内側に位置していることが特徴である。また、745にみられるように瀬戸内地域の影響と考えられる資料もみられる。

・古戸Ⅰ期（古相）

弥生時代前期前半に該当すると考えられる資料である。この時期から板付式の壺が出現する。ST004では壺と貝殻条痕が明瞭に残る深鉢が共伴し同一時期であることが確実である。周辺でも共伴を示す遺構が複数確認される。

壺は数個体確認できるが全体の様相が観察できるのは760のみである。外面は全面にミガキを施し肩部には沈線と直線的な山形文を巡らす。内面は体部の上部には外面同様のミガキを施すが、下部にはハケメが残る。口縁部は若干肥厚するものの段差は明瞭ではない。底部は平坦である。

深鉢の系統としては0期以来のA類の深鉢がみられ、内外面に貝殻条痕が残るものの外面の一部はナデにより条痕が消される。口縁部は体部の屈曲部から直線的に立ち上がる。761は口縁部から底部まで残存する資料で、底部は比較的厚みがあることがわかる。キザミ目は非常に小さく密に施されることも特徴である。

B類は口縁部の内側に沈線が施される資料である。口縁部は体部の屈曲部から直線的に立ち上がり、口縁端部がやや外反する。沈線は1条と2条の2種類が確認されている。内外面には明瞭に貝殻条痕が残る。

C類は口縁部が大きく外反する資料である。底部は残存していないが他の深鉢と比較するとやや浅い器形を呈すると考えられる。口縁部は体部の屈曲部からやや直線的に立ち上がり、中程から大きく外反する。内外面には明瞭に貝殻条痕が残る。キザミ目は二枚貝の背面を利用して密に施される。県内では一方平Ⅳ遺跡（大分市）で同様の資料が多くみられる。D類は全体の器形が砲弾状を呈する資料である。底部からやや丸みを持って体部は立ち上がり、口縁部も外反しない。口縁部から大きく下がった位置に鈍い突帯を巡らし、工具を利用して細かいキザミ目を密に施している。底部はやや径が小さく器面は非常に薄い。調整は貝殻条痕を施した後丁寧にナデ調整を施している。

・古戸Ⅰ期（新相）

古戸Ⅰ期の中でもやや新しいと考えられる資料である。これらが出土する遺構は古相が出土する遺構の周辺である。共伴する遺物の中にはハケメを施す資料もみられる。

壺は口縁部に明瞭な段差をもつ資料がみられる。やはりこの壺にも内外面共に丁寧に調整を施す。

A類の深鉢は内外面共に貝殻条痕後ナデ調整を全面に施す。古相同様口縁部は直線的にのびる。716はこの資料と共伴しハケメが施される。

B類の深鉢でも器面全体は内外面共に貝殻条痕後ナデ調整を施す。口縁部がさらに外反する資料もみられ傾きは体部とほぼ同様となり、体部の屈曲部は突帯のように施される。口縁端部内側の沈線も古相の資料と比較するとやや太く表現される。

C類は1点であるが確認される。体部の屈曲部の破片のみであるが、口縁部が大きく開いていることがわかる。内外面共に条痕が残らないように丁寧にナデ調整を行っている。

D類はこの時期の最も出土数の多い個体である。全体として小型の深鉢が多く古相同様直線的に広がるもの、やや丸みを帯びながら広がるものの2種類が確認される。突帯は古相の資料とは違い口縁部直下に巡り、小さく密なキザミ目が施される。内外面共に貝殻条痕後ナデ調整を全面に施す。

・古戸Ⅱ期

弥生時代前期後半に該当すると考えられる資料である。この時期から刻目突帯文の深鉢はみられず、ハケメで調整された甕が出現する。これらが出土する遺構は調査区1などの遺跡北側が中心で古戸Ⅰ期とは出土位置も異なる。

壺は小破片も含めると比較的多く出土している。635は大型の壺で口縁部は粘土を貼り付け肥厚させないものの口縁部下部に沈線を巡らす。後述する甕E類との関係が想定される。内外面共に丁寧なミガキが施される。567、637、611は肩部に装飾が施される資料である。綾杉文と重弧文の二種類が確認でき、上部には頸部からの段と沈線がみられる。609は小壺である。遺跡全体でもこの1点のみの出土である。

甕A類はⅠ期の刻目突帯文の深鉢に系譜をたどれると考えられる資料である。639は口縁部が大きく外反し口縁端部外面には細かいキザミ目の施された突帯が巡る。外面にはハケメで丁寧な調整が施される。

B類は口縁部と胴部に刻目突帯が巡る資料である。体部はやや内湾し突帯のキザミ目は大きく間隔も広い。遺跡全体では638が唯一の出土例である。

C類は口縁部直下に刻目突帯が巡る資料である。口縁端部は短く開き細かいキザミ目が施される。突帯は断面が三角形を呈し比較的太い。器形全体を把握できる資料の出土がなく全体のプロポーシオンは不明である。

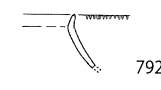
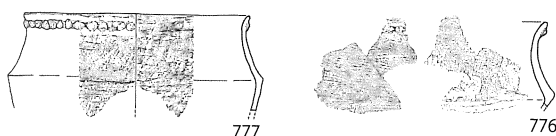
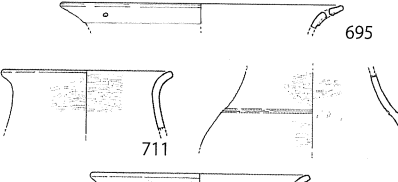
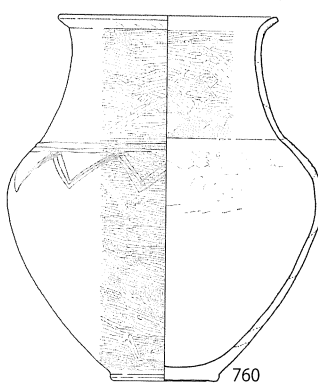
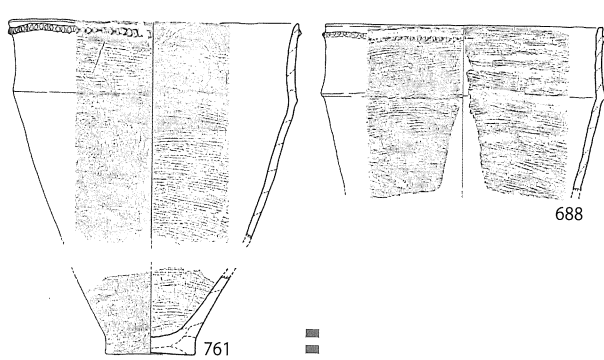
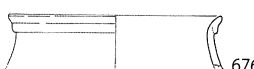
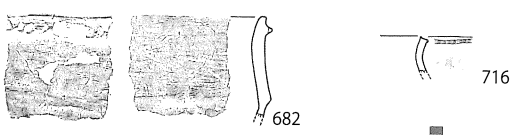
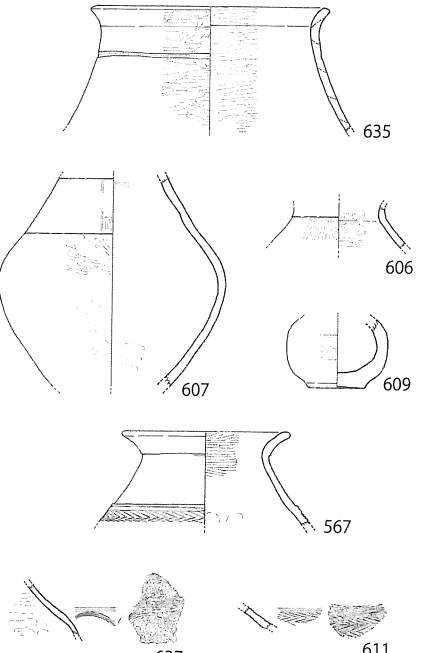
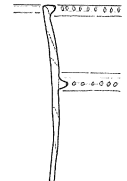
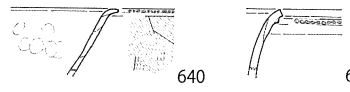
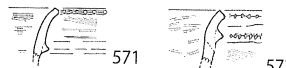
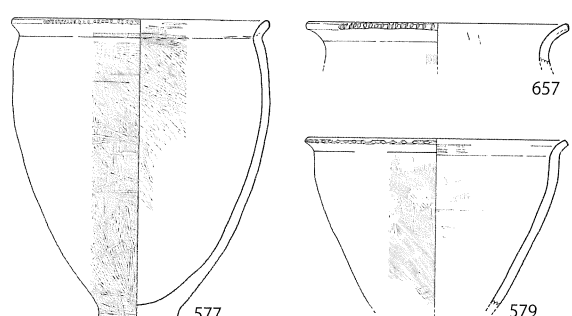

D類は口縁部が如意形を呈する資料である。遺跡全体でも小破片まで含めれば比較的出土量の多いタイプである。口縁端部には細かいキザミ目が巡り、調整は基本ハケメであるが、中にはミガキを施すものも確認できる。底部はやや厚みがあり平底である。

E類は体部に沈線が巡る資料である。D類同様出土点数の多い資料である。口縁部は如意形を呈し体部には1条から2条の沈線が巡る。調整は比較的細かいハケメで施される。

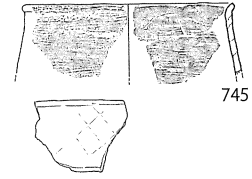
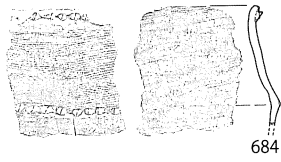
F類は口縁部下部に粘土帯の接合部に段が施される資料である。中には767のようにキザミ目を巡らす資料も確認できる。

G類は全体の器形が砲弾状を呈する資料である。Ⅰ期の深鉢D類からの系譜をたどれると考えられる資料で、Ⅰ期新相の資料と比較すると口縁端部の突帯がやや下がった位置に巡らされる。内外面の調整はハケメが施される。

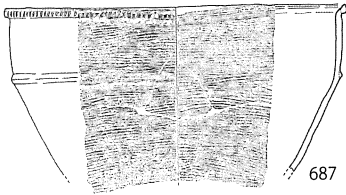
H類はこれも器形が砲弾状を呈する資料である。口縁部を欠くので全体のプロポーシオンは不明であるが、胎土や調整からG類とは異なるタイプの資料であると考えられる。底部の構造等はⅠ期のD類692に類似し、これもⅠ期に系譜をたどることができる資料の一つと考えられる。

	壺	深鉢・甕
古戸0期	 <p>792</p>	<p>深鉢 A 類</p>  <p>777 776</p>
古戸I期 (古)	 <p>695 711 712</p>  <p>760</p>	 <p>761 688</p>
古戸I期 (新)	 <p>676</p>	 <p>682 716</p>
古戸II期	 <p>635 606 607 609 567 637 611</p>	<p>甕 B 類</p>  <p>638</p> <p>甕 A 類</p>  <p>640 639</p> <p>甕 C 類</p>  <p>571 572</p> <p>甕 D 類</p>  <p>577 579</p>  <p>657</p>

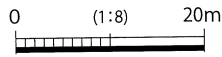
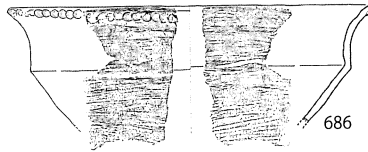
深鉢・甕



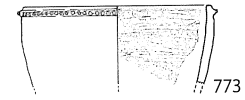
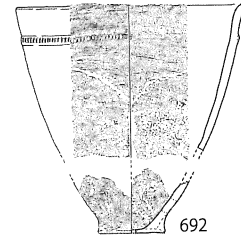
深鉢 B 類



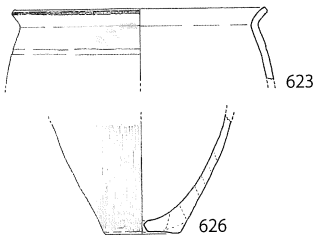
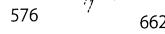
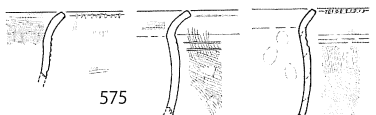
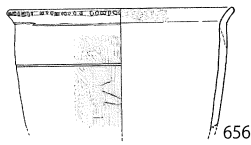
深鉢 C 類



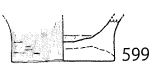
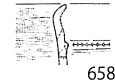
深鉢 D 類



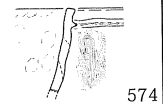
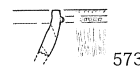
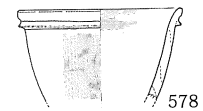
甕 E 類



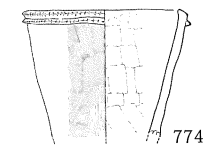
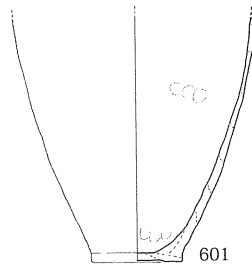
甕 F 類



甕 G 類



甕 H 類



第 272 図 土器編年図

第6章 総括

まとめ

上記のように古戸遺跡出土の弥生時代前期の土器についてその分類と編年を試みた。古戸Ⅰ期では出土点数は少ないもの刻目突帯文土器を確認でき、口縁端部にキザミ目を施す壺も出土している。大規模な遺構はなく、遺跡南側の調査区3を中心に遺物の出土はみられた。古戸Ⅰ期は条痕のナデ消しの有無から古相と新相に細分することが可能である。板付式の壺もこの時期から出現し、刻目突帯文土器と共伴する。深鉢は口縁部が直立し、中には大きく外側へ外反するものもみられる。古戸Ⅱ期は如意形口縁の甕が主体となる時期で、深鉢の影響はほとんど見られなくなるものの甕G類やH類など明らかに古戸Ⅰ期の深鉢D類系統の甕も出現する。

古戸Ⅰ期とⅡ期では出土地点が遺跡の南側と北側で異なることや刻目突帯文土器と如意形口縁の甕が共伴する遺構がみられないことから、これらの間にはヒアタスが存在すると考えられ、常時継続して北部九州と交流があったわけではなく時期をあけて幾度かの人的交流があったのだろう。この古戸遺跡での空白期間に該当すると考えられる時期の遺跡としては一方平Ⅳ遺跡（大分市）の一方平Ⅱ期があげられ、639のようなハケメをもつ深鉢が主体となる時期である。

第3節 古戸遺跡出土の線刻絵画土器について

はじめに

今回の調査ではSP041から3点の線刻絵画土器が出土した。接合はしないものの、胎土や特徴的な器面調整から同一個体であることは明らかであり、土器全体に比較的大きな線刻絵画土器が描かれていることが想定された。ここでは大分県内の先行例をもとに古戸遺跡出土の線刻絵画土器について考察を行いたい。

県内で初めて線刻絵画土器が出土したのは1949年に調査が始まった安国寺遺跡（国東市）である。2点の線刻絵画土器が出土しており、報文中でも「記号的文様が施されて居るが、このような例は他に見当たらない」とされている。その後の70年間でも数例確認されるのみで、弥生時代の遺物としては量が多いものではない。今回の集成では管見の限り弥生時代の線刻絵画土器としては9個体が確認でき、その図の特徴から3種類に大別することができた。なお、昨今数例の線刻絵画土器が出土している四日市遺跡（玖珠町）は報告書の刊行前であるため集成に含んでおらず、今後の報告を待ちたい。

1は小西遺跡（日田市）出土の線刻絵画土器である。ほぼ完形の壺の肩部に線刻がみられ、S字を横にしたような環状の線刻絵画である。報告者は龍または蛇などの図と考えている。資料の時期は後期後半である。

2、3、4は安国寺遺跡（国東市）出土の線刻絵画土器である。2の甕には体部に櫛描波状文が直線的にやや傾きながら施されている。資料の時期は後期前半と考えられる。3は壺である。今回、熟覧する機会を得たので再度実測を行った。外面には荒い縦方向のハケメがみられ、口縁部付近はナデ消されている。胴部には4条の沈線が左上から右下に引かれ、それぞれは二本単位で形状が類似する。資料の時期は後期後半と考えられる。4は壺である。器面の全体に縦や斜め方向に線刻が施され図を描いている。壺の下半分を欠き全容は不明である。構図などは後述する東田室遺跡（大分市）の線刻絵画と類似している。資料の時期は後期後半と考えられる。

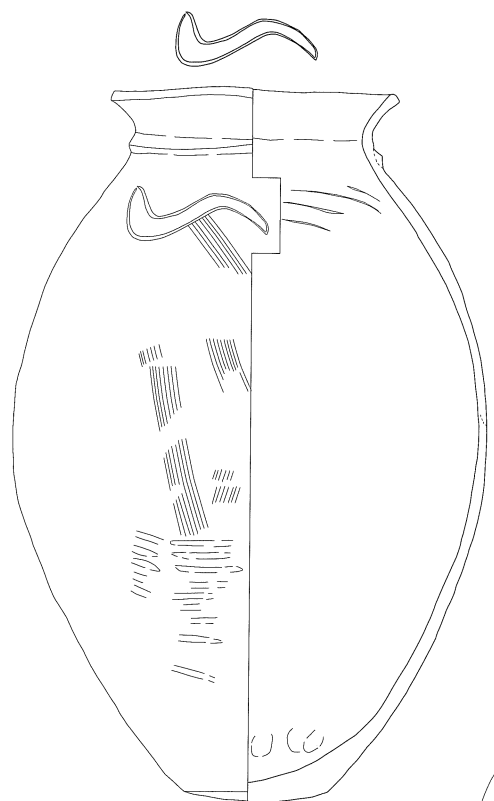
5、9は下郡遺跡（大分市）出土の線刻絵画土器である。5は安国寺式の複合口縁壺である。口縁部の櫛描波状文は荒く、頸部と体部に突帯が巡る。線刻は壺の肩部にあり、口縁部の櫛描波状文と類似したやや崩れた波状文が縦や横方向に施される。9も壺である。頸部の資料のみで口縁部の形態は不明である。線刻は頸部から肩部にあり、ヘラ状の工具で波状やX字状の線刻を施している。これらの資料の時期は後期後半と考えられる。

6は東田室遺跡（大分市）出土の線刻絵画土器である。古墳時代中期前半の資料で今回対象としている弥生時代の線刻絵画土器ではないが、構図等が古戸遺跡出土の線刻絵画土器に類似しているために参考資料として紹介したい。全体に丸みを帯びた壺で、体部の上半部ほぼ全面に様々な線刻を施している。位置関係から中心の図と考えられる部分は遺棄に際して打ち割られており不明ではあるが、残存している線刻から池上曾根遺跡（大阪府）で出土しているような龍の線刻が施されていた可能性が想定される。

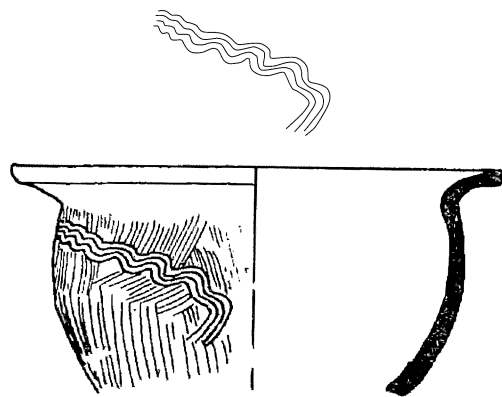
7は若宮八幡宮遺跡（大分市）出土の線刻絵画土器である。穿孔が施されている点などから西部瀬戸内系大型器台の一部と考えられ、やや太いハケメで調整した器面に葉状の線刻を施している。同様の線刻は愛媛県出土の西部瀬戸内系大型器台にも確認でき、この資料も伊予地域の影響を強く受けて作られたと考えられる。

8は成田尾遺跡（日出町）出土の線刻絵画土器である。壺の頸部と考えられる部分に線刻が施されており、蕨手状の線刻と三角形と方形を組み合わせたような図の二つが確認できる。報告者は後者の図について人物の胸部である可能性を示しており、注目される資料である。資料の時期は中期前半と考えられる。

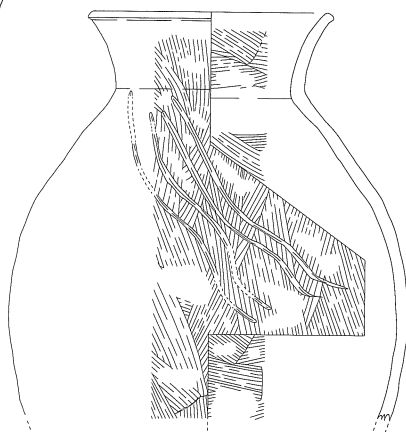
10は古戸遺跡（中津市）出土の線刻絵画土器である。10-1は縦の線が連続する線刻で破片の中心を境として左右に線刻は湾曲している。10-2は突起を持つ環状の線刻と考えられるもので、内部には鉤状の線刻もみられ



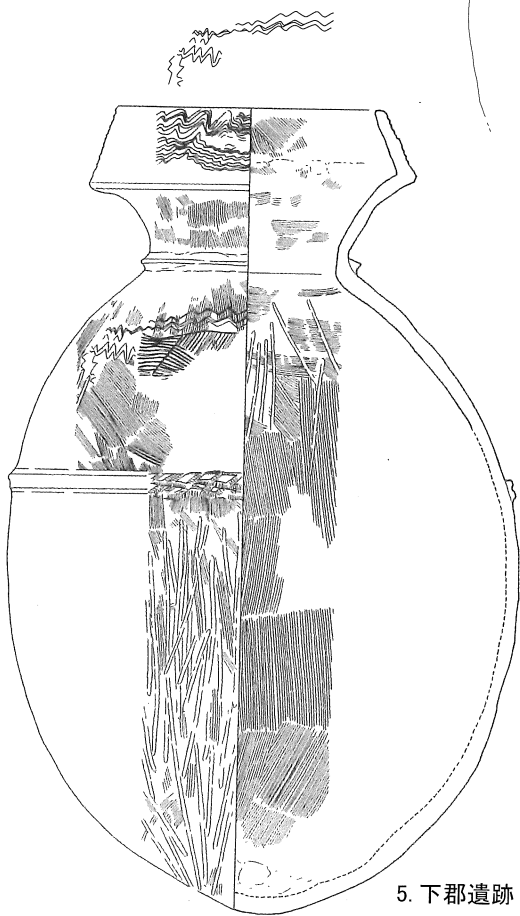
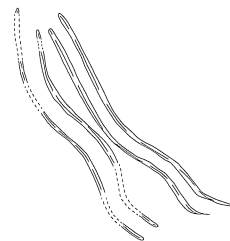
1. 小西遺跡



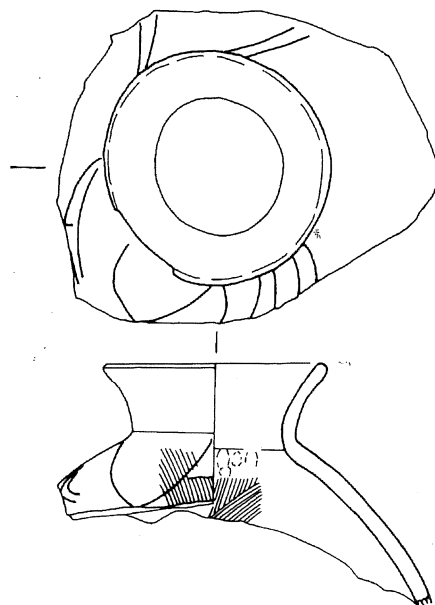
2. 安国寺遺跡



3. 安国寺遺跡

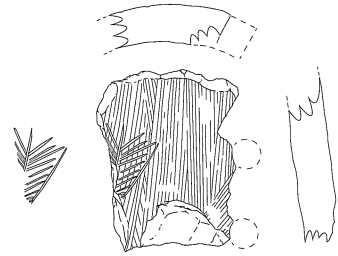


5. 下郡遺跡

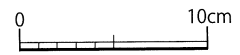


4. 安国寺遺跡

第273図 線刻絵画土器(1)

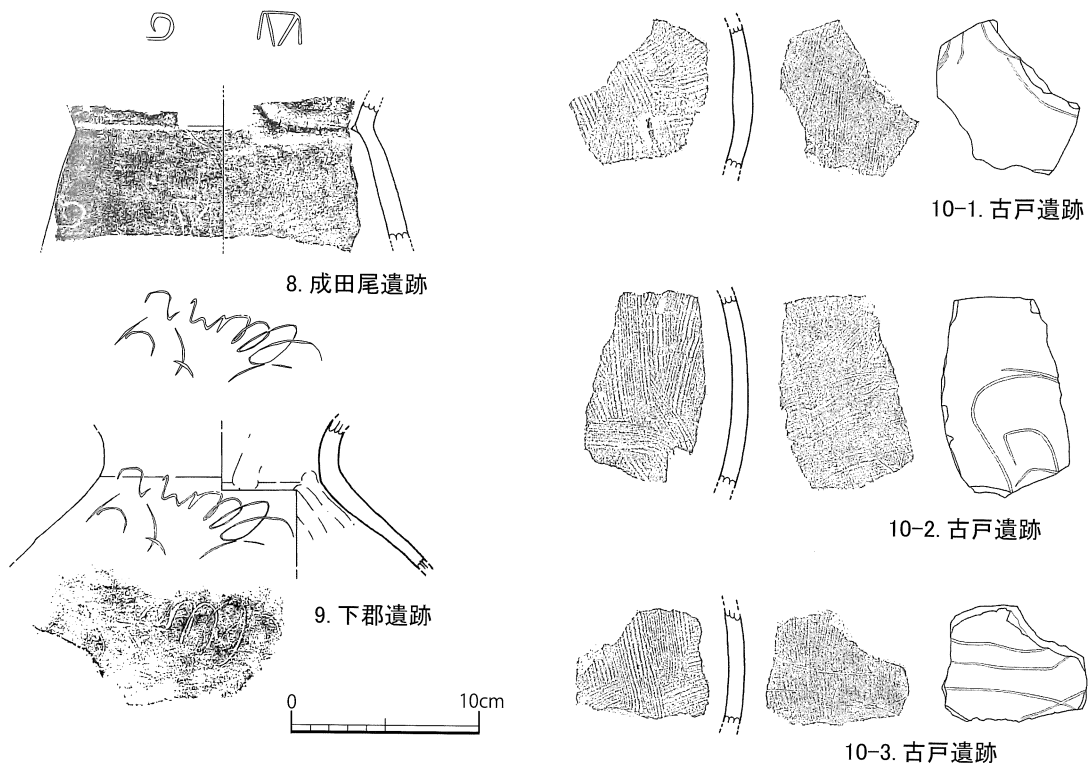


7. 若宮八幡宮遺跡



6. 東田室遺跡

第 274 図 線刻絵画土器(2)



第 275 図 線刻絵画土器(3)

る。10-3は横線が連続する線刻であり、一部にはX字状の線刻もみられる。先述したようにこれらは同一個体であり、他の線刻絵画土器と比較しても図が大きいことが特徴である。3点の破片の位置関係は不明であるが器面全体に線刻が施されていたのであろう。

まとめ

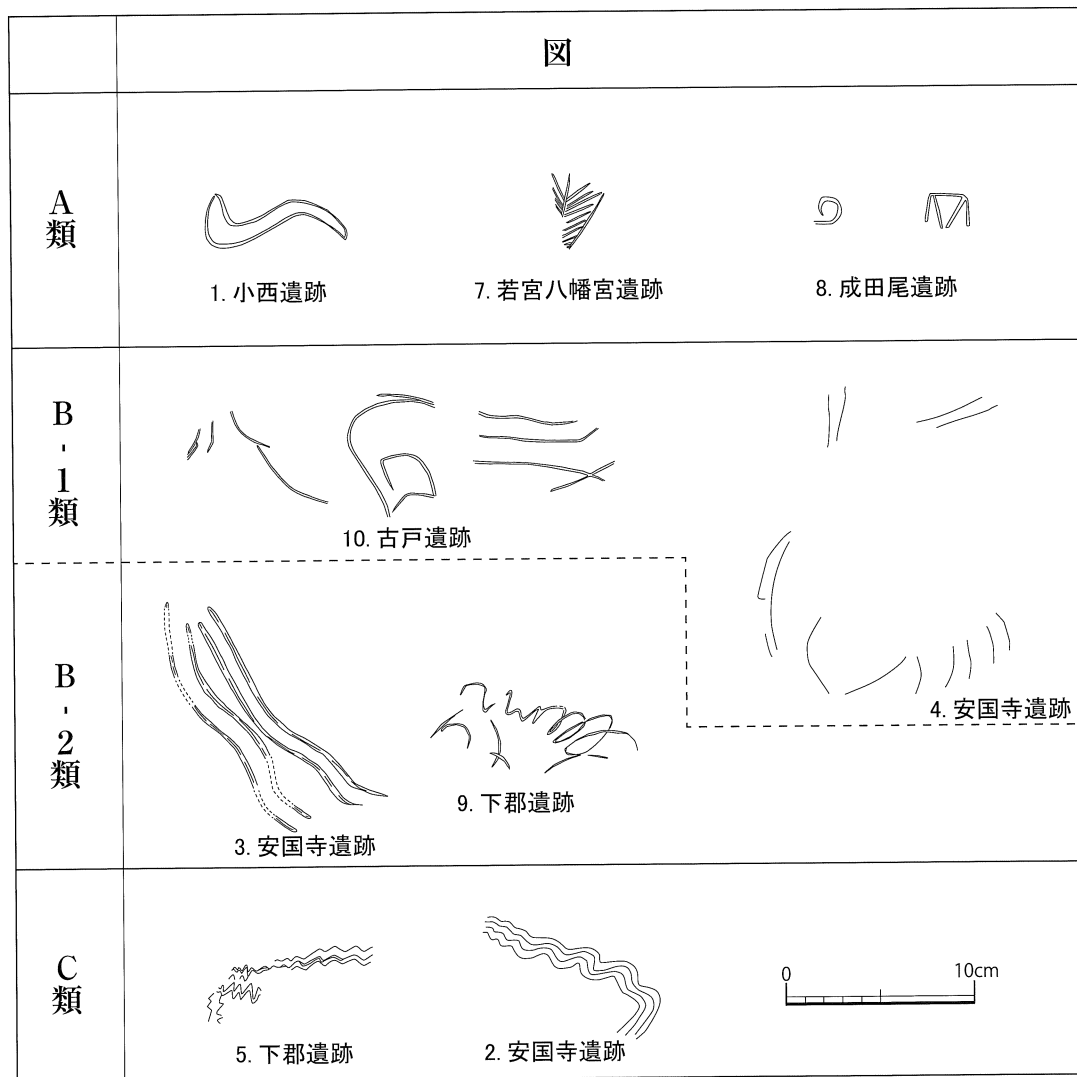
これまで観察したように弥生時代における県内出土の線絵画土器は9点を確認できた。多くは壺に描かれており、その図の特徴から大きく3つに大別することが可能であった。

A類は表現された図が具体的であるもので、県内出土の事例では1の小西遺跡、7の若宮八幡宮遺跡、8の成田尾遺跡の線刻絵画土器がこれに該当する。時期は古墳時代ではあるが龍が描かれているとすれば東田室遺跡の線刻絵画土器もこれにあたる。小西遺跡例は龍または蛇、若宮八幡宮遺跡例は葉、成田尾遺跡例は人物と描かれるものや土器の時期にはまともではない。

B類は表現された図が具体的でなく線を多用するものである。また、描かれた図の配置等からB-1類とB-2類に細分できる。B-1類は器面全体に線刻が施される種類である。4の安国寺遺跡や10の古戸遺跡の線刻絵画土器がこれにあたる。線刻が全周する点を積極的に評価すれば東田室遺跡の例もこれらの事例と共通する点は多い。B-2類は一か所に線刻が施される種類である。3の安国寺遺跡や9の下郡遺跡がこれに該当する。壺の肩部に描かれることが多い。

C類は表現された図が具体的でなく土器調整の延長で図が施されるものである。2の安国寺遺跡や5の下郡遺跡の線刻絵画土器がこれにあたる。いずれも櫛描波状文を施したもので5では壺の口縁部に施された櫛描波状文と共通性が認められる。

以上のことから大分県出土の弥生時代の線刻絵画土器は最も古いもので弥生時代中期前半から出土し、沿岸部を中心として後期後半に隆盛が認められる。安国寺遺跡や下郡遺跡など比較的集落の規模が大きく地域の拠点的な集落と考えられる遺跡には複数の線刻絵画土器が認められ、今回の古戸遺跡や安国寺遺跡の例のように器面全体に描かれるものも出現する。東田室遺跡の事例や古戸遺跡の事例のように図の部分の部分が細かく破碎された例もあり、遺棄の際の祭祀行為の存在をうかがわせる。今回の古戸遺跡の線刻絵画土器に限って言えば10-1の縦方向の線刻や10-2の鉤状の線刻など東田室遺跡の線刻絵画土器と類似する部分が多く龍を描いている可能性も考慮されるが破片の残存状況が悪く現状ではB-1類にとどまる。



第 276 図 線刻絵画土器の文様

遺物觀察表

遺物一覧表（土器・陶磁器）

No.	遺構	器種	時期・施文	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴部最大径)	外面の 文様・調整	外面色調	内面の 文様・調整	内面色調	胎土			
											角閃石	長石	石英	その他
1	SH001	深鉢	縄文後期		5.1+α		ナデ後磨 研・沈線	黒褐色	ナデ後磨研	暗褐色	少	多		少
2	SH001	深鉢	縄文後期		4.5+α		磨研・沈線	にぶい褐色	磨研	にぶい黄褐色	多	少		少
3	SH001	深鉢	縄文後期		5.3+α		ナデ後磨研	黒褐色	ナデ後磨研	黒褐色	少	多		多
4	SH001	深鉢	縄文後期		5.0+α		研磨・沈線	淡橙褐色	研磨	淡橙褐色	多	多		多
5	SH001	深鉢	縄文後期		2.4+α		ナデ後磨研	淡褐色	ナデ後磨研	淡褐色		少		多
6	SH001	深鉢	縄文後期		3.6+α		沈線・磨研	淡褐色	磨研	淡褐色	多、	多		
7	SH001	深鉢	縄文後期		4.2+α		ナデ後磨研	暗褐色	ナデ後磨研	暗褐色	少	多		少
8	SH001	深鉢	縄文後期		3.3+α		沈線・ナ メの刻目	淡褐色	ヨコナデ・ナ テ方向の 磨研・ヨコ 方向の磨研	淡褐色	多	多		
9	SH001	深鉢	縄文後期		5.5+α		研磨・沈線 ・刻目(Xの形)	黄褐色～ 黒褐色	研磨	暗褐色	多	多		多
10	SH001	深鉢	縄文後期		3.7+α		3條の沈線・研磨・沈 線文(偏線状)文様	暗褐色～ にぶい褐色	研磨	暗褐色	多	多	多	多
11	SH001	深鉢	縄文後期		2.6+α		ナデ後磨研	暗褐色	ナデ後磨研	暗褐色	少	多		多
12	SH001	深鉢	縄文後期		7.3+α		ナデ後磨研	淡褐色	ナデ後磨研	暗褐色	多	多		多
13	SH001	深鉢	縄文後期		5.7+α		条痕文	にぶい黄褐色	条痕文	にぶい黄褐色	多	多		
14	SH001	深鉢	縄文後期		4.2+α		沈線・ナデ	灰褐色	ナデ	淡黄色・	多	多		
15	SH001	深鉢	縄文後期		3.9+α		条痕	黒褐色	条痕	赤褐色	多			多
16	SH001	深鉢	縄文後期		6.1+α		磨研	灰茶褐色	磨研	灰茶褐色	多	多		少
17	SH001	深鉢	縄文後期		4.2+α		研磨・沈線	淡黄褐色	研磨	淡黄褐色	少	少		少
18	SH001	深鉢	縄文後期		3.5+α		ナデ・沈線・ 条痕文・研磨	灰黄褐色	研磨	褐灰色	多	少		多
19	SH001	深鉢	縄文後期		3.7+α		磨研・沈線・ 刻目文様	黒褐色	磨研 ヨコナデ・	にぶい赤褐色	少	少	少	
20	SH001	深鉢	縄文後期		3.2+α		ヨコナデ・ 沈線・磨研	暗茶褐色	磨研	暗茶褐色	多	多		
21	SH001	深鉢	縄文後期		5.9+α		研磨・刻目突 帯・沈線か?	暗褐色	ナデ	灰黄褐色	多	少		多
22	SH001	深鉢	縄文後期		3.7+α		沈線	茶褐色	研磨	茶褐色	少	多	多	少
23	SH001	深鉢	縄文後期		12.0+α		研磨	淡茶褐色	研磨	淡茶褐色	多	多	多	少
24	SH001	深鉢	縄文後期		3.6+α		磨消縄文	黒褐色	ナデ	黄褐色	多	多		
25	SH001	深鉢	縄文後期		4.3+α		沈線・紋様	淡褐色	ナデ	淡褐色	少	多		
26	SH001	深鉢	縄文後期		3.2+α		沈線・刻目・ ナデ	暗褐色	ナデ	暗褐色	少	多		多
27	SH001	深鉢	縄文後期		4.5+α		縄文痕	浅黄褐色	ナデ	褐灰色	多	多		少
28	SH001	深鉢	縄文後期		15.5+α		ヨコ方向の磨研・ ナデ方向の磨研	にぶい黄褐色	磨研	にぶい黄褐色	多	多		少
29	SH001	深鉢	縄文後期		8.6+α		ナデ	暗褐色	ナデ・ヨコ 方向のナデ	淡褐色	少	多		少
30	SH001	深鉢	縄文後期		11.4+α		磨研	灰褐色	磨研	にぶい褐色	多	少		多
31	SH001	深鉢	縄文後期	(32.0)	11.0+α		条痕	暗灰褐色	条痕	暗褐色	多	多		
32	SH001	深鉢	縄文後期	(25.6)	9.8+α		研磨	淡茶褐色	沈線・研磨	淡茶褐色	多	多	多	多
33	SH001	深鉢	縄文後期		6.2+α		ナデ後磨研	にぶい褐色	ナデ後磨研	にぶい褐色	少	少	少	少
34	SH001	深鉢	縄文後期		6.1+α		磨研	灰茶褐色	磨研	灰茶褐色	多	多		少
35	SH001	深鉢	縄文後期		4.8+α		指圧・ナデ・ 磨研	暗褐色	磨研	黒褐色	多	多		
36	SH001	深鉢	縄文後期		6.0+α		条痕文	暗黄褐色	ナデ	黄褐色	多	多		多
37	SH001	深鉢	縄文後期	23.0	6.4+α		ナデ	明赤褐色～ 暗赤褐色	ナデ・工具痕	灰褐色	多		少	多
38	SH001	深鉢	縄文後期		6.2+α		ナデ後磨研	暗褐色	ナデ後磨研	暗褐色	少	多		多

No.	遺構	器種	時期・施文	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴部最大径)	外面の 文様・調整	外面色調	内面の 文様・調整	内面色調	胎土			
											角閃石	長石	石英	その他
39	SH001	深鉢	縄文後期		8.9+α		ナデ後研磨	暗褐色	ナデ後研磨	橙褐色	多	多		
40	SH001	深鉢	縄文後期		6.7+α		丁寧なナデ	にぶい黄褐色	丁寧なナデ	にぶい黄褐色	少	少		少
41	SH001	深鉢	縄文後期		5.2+α		ナデ後研磨	灰褐色	ナデ後研磨	灰褐色	少	少		少
42	SH001	深鉢	縄文後期		4.0+α		ヨコ方向の ナデ	暗黄褐色	ヨコ方向の ナデ	暗黄褐色	少	多		
43	SH001	深鉢	縄文後期		7.1+α		条痕	暗褐色	条痕	暗橙褐色	多	少		
44	SH001	深鉢	縄文後期		4.9+α		ナデ	褐色	ナデ	褐色	多	多		
45	SH001	深鉢	縄文後期		8.8+α		ナデ後研磨	黒褐色	ナデ後研磨	にぶい黄褐色	少	少		少
46	SH001	深鉢	縄文後期		9.3+α		ナデ後研磨	黒褐色	ナデ後研磨	にぶい黄褐色	少	少	多	少
47	SH001	深鉢	縄文後期		6.0+α		ナデ後研磨	暗褐色	ナデ	暗褐色	少	多		
48	SH001	深鉢	縄文後期		7.1+α		条痕	暗褐色	条痕	暗橙褐色	多	少		
49	SH001	深鉢	縄文後期		4.9+α		ナデ後研磨	灰黄褐色	ナデ後研磨	淡褐色	少	多		
50	SH001	深鉢	縄文後期		8.3+α		条痕	浅黄色	ナデ	浅黄色	少	少		少
51	SH001	深鉢	縄文後期		5.8+α		研磨	灰褐色	研磨	灰褐色	多	少		
52	SH001	深鉢	縄文後期		4.4+α		研磨(摩滅 あり)・摩滅	にぶい黄褐色 ～灰黄褐色	ナデ・研磨	灰黄褐色	多	多		
53	SH001	深鉢	縄文後期		6.0+α		研磨	灰褐色	研磨	灰褐色	多	少		
54	SH001	深鉢	縄文後期		5.9+α		ナデ後研磨 磨・沈線	灰褐色	ナデ後研磨	灰褐色	多	少		
55	SH001	鉢	縄文後期	(17.5)	9.5+α		磨研・沈線	茶褐色	磨研	明茶褐色	多	多	少	
56	SH001	鉢	縄文後期	(16.6)	6.0+α		ヨコ方向の 磨研・沈線	淡橙褐色～ 黒褐色	ヨコ方向の 磨研	茶褐色	少	多		
57	SH001	鉢	縄文晩期	(11.4)	4.5+α		ナデ	淡黄色	ナデ	淡黄色	少	少		少
58	SH001	深鉢底部	縄文後期		4.2+α	6.3	ナデ後研磨	茶褐色	ナデ後研磨	黒褐色	少	多	多	
59	SH001	深鉢底部	縄文後期		3.9+α	(6.2)	磨研・ナデ	にぶい橙色	磨研	にぶい橙色	少	少	多	少
60	SH001	深鉢底部	縄文後期		3.6+α	6.0	磨研・磨滅	淡黄橙褐色	ナデ	淡黄橙褐色	多	多		少
61	SH001	深鉢底部	縄文後期		2.0+α	5.7	ナデ・貼付 高台	黄褐色	磨研	灰褐色	多	多		
62	SH001	深鉢底部	縄文後期		2.2+α	(8.0)	ナデ後研磨	暗褐色	磨滅	黒褐色	少	多		
63	SH001	深鉢底部	縄文後期		1.9+α	(7.4)	ナデ後研磨	淡橙褐色	ナデ	淡橙褐色		少		
64	SH001	深鉢底部	縄文後期		2.1+α	(6.0)	ナデ	黄褐色	ナデ	暗灰褐色	多	多		
65	SH001	深鉢底部	縄文後期		2.7+α	(4.2)	ナデ・磨研	にぶい黄色	ナデ	にぶい黄色	少	少		少
66	SH001	深鉢底部	縄文後期		2.0+α	(5.3)	タテナデ・ヨ コナデ・ナデ	淡灰褐色	ナデ	灰褐色	多	多		
67	SH001	深鉢底部	縄文後期		1.7+α	5.5	不明(磨滅)	浅黄色	ナデ	浅黄色	少	少		少
68	SH001	深鉢底部	縄文後期		1.7+α	5.2	磨研	灰褐色	磨研	灰褐色	少	多	多	
69	SH001	深鉢底部	縄文後期		1.3+α	(4.8)	ナデ後研磨	暗褐色	ナデ後研磨	暗褐色	少	多	少	
70	SH001	深鉢底部	縄文後期		1.7+α	4.8	ナデ・磨研	明赤褐色	ナデ	明赤褐色	少	少		少
71	SH001	深鉢底部	縄文後期		1.9+α	7.2	条痕	にぶい橙色	磨研	淡褐色	少	少		
72	SH001	深鉢底部	縄文後期		1.9+α	6.0	ナデ	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄褐色	多	多		
73	SH001	注口土器	縄文後期		2.8+α		沈線・刻目・貼 付突帯後刻目	淡褐色～ 灰褐色	ナデ	淡褐色～ 暗褐色灰褐色	多	多	少	
74	SH001	注口土器	縄文後期		4.2+α		ナデ・刻目突帯と リソ・刻目・沈線	にぶい褐色 ～褐灰色	ナデ	にぶい褐色	少	少		多
75	SH001	注口土器	縄文後期				ナデ	淡黄橙褐色		灰白色	少	少		少
97	SK001	深鉢	縄文晩期	(36.4)	16.3+α		条痕・ナデ	暗褐色・ 暗黄褐色	ナデ・研磨	暗灰褐色・ 暗黄褐色	多	多	少	

No.	遺構	器種	時期・施文	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴部最大径)	外面の 文様・調整	外面色調	内面の 文様・調整	内面色調	胎土			
											角閃石	長石	石英	その他
98	SK002	深鉢	縄文晩期		10.4+α		指ナテ・ヨコ方向のヘラクスの痕を調整	茶褐色	ヨコヘラミガキ	黒褐色	多	多		
99	SK002	浅鉢	縄文晩期		4.2+α		ヨコヘラミガキ	灰褐色～淡褐色	ヨコヘラミガキ	淡明褐色	多	多		
102	SK004	深鉢	縄文晩期		5.2+α		ヨコ方向ナテ	暗茶褐色	ヨコ方向ナテ	暗茶褐色	多	多		
103	SK005	深鉢	縄文後期		5.5+α		縄文・条痕	灰褐色	ナテ・条痕	灰褐色	多	多		
105	SK007	深鉢	縄文後期	(28.8)	15.1+s		ヨコナテ 洗滌タテ方向のミガキ	にぶい黄褐色	ヨコナテ	にぶい黄褐色	多	多		少
106	SK007	深鉢	縄文後期		4.0+α		ナテ 沈線文2条	灰黄褐色	ナテ	にぶい黄褐色	少	多		少
107	SK007	深鉢	縄文後期		5.5+α		沈線文	橙色	ナテ	にぶい黄褐色	多	少		少
108	SK007	深鉢	縄文後期		4.2+α		ナテ 磨研文 半敷竹管文による沈線文	灰黄褐色	ナテ	にぶい黄褐色	少	多		少
109	SK007	深鉢	縄文後期		6.2+α		ナテ後工具ナテ 沈線文	にぶい褐色	ナテ	灰褐色	多	多		多
110	SK007	深鉢	縄文後期		5.4+α		ヨコ方向のナテ	にぶい黄褐色	ナテ 沈線文	にぶい黄褐色	多	多	多	少
111	SK007	深鉢	縄文前期		4.4+α		ナテ 貼付突帯3条	灰黄褐色	ナテ	にぶい黄褐色	多	多		少
112	SK007	深鉢	縄文晩期		4.7+α		ヨコ方向の工具痕	暗褐色～黒褐色	ヨコナテ	褐灰色	多	多		多
113	SK007	深鉢	弥生中期		4.7+α		ナテ 貼付突帯タテ方向のハゲ目	にぶい黄褐色	ナテ	浅黄褐色		多		多
115	SK008	深鉢	縄文後期		2.8+α		縄文	にぶい黄褐色	ナテ	にぶい黄褐色	多	少		少
116	SK009	深鉢	縄文晩期		16.4+α		条痕	にぶい赤褐色	条痕	灰褐色	多	多		多
117	SK009	深鉢	縄文晩期		2.4+α	4.4	工具ナテナテ	にぶい黄褐色	ミガキ	黒灰色	多	多		少
118	SK009	深鉢	縄文晩期		9.0+α		ナテ	にぶい褐色	ナテ	にぶい褐色	多	多		多
119	SK010	深鉢	縄文後期		6.5+α		条痕	にぶい褐色	条痕	にぶい褐色	少	少		
120	SK010	深鉢	縄文後期		3.6+α		条痕	淡褐色	条痕	淡褐色	少	少	少	
121	SK010	深鉢	縄文後期		3.1+α		条痕	にぶい黄褐色	条痕	にぶい褐色	多	多		
122	SK010	深鉢	縄文後期		2.6+α		条痕	にぶい褐色	条痕	にぶい褐色	多	多		
123	SK010	深鉢	縄文後期		2.6+α		条痕	淡褐色	条痕	にぶい褐色	多	少	多	
124	SK010	深鉢	縄文後期		3.6+α		条痕・刻目	にぶい褐色	条痕	黒褐色	少	少	多	
125	SK010	深鉢	縄文後期		5.0+α		条痕	淡褐色	条痕	淡褐色	少	少		
126	SK010	深鉢底部	縄文後期		3.6+α		ナテ	にぶい褐色	ナテ	褐灰色	多	多		
129	SK012	深鉢	縄文晩期		12.5+α		磨研	淡褐色	磨研	淡褐色	多	少		
130	SK012	深鉢	縄文晩期		5.8+α		磨研	淡灰褐色	磨研	淡灰褐色	多	多		
131	SK012	深鉢	縄文晩期		3.9+α		ナテ	にぶい褐色	ナテ	にぶい褐色	少	多		
132	SK012	鉢	縄文晩期	21.7	6.4+α		磨研	にぶい黄褐色	磨研	にぶい黄褐色	少	多		多
133	SK012	浅鉢	縄文晩期		2.7+α		磨研	明褐色	磨研	黒褐色	多	少		
134	SK012	深鉢底部	縄文晩期		3.2+α	(6.4)	ナテ	暗橙褐色	ナテ	白黄褐色	少	多		
135	SK012	深鉢底部	縄文晩期		1.5+α	(5.0)	ナテ 貼付高台	淡褐色	磨研	淡褐色	少	少	多	
138	SK013	深鉢	縄文後期		4.3+α		研磨	灰褐色	研磨	灰黄色	少	少	少	
139	SK014	深鉢	縄文後期		4.2+α		2条の沈線	にぶい褐色	研磨	にぶい褐色	多	多		
140	SK014	深鉢	縄文後期		5.2+α		研磨・2条の沈線	灰黄褐色	研磨	灰黄褐色	少	少		
141	SK015	深鉢	縄文晩期		4.3+α		条痕・沈線	橙色	条痕	淡褐色	少	多		
142	SK015	深鉢	縄文晩期		6.2+α	(5.0)	工具ナテ	黄褐色	工具ナテ	灰黄色	多	少	少	
143	SK016	深鉢	縄文後期		6.0+α		ヨコナテ・ナテ	暗赤褐色～にぶい褐色	ナテ・ヨコナテ	褐灰色	多			
144	SK016	深鉢	縄文後期		2.9+α		沈線・ヨコナテ	にぶい褐色～褐灰色	ヨコナテ	にぶい褐色	多	多		
145	SK016	深鉢底部	縄文後期		1.7+α		ナテ	にぶい褐色	ナテ	褐灰色	多		少	

No.	遺構	器種	時期・施文	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴部最大径)	外面の 文様・調整	外面色調	内面の 文様・調整	内面色調	胎土			
											角閃石	長石	石英	その他
146	SK016	深鉢底部	縄文後期		4.2+α		ナテ・工具ナテ・指オサエ	褐灰色～にぶい橙色	ナテ	褐灰色	多	多		多
148	SK017	深鉢	縄文後期	(27.7)	14.7+α		ナテ・沈線・縄文	灰褐色	ナテ	灰褐色・黒褐色	多	多		
149	SK017	深鉢	縄文後期	(36.4)	11.0+α		磨消縄文・沈線・磨研・縄文のある突起	茶褐色褐色～暗茶褐色	磨研・ナテ	淡褐色～暗褐色	多	多		
150	SK017	深鉢	縄文後期		10.0+α		沈線・磨研	淡褐色	磨研	淡褐色	多	多	多	多
151	SK017	深鉢	縄文後期		4.4+α		沈線・磨研	淡茶褐色	磨研	淡茶褐色	多	多	多	多
152	SK017	深鉢	縄文後期		6.2+α		沈線・条痕	淡茶褐色	ナテ	灰白色	多	多	多	多
153	SK017	深鉢	縄文後期		3.5+α		ナテ後磨研	黒茶褐色	ナテ後磨研	黒茶褐色		多		多
154	SK017	深鉢	縄文後期		4.2+α		ナテ	暗灰褐色	ナテ	暗灰褐色	少	多		多
155	SK017	深鉢	縄文後期		5.0+α		ナテ後磨研	黒茶褐色	ナテ後磨研	黒茶褐色		多		少
156	SK017	深鉢	縄文後期		6.1+α		ナテ後磨研	暗褐色	ヨコ方向ナテ	暗褐色	少	多		多
157	SK017	深鉢	縄文後期		4.9+α		ナテ・磨研	暗褐色	ナテ後磨研	暗褐色	少	多		多
158	SK017	深鉢	縄文後期		3.9+α		ナテ後磨研	暗褐色	ナテ後磨研	暗褐色	多	多		多
159	SK017	深鉢	縄文後期		5.9+α		ナテ後磨研	黒褐色	ナテ後磨研	黒褐色	多	多		多
160	SK017	深鉢	縄文後期		6.9+α		ナテ後磨研	暗灰褐色	ナテ後磨研	暗黄灰褐色	多			多
161	SK017	深鉢	縄文後期		5.3+α		沈線・磨研	茶褐色	磨研	灰白色	多	多	多	多
162	SK017	深鉢	縄文後期		5.5+α		沈線・磨研	茶褐色	磨研	茶褐色	多	多	多	少
163	SK017	深鉢	縄文後期		4.6+α		沈線・縄文・ナテ	暗褐色	ナテ	暗褐色		多		多
164	SK017	深鉢	縄文後期		4.3+α		磨研・沈線	淡橙褐色	磨研	淡橙褐色	多	多	多	多
165	SK017	深鉢	縄文後期		6.0+α		沈線・磨研	黒褐色	磨研	黒褐色～灰褐色	多	多	少	多
166	SK017	深鉢	縄文後期		7.4+α		縄文・ナテ	褐色・黒褐色	ナテ	灰白色	多	多		
167	SK017	深鉢	縄文後期		4.8+α		沈線・ナテ	茶褐色	磨研	茶褐色	多	多	多	少
168	SK017	深鉢	縄文後期		7.5+α		条痕・磨消縄文	茶褐色	ナテ	灰褐色	少	多	少	多
169	SK017	深鉢	縄文後期		8.5+α		条痕・磨消縄文・ナテ	灰褐色	ナテ	灰褐色	多	多	少	多
170	SK017	深鉢	縄文後期		6.1+α		条痕・縄文	褐色・黒褐色	ナテ	灰白色	多	多		
171	SK017	深鉢	縄文後期		7.0+α		沈線・ナテ	暗黄灰褐色	ナテ	暗黄灰褐色		多		多
172	SK017	深鉢	縄文後期		3.8+α		沈線・ヨコ方向ナテ	暗褐色	ヨコ方向ナテ	淡黄褐色	少	多		多
173	SK017	深鉢	縄文後期		4.2+α		縄文	灰褐色	ナテ	褐色	多	多		
174	SK017	深鉢	縄文後期		5.9+α		縄文・ナテ	褐灰色	ナテ	浅黄橙色	多	多		
175	SK017	深鉢	縄文後期		3.2+α		ナテ後磨研	暗褐色	ナテ後磨研	暗褐色		多		多
176	SK017	深鉢	縄文後期	(17.7)	18.0	(7.0)	ヨコ・ナナム方向の磨研	灰褐色・淡褐色	ヨコ方向のミガキ	黒褐色・灰褐色	多	多		
177	SK017	深鉢	縄文後期		7.4+α		ナテ	灰褐色・淡黄色	ナテ	灰褐色	多	多		
178	SK017	深鉢	縄文後期		15.8+α		ナテ後磨研	暗褐色	ナテ後磨研	暗褐色		多		多
179	SK017	深鉢	縄文後期	(29.2)	11.4+α		条痕	灰黄褐色	ナテ	灰白色	多	多		
180	SK017	深鉢	縄文後期		8.4+α		条痕	茶褐色	ナテ	黒褐色～灰褐色	少	多	多	多
181	SK017	深鉢	縄文後期		8.6+α		条痕	灰褐色	ナテ	灰褐色	多	多	多	多
182	SK017	鉢	縄文後期	(15.4)	5.2+α		ナテ後磨研	黒褐色	ヨコ方向ナテ・ナテ後磨研	黒褐色	少	多		多
183	SK017	鉢	縄文後期	(20.6)	7.7		縄文・ナテ	暗黄褐色	ナテ・磨研	暗黄褐色	多	多		多
184	SK017	深鉢	縄文後期		4.4+α		ナテ後磨研	暗褐色	ナテ後磨研	暗褐色	少	多		多
185	SK017	深鉢	縄文後期		3.2+α		ナテ後磨研	黒茶褐色	ナテ後磨研	黒茶褐色	多	多		多
186	SK017	深鉢	縄文後期		6.1+α		ナテ後磨研	暗褐色	ヨコ方向ナテ	暗褐色	少	多		多

No.	遺構	器種	時期・施文	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴部最大径)	外面の 文様・調整	外面色調	内面の 文様・調整	内面色調	胎土			
											角閃石	長石	石英	その他
187	SK017	深鉢	縄文後期		5.5+α		沈線・研磨	茶褐色	研磨	茶褐色	多	多	多	少
188	SK017	深鉢	縄文後期	(44.5)	7.8+α		条痕	淡褐色	条痕	褐色	多	多		
189	SK017	深鉢	縄文後期	(35.8)	7.5+α		ナデ後研磨	暗灰黄褐色	ナデ後研磨	暗灰黄褐色	少	多		多
190	SK017	深鉢	縄文後期	(33.8)	5.7+α		ヨコ方向の 条痕	褐色	ヨコ方向の 条痕	灰褐色・褐色	少	少		
191	SK017	深鉢底部	縄文後期		6.4+α	(7.0)	ナデ	浅黄褐色	ナデ	浅黄褐色	少	少		
192	SK017	深鉢底部	縄文後期		2.8+α	16.5	ナデ	淡黄色	ナデ	灰白色	多	多		
193	SK017	深鉢底部	縄文後期		2.6+α	6.0	ナデ・ミガキ	灰褐色	ナデ	灰褐色	多	多	多	多
194	SK017	深鉢底部	縄文後期		2.5+α	7.4	ナデ	黄褐色	ナデ	黄褐色	多	少	多	多
195	SK017	深鉢底部	縄文後期		2.5+α	6.3	ナデ	淡黄色	ナデ	灰褐色	多	多		
196	SK017	深鉢底部	縄文後期		2.5+α	6.7	ナデ	淡黄色	ナデ	黒褐色・灰 褐色	多	多		
197	SK017	深鉢底部	縄文後期		1.9+α	(7.2)	ナデ	淡橙褐色	ナデ	淡褐色				多
198	SK017	深鉢底部	縄文後期		2.6+α	(5.8)	ナデ後研磨	淡橙褐色	ナデ	黒褐色	多	多		多
199	SK017	深鉢底部	縄文後期		2.3+α	4.8	ナデ・工具ナデ	橙色	ナデ	黒褐色・灰 褐色	多	多		
200	SK017	深鉢底部	縄文後期		2.2+α	(6.4)	ナデ後研磨	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	多	多		多
201	SK017	深鉢底部	縄文後期		1.7+α	(5.4)	ナデ	淡橙褐色	ナデ	黒褐色	多	多		多
202	SK017	深鉢底部	縄文後期	(15.4)	5.2+α		ナデ後研磨	黒褐色	ヨコ方向ナデ・ ナデ後研磨	黒褐色	少	多		多
203	SK017	深鉢底部	縄文後期		1.6+α	6.4	ミガキ	黄褐色	ナデ	黒褐色	多	多	多	多
217	SK018	深鉢	縄文後期		3.0+α		ヨコナデ・沈 線・縄文・ナデ	にぶい橙色 ～灰褐色	ナデ・ヨコ ナデ	にぶい橙色 ～灰褐色	少	少		多
219	ST001	深鉢	縄文後期		17.3+α		条痕	暗褐色	条痕・ナデ	暗褐色	多	多	少	多
220	ST002	深鉢	縄文後期	(39.0)	37.8+α		条痕・ナデ	暗褐色	条痕・ナデ	暗褐色	多	多		
136	ST003	深鉢	縄文後期		20.0+α	11.8	ナデ	暗茶褐色	ナデ	暗茶褐色		多		多
223	SP002	深鉢底部	縄文後期		5.6+α	6.4	工具によるナデ・ 磨滅により不明	黄褐色	ナデ	淡褐色	多	多		少
226	SP005	深鉢底部	深鉢底部		4.7+α	4.6	ヨコ方向の工具ナデ 後ミガキ(磨滅) ナデ	暗褐色～黒 褐色	ナデ	暗褐色	多	多		多
227	SP006	深鉢	縄文後期		3.0+α		ナデ	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄 褐色	多	多		
228	SP007	深鉢	縄文後期		3.8+α		沈線文・条痕	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄 褐色	多	多		
229	SP008	浅鉢	縄文晩期		4.3+α		ナデ	灰黄褐色	ナデ	灰黄褐色	多	多		多
231	SP010	深鉢底部	縄文後期		2.9+α	4.8	ナデ後ヘラミ ガキ・ナデ	暗茶褐色	ナデ後ヘラ ミガキ	黒褐色	少	多		少
235	SP014	深鉢	縄文後期		3.9+α		研磨・沈線	暗茶褐色	研磨	暗褐色		多		少
236	SP015	深鉢	縄文後期		3.6+α		紋様・磨研	にぶい黄褐色	磨研・ヨコ ナデ	にぶい黄 褐色	少	少		
237	SP016	深鉢	縄文後期		5.1+α		研磨	褐灰色	研磨	褐灰色	少	少		少
238	SP017	深鉢底部	縄文後期		3.5+α	(6.2)	ミガキ	明褐色	ミガキ	黒褐色	多	多		多
240	SP019	深鉢底部	縄文後期		2.1+α	(4.6)	ナデ	暗褐色	ナデ	暗褐色	多	多		多
242	SP021	深鉢	縄文後期		5.0+α		研磨・刻目・ 沈線	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	多			多
243	SP022	深鉢	縄文後期		2.4+α		ナデ・沈線	暗茶褐色	ナデ	暗茶褐色		多		少
246	SP024	深鉢	縄文後期		3.4+α		研磨・沈線	暗茶褐色	研磨	褐色	多	多		多
248	SP026	深鉢	縄文後期		2.7+α		条痕・1条沈線	にぶい橙色	条痕	にぶい橙色	多		多	多
249	SP027	深鉢底部	縄文後期		1.7+α	(5.0)	ナデ	淡褐色	ナデ	黒褐色	少	多	少	少
250	SP028	深鉢	縄文後期		5.5+α		縄文・沈線・ヨコナデ・ 工具ナデ後ヨコナデ	褐灰色	ヨコナデ・ ナデ	にぶい橙色	多	多		多
251	SP029	深鉢	縄文後期		3.7+α		ヨコナデ・沈 線・突帯	にぶい橙色 ～褐灰色	ヨコナデ	灰褐色		多		多
253	SP031	深鉢	縄文後期		6.2+α		研磨・縄文後 2条沈線	暗褐色	研磨	暗褐色	多	少		多

No.	遺構	器種	時期・施文	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴部最大径)	外面の 文様・調整	外面色調	内面の 文様・調整	内面色調	胎土			
											角閃石	長石	石英	その他
254	SP032	深鉢	縄文後期		4.9+α		ナデ・沈線	暗褐色	ナデ	淡褐色	多	多		少
255	SP033	深鉢底部	縄文後期		2.1+α	5.9	工具ナデ	淡橙色	工具ナデ	灰褐色	多	多		多
256	SP034	深鉢	縄文後期		4.6+α		ナデ	灰褐色	ナデ	灰褐色		多	多	多
257	SP035	浅鉢	縄文後期	(20.0)	5.0+α		ナデ	暗褐色	条痕後ナデ	暗褐色	多	多		多
258	SP036	深鉢	縄文後期		5.6+α		縄文・沈線・ 研磨	灰黄褐色	研磨	暗茶褐色	多	多		多
259	SP037	深鉢	縄文後期		4.7+α		ナデ	橙褐色	ナデ	橙褐色	多	多	多	多
260	SP038	深鉢	縄文後期		3.1+α		ナデ	暗褐色	ナデ	暗褐色		少		多
261	SP039	深鉢	縄文後期		2.7+α		ナデ後沈線・ 刻目	暗灰黄色	ナデ	暗灰黄色	多	多		少
263	包含層	深鉢	縄文前期		5.7+α		隆起縄文・縄文	暗灰色	条痕文	灰黄褐色	多	多	多	少
264	包含層	深鉢	縄文前期		6.3+α		刻み目・隆起 縄文	灰褐色	条痕	黒褐色	多	多	多	多
265	包含層	深鉢	縄文前期		5.3+α		隆起縄文	灰白色	条痕	灰褐色	多	多	多	多
266	包含層	深鉢	縄文前期		5.5+α		縄文	にぶい橙色	条痕文	暗茶褐色	少	少	少	少
267	包含層	深鉢	縄文前期		5.9+α		ナデ・縄文・ 竹管文	にぶい褐色	ナデ	にぶい褐色	少	多	多	多
268	包含層	深鉢	縄文前期		6.9+α		ナデ・刻目・ 突帯・縄文	黒褐色	条痕	黒褐色				少
269	包含層	深鉢	縄文前期		5.8+α		縄文・刻目突帯	暗茶褐色	条痕?	暗灰黄褐色	多			少
270	包含層	深鉢	縄文前期		3.0+α		縄文・条痕	黄橙褐色	条痕	黄橙褐色				多
271	包含層	深鉢	縄文後期		5.8+α		沈線	黄橙褐色	ナデ	黄橙褐色	多	多	多	多
272	包含層	深鉢	縄文後期		5.7+α		縄文・条痕	茶褐色	ナデ	茶褐色	多	多		多
273	包含層	深鉢	縄文後期				研磨 沈線 縄文	にぶい褐色	研磨	褐灰色	少	少		多
274	包含層	深鉢	縄文後期				研磨 沈線	にぶい褐色 ~褐灰色	研磨	にぶい黄 橙色	多	多		多
275	包含層	深鉢	縄文後期				研磨 磨消 縄文 沈線	暗褐色	研磨	暗褐色	多	多		多
276	包含層	深鉢	縄文後期		4.7+α		沈線・ヨコナデ・ 縄文・沈線文	灰褐色	ナデ	褐灰色	多	多	少	
277	包含層	深鉢	縄文後期		3.5+α		ナデ 縄文 沈線 ヨコ方向のナデ	淡黄色	ナデ	淡黄色	少	少		少
278	包含層	深鉢	縄文後期		2.6+α		研磨 沈線・ 刻目	黄橙褐色	研磨	黄橙褐色	多	多		多
279	包含層	深鉢	縄文後期		3.7+α		沈線	灰褐色	ナデ	黒灰色	多	多	多	多
280	包含層	深鉢	縄文後期		3.4+α		縄文	褐色	ナデ	灰褐色	多	多		多
281	包含層	深鉢	縄文後期		3.5+α		沈線・竹管文	灰褐色	ナデ	灰褐色	多	多	多	多
282	包含層	深鉢	縄文後期		4.9+α		沈線・ナデ・ 縄文	にぶい褐色	ナデ	灰白色		少	少	
283	包含層	深鉢	縄文後期		3.8+α		沈線・ナデ・ 刻目	にぶい褐色	研磨	灰褐色	多	多		
284	包含層	深鉢	縄文後期				沈線 半截竹管文 磨消縄文 縄文	にぶい褐色	ヨコ方向の 条痕	にぶい褐色	多	多		多
285	包含層	深鉢	縄文後期				研磨 沈線 磨消縄文	にぶい褐色	ナデ	淡褐色~ 黒褐色	少	多	多	多
286	包含層	深鉢	縄文後期		2.4+α		刺突文 沈線	灰黄色	タテ方向の 研磨	灰黄色	少	少		少
287	包含層	深鉢	縄文後期				沈線 磨消 縄文	暗褐色	ナデ	暗褐色	少	多		多
288	包含層	深鉢	縄文後期		3.1+α		沈線・縄文	灰褐色	ナデ	にぶい黄 橙色	多	多	少	
289	包含層	注口土器	縄文後期		3.5+α		磨消縄文	黒灰色~ 灰白色	ナデ	黒灰色	少	多	多	多
290	包含層	注口土器	縄文後期		2.6+α		ナデ 沈線 ヨ コ方向のナデ	橙色	ナデ	橙色	少	多		少
291	包含層	注口土器	縄文後期		2.5+α		沈線・ナデ・ 貼付突帯	灰白色	条痕	黒灰色	多	多	多	多
292	包含層	注口土器	縄文後期		2.6+α		ナデ・沈線	灰白色	ナデ	灰白色	多	多	多	多
293	包含層	注口土器	縄文後期		20.+α		沈線 ナデ	黒褐色	条痕	黒褐色	多	少		多
294	包含層	脚付浅鉢	縄文後期		3.4+α	4.8	沈線 ナデ ヨコ方向のナデ	にぶい黄 橙色	ナデ	にぶい黄 橙色	多	多		多

No.	遺構	器種	時期・施文	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴部最大径)	外面の 文様・調整	外面色調	内面の 文様・調整	内面色調	胎土			
											角閃石	長石	石英	その他
295	包含層	脚付浅鉢	縄文後期		3.5+α	4.9	沈線 ナデ ヨコ方向のナデ	にぶい黄 橙色	ナデ	にぶい黄 橙色	多	多		多
296	包含層	深鉢	縄文後期		7.0		研磨	暗茶褐色	研磨	茶褐色	少	多	多	多
297	包含層	深鉢	縄文後期		6.1+α		ヨコ方向の 研磨	にぶい黄 橙色	ヨコ方向の 研磨	にぶい黄 橙色	少	多		多
298	包含層	深鉢	縄文後期				ナデ ヨコ 方向の条痕	暗褐色	研磨 沈線 ナデ	暗褐色	少	多	多	多
299	包含層	深鉢	縄文後期				ヨコ方向の 条痕	暗褐色～ 黒褐色	ヨコ方向の ナデ	暗褐色	多	多	多	多
300	包含層	深鉢	縄文後期		6.0+α		条痕	にぶい黄 橙色	条痕	にぶい黄 橙色	多			多
301	包含層	深鉢底部	縄文後期		3.8+α	(6.7)	研磨	黄褐色	研磨	淡黄褐色	多	多		
302	包含層	深鉢底部	縄文後期		2.0+α	5.6	ナデ・ヨコナ デ	灰褐色	ナデ	黒灰色	多	多	多	多
303	包含層	深鉢底部	縄文後期		1.8+α	2.2	ナデ	暗赤褐色	ナデ	黒褐色	多	多	多	多
304	包含層	浅鉢	縄文晩期		3.0+α		研磨	黒褐色	研磨	黒褐色	多	多	多	少
305	包含層	深鉢	縄文晩期		4.5+α		ヨコ方向の 研磨	灰黄褐色	ヨコ方向の 研磨	灰黄褐色	少	少		少
306	包含層	深鉢	縄文晩期		3.0+α		ナデ	褐色	ナデ	暗褐色～ 黒褐色	多	多		多
307	包含層	深鉢	縄文晩期		8.2+α		条痕	黒褐色	条痕	灰黄褐色	多	少		多
308	包含層	深鉢	縄文晩期		7.4+α		ナデ・沈線文	灰褐色～に ぶい橙色	ナデ	褐灰色～ にぶい橙色	多	多		多
309	包含層	浅鉢	縄文晩期		4.0+α		ヨコ方向のナデ	灰黄褐色	ヨコ方向の ナデ	褐灰色	多	多		多
310	包含層	浅鉢	縄文晩期		3.2+α		ヨコ方向の 研磨	にぶい橙色	ヨコ方向の 研磨	にぶい橙色	多			多
311	包含層	浅鉢	縄文晩期		5.1+α		ナデ	暗褐色	ナデ	黒褐色	多	多		少
312	包含層	深鉢	縄文晩期		3.0+α		線刻	橙褐色	ナデ・ヨコ ナデ	橙褐色	多	多	多	多
313	包含層	深鉢	縄文晩期	(22.2)	12.2+α		ヨコ方向の 研磨・ナデ	黒褐色	ヨコ方向の 研磨	黒褐色	多	多		多
314	包含層	深鉢	縄文晩期	(20.8)	12.5+α		刻み文様・条 痕文	暗褐色	ヨコ方向の 工具ナデ	灰黄褐色	多	多		少
398	SH002	壺	弥生中期後半	13.8	15.2	6.8	ヨコナデ・ミ ガキ	淡黄褐色	ヨコナデ・ナ デ・指圧痕	淡黄褐色	多	多	多	多
399	SH002	壺	弥生中期後半	(29.6)	33.5	6.4	タテハケ・ナ デ・指圧痕	黄褐色	ユビ押し・ナ デ・ヨコナデ	黄褐色	多	多		少
400	SH002	壺	弥生中期後半		24.1+α	3.3	磨滅により不明	黄褐色	ナデ	黄褐色	少	少		多
401	SH002	壺	弥生中期後半		3.2+α	(5.4)	ナデ後ヘラミ ガキ・ナデ	黄茶褐色	ナデ(ツメ 痕残)	黄茶褐色	少	多		
402	SH002	蓋	弥生中期後半		2.5+α		ヨコナデ・タテハ ケ・タテハ後ヨコナ デ	淡褐色	ヨコナデ	暗褐色	多	多		
403	SH002	鉢	弥生中期後半	(13.0)	5.6+α		刻み目・ナデ(磨 滅が著しい)	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色		多		多
404	SH002	甗	弥生中期後半	(29.8)	5.6+α		ヨコナデ・タテハ ケ後ヨコナデ・沈線	淡褐色	ヨコナデ・ 工具ナデ	淡褐色	多	少		
405	SH002	甗	弥生中期後半	(27.0)	9.0+α		ヨコナデ・タテ 方向のハケ	淡褐色	ヨコナデ・ ナデ	淡褐色	少	少		少
406	SH002	甗	弥生中期後半	(26.4)	30.1	6.6	磨滅により不明・ 縦方向のハケ	黄褐色～ 淡褐色	ナデ・磨滅 により不明	灰黄褐色	多	多		多
407	SH002	甗	弥生中期後半	(25.2)	16.2	7.6	ヨコナデ・ハケ	淡褐色	ナデ・指圧痕	淡褐色～ 黒灰色	多	多	多	多
408	SH002	甗	弥生中期後半		5.0+α		ヨコナデ・タテハ ケ	橙褐色・ 淡褐色	ヨコナデ・ ナデ	橙褐色・灰 褐色	少	多		
409	SH002	甗	弥生中期後半		4.1+α		ヨコナデ・ハケ	褐灰色～に ぶい褐色	ナデ・ヨコ ナデ	にぶい橙色		少		少
410	SH002	甗	弥生中期後半		3.8+α		ヨコナデ・ハケ	灰褐色・黒 褐色	ヨコナデ	灰褐色	少	少		
411	SH002	甗	弥生中期後半		2.5+α		ヨコナデ・ハケ	にぶい橙色	ヨコナデ	にぶい橙色 ～橙色	少			
412	SH002	甗	弥生中期後半		5.0+α		ヨコナデ・ハケ	黄灰色	ナデ・ヨコ ナデ	灰褐色	少			少
413	SH002	甗	弥生中期後半		4.0+α		ヨコナデ・ハケ	灰褐色	ヨコナデ・ ハケ	灰褐色	少			少
414	SH002	甗	弥生中期後半		3.8+α		ヨコナデ・ハケ	浅黄褐色	ヨコナデ	浅黄褐色	少	少		少
415	SH002	甗	弥生中期後半		4.0+α		ヨコナデ・ハケ メ・突帯貼付	灰褐色・褐 灰色	ヨコナデ	灰褐色	少	多		
416	SH002	甗	弥生中期後半		4.7	5.6	タテハケ・タテハ 後ヨコナデ・工具ナ デ	暗茶褐色	ナデ	黒灰色	少	多		
417	SH002	甗	弥生中期後半		9.9+α	6.7	タテ方向のハケ・ ヨコナデ・ナデ	にぶい黄 橙色	ナデ	にぶい黄 橙色	多	多		少

No.	遺構	器種	時期・施文	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴部最大径)	外面の 文様・調整	外面色調	内面の 文様・調整	内面色調	胎土			
											角閃石	長石	石英	その他
418	SH002	甗	弥生中期後半		6.4+α	(7.3)	タテハケ・タテハケ後 ヨコナデ・ヨコナデ	橙褐色	ナデ	灰褐色	少			
419	SH002	甗	弥生中期後半		6.8+α	(7.2)	タテハケ・ヨ コナデ・ナデ	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	少	少		少
420	SH002	高坏	弥生中期後半		1.7+α		ヨコナデ	暗黄褐色	ヨコナデ・ ヘラミガキ	暗黄褐色		多		
421	SH002	高坏	弥生中期後半		7.1	(13.6)	不明(剥離)	淡褐色・黒 褐色	絞り痕・ヨコ ナデ	淡褐色	多	多		
430	SH003	鉢	弥生終末～ 古墳初頭	(11.6)	3.2+α		ヨコナデ・指 圧・ナデ	赤茶色	ヨコナデ・ ナデ	赤茶色	少	少		
431	SH004	甗	弥生中期後半	(26.0)	5.5+α		ヨコナデ・タ テハケ	暗茶褐色	ヨコナデ・ ナデ	茶褐色	多	多		
432	SH005	深鉢	縄文晩期		5.4+α		条痕	黒褐色	条痕・ナデ	黒褐色		多		多
433	SH005	深鉢	縄文晩期		3.4+α		刻み目・横方 向のナデ	黒褐色	条痕	黒褐色	少	多		
434	SH005	甗	弥生中期後半		1.6+α	(9.0)	ヨコナデ・ナデ	淡褐色	ナデ	淡褐色		少		多
435	SH005	甗	弥生中期後半		4.0+α	(7.6)	ヨコナデ・ナデ	淡褐色	剥離	淡褐色	多	多		
437	SH006	壺	弥生終末～ 古墳初頭	(17.1)	5.9+α		ナデ	明橙色	ナデ	淡褐色	多	少		少
438	SH006	長頸壺	弥生終末～ 古墳初頭		3.9+α	(7.4)	タテ方向のハ ケメ・ヨコナデ	淡褐色	ヨコ方向のハ ケメ・ヨコナデ	淡褐色	少	多		
439	SH006	甗	弥生終末～ 古墳初頭	(22.0)	17.7+α		ナデ・ナナメ ハケ	橙色	ヨコハケ・ナ メハケ後ナ メハケ後ナ メハケ後ナ メハケ後ナ	橙色	多	多		
440	SH006	甗	弥生終末～ 古墳初頭	(19.0)	8.6+α		ナデ	暗灰褐色	ヨコ方向のハ ケメ・ナメハ ケ後ナメハ ケ後ナメハ ケ後ナメハ	暗灰褐色	多	多		多
441	SH006	甗	弥生終末～ 古墳初頭	(18.2)	8.0+α		ナデ・タテ方 向のハケ後 ナデ	にぶい黄 褐色	ナデ・ヨコ ナデ	にぶい黄 褐色	少	少		
442	SH006	甗	弥生終末～ 古墳初頭		4.6+α		ヨコナデ・タ テ方向の工 具ナデ	黒褐色	ヨコナデ・ナ メ方向のナ デ	淡褐色	多	多		
443	SH006	甗	弥生終末～ 古墳初頭		4.8+α		ヨコナデ・タ テ方向のナ デ	暗灰褐色	ヨコナデ・タ テ方向のナ デ	暗灰褐色	少	少		
444	SH006	甗	弥生終末～ 古墳初頭	(19.8)	9.6+α		ヨコナデ・工 具ナデ平行 タテハケ・ナ メハケ	黄褐色	ヨコハケ	黄褐色	少	少		少
445	SH006	甗	弥生終末～ 古墳初頭		10.5+α		ヨコナデ・条 痕	淡明褐色	ヨコナデ・筋 筋ナメ筋筋 筋筋筋筋筋筋	淡明褐色	少	多		
446	SH006	鉢	弥生終末～ 古墳初頭	(15.2)	6.7+α		ナデ・ヘラケ ズリ	明橙色	ナデ	明橙色	少	少		少
447	SH006	鉢	弥生終末～ 古墳初頭	(11.1)	7.1+α		ヨコ方向のハ ケ・工具によ るナデ	灰褐色	ヨコ方向のナ デハケ・ナ デ	灰褐色	多	少		多
448	SH006	鉢	弥生終末～ 古墳初頭	(11.6)	5.1+α		ヨコナデ・ヘ ラケズリ後 ナデ	黄褐色	ヨコナデ・ ナデ	黄褐色	少	少		少
449	SH006	鉢	弥生終末～ 古墳初頭	(10.9)	4.3+α		ヨコナデ・工 具ナデ?	淡褐色	ナナメハケ・ ヨコナデ	淡褐色	多	多		
450	SH006	鉢	弥生終末～ 古墳初頭	(11.6)	5.5+α		ヨコナデ・指 圧後タテ方 向ナデ	暗褐色	ヨコナデ・ ナデ	黒色	少	多		
451	SH006	鉢	弥生終末～ 古墳初頭	(8.4)	5.4+α		ヨコナデ・丁 竪なナデ	灰褐色	ヨコナデ・不 定方向のハ ケ	灰褐色	少	少		少
452	SH006	鉢	弥生終末～ 古墳初頭		5.6+α		ヨコナデ・ヘ ラケズリ	灰黄色	ヨコナデ・ヨ コ方向のハ ケメ	黒褐色	少	少		
453	SH006	壺底部	弥生終末～ 古墳初頭		1.9+α	1.6	工具によるナ デ	にぶい赤 褐色	ヘラケズリ 後ナデ	淡褐色	少	少		多
454	SH006	壺底部	弥生終末～ 古墳初頭		2.6+α	(2.8)	ミガキ	茶褐色	工具による ナデ	黒褐色	少	少		少
455	SH006	高坏脚部	弥生終末～ 古墳初頭		3.1+α	(14.4)	ヨコナデ後 タテミガキ	黄褐色	ヨコナデ	黄褐色	少	少		
456	SH006	高坏	弥生終末～ 古墳初頭	(30.0)	4.2+α		ヨコナデ・ミ ガキの暗文 ケズリ	黄褐色	ミガキ・ナ デ	黄褐色	少	少		少
457	SH006	高坏	弥生終末～ 古墳初頭	(30.0)	8.2+α		ヨコナデ・タ テ方向の ミガキ・ナ メナメナ	黄褐色	ヨコナデ・工 具によるケ ズリ(下～上)	黄褐色	少	少		
458	SH006	高坏	弥生終末～ 古墳初頭	(29.0)	9.3+α		ヨコナデ・工 具ナデ	橙色	ヨコナデ・ 暗文	橙色	多	多		
460	SH006	甗	弥生中期後半	(14.0)	3.0+α		ヨコナデ	明赤褐色	ヨコナデ・ ナデ	明赤褐色	多	少		少
461	SH006	長頸壺	弥生中期後半	(7.2)	3.5+α		ヨコナデ・突 帯貼付・ヨ コナデ	淡褐色	ヨコナデ・ ナデ	淡褐色	少	多		
462	SH006	深鉢	縄文前期		2.5+α		突帯貼付後 ヨコナデ・	暗褐色	条痕	茶褐色	多	少		
463	SH006	深鉢	縄文前期		3.0+α		突帯貼付後 ヨコナデ・	黒褐色	条痕	淡褐色	少	多		
464	SH006	深鉢	縄文前期		2.5+α		突帯貼付後 ヨコナデ	灰褐色	条痕	黒褐色	多	多		
465	SH006	深鉢	縄文後期		4.2+α		条痕・刻目	灰褐色	条痕	灰褐色	多			多
466	SH006	深鉢	縄文後期		4.5+α		ヨコナデ・ヨ コナデ・ミ ガキ・ナメ ミガキ・ナ メミガキ・ ナメミガキ	灰茶褐色	ヨコナデ・ ナデ	灰茶褐色	多	多		
467	SH006	深鉢	縄文後期		5.1+α		竹管文・沈 線・磨消縄 文	淡灰褐色	ヨコヘラミ ガキ	暗茶褐色	多			少

No.	遺構	器種	時期・施文	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴部最大径)	外面の 文様・調整	外面色調	内面の 文様・調整	内面色調	胎土			
											角閃石	長石	石英	その他
468	SH006	瓦器椀	古代	(17.0)	4.4+α		ヨコヘラミガキ・ヘラケズリ	黒色	ヨコヘラミガキ	黒色	多	少		
473	SH008	壺	弥生終末～古墳初頭	(12.6)	40.7		刻め目 ナテ 突帯	灰黄褐色～褐灰色～黒色	ナテ ハケ目 工具による粗いナテ	灰黄褐色	多	多	少	少
474	SH008	高坏脚部	弥生後期		8.1+α		タテ方向のヘラミガキ(磨滅)	にぶい橙色	絞り痕	にぶい橙色	多	多		少
475	SH008	鉢	弥生後期	(13.8)	6.1	(3.4)	ヨコナテ 工具ナテ	にぶい橙色	ナテ	にぶい橙色	多	少		多
476	SH008	深鉢	弥生早期				ヨコ方向の条痕	暗褐色	ヨコ方向の条痕	暗褐色		多	多	多
477	SH008	甗	弥生前期				刻め目 ヨコ方向のナテ	黄褐色	ヨコ方向のナテ	黄褐色		少	多	少
480	SH010	壺	弥生後期	(27.6)	11.7+α		ヨコナテ タテ方向の粗いハケ 指圧痕	にぶい黄褐色	不定方向の粗いハケ 指圧痕	暗褐色	少	多	少	多
					9.0+α		不定方向の粗いハケ ナテ	にぶい黄褐色	不定方向の粗いハケ 指圧痕	にぶい黄褐色	多	多	多	多
481	SH010	甗	弥生後期	(27.6)	5.0+α		ヨコナテ タテ方向の粗いハケ後ナテ	にぶい橙色	ヨコナテ ヨコ方向の粗いハケ	にぶい黄褐色	少	多	少	少
482	SH010	鉢	弥生後期	(16.0)	7.7+α		工具ナテ	にぶい黄色	工具ナテ	にぶい黄色	多		少	少
483	SH010	鉢	弥生後期	(27.6)	5.0+α		ヨコナテ タテ方向の粗いハケ後ナテ	にぶい橙色	ヨコナテ ヨコ方向の粗いハケ	にぶい黄褐色	少	多	少	少
484	SH010	鉢	弥生後期		8.4+α		ヨコナテ タテ方向の粗いハケ	暗褐色	ヨコナテ ナメ方向の粗いハケ	黒灰色	多	少	少	少
486	SH010	焼塩壺	不明	(11.2)	8.9+α		指圧痕 ナテ	にぶい黄褐色	指圧痕 工具ナテ	淡黄色	多	多	少	多
488	SH011	土師質土鍋					ヨコナテ ヨコ方向のハケ	茶褐色	ヨコナテ ヨコ方向のハケ	茶褐色	多	多		少
489	SH011	須恵器坏身	古墳中期	(9.1)	3.3+α		回転ナテ	黒褐色	回転ナテ	褐灰色				
491	SH012	壺	弥生後期	16.8	30.0	3.4	ヨコナテ タテ方向の粗いハケ ナテ 指圧痕	にぶい橙色～黄褐色	ヨコナテ 指圧痕 工具ナテ	にぶい橙色	多	多	少	多
492	SH012	壺	弥生後期	12.5	29.9		ヨコナテ 指圧痕 指圧痕 指圧痕	淡褐色	ヨコナテ ヨコナテ後ハケ 工具ナテ ナテ	淡褐色	少	多		多
493	SH012	鉢	弥生後期	(19.8)	7.4+α		ヨコナテ ヨコ方向の粗いハケ	暗褐色	ヨコナテ 工具ナテ	暗褐色	少	多		多
494	SH012	高坏	弥生後期	(22.0)	4.8+α		ヨコナテ後タテ方向の粗いハケ ヨコナテ ミガキ	淡燈褐色	ヨコナテ ヨコナテ後タテ方向の粗いハケ	淡燈褐色	少	少		少
497	SK023	広口壺	弥生中期後半		36.2+α		ヨコナテ・タテ方向の粗いハケ	黄褐色～明褐色・黒褐色	ナテ・ヨコ方向のヘラミガキ	黒褐色	多	少		少
498	SK023	広口壺	弥生中期後半		8.9+α		ヨコ方向のミガキ・ナテ	淡褐色	ヨコ方向のミガキ・ナテ	淡褐色		少		
499	SK023	無頸壺	弥生中期後半		3.4+α		ヨコ方向のミガキ・ナテ	淡褐色	ヨコ方向のミガキ・ナテ	淡褐色	少	少	多	
500	SK023	甗	弥生中期後半	(26.1)	13.7		ヨコナテ・縦方向ハケメ・洗線	橙色	ヨコナテ・ナテ	橙色	多	多		多
501	SK023	甗	弥生中期後半	(21.8)	9.4+α		ヨコナテ・縦方向ハケメ	にぶい橙色	ヨコナテ・ナテ	灰黄色		少	多	多
502	SK023	甗	弥生中期後半	(26.8)	7.2+α		ヨコナテ・タテ方向ハケ目	淡黄色	ヨコナテ・ナテ	淡黄色	多	多		少
503	SK023	甗	弥生中期後半	(23.6)	11.5+α		ヨコナテ・ハケメ	灰黄褐色	ヨコナテ・ナテ	にぶい黄褐色		多		少
504	SK023	甗	弥生中期後半	(29.6)	8.0+α		ヨコナテ・ハケメ	橙色	ヨコナテ・ナテ	浅黄褐色・黒褐色	少			多
505	SK023	甗	弥生中期後半	(26.6)	5.7+α		ヨコナテ・タテハケ	茶褐色	ヨコナテ・ナテ	淡褐色	少	多		
506	SK023	甗	弥生中期後半	(29.0)	4.7+α		ヨコナテ・タテハケ	暗褐色	ヨコナテ・ナテ	淡褐色	少	少		
507	SK023	甗	弥生中期後半	(34.1)	6.0+α		ヨコナテ・突帯・タテハケメ	にぶい褐色	ヨコナテ・ナテ	にぶい褐色			多	少
508	SK023	甗	弥生中期後半	(34.2)	6.7+α		ヨコナテ・突帯・タテハケメ	にぶい黄褐色	ヨコナテ・ナテ	にぶい黄褐色			多	少
509	SK023	甗	弥生中期後半		4.0+α		ヨコナテ・タテハケメ	にぶい淡褐色	ヨコナテ・ナテ	にぶい淡褐色	多	少		少
510	SK023	甗	弥生中期後半		5.5+α		ヨコナテ・ナテ・ハケメ・突帯貼付	浅黄褐色	ナテ・ヨコナテ	浅黄褐色～灰褐色	少	少		少
511	SK023	甗	弥生中期後半		6.8+α		ヨコナテ・突帯・タテハケメ	にぶい褐色	ヨコナテ・ナテ	にぶい褐色			多	少
512	SK023	甗底部	弥生中期後半		2.9+α	(6.3)	ナテ	にぶい褐色	不明	にぶい褐色			多	多
513	SK023	甗底部	弥生中期後半		8.6+α	7.1	縦方向ハケメ	にぶい褐色～褐色	工具ナテ・指圧痕	にぶい褐色～褐色	少	少		少
514	SK023	深鉢	縄文後期		6.7+α		ヨコ方向の研磨	暗褐色	ヨコ方向の研磨	褐灰色	少	多		
517	SK024	甗	弥生前期		8.9+α		縦横ヨコナテ・タテ方向のナテ後ヨコナテ	淡灰褐色	指圧後ヨコナテ・ナテ後ヘラミガキ	淡灰褐色	多	多	多	
518	SK025	長頸壺	弥生中期後半	(9.9)	3.6+α		ヨコナテ・突帯貼付・ナテ	淡褐色	ナテ	淡褐色	少	多		
519	SK025	壺	弥生前期末～中期	(7.9)	1.1	7.2	回転ヨコナテ・回転糸切後指圧痕	淡灰褐色	回転ヨコナテ・指ナテ	淡灰褐色	少			少

No.	遺構	器種	時期・施文	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴部最大径)	外面の 文様・調整	外面色調	内面の 文様・調整	内面色調	胎土			
											角閃石	長石	石英	その他
520	SK025	高坏	弥生中期後半	(21.0)	6.0+α		ミガキ・ヨコナデ	赤褐色	ナデ	赤褐色	多	多		
521	SK025	高坏	弥生中期後半		3.3+α		ヨコナデ(磨滅)	灰白色	ヨコナデ	灰白色	多	多		
522	SK025	甗	弥生中期後半		18.7+α		ヨコナデ・ナメハケメ	茶褐色	ヨコナデ・ナデ	浅黄褐色	多	多		
523	SK025	甗	弥生中期後半	(24.8)	8.8+α		ヨコナデ・ナメ方向のナデ	暗茶褐色	ヨコナデ・ナデ	明橙褐色	多	多		
524	SK025	甗	弥生中期後半	(25.4)	9.9+α		ヨコナデ・タテハケ後頭部ヨコナデ	暗茶褐色	ヨコナデ・ナデ	明灰褐色～暗灰褐色	多	多		
525	SK025	甗底部	弥生中期後半		3.3+α	8.0	ナメハケ・ヨコナデ・ナデ	橙色	ナデ	橙色	多	多		
526	SK025	甗底部	弥生中期後半		5.0+α	7.0	タテハケ・ヨコナデ	淡褐色	ナデ・指圧とナデ	淡褐色	少	少		
527	SK025	甗底部	弥生中期後半		5.5+α	7.4	ナメハケ(磨滅)・ヨコナデ・ナデ	淡褐色・黒褐色	ナデ	灰白色・灰褐色	多	多		
528	SK025	甗底部	弥生中期後半		7.5+α	(6.0)	ナメハケ・ヨコナデ・ナデ	橙色	ナデ	褐色	少	少		
529	SK025	甗底部	弥生中期後半		7.3+α	(6.8)	ナメハケ・ヨコナデ	淡褐色	ナデ	黒褐色・灰褐色	多	多		
530	SK025	甗底部	弥生中期後半		8.6+α	7.0	ナメハケメ・ヨコナデ・ナデ	浅黄褐色	ナデ	灰褐色	多	多		
531	SK025	深鉢	縄文前期		4.7+α		ナデ	灰黒褐色	隆起線文・ナデ	褐色	多	多		
532	SK026	高坏	弥生中期後半	(23.4)	4.5+α		ヨコナデヨコナデガキ・指圧とヨコナデ・指	淡明褐色～淡灰褐色	ヨコナデ・ヨコナデミガキ	淡明褐色～淡灰褐色	少	多		
533	SK026	高坏	弥生中期後半	(19.0)	6.0+α		ヨコナデ・ヘラミガキ・指圧とナデ	淡褐色	ヨコナデ・ヘラミガキ	淡褐色	多	多		
535	SK027	甗	弥生中期後半	(29.0)	25.4+α		タテハケ・ヨコナデ	暗黄褐色	タテハケ・ヨコナデ	暗黄褐色	少	多		多
536	SK027	甗	弥生中期後半	(27.0)	24.4+α		ヨコナデ・ハケメ・剥離	暗茶褐色	ヨコナデ・ナデ	暗茶褐色	多	多	少	多
537	SK027	甗	弥生中期後半	(23.6)	22.7+α		タテハケ・ヨコナデ	暗褐色～暗赤褐色	ナデ・ヨコナデ	暗褐色～暗赤褐色	多	多		
538	SK027	甗	弥生中期後半	(24.4)	20.0		タテハケ・ヨコナデ	暗黄褐色	ナデ・ヨコナデ	淡黄赤褐色	多	多		多
539	SK027	甗	弥生中期後半	(26.1)	17.6+α		ヨコナデ・ハケメ	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄褐色	少	少	少	少
540	SK027	甗	弥生中期後半		6.7+α		ヨコナデ・ハケメ	にぶい黄色	ヨコナデ・ナデ	にぶい黄色	少	少	少	少
541	SK027	甗	弥生中期後半	20.9	18.6+α		ヨコナデ・ハケメ	にぶい黄褐色	ヨコナデ・ナデ	にぶい黄褐色	少	少	少	少
542	SK027	甗	弥生中期後半	(33.8)	10.5+α		ヨコナデ・ハケメ・突帯	にぶい黄色	ヨコナデ・ナデ	にぶい黄色	少	少	少	少
543	SK027	甗	弥生中期後半	(34.8)	5.6+α		ヨコナデ	黄褐色	ヨコナデ	黄褐色	少	少		多
544	SK027	甗底部	弥生中期後半		13.8+α	7.2	タテハケメ・ヨコナデ・ナデ	暗褐色	ナデ	暗茶褐色	多	多	多	多
545	SK027	甗底部	弥生中期後半		8.1+α	(8.1)	ヨコナデ・ハケメ	淡黄色	ナデ	淡黄色	少	少	少	少
546	SK030	甗	弥生中期後半		7.2+α		タテハケ・ヨコナデ	黒褐色	ナデ・ヨコナデ	黒褐色		多		多
547	SK030	甗	弥生中期後半		8.3+α		タテハケ・ヨコナデ	暗灰褐色	ナデ・ヨコナデ	暗灰褐色	少	多		多
548	SK030	甗	弥生中期後半		4.0+α		タテハケ・ヨコナデ	灰褐色	ナデ・ヨコナデ	灰褐色	少	多		
549	SK030	甗	弥生中期後半		3.1+α		タテハケ・ヨコナデ	暗灰褐色	ヨコナデ	暗灰褐色	少	少	少	多
550	SK030	甗底部	弥生中期後半		5.8+α	7.2	タテハケ・ヨコナデ	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	少	少		多
551	SK030	高坏	弥生中期中頃	(24.2)	6.9+α		ナデ・ヨコナデ・ヘラミガキ	暗灰黄褐色	ヨコナデ・剥離	暗灰黄褐色		多		多
553	SK036	甗底部	弥生中期後半		6.0+α	6.6	タテハケ・ヨコナデ・ナデ	橙色	ナデ	橙色	少	多		少
554	SK037	甗	弥生中期後半		5.6+α	6.6	タテ方向のハケメ後ヨコナデ	淡褐色～黄褐色	ナデ	黄褐色	多	多		多
					3.5+α	(29.6)	タテハケ・指圧・ヨコナデ・磨滅	淡褐色	ナデ・ヨコナデ	暗茶褐色	多	多		
555	SK037	甗	弥生中期後半		4.8+α		ヨコナデ・タテ方向のハケメ	黄褐色～灰褐色	ヨコナデ	黄褐色	多	多		
556	SK037	甗	弥生中期後半	(24.6)	7.6+α		ヨコナデ・タテ方向のハケメ	黄褐色	ナデ・ヨコナデ	黄褐色	少	少		
557	SK037	甗	弥生中期後半		3.6+α	(8.2)	タテハケメ・ヨコナデ	黄褐色	不明	不明	多	多		多
558	SK037	甗	弥生中期後半		5.2+α		タテハケメ	淡黄褐色	ナデ	暗茶褐色	少	少		
559	SK037	甗	弥生中期後半		6.3+α	7.6	タテ方向のハケメ後ヨコナデ	明赤褐色	ナデ	黄褐色～黒褐色	多	多		多
560	SK037	甗	弥生中期後半		5.9+α	7.8	タテ方向のハケメ	黄褐色	ナデ	にぶい橙色～黒褐色	多	多		多

No.	遺構	器種	時期・施文	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴部最大径)	外面の 文様・調整	外面色調	内面の 文様・調整	内面色調	胎土			
											角閃石	長石	石英	その他
561	SK037	甕	弥生中期後半		5.6+α	6.4	タテ方向のハケメ後ヨコナデ	黄橙色	ナデ	黄橙色	少	少		
562	SK037	甕	弥生中期後半		6.0+α	(8.0)	タテハケメ後ヨコナデ	黄橙褐色	ヨコナデ	黄橙褐色	多	多		
563	SK037	甕	弥生中期後半		14.8+α	8.0	ナナムハケメ後ヨコナデ	黄橙褐色	ナデ	暗茶褐色	多	多		
564	SK037	甕	弥生中期後半		10.4+α	8.1	タテ方向のハケメ後ナデ消すナデ	黄橙色～赤褐色	ナデ・工具によるナデ	淡黄灰色	多	多		多
565	SK037	器台	弥生中期		5.9+α		ナデ	黄橙褐色	ナデ	淡黄褐色				少
566	SK037	不明	不明		2.3+α		貝殻条痕?・ケズリ?	黒褐色	丁寧なナデ	黒褐色	少			
567	SK039	壺	弥生前期	(16.8)	9.8+α		ナデ・ハケメ	にぶい黄褐色	ミガキ・ナデ	にぶい黄褐色	多	多	多	
568	SK039	壺	弥生前期		4.4+α		ミガキ	にぶい黄褐色	ハケメ?後ミガキ	にぶい黄褐色			多	
569	SK039	壺	弥生前期		2.9+α		ナデ・線刻	淡黄色	ナデ	褐色	多	多		多
570	SK039	壺	弥生前期		4.2+α		ナデ・線刻	橙色～褐色	ナデ	褐色	多	多		多
571	SK039	甕	弥生前期		5.3+α		ヨコナデ・刻目・突帯・ハケメ	にぶい橙色	ハケメ	にぶい橙色	多	多		少
572	SK039	甕	弥生前期		5.7+α		刻目・刻目突帯・ナナムハケメ・ナデ	灰黄褐色	ヘラ状工具のナデ	にぶい橙色	多	多		少
573	SK039	甕	弥生前期		5.0+α		刻目・刻目突帯・タテハケ	暗灰褐色	ヨコ方向のナデ	暗灰褐色	多	多		
574	SK039	甕	弥生前期		9.0+α		ヨコナデ・多方向のハケメ突帯貼付	褐灰色～にぶい橙色	ヨコナデ・ナデ・指圧痕	にぶい橙色	多	多		少
575	SK039	甕	弥生前期		7.0+α		ヨコナデ後ハケメ・ヨコハケメ・タテハケメ	灰褐色	ヨコハケ・ヨコ方向のナデ	茶褐色	多	多	多	
576	SK039	甕	弥生前期		11.2+α		ヨコナデ・多方向のハケメ・洗線・刻目・突帯	灰黄褐色	ヨコナデ・ナデ・ハケ後ナデ	灰黄褐色	少			多
577	SK039	甕	弥生前期	(26.6)	31.9	8.2	ヨコハケ・ナナムハケメ・タテハケメ・ミガキ・ナデ	暗橙褐色	ヨコハケ後ミガキ・ナデ後ミガキ	暗橙褐色	多	多		少
578	SK039	甕	弥生前期	(17.0)	9.7+α		刻目突帯・タテハケメ	暗黄褐色	ヨコナデ・ヨコハケ後指圧痕	暗黄褐色	少	多		少
579	SK039	甕	弥生前期	(27.2)	17.8+α		タテハケ・ヨコハケ・タテハケ・ヨコハケ	明赤褐色	ヨコナデ・ハケ後ナデ・ヨコハケ	明赤褐色	多	多		少
580	SK039	底部	弥生前期		9.7+α	(8.9)	ナデ後タテハケ後ミガキ	橙色	ナデ後ミガキ	灰色	少	多		多
581	SK039	底部	弥生前期		7.2+α	(6.9)	縦方向ハケメ	にぶい橙色	工具ナデ	にぶい褐色	多	多	少	少
582	SK039	底部	弥生前期		9.1+α	6.7	ナデ後タテハケ・ミガキ?・工具ナデ?	にぶい橙色	ナデ	橙色～明赤褐色	多	多		多
583	SK039	底部	弥生前期		5.5+α	(7.3)	ミガキ・ハケメ	にぶい橙色	ナデ	にぶい橙色	少	少		
584	SK039	底部	弥生前期		5.2+α	(9.2)	ハケメ(磨滅)・ナデ	にぶい橙色	ナデ	にぶい褐色	多	多		
585	SK039	底部	弥生前期		40.+α	10.7	ナデ・タテハケメ	にぶい橙色	ナデ	にぶい橙色			多	
586	SK039	底部	弥生前期		6.8+α		縦方向ハケメ	にぶい橙色	工具ナデ	褐灰色		多	多	少
587	SK039	底部	弥生前期		2.6+α	2.0	ハケメ・ナデ	にぶい褐色	指押さえ	にぶい橙色	多			多
588	SK039	壺底部	弥生前期		2.0+α		ナデ	にぶい橙色	ナデ	にぶい褐色	多	多		少
601	SK040	甕	弥生前期		25.8+α	9.4	ハケメ後ナデ・ヨコナデ・ナデ	黄橙褐色	ナデ・指圧痕	淡灰褐色	多	多	多	多
602	SK040	底部	弥生前期		2.4+α	9.6	摩滅・ハケメ	暗赤褐色	ナデ・指圧痕	黄橙褐色	多	少	多	多
603	SK040	甕底部	弥生		3.6+α	(7.4)	工具ナデ	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	多	多	多	多
606	SK041	壺	弥生前期		4.6+α		ナデ・沈線・ナナムハケ	褐色	ミガキ・指圧痕	浅黄褐色	多	多		少
607	SK041	壺	弥生前期		22.0+α		ミガキ・沈線	灰褐色・橙色	ヨコナデ・ナデ・ハケ後ナデ消し	浅黄褐色・灰褐色	多	多		少
608	SK041	壺	弥生前期		5.0+α		ナデ・沈線	灰白色	ナデ	灰白色	少	少		少
609	SK041	壺	弥生前期		7.2+α	(6.0)	ミガキ・ナデ	褐色	ナデ	灰褐色	多	多	多	
610	SK041	壺	弥生前期		2.9+α		線刻	浅黄褐色	工具ナデ	浅黄褐色	多	多		多
611	SK041	壺	弥生前期		2.4+α		線刻	浅黄褐色	ナデ	浅黄褐色	多	多		多
612	SK041	甕	弥生前期		6.0+α		刻目・ナナムハケメ	黒褐色	ヨコハケ・ナデ	灰褐色	多	多		
613	SK041	甕	弥生前期		5.5+α		ナナムハケメ・ナデ	灰褐色・淡黄色	ナデ・ナナムハケ	灰褐色・橙色	多	多		
614	SK041	底部	弥生前期		3.3+α	(9.6)	ナデ	浅黄褐色	ナデ	灰白色	少	少		

No.	遺構	器種	時期・施文	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴部最大径)	外面の 文様・調整	外面色調	内面の 文様・調整	内面色調	胎土				
											角閃石	長石	石英	その他	
615	SK041	底部	弥生前期		5.5+α		ナナメハケ メ・ナデ	浅黄橙色	ナデ	茶褐色	多	多			
617	SK042	甗	弥生中期後半		3.3+α		ヨコナデ	黄褐色	ヨコナデ	黄褐色	多	多	多	多	
618	SK042	甗底部	弥生中期後半		3.8+α	(7.2)	タテハケ・ヨコ ナデ・仕上げナデ	橙赤褐色	不明(欠け ている)	橙赤褐色	多	多	多	多	
619	SK043	甗	弥生中期後半	(19.6)	6.8+α		ヨコナデ・ナ デ・剥離	淡褐色	ヨコナデ・ナ デ・接合痕	淡褐色	少	多			
620	SK044	甗	弥生中期後半	(19.6)	6.8+α		ヨコナデ・ナ デ・剥離	淡褐色	ヨコナデ・ナ デ・接合痕	淡褐色	少	多			
623	SK045	甗	弥生前期	(26.4)	7.8+α		刻み目・ヨコ ナデ・ハケメ後ナ デ	暗茶褐色	剥離	灰白色	多	少	多	多	
624	SK045	甗	弥生前期		5.8+α		ミガキ・刻み目	灰白色	ミガキ	淡黄灰色	多	多	多	多	
625	SK045	甗	弥生前期		7.0+α		ハケメ後ナデ・刻 み目・刻み目貼付突 帯	暗褐色	工具ナデ	淡褐色	多	多	多	多	
626	SK045	甗	弥生前期		12.5+α	7.6	ナデ	暗赤褐色	ナデ	茶灰色	多	多	多	多	
627	SK045	壺底部	弥生前期		2.3+α	(4.2)	ミガキ・ナデ	暗赤褐色	ナデ	にぶい橙色	多	多	多	多	
628	SK045	底部	弥生前期		3.4+α	(10.8)	ハケメ・ナデ	淡赤褐色	ナデ	黒灰色	多	多	多	多	
629	SK045	底部	弥生前期		4.5+α	(12.8)	ハケメ後ナ デ・ナデ	黄橙褐色	ナデ	灰白色	多	多	多	多	
630	SK045	壺	弥生前期		6.7+α		ミガキ	暗茶褐色	ミガキ	暗茶褐色	少	少	多	多	
631	SK045	浅鉢	弥生前期		2.8+α		研磨	にぶい橙色	研磨	にぶい橙色	多	多	少	多	
635	SK046	壺	弥生前期	(24.0)	13.2+α		ミガキ・沈線	灰黄色	丁寧なナデ	灰黄色	少	少	少		
636	SK046	壺	弥生前期		3.0+α		ナデ・線刻	浅黄褐色	ナデ	褐色	多	多		多	
637	SK046	壺	弥生前期		5.5+α		ナデ・線刻	灰褐色	ナデ	灰褐色	多	多		多	
638	SK046	甗	弥生前期		18.9+α		ナデ・刻目突 帯・刻目口縁	にぶい黄 橙色	ナデ	にぶい黄 橙色	少	少	少	少	
639	SK046	甗	弥生前期		6.7+α		ヨコナデ・刻 目突帯	にぶい黄 橙色	ヨコナデ	にぶい黄 橙色	少	少	少	少	
640	SK046	甗	弥生前期		6.8+α		刻目・ヨコ ナデ・ハケメ	にぶい黄 橙色	ハケメ後ナ デ・指圧痕	にぶい黄 橙色	少	少	少	少	
641	SK046	甗	弥生前期	(16.9)	6.3+α		ヨコナデ・ナデ・刻 目・ハケメ沈線	灰黄褐色	ハケメ後ナ デ・指圧痕	灰黄褐色	少	少	少		
642	SK046	底部	弥生前期		3.3+α	(8.9)	条痕?	灰黄褐色	ナデ	灰黄褐色	少	少	少	少	
643	SK046	浅鉢	縄文晩期		3.1+α		丁寧なナデ	暗黄灰色	ナデ	暗黄灰色	少	少	少		
644	SK046	浅鉢	縄文晩期		1.2+α		研磨	暗黄灰色	研磨	暗黄灰色	少	少			
645	SK046	深鉢	縄文晩期		3.7+α		ナデ	暗灰色	条痕?	暗灰色	少	少	少		
651	SK049	甗	弥生前期		11.5+α		ヨコナデ後口縁刻 み目・接合痕とナ デ	淡褐色～暗 褐色	ヨコナデ・ ナデ	淡明褐色	多	多			
656	SK050	甗	弥生前期	(23.6)	13.0+α		刻み目・タテハ ケ・沈線・ヨコ ナデ	暗褐色	ヨコハケ・ ナデ	暗褐色	少	多	多		
657	SK050	甗	弥生前期	(27.4)	4.5+α		刻み目・タテハ ケ・ヨコナデ	黒灰褐色	ハケ・ヨコ ナデ	黒灰褐色	少	多	少		
658	SK051	甗	弥生前期		6.1+α		剥離・貼付突帯後 ヨコナデ後刻目	灰褐色	ヨコナデ・ヨコ ヘ ラミガキ・ナ デ	淡褐色	多	多			
659	SK051	甗底部	弥生前期		4.5+α	(10.6)	タテハケ・ナ デ	灰茶褐色	タテ方向の ナデ・指圧	暗灰褐色	多	多			
660	SK052	甗底部	弥生中期後半		7.6+α		ナナメ方向 のハケ	灰褐色	ナデ	灰褐色	多	多		多	
662	SK054	甗	弥生前期		12.1+α		刻み目・タテ ハケ・ヨコナ デ	淡黄褐色	指圧痕・ナ デ	淡黄褐色	少	少	多		
663	SK054	甗	弥生前期		4.6+α	9.4	タテハケ・ナ デ	黄褐色	ナデ	黄褐色		少	少		
665	SK055	甗	弥生中期後半	(40.0)	15.1+α		おけ 三脚脚 井 戸脚 井戸脚	灰黄褐色	ヨコナ デ	灰黄褐色	少	少		多	
666	SK055	甗	弥生中期後半	(20.4)	6.2+α		ヨコナ デ	暗茶色	ヨコナ デ	暗茶色	少	多		少	
667	SK055	甗	弥生中期後半	(30.0)	7.0+α		井 井戸脚 井戸 脚 井戸脚	淡黄褐色	工具ナ デ	淡黄褐色	少	少		少	
668	SK055	甗底部	弥生中期後半		3.7+α	(5.2)	ヨコナ デ	灰黄褐色	ナ デ	灰黄褐色	多	多		少	
669	SK055	甗底部	弥生中期後半		6.1+α	(7.0)	タテハ ケ	灰黄褐色	ナ デ	指圧痕	灰黄褐色	少	少		少
670	SK055	高坏脚部	弥生中期後半		8.6+α	(18.4)	タテ方向の ヘラミガキ	赤褐色土	タテ方向の ヘラミガキ	赤褐色土	多	多		少	
672	SK056	深鉢	縄文後期				波状口縁 ナデ 沈線	にぶい橙色	ヨコ方向の 条痕	にぶい橙色	多	多	多	多	

No.	遺構	器種	時期・施文	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴部最大径)	外面の 文様・調整	外面色調	内面の 文様・調整	内面色調	胎土			
											角閃石	長石	石英	その他
673	SK056	深鉢	縄文晩期				ヨコ方向のナ テ貼付突帯	黒褐色	ヨコ方向の 条痕	黒褐色	多	多		
674	SK056	壺	弥生前期				ヘラミガキ後ヘラ 描平行文・斜線文	黄褐色	ナテ	黄褐色	多	多		多
675	SK056	土師器椀	古代				ナテ	にぶい橙色	ナテ	にぶい橙色	多	多		多
676	SK057	甌	弥生前期	(22.2)	5.2+s		ナテ磨滅	橙色	ナテ	にぶい褐色	多	多		多
677	SK057	蓋	弥生前期		2.1+α		ナテ	にぶい黄橙 色	ナテ	にぶい黄橙 色	多	多		多
678	SK057	底部	弥生前期				ナテ	にぶい橙色	ナテ	にぶい橙色	多	多		
679	SK057	深鉢	弥生早期		2.4+α		ヨコ方向のナ テ刻目突帯	黒褐色	ヨコ方向の ナテ	橙色～黒褐 色	多	多	多	少
680	SK057	深鉢	弥生早期		3.7+α		ヨコ方向のナ テ刻目突帯	黒色	ヨコ方向の ナテ	黒褐色	多	多	多	多
681	SK057	深鉢	弥生早期		9.1+α		ヨコ方向のナ テ刻目突帯	黒褐色～ 暗褐色	ヨコ方向の ナテ	にぶい褐色 ～灰黄褐色	多	多		少
682	SK057	深鉢	弥生早期	(22.2)	5.2+s		ナテ磨滅	橙色	ナテ	にぶい褐色	多	多		多
683	SK057	深鉢	縄文後期		2.9+α		ナテ	浅黄褐色	ナテ	浅黄褐色	多	少		少
684	SK058	深鉢	弥生早期		12.7+α		ヨコ方向の条痕 刻み目突帯2条	暗褐色～ 茶褐色	ヨコ方向の 条痕	黒灰色		多		
685	SK059	深鉢	弥生早期 ～前期	(41.6)	7.3+α		貼付突帯・ヨ コ方向の条痕	黄褐色	ヨコ方向の 条痕	黄褐色	多	多		
686	SK059	深鉢	弥生早期 ～前期	(38.1)	12.4+α		ナテ・貼付突 帯・条痕	黒褐色	条痕	灰褐色	多	多		
687	SK059	深鉢	弥生早期 ～前期	35.8	22.7+α		刻み目突帯・ 条痕	茶褐色	ナテ・沈潜・ 条痕	茶褐色 灰褐色・淡	多	多	多	多
688	SK059	深鉢	弥生早期 ～前期	(29.2)	17.2+α		ヨコナテ・貼 付突帯・条痕	浅黄褐色・ 褐色	条痕	黄褐色	多	多		
689	SK059	深鉢	弥生早期 ～前期	36.0	5.6+α		刻み目突 帯・条痕	にぶい黄橙 色	ナテ	にぶい黄橙 色	多	多		多
690	SK059	深鉢	弥生早期 ～前期		4.5+α		貼付突帯・ ナテ	黒褐色	条痕	黒褐色	多	多		
691	SK059	深鉢	弥生早期 ～前期		7.0+α		ナテ・刻み目 突帯・条痕	茶褐色	ナテ	淡茶褐色	多	多		多
692	SK059	深鉢	弥生早期 ～前期	23.8	20.8+α	6.8	ナテ・刻み目 突帯・条痕・磨滅	淡赤褐色～ 黒灰色	ナテ	灰白色	多	多		多
693	SK059	深鉢	弥生早期 ～前期	(22.8)	12.7+α		条痕・刻目・ヨ コ方向のナテ	暗茶褐色	条痕・ヨコ 方向のナテ	暗茶褐色		多	少	
694	SK059	深鉢	弥生早期 ～前期		10.0+α		丁寧なナテ	暗黄褐色	ヨコ方向の ナテ	黄褐色	多	多		
695	SK059	壺	弥生前期	30.0	2.3+α		磨滅・穿孔あり	黄橙褐色	ナテ	黄橙褐色	多	多		多
696	SK059	甌	弥生前期		2.8+α		ナテ・貼付 突帯	褐色	ナテ	橙色	多	多		
697	SK059	底部	弥生前期		3.0+α	(8.2)	ナテ	橙色	ナテ	橙色	多	多	多	
698	SK059	浅鉢	弥生前期		3.0+α		ミガキ・ナテ	黒褐色・赤 褐色	ミガキ	黒褐色				多
699	SK059	浅鉢	弥生前期		3.0+α		ナテ	灰褐色・赤 褐色	ナテ	灰褐色・赤 褐色	多	多		
700	SK059	浅鉢	縄文晩期		4.6+α		条痕	淡黄色・灰 褐色	条痕	淡黄色・灰 褐色	多	多		
701	SK059	深鉢底部	縄文晩期		1.7+α	2.8	ナテ	灰白色	ナテ	灰白色	多	多	多	
707	SK060	深鉢	弥生早期 ～前期		2.5+α		ナテ・刻目 突帯	にぶい黄 褐色	ナテ	にぶい黄褐 色	少	少	多	
708	SK060	深鉢	縄文後期		2.0+α		ナテ・竹管文	にぶい黄橙 色	ナテ・竹管 文	にぶい黄橙 色	多	多	多	
709	SK061	深鉢	弥生早期 ～前期		5.6+α		刻目突帯・ 条痕	にぶい黄橙 色	条痕	にぶい黄橙 色	少	少		
710	SK062	鉢	古墳初頭	11.1	4.0		指オサエ・ 粗ナテ	淡褐色～ 橙褐色	指オサエ・ 粗ナテ	淡褐色～ 橙褐色	多	多		
711	SK063	壺	弥生前期	(17.7)	6.3+α		ヨコナテ・ ミガキ	浅黄褐色	ミガキ・ナテ	浅黄褐色		少		
712	SK063	壺	弥生前期		8.0+α		ミガキ・ナテ	浅黄褐色	ミガキ・ナメハ ケ・指圧痕・ナテ	灰褐色	少	少	多	
713	SK063	深鉢	弥生早期 ～前期		7.0+α		ヨコナテ・貼 付突帯・条痕	褐灰色	ヨコナテ・沈線・ ヨコ方向のナテ	黄褐色	多	多		
714	SK063	深鉢	弥生早期 ～前期		8.0+α		ナテ・貼付 突帯	褐色	沈線・ナテ・ 条痕	浅黄褐色	多	多		
715	SK063	深鉢	弥生早期 ～前期		4.8+α		工具ナテ・ 貼付突帯	暗褐色	ナテ	褐色	多	多		
716	SK063	深鉢	弥生早期 ～前期		3.8+α		ヨコナテ・貼付突帯・ ナテ・ナメハケ	橙色	ナテ	橙色	少	少		
717	SK063	深鉢	弥生早期 ～前期		2.6+α		縄文	暗褐色	沈線・ナテ	暗褐色	多	多		

No.	遺構	器種	時期・施文	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴部最大径)	外面の 文様・調整	外面色調	内面の 文様・調整	内面色調	胎土				
											角閃石	長石	石英	その他	
718	SK064	壺	弥生前期		2.0+α		ヨコナデ	淡黄橙色	ヨコナデ 指オサエ.	淡黄橙色	多		多	多	
719	SK064	壺	弥生前期		4.2+α		ナデ後重弧 文	淡黄橙色	ナデ	淡黄橙色	多		多	多	
720	SK064	深鉢	弥生早期 ~前期		2.9+α		ヨコナデ後 刻目	黒茶褐色	ヨコナデ	黒茶褐色	多	多		多	
721	SK064	深鉢	縄文後期		2.6+α		ナデ後沈 線・刻目	淡黄橙色	ナデ	淡黄橙色	少	少		多	
722	SK064	深鉢	縄文後期		3.0+α		ナデ・縄文	暗褐色	ナデ	暗褐色	多	多		多	
723	SK065	壺	弥生前期		2.4+α		ナデ後沈線	淡橙褐色	ナデ	淡橙褐色		少	多	多	
724	SK065	底部	弥生前期		2.2+α	(9.8)	ナデ	黄褐色	ナデ	暗灰褐色	少	多		多	
725	SK065	深鉢	弥生早期 ~前期		5.5+α		ナデ	暗茶褐色	ナデ	暗黄褐色	少	多		多	
727	SK065	深鉢	縄文後期		6.0+α		ナデ後研磨	黒灰褐色	ナデ後研磨	淡黄灰色	少	少		少	
728	SK066	深鉢	弥生早期 ~前期		6.1+α		ヨコナデ・刻 目突帯・条痕	暗褐色	条痕	暗褐色	多	多	少	多	
729	SK066	深鉢	弥生早期 ~前期		5.2+α		条痕	黒褐色	条痕	黒褐色	多	多		多	
730	SK066	深鉢	弥生早期 ~前期		4.7+α		ナデ後研磨	暗褐色	ナデ	暗褐色	少	多		多	
731	SK066	深鉢	弥生早期 ~前期		5.8+α		ナデ後ヨコナ メ方向に研磨	暗褐色	ナデ後ヨコ 方向に研磨	暗褐色		多		多	
732	SK066	浅鉢	弥生早期 ~前期		3.8+α		研磨	黒灰色	研磨	黒灰色	多	多	多	少	
733	SK066	深鉢	縄文後期		2.4+α		ナデ後研磨	黒褐色	ナデ後研磨	黒褐色	多	多		少	
734	SK066	深鉢底部	縄文後期		2.3+α	(5.0)	ナデ後研磨	淡橙褐色	ナデ後研磨	暗灰褐色	多	多		多	
735	SK066	深鉢底部	縄文後期		2.9+α	(6.0)	ナデ・ナデ 後研磨	黄褐色	ナデ・ナデ 後研磨	黒褐色	少	多		少	
745	SK067	深鉢	縄文晩期~ 弥生早期	(22.2)	7.7+α		条痕・線刻	黒褐色・ 褐色	条痕	灰褐色	多	多			
746	SK067	甗	弥生前期		3.9+α		ヨコナデ・貼 付突帯・ナデ	茶褐色	ナデ	橙色	多	多			
747	SK067	甗	弥生前期		2.7+α	(7.4)	ナデ	淡橙色	ナデ	黒褐色	多	多			
748	SK067	甗	弥生前期		3.3+α		ナデ	暗褐色	ナデ	灰褐色	少	少			
755	SK068	甗	弥生中期 後半	(27.2)	6.5+α		ヨコナデ・タ テ方向のナデ	淡褐色	ヨコナデ・ ナデ	淡褐色	多	多		少	
756	SK068	甗	弥生中期 後半	(18.6)	5.0+α		ヨコナデ・ ナデ	淡褐色	ヨコナデ・ ナデ	淡褐色	多	多		多	
757	SK068	甗	弥生中期 後半	(21.4)	8.5+α		ヨコナデ・ナデ・ 工具痕・タテハケ	灰褐色~暗 褐色	ヨコナデ・ナ メ方向のナデ	淡褐色~灰 褐色	多	多		多	
758	SK068	甗底部	弥生中期 後半		6.5+α	(5.5)	タテハケ・指オ サエ後ナデ	明橙褐色 暗橙褐色~	ナデ・指オ サエ	淡褐色	少	少		少	
759	SK068	高坏	弥生中期 後半	(25.8)	19.0+α	(17.0)	ヨコナデ・タテハ ケ・タテハケ・ヨコ ナデ	明橙褐色	ヨコナデ・タテハ ケ・タテハケ・ヨコ ナデ	明橙褐色~ 淡褐色	多	多		多	
760	ST004	壺	弥生前期	(22.8)	38.6	11.2	ヨコナデ・ミガ キ・沈線・ナデ	橙色	ナデ・ヨコナデ・ナ メハケ・指痕	橙色	多	多			
761	ST004	深鉢	弥生早期 ~前期	30.8	31.2+α	9.4	条痕・ナデ	暗褐色	条痕・ナデ	黄茶褐色	多	多		多	
762	ST005	甗	弥生中期 後半	(28.2)	37.4	7.4	ヨコナデ・タ テハケ	淡褐色	ヨコナデ・ ナデ	淡褐色	少	多		多	
763	ST005	甗	弥生中期 後半	(29.8)	25.0+α		ナデ・ヨコナデ・ ヘラミガキ	黄褐色	ナデ・ヨコ ナデ	黄褐色		多		少	
764		壺	弥生後期		7.7+α		不定方向の ハケ	淡褐色	不定方向の ハケ	黒褐色	少	少		少	
765		壺	弥生後期		10.0+α		タテ方向の ハケ後ナデ	黄褐色	タテ・ヨコ方 向のハケメ	黒褐色	多	少		少	
766		壺	弥生後期		6.0+α		タテ方向のハ ケメ後ナデ	灰橙褐色	タテ・ヨコ方 向のハケメ	黒褐色	少	少		少	
767		甗	弥生前期		4.7+α		刻目・ヨコ ナデ	黄褐色	ヨコナデ	黄褐色		多		多	
768		壺底部	弥生前期		9.1+α		ナメ方向のヘ ラミガキ・ナデ	赤茶色~暗 茶褐色	ナメ方向 のヘラミガキ	暗灰褐色	多	多			
769		広口壺	弥生中期 後半	(33.4)	6.4+α		ヨコナデ・ ナデ・剥離	淡褐色	ヨコナデ・ ナデ	淡褐色	多	多			
						5.5+α		ヨコヘラミ ガキ・ナデ	淡褐色	ヨコナデ・ ナデ	淡褐色	多	多		
						8.7+α	7.0	ヨコ方向のヘラミ ガキ・ヘラミガキ・ナ デ	淡褐色	ナデ・剥離	灰褐色	多	多		
770		深鉢	弥生早期 ~前期		2.1+α		ナデ刻目突 帯	黒灰色	条痕	黒灰色	多		多	少	
771		甗	弥生中期 後半	(19.2)	5.9+α		ヨコナデタテ ハケ後ナデ	暗褐色	工具ナデ	暗褐色	多	多		多	

No.	遺構	器種	時期・施文	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴部最大径)	外面の 文様・調整	外面色調	内面の 文様・調整	内面色調	胎土			
											角閃石	長石	石英	その他
773		甕	弥生前期	(20.0)	8.3+α		ナデ・刻目 突帯	暗茶褐色	ナデ	茶褐色	多	多		少
774		甕	弥生前期 ～中期	15.9	13.4+α		刻目・刻目突帯・ナデ 方向のハケ後ナデ	茶褐色	工具ナデ・ 指圧痕	茶褐色	多	多		多
775	包含層	深鉢	弥生早期 ～前期		7.8+α		条痕	暗褐色	ナデ	暗褐色	多	少		多
776	包含層	深鉢	弥生早期 ～前期		9.0+α		ナデ・刻目突 帯・貝殻状痕文	橙色	貝殻状痕文 (剥離)・ナデ	淡黄褐色	少	少	多	多
777	包含層	深鉢	弥生早期	(23.8)	10.0+α		ヨコナデ・条 痕・刻目突帯	暗褐色	条痕・ヨコ ナデ	暗褐色	多	多	多	多
778	包含層	深鉢	弥生早期 ～前期		5.6+s		刻目突帯 1条条痕	黒褐色	条痕	黒褐色	少			少
779	包含層	深鉢	弥生早期 ～前期				刻目突帯1条 ヨコ方向の条痕	灰褐色	ヨコ方向の 条痕	にぶい橙色	多	多	多	多
780	包含層	深鉢	弥生早期 ～前期		2.7+α		刻目突帯 1条条痕	にぶい黄橙 色	条痕	にぶい黄橙 色	少	多		多
781	包含層	深鉢	弥生早期 ～前期		3.8+α		ヨコ方向のナデ刻目 突帯1条ナデ方向の研磨	暗褐色	ヨコ方向の ナデ	黒褐色	多	多		少
782	包含層	深鉢	弥生早期 ～前期		5.9+α		ヨコナデ・刻目 突帯・ナデ	黒灰色～灰 白色	ナデ・ヨコ ナデ	黒灰色～灰 白色	多	多	多	多
783	包含層	深鉢	弥生早期 ～前期				ヨコ方向の条痕 刻目突帯1条	にぶい暗褐 色	沈線ナデ	にぶい暗褐 色	多	多		多
784	包含層	深鉢	弥生早期 ～前期		6.5+α		条痕・ナデ	黒褐色～明 褐色	条痕	黒褐色	多			多
785	包含層	底部	弥生早期 ～前期		5.0+α	12.0	貝殻状痕 文・ナデ	橙色	貝殻状痕文	淡黄褐色	多	多	少	多
786	包含層	底部	弥生早期 ～前期		3.2+α	7.3	ナデ・工具 ナデ	赤褐色～に ぶい褐色	ナデ	灰褐色	多		少	多
787	包含層	底部	弥生早期 ～前期		3.6+α	(8.8)	条痕	にぶい橙色	ナデ	にぶい橙色	多			多
788	包含層	底部	弥生早期 ～前期		5.1+α	10.0	工具ナデヨ コナデナデ	暗茶褐色	ナデ接合痕	黒褐色	少	多		多
789	包含層	甕	弥生前期		6.7+α		ヨコナデ・ナデ・刻 目・沈線・ハケメ	にぶい褐色	ヨコナデ	にぶい褐色	少	少	少	少
790	包含層	甕	弥生前期		11.3+α		ヨコナデ・ ハケメ	暗褐色	ヨコナデ・指 ナデ・指圧痕	淡黄色	少	少	少	少
791	包含層	甕	弥生前期		7.5+α		ナデ・貼付刻目突 帯・ナデ方向のハケメ	にぶい褐色 ～暗褐色	指圧痕・ナ デ	にぶい褐色	多	多	多	多
792	包含層	壺?	弥生前期		5.5+α		ナデ・刻目	灰黄褐色	ナデ	灰黄褐色	多	多		少
793	包含層	壺	弥生前期		2.3+α		ナデ・沈線	黄褐色	ナデ・指圧 痕	黄褐色				多
794	包含層	壺	弥生前期		3.3+α		ナデ・沈線	茶褐色	ナデ	黄褐色				多
795	包含層	壺	弥生前期		2.1+α		線刻	灰褐色	ナデ	灰白色	多	多		多
796	包含層	壺	弥生前期		5.2+α		ヨコ方向のミ ガキ後沈線	淡褐色～橙 褐色	工具ナデ	黒灰色	多	多		多
797	包含層	鉢	弥生前期		6.7+α		丁寧なナデ	暗灰色	ナデ	灰白色	少	少		
798	包含層	甕	弥生中期 後半	11.6	4.8		ヨコナデ・タ テハケ	淡橙褐色	ナデ・ヨコ ナデ	淡橙褐色	多	多	多	多
799	包含層	甕	弥生中期 後半		5.4+α		ヘラケズリ・ ヨコナデ	淡橙褐色	ナデ・ヨコ ナデ	淡橙褐色		少		少
800	包含層	底部	弥生中期		2.4+α	(8.4)	不明(剥離)	にぶい褐色	ナデ	にぶい褐色	少	少	少	
801	包含層	甕底部	弥生中期 後半		4.6+α	10.6	ナデ・工具 痕	明褐色	ナデ	黒褐色	多	多		多
802	包含層	甕底部	弥生中期 後半		7.0+α	(6.7)	ハケメ・ヨコ ナデ・ナデ	灰黄色	ナデ	灰黄色	少	少	少	
803		瓦器椀			1.5+α	(13.5)	工具ナデ・貼付 高台後ヨコナデ	灰褐色	ナデ	黒灰色	多	多		
804		深鉢	縄文後期		12.7+α		ヨコ方向の 研磨	褐灰色	ヨコ方向の 研磨	淡灰褐色	少	多		多
805		土師器椀		15.6	5.2	7.3	ヨコナデヨコ方向のミ ガキ高台後ヨコナデ	淡褐色	ヨコナデヘ ラミガキ	黒褐色	少	多		多
807		白磁碗			2.1+α	(6.1)	施釉・露胎	灰白色	施釉	灰白色				
808		瓦器椀			2.3+α		ヨコナデ	黒褐色	ヨコナデ	黒褐色				少
809		土師器甕			4.0+α		ヨコナデ	茶褐色	ヨコナデ	茶褐色	多	多		多
811		土師器羽釜		(24.8)	8.0		ヨコナデ・ツハ貼付 後ヨコナデナデ	明橙褐色～ 灰褐色	ヨコナデ・ヨコ ハケ後ヨコナデ	明橙褐色	多	多		多
812		土師器羽釜		(30.2)	7.5+α		ヨコナデ・ナデ・ツ ハ貼付後ヨコナデ	淡灰褐色	ナデ	淡褐色	多	多		多
813		白磁椀			1.6+α	6.3	露胎	灰色	施釉・蛇の 目釉	灰色				
814		土師器甕			4.0+α		ヨコナデ・ ナデ	暗褐色	明褐色	ヨコナデ・ ナデ	多	多		多

No.	遺構	器種	時期・施文	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴部最大径)	外面の 文様・調整	外面色調	内面の 文様・調整	内面色調	胎土			
											角閃石	長石	石英	その他
815		土師器甕			3.5+α		ヨコナデ・タテハク後ナデ	淡褐色	ヨコナデ・ヨコ方向のナデ	淡橙褐色	多	多		多
816		瓦器碗		(15.7)	4.2	4.0	回転ナデ後へラミガキ ・高台付ナデ	灰色	回転ナデ後へラミガキ	灰色				少
817		土師器坏		(13.9)	3.1	8.9	回転ヨコナデ・回転系切後板状圧痕	暗淡褐色	回転ヨコナデ・指ナデ	暗淡褐色	少			少
818		土師器坏		(15.8)	2.9	(10.0)	回転ナデ・回転系切 切り難し・板状圧痕	淡灰褐色	回転ナデ・ナデ	淡灰色	少	少		少
819		土師器坏			1.0+α	(9.4)	回転ヨコナデ・回転系切	淡灰褐色	回転ヨコナデ・指ナデ	淡灰褐色	少	少		少
820		土師器坏			1.6+α	9.2	回転ヨコナデ・回転系切後圧痕	淡褐色	回転ヨコナデ	淡灰褐色	少	少		少
821		土師器坏			0.8+α	8.4	回転ヨコナデ・回転系切後板状圧痕	淡灰褐色	指ナデ	淡灰褐色	少	少		少
822		土師器小皿		(7.9)	1.1	7.2	回転ヨコナデ・回転系切後板状圧痕	淡灰褐色	回転ヨコナデ・指ナデ	淡灰褐色	少			少
823		土師器小皿		(7.7)	1.1	5.6	ヨコナデ・板状圧痕	淡黄色	ヨコナデ	淡黄色	少	少		多
830		深鉢	縄文後期		6.7+α		ナデ後研磨・沈線文	にぶい黄褐色	研磨	にぶい黄褐色	少	少		多
831		深鉢	縄文後期		3.3+α		ナデ・沈線	暗褐色	ナデ	暗褐色	少	多		少
832		深鉢	縄文後期		3.4+α		ヨコ方向の条痕・ナデ・沈線	暗褐色	ヨコ方向の条痕	暗褐色		多		多
833		深鉢	縄文後期		3.1+α		研磨	淡褐色	ヨコ方向の条痕	淡褐色	少	多		多
834		深鉢	縄文後期		2.1+α		ナデ・刻目突帯・夕竹管文	淡褐色	ヨコ方向の条痕	黒褐色	少	多		多
835		深鉢	縄文後期		3.5+α		沈線文	暗褐色	ヨコ方向の条痕	淡褐色	少	多		多
836		深鉢	縄文後期		5.5+α		ナデ後研磨・沈線文・縄文	にぶい黄褐色	ナデ後研磨	にぶい黄褐色	多	少		多
837		深鉢	縄文後期		4.1+α		ヨコ方向の条痕・ヨコ方向の貝殻条痕・縄文	暗褐色	ナデ	淡褐色	少	多		多
839		土師器甕		(43.0)	12.2+α		ヨコナデ・指圧痕・ナデ	暗橙褐色	ヨコナデ・指圧痕・ナデ	暗橙褐色	多	多	多	多
840		土師器甕			12.7+α		ヨコナデ・タテハク後ナデ	明褐色 灰白色とに	ヨコナデ・ヨコ方向のナデ	明褐色	多	多		多
841		土師器碗		15.5	5.1	6.9	回転方向のナデ(併 せりか?)・高台付	にぶい橙色の まだら	ヨコ方向の ミガキ	黒色	多	多		少
842		瓦器碗			5.2+α	(6.0)	ヨコ方向のケズリ ナデ・高台付	暗灰褐色	ヨコ方向の ミガキ	黒褐色	少	少		少
843		白磁碗			1.6+α	7.0	ヨコナデ	透明釉	施釉	透明釉				
844		土師器坏		(6.4)	3.4	(6.2)	ナデ・回転系切	灰黄褐色	回転ナデ	にぶい黄褐色	少	多		
845		土師器坏		14.4	3.3	8.5	回転ヨコナデ・回転系切後板状圧痕	暗灰褐色	回転ヨコナデ・指ナデ	暗灰褐色	少	少		少
846		土師器坏		(15.1)	2.8	8.6	回転ヨコナデ・回転系切	橙色	回転ヨコナデ	橙色	多	少		少
847		土師器坏		(16.0)	3.3	(9.8)	回転ヨコナデ・回転系切	淡褐色	回転ヨコナデ・指ナデ	淡褐色	少	少		少
848		土師器坏			2.3+α	(11.2)	ナデ・回転系切	灰褐色	回転ナデ	浅黄褐色	少	多	少	
849		土師器坏			1.0+α	(11.2)	回転ヨコナデ・回転系切後板状圧痕	淡灰褐色	回転ヨコナデ・指ナデ	淡灰褐色	少	少		少
850		土師器小皿		9.5	1.2	6.8	回転ヨコナデ・回転系切	灰白色	ナデ	灰白色	少	多	少	
851		土師器坏		(13.2)	2.0	(10.0)	回転ナデ	淡黄色	回転ナデ	淡黄色	少			少
852		土師器甕			4.6+α		ヨコナデ	灰褐色	ヨコナデ	灰褐色	多	多		少
853		白磁碗			2.5+α	(7.0)	施釉・露胎	白色	施釉	白色				
854		土師器羽釜			3.9+α		ヨコナデ	灰褐色	ヨコナデ	にぶい黄褐色	少	多		少
855		土師器甕			3.1+α		ヨコナデ・ナデ	暗黄褐色	ヨコナデ・ナデ	にぶい黄褐色	多	多		多
856		土師器坏		(12.6)	2.3+α		ナデ・ヨコナデ・系切後板状圧痕	にぶい黄褐色	ナデ・ヨコナデ	にぶい黄褐色	少	少		少
857		土師器坏			3.0+α		ナデ	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄褐色				少
858		土師器碗			1.4+α	1.3	ナデ・貼付高台	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄褐色	少	少		少
860		白磁碗			5.5+α		施釉	淡黄色	施釉	淡黄色				少
861		瓦器碗			3.2+α		ヨコナデ・ナデ	黄白色	ナデ	黒色	少	少		少
862		土師器坏		(16.0)	2.7	10.4	ヨコナデ・ナデ	にぶい黄褐色	ナデ・工具ナデ・ヨコナデ	にぶい黄褐色	多	少		少

No.	遺構	器種	時期・施文	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴部最大径)	外面の 文様・調整	外面色調	内面の 文様・調整	内面色調	胎土			
											角閃石	長石	石英	その他
863		須恵器蓋			2.3+α		ヨコナデ	灰白色・黒色	ヨコナデ	灰白色				多
864		須恵器高坏			3.3+α		ヨコナデ	灰色	ナデ	黄褐色				少
871		土師器坏			1.2+α	(8.8)	回転ヨコナデ 回転糸切り痕	淡褐色	回転ヨコナ デ	淡褐色	少	少		少
872		土師器椀			3.6+α	(7.4)	ヨコナデのケスリ ヨコナデ高台貼付ナ デ	淡褐色	ヨコ方向の ミガキ	淡褐色	少	少		少
873		土師器小皿		8.1	1.1	5.7	回転ヨコナデ 糸切後板状圧痕	橙褐色	回転ヨコナ デ指ナデ	橙褐色	少	少		少
874		土師器小皿		(8.0)	1.2	(5.5)	ヨコナデ糸 切り痕	にぶい黄橙 色	ヨコナデ	にぶい黄橙 色	多	多	少	多
875		土師器坏			1.6+α	(10.0)	ヨコナデ糸 切り痕?	にぶい黄橙色 ~淡赤褐色	ナデ	にぶい黄橙 色	多	多	多	少
876		瓦器椀			3.5+α		ヨコナデナ デ	にぶい黄橙 色	ミガキ工具 痕	黒灰色	少	少	少	少
877		土師器小皿		8.7	1.3	6.0	ヨコナデ 回転糸切り	橙色	ヨコナデ ナデ	橙色	少	少		少
878		土師器甗			8.0+α		ナデ・工具 痕	にぶい黄橙 色	ナデ	にぶい黄橙 色	多	多		
880		土師器小皿		(7.9)	1.2	6.0	ヨコナデ 回転糸切り	淡褐色~淡 橙色	ヨコナデ ナデ	淡褐色~淡 橙色	少	少		少
881		瓦器椀			1.3+α	(6.0)	ナデ・高台 貼付	にぶい黄橙 色	ミガキ	黒色	少	少		
882		白磁碗		(14.3)	4.1+α		回転ヨコナ デ・施釉	灰白色	回転ヨコナ デ・施釉	灰白色				
883		土師器小皿		(8.6)	1.2	7.0	回転ナデ	黄褐色	回転ナデ ナデ	黄褐色	少			少
884		土師器甗	中世13C		3.9+α		ナデ	黒褐色	ナデ	にぶい橙色	多	多	少	少
885		土師器甗			3.9+α		ヨコナデ	灰黄褐色	ヨコナデ	黄褐色	多	多		少
886		土師器甗			6.6+α		ヨコナデ	灰黄褐色	ヨコナデ	黄褐色	多	多		多
888		須恵器甗			4.7+α		回転ヨコナ デ	灰白色	回転ヨコナ デ	灰白色				
889		土師器小皿		(8.4)	1.4	(7.0)	回転ヨコナ デ・回転 糸切り	黄褐色	ナデ・回転 ヨコナデ	淡黄褐色	多	多		多
890		土師器椀			1.7+α	6.6	回転ヨコナ デ	淡黄色	ナデ後ヘラ ミガキ	淡黄色	少			少
891		土師器椀			1.6+α		回転ヨコナ デ	淡黄色	ナデ	淡黄色		多		多
892		土師器椀			2.4+α		ミガキ	黒褐色	ミガキ	黒褐色	少			少
893		白磁碗			2.2+α		施釉	白色	施釉	白色				
894		土師器坏			0.9+α	(7.6)	ヨコナデ糸 切り痕	淡黄色	ヨコナデ	淡黄色	少	少	少	多
895		土師器小皿		8.4	1.1	6.4	回転ヨコナ デ・回転 糸切り	黄灰色	ナデ・回転 ヨコナデ	灰白色	多	多		多
896		土師器小皿		8.6	1.0	5.8	回転ヨコナ デ・回転 糸切り・板状圧痕	黄橙褐色	ナデ・回転 ヨコナデ	黄橙褐色	多	多		多
897		土師器椀			1.1+α	8.8	ナデ・ヨコ 方向ナデ	黄褐色~黒 灰褐色	ナデ	暗褐色	多	多		多
898		須恵器甗		(41.0)		7.0+α	回転ヨコナ デ・沈線・櫛 描文	暗灰色	回転ヨコナ デ	灰白色		少		少
899		須恵器壺			6.6+α	12.2	回転ナデ	灰褐色~黒 褐色	回転ナデ	青灰色		少		
900		白磁碗			2.3+α	6.4	露胎	灰白色	施釉・露胎(蛇 の目軸剥ぎ)	灰白色				
901		青磁皿			1.3+α	5.0	施釉・ロク ロナデ	灰色の釉	施釉	灰色の釉				

遺物一覧表（土製品）

No.	遺構	時期	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
204	SK017	縄文後期	土偶	5.6+ α	8.3	1.9	86.1	—
205	SK017	縄文後期	土偶	4.3+ α	4.7	1.6	34.7	—
315	包含層	縄文後期	土偶	4.8+ α	6.0	1.5	42.8	—
459	SH006	弥生終末	勾玉	3.6	1.5	1.6	11.2	孔径0.4cm
485	SH011	弥生後期	勾玉	3.0+ α	1.3	1.3	6.4	孔径0.6cm
801	SK072	中世	土錘	4.4	1.4	1.4	4.6	孔径0.4cm
824	SK073	中世	不明品	5.0	4.6	0.5	16.2	土師器胴部の転用品
825	SK073	中世	土錘	5.5	1.2	1.1	8.3	孔径0.35cm
826	SK073	中世	土錘	5.4	1.2	1.3	7.9	孔径0.4cm
827	SK073	中世	土錘	5.1	1.3	1.3	7.3	孔径0.35cm
828	SK073	中世	土錘	4.95	1.1	1.1	5.8	孔径0.4cm
859	SK077	中世	土錘	5.7	1.2	1.2	5.2	孔径0.3cm
860	SK077	中世	土錘	4.0	0.9	0.9	2.6	孔径0.4cm
871		中世	土錘	4.4+ α	1.2	1.1	4.8	孔径0.5cm
880		中世	土錘	4.1	1.1	1.1	4.3	孔径0.45cm
888		中世	土錘	4.6	1.2	1.1	6.1	孔径0.4cm
903	包含層	中世	土錘	4.7+ α	1.4	1.4	7.3	孔径0.3cm
904	包含層	中世	土錘	4.0	1.5	1.2	6.7	孔径0.4cm
905	包含層	中世	土錘	5.15	1.3	1.3	9.1	孔径0.45cm
906	包含層	中世	土錘	5.5+ α	1.1	1.0	7.1	孔径0.45cm
907	包含層	中世	土錘	4.8	1.0	1.0	5.3	孔径0.4cm
908	包含層	中世	土錘	4.2	1.1	1.1	5.3	孔径0.4cm
909	包含層	中世	土錘	4.5	1.2	1.2	5.3	孔径0.4cm
910	包含層	中世	土錘	4.25+ α	1.1	1.1	4.7	両端欠損
911	包含層	中世	土錘	4.3+ α	1.3	1.3	7.1	孔径0.35cm
913	包含層	近現代	磁器ハマ	5.6	5.5	1.1	—	窯道具
914	包含層	近現代	磁器ハマ	5.7	1.3	3.1	—	窯道具

遺物一覧表（石器）

No.	遺構	種類	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
76	SH001	石錐未製品	姫島産黒曜石	3.4	1.55	0.9	3.4
77	SH001	石鏃	サヌカイト	2.2	1.7	0.35	1.5
78	SH001	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.0+ α	0.2	0.3
79	SH001	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.25	0.3	0.7
80	SH001	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.5	0.5	1.0
81	SH001	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.4	0.4	0.5
82	SH001	石鏃	姫島産黒曜石	2.1+ α	1.9+ α	0.5	1.4
83	SH001	石鏃	サヌカイト	2.25	1.3	0.3	0.6
84	SH001	石鏃未製品	サヌカイト	2.2	1.7	0.35	1.5
85	SH001	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.9	0.4	1.1
86	SH001	石鏃	姫島産黒曜石	3.4	1.3	0.3	0.8
87	SH001	石鏃	西北九州産黒曜石	3.15	1.3	0.3	0.9
88	SH001	石鏃	姫島産黒曜石	2.8	1.9	0.5	2.7
89	SH001	石鏃	姫島産黒曜石	2.8	1.5	0.6	2.4
90	SH001	扁平打製石斧	緑泥片岩	7.9	4.6	0.7	48.9
91	SH001	磨製石斧	蛇紋岩	9.0	5.4	2.0	185.0
92	SH001	敲石	角閃石安山岩	7.0	5.0	3.8	171.6
93	SH001	敲石	角閃石安山岩	7.7	6.3	5.0	280
94	SH001	敲石	角閃石安山岩	13.7	8.7	5.8	940
95	SH001	敲石	角閃石安山岩	12.5	9.15	6.3	980
96	SH001	台石	安山岩	49.4	38.1	9.5~13.7	37kg
100	SK003	石鏃		3.1	1.3	0.4	1.7
101	SK003	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.9	0.6	1.1
104	SK006	扁平打製石斧	安山岩	6.5	4.9	0.7	29.5
114	SK007	扁平打製石斧	安山岩				
127	SK010	石鏃	姫島産黒曜石	1.7+ α	1.2+ α	0.3	0.4
128	SK011	打製石斧	安山岩	6.5	6.3	1.2	56.9
136	SK012	玉	クロム白雲母	0.6	0.2	0.1	
137	SK012	玉	クロム白雲母	0.4	0.6	0.2	
147	SK016	敲石	花崗岩	10.5	8.6	5.4	660
206	SK017	石刃	姫島産黒曜石	4.0	1.3	0.55	1.9
207	SK017	石錐	サヌカイト	3.75+ α	1.85+ α	0.5	2.5
208	SK017	楔形石器	姫島産黒曜石	5.45	2.5	1.6	20.5
209	SK017	石鏃	サヌカイト	2.55	1.3	0.4	0.9
210	SK017	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.5	0.35	0.9
211	SK017	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.7	0.4	1.2
212	SK017	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.6	4.5	1.0
213	SK017	扁平打製石斧	安山岩	12.65	5.7	1.9	120
214	SK017	扁平打製石斧	安山岩	10.3	6.6	0.7	90
215	SK017	扁平打製石斧	安山岩	9.2	4.6	1.8	55.9

No.	遺構	種類	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
216	SK017	敲石	角閃石安山岩	7.8+ α	10.7	5.4	650
218	SK019	扁平打製石斧	安山岩	77.2+ α	5.9	1.3	83.1
222	SP001	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.6+ α	0.4	0.8
224	SP003	石鏃	姫島産黒曜石	1.4	1.3	0.3	0.5
225	SP004	石鏃	サヌカイト	1.8	1.7+ α	0.3	0.7
230	SP009	石鏃	サヌカイト	2.2+ α	1.4	0.3	0.9
232	SP011	扁平打製石斧	安山岩	6.15	5.3	1.2	44.1
233	SP012	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.2+ α	0.2	0.5
234	SP013	石匙	サヌカイト	8.35	3.25	1.3	31.6
239	SP018	石鏃	黒曜石	1.9	1.6	0.3	0.8
241	SP020	石鏃	サヌカイト	1.6	1.5	0.5	0.9
244	SP022	石鏃	黒曜石	1.2	1.0	0.2	0.2
245	SP023	扁平打製石斧	安山岩	7.7	7.2	1.2	85.7
247	SP025	石鏃	サヌカイト	3.0	1.5	0.3	0.9
252	SP030	石鏃	サヌカイト	1.7	1.4+ α	0.2	0.4
262	SP040	扁平打製石斧	結晶片岩	9.3	4.7	1.3	86.2
316	包含層	異形石器	姫島産黒曜石	1.1	1.6	0.3	0.5
317	包含層	石錘	安山岩	2.6	4.15	1.5	19.7
318	包含層	石棒	結晶片岩	9.9+ α	3.4+ α	2.0+ α	98.8
319	包含層	石棒	結晶片岩	7.7+ α	3.5	2.55	126.9
320	包含層	石核	姫島産黒曜石	0.3	3.9	2.6	23.5
321	包含層	剥片	姫島産黒曜石	8.2	11.9	2.1	106.9
322	包含層	剥片	姫島産黒曜石	6.7	6.2	2.2	70.2
323	包含層	剥片	黒曜石	2.7	2.4	0.8	3.5
324	包含層	剥片	姫島産黒曜石	3.7	2.6	0.8	6.8
325	包含層	剥片	サヌカイト	4.8	8.65	0.95	42.0
	包含層						
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	3.5	2.3	0.9	5.6
328	包含層	石鏃	金山産 サヌカイト	1.5	1.2	0.3	0.4
329	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	1.4	1.4	0.25	0.4
	包含層	石斧		6.2+ α	6.2	0.75	43.0
330	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.45	0.2	0.5
331	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	1.95	1.4	0.4	0.8
332	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.4	0.4	1.0
	包含層	剥片	姫島産黒曜石	2.0	2.1	0.6	2.2
333	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	2.4	2.0	0.6	2.1
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	2.8	1.65	0.4	1.4
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	1.3	0.3	0.4
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	1.4	1.3	0.3	0.3
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.4	0.25	0.5

No.	遺構	種類	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
	包含層	剥片	姫島産黒曜石	1.45	1.5	0.3	0.4
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.5	0.4	0.6
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.3	0.4	0.6
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.5	0.4	0.7
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.7	0.25	0.6
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	1.8+ α	1.3	0.3	0.6
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.3	0.3	0.4
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.8	0.35	0.9
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.4	0.4	0.8
	包含層	石鏃	サヌカイト	1.6	1.7	2.05	0.5
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.2	0.8	0.4
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.6	0.5	0.8
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.65	0.35	0.6
	包含層	石鏃	黒曜石	2.4	1.6	0.5	1.2
	包含層	石鏃	サヌカイト	2.3	2.0	0.5	2.1
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	2.6	2.1	0.7	2.4
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	1.3+ α	1.2+ α	0.3	0.4
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.1	0.4	0.8
	包含層	石鏃	サヌカイト	3.0	2.0	0.3	1.4
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	3.0	1.1	0.3	0.8
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.2	0.3	0.5
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	2.4	1.5	0.2	0.6
	包含層	石斧		6.2+ α	6.2	0.75	43.0
	包含層	石鏃未製品?	サヌカイト?	2.3	1.5	0.5	1.4
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	2.5	1.8	0.6	2.5
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	2.7	1.6	0.6	2.3
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	2.5	1.9	0.45	1.4
	包含層	石鏃 未製品	姫島産黒曜石	2.15	1.95	0.55	2.0
	包含層	石鏃	姫島産黒曜石	2.55	1.9+ α	0.6	2.3
370	包含層	扁平打製石斧	安山岩	20.3	7.6	2.0	460
	包含層	扁平打製石斧		16.4	7.0	2.1	306.2
	包含層	打製石斧	安山岩	13.2	6.2	1.7	172.1
	包含層	石斧		11.3	7.3	1.1	146.9
	包含層	扁平打製石斧		10.6	5.3	1.7	126.3
	包含層	扁平打製石斧		9.8+ α	6.2	1.0	114.8
	包含層	石斧	頁岩	10.0	6.1	1.5	106.9
	包含層	扁平打製石斧	結晶片岩	10.3	6.3	1.1	119.4
	包含層	打製石斧	安山岩	9.5+ α	5.9	1.6	129.5
	包含層	打製石斧	安山岩	9.5	7.1	1.4	107.5
	包含層	石斧		8.9+ α	6.6	0.9	87.3

No.	遺構	種類	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
	包含層	扁平打製石斧	結晶片岩	7.7	5.0	0.9	47.2
	包含層	石斧?		4.4+ α	9.1+ α	1.0	56.8
	包含層	扁平打製石斧	結晶片岩	7.2+ α	5.0	1.0	45.5
	包含層	扁平打製石斧	結晶片岩	7.3+ α	9.3	0.7	60.1
	包含層	扁平打製石斧		7.9+ α	7.3	1.1	103.9
	包含層	扁平打製石斧		6.5+ α	8.7	1.1	79.2
	包含層	扁平打製石斧	結晶片岩	6.5+ α	6.4	0.7	50.7
	包含層	扁平打製石斧		6.0+ α	5.6	1.0	40.0
	包含層	石鏃		1.7	1.3	0.3	0.5
	包含層	扁平打製石斧		5.1+ α	7.4	1.1	57.8
	包含層	打製石斧 未製品?	緑泥片岩	6.7	5.1	1.0	48.6
	包含層	扁平打製石斧	結晶片岩	4.3+ α	6.0	1.0	36.2
393	包含層	磨製石斧	蛇紋岩	12.25+ α	6.5	3.3	450
394	包含層	磨製石斧	蛇紋岩	12.8	4.4	2.5	206.4
395	包含層	磨製石斧		9.0+ α	5.0	1.6+ α	100.0
396	包含層	磨石	安山岩	12.2	10.8	4.2	830.0
397	包含層	磨石	安山岩	7.9+ α	10.3	5.5	630.0
422	SH002	石鏃	姫島産黒曜石	1.1	1.8+ α	0.4	0.9
423	SH002	石鏃	姫島産黒曜石	3.3+ α	2.0+ α	0.45	1.7
424	SH002	石鏃	サヌカイト	3.0	1.4	0.4	1.7
425	SH002	石鏃	サヌカイト	1.9	1.4	0.2	0.6
426	SH002	敲石	安山岩	9.1	8.6	5.9	660
427	SH002	扁平打製石斧	安山岩	9.5	7.3	1.1	119.1
428	SH002	石剣	凝灰岩	7.2	2.9	0.8	14.6
429	SH002	磨製石鏃	凝灰岩	3.0	1.9	0.6	4.0
436	SH005	砥石	砂岩	9.3	6.7	1.9	85.8
469	SH006	石鏃	姫島産黒曜石	2.8	1.7	0.45	1.5
470	SH006	敲石	安山岩	10.7	9.6	4.0	550
471	SH006	敲石	安山岩	10.3	3.4	2.2~2.8	173.1
472	SH006	砥石	砂岩	12.1	6.4	1.0	113.5
478	SH008	台石	安山岩	35.6	30.0	10.2	17.0
479	SH009	台石	安山岩	50.3	33.4	10.4	29.0
487	SH010	砥石	天草砂岩	5.0+ α	3.0	1.5	20.1
490	SH011	台石	安山岩	40.7	32.4	14.3	33.0
495	SH012	剥片	姫島産黒曜石	2.1	3.0	0.9	5.2
496	SH012	磨製石斧	結晶片岩	6.9+ α	5.9	2.2	133.6
516	SK023	扁平打製石斧	安山岩	5.2	4.5	0.7	31.4
534	SK026	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	2.0	0.5	1.0
552	SK032	砥石	砂岩	12.6	21.6	4.0	1450
589	SK039	石鏃	サヌカイト	0.9+ α	1.5	0.15	0.2

No.	遺構	種類	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
590	SK039	石鏃	サヌカイト	1.8	1.6	0.3	0.4
591	SK039	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.6	0.3	0.6
592	SK039	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.7	0.3	0.9
593	SK039	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.65	0.4	0.9
594	SK039	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	1.9	0.5	1.5
595	SK039	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.7	0.6	2.0
596	SK039	石鏃	サヌカイト	3.0	2.0	0.5	3.3
597	SK039	石鏃	サヌカイト	4.0	2.0	0.5	4.6
598	SK039	削器	姫島産黒曜石	2.4	2.3	0.5	3.2
599	SK039	不明	姫島産黒曜石	2.2	1.7	0.7	3.0
600	SK039	剥片	珪化木	3.7	3.0	0.25	3.9
604	SK040	台石	安山岩	8.8	9.7	2.5~4.1	394.3
605	SK040	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.2	0.35	0.5
616	SK041	扁平打製石斧	安山岩	8.0	4.7	0.7	38.8
621	SK044	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.5	0.3	0.5
622	SK044	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.9	0.4	0.5
632	SK045	石包丁	ホルンフェルス	5.8	7.7+ α	0.6	30.6
633	SK045	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.4	0.55	0.8
634	SK045	石鏃	姫島産黒曜石	1.2	1.3+ α	0.2	0.3
	SK046	石鏃	姫島産黒曜石				
647	SK046	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	0.8	0.25	0.4
648	SK046	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	1.4	0.25	0.6
649	SK046	石鏃	姫島産黒曜石	2.5	1.1	0.4	0.8
650	SK046	異形勾玉	クロム白雲母	1.8	1.3	0.4	0.9
652	SK049	石斧	蛇紋岩	6.8+ α	4.5+ α	3.2+ α	101.2
653	SK049	台石	安山岩	17.9	10.6	4.6	1400
654	SK049	扁平打製石斧	安山岩	15.9	6.0	2.0	278.5
655	SK049	削器	サヌカイト	5.2	2.5	1.0	18.1
661	SK053	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	2.0	0.9	3.7
664	SK054	石鏃	サヌカイト	2.7	1.3	0.6	2.1
671	SK055	剥片	姫島産黒曜石	4.7	3.1	1.6	20.1
702	SK059	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.3	0.3	0.5
703	SK059	石匙	姫島産黒曜石	1.6+ α	0.7+ α	0.3	0.4
704	SK059	石核	花崗岩アブライト	6.3	8.3	3.1	190
705	SK059	磨石・敲石	安山岩	11.1+ α	11.0	5.8	1020
706	SK059	敲石	安山岩	7.1	5.9	3.2	190
727	SK065	石錐	姫島産黒曜石	2.1	0.7	0.3	0.3
736	SK066	石鏃	姫島産黒曜石	1.5+ α	1.1+ α	0.3	0.4
737	SK066	石鏃未製品	姫島産黒曜石	2.0	1.5	0.45	0.8
738	SK066	石鏃	サヌカイト	2.2	1.4	0.4	0.9

No.	遺構	種類	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
739	SK066	石鏃	姫島産黒曜石	2.4+ α	1.1	0.3	0.7
740	SK066	石鏃	姫島産黒曜石	2.45	1.2	0.5	1.3
741	SK066	石鏃	黒曜石	2.25	1.7	0.4	1.7
742	SK066	敲石	安山岩	9.7	10.8	4.6	500
743	SK066	敲石	安山岩	12.2	9.05	5.4	750
744	SK066	敲石	安山岩	9.3	8.1	3.3	328.2
749	SK067	石鏃	サヌカイト	1.35	1.05	0.3	0.4
750	SK067	石鏃	姫島産黒曜石	1.55+ α	1.25	0.25	0.4
751	SK067	石鏃	サヌカイト	1.95+ α	1.80+ α	0.25	0.6
752	SK067	石鏃	姫島産黒曜石	1.65+ α	1.55+ α	0.5	0.7
753	SK067	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.4+ α	0.25	0.5
754	SK067	石鏃 未製品	姫島産黒曜石	2.1	1.8	0.5	1.6
829	SK073	石鍋	滑石	3.8	3.3	1.0	18.2
838	SK073	石鏃	サヌカイト	1.3+ α	1.7	0.2	0.6
866	SK075	温石	滑石	7.4	5.7	1.3	80.2
867	SK075	石錐の先	サヌカイト	2.7+ α	0.8	0.3	0.8
868	SK075	石鏃	黒曜石	1.5	1.15	0.3	0.4
869	SK075	石鏃	姫島産黒曜石	1.75	1.25	0.25	0.4
870	SK075	石鏃未製品	黒曜石	1.6	1.45	0.3	0.7
915	包含層	扁平打製石斧	安山岩	18.9+ α	11.3	3.4	980.0